

斎宮跡発掘調査報告 I

内院地区の調査

本文編

2001

斎宮歴史博物館

斎宮跡発掘調査報告 I

内院地区の調査
本文編

2001

斎宮歴史博物館

PL.1 斎宮跡航空写真



PL2 竈宮跡内院（鍛冶山地区の現状）





はじめに

幻の宮とよばれていた斎宮跡が、一片の踏脚硯出土から甦った。

天武朝の大来皇女にはじまり、約660年間続いた斎王制度は南北朝期に途絶え、それと同じ時間をこの斎宮の地下で眠り続けました。文化庁、歴史学会をはじめとする各分野、各階層から解明の期待を一心に集めた発掘調査は、斎宮跡の範囲を確認するトレンチ調査から着手され、調査開始から10年にして国史跡の指定を受け、三重県では斎宮跡調査事務所を組織して本格的な計画調査を開始いたしました。

大型の掘立柱建物群、多量の土師器が充満した土坑、多数の綠釉陶器、硯などの出土は、斎王宮殿と斎宮寮の確かな存在を物語っていました。史跡の保護を図るため、史跡東部での確認調査は継続され、また史跡の全体像を把握するため、面的な調査は史跡全域で実施していくことになりました。この間、都城の条坊制に近い方格地割も確認されております。

平成元年度には、斎宮歴史博物館を開館させ、斎宮跡の全国発信を図るとともに、調査研究体制も拡充いたしました。開館以降は、斎宮跡の中核部である内院地区に調査を集中させ、その解明を図ることを目指してきました。

ここに、『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』として報告させていただきます主な内容は、斎宮跡調査の成果の一つとしての斎宮跡土器編年とこの内院地区における遺構変遷であります。

本報告書の刊行にあたり、有益なご指導をわ賜った斎宮跡調査研究指導委員の諸先生をはじめ、文化庁、明和町の関係機関、さらに快く調査地を提供いただいた地元関係各位に感謝の意を表するとともに、今後一層のご指導とご協力を念願して、発刊のご挨拶をいたします。

平成13年3月

斎宮歴史博物館長

藤澤英三

例 言

- 1 本書は、三重県教育委員会が1973年度（昭和48年度）から2000年度（平成12年度）に文化庁の補助を受けて実施した史跡斎宮跡における発掘調査のうち、中枢部と考えられる内院地区的調査結果をまとめたものである。
- 2 斎宮跡の発掘調査研究にあたっては、1970年度（昭和54年度）に設置した「斎宮跡調査研究指導委員」の先生方の御指導、御助言によるところが大である。次に委員の先生方を挙げさせていただき、謝意を表したい。敬称は、省略させていただき、（ ）に委員の在任期間を明記させていただきました。

福山 敏男 (1979～1995)
服部 貞藏 (1979～1988)
久徳 高文 (1979～1994)
坪井 清足 (1979～1998)
門脇 穎二 (1979～1998)
檜崎 彰一 (1979～1998)
渡辺 寛 (1979～)
早川 庄八 (1984～1994)
北原 理雄 (1986～)
八賀 晋 (1990～)
鈴木 嘉吉 (1993～)
所 京子 (1995～)
佐々木恵介 (1995～)
狩野 久 (1999～)
町田 章 (1999～)
上村喜久子 (1999～)

凡　　例

- 1 本書は、三重県教育委員会が1973年度（昭和48年度）から2000年度（平成12年度）に文化庁の補助等を受けて実施した史跡斎宮跡における発掘調査のうち、中枢部と考えられる内院地区の調査結果をまとめたものである。
- 2 斎宮跡方格地割における各区画の名称については、現在の段階で各区画の歴史的呼称を確認していないので、第5図に記したように小字名を冠して○○区画として報告する。
- 3 各調査区は、国土調査法による第VI座標系を基準とし、方位は座標北を用いている。
- 4 遺構表示記号は、次のとおりである。

SA；掘立柱塀、柵列 SB；建物 SE；井戸 SK；土坑 SD；溝 SF；道路 SS；足場 SX；その他
- 5 斎宮跡における遺構・遺物の時期区分は、第23表により表示することとした。
- 6 遺物の器種・器形名称は、平城宮発掘調査報告書に準拠し、その凡例を第26・27表及び第62・63図に示した。また、用語については、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「杯」・「椀」等を用いた。
- 7 遺物実測図は特に表示がない限り実物の1／4とした。

目 次

第一章 序 言	1
第一節 斎宮跡	1
第二節 斎宮跡発掘調査の歩み	3
第三節 斎宮跡研究小史	11
第四節 発掘調査報告書の作成	16
第二章 位置と歴史的環境	20
第一節 位置	20
第二節 歴史的環境	21
第三節 古代の道路	25
第三章 内院地区の遺構と遺物	29
第一節 斎宮跡の方格地割と内院	29
第二節 牛葉東区画	32
1 遺構	32
2 遺物	47
第三節 鋳冶山区画	57
1 遺構	57
2 遺物	97
第四節 区画間施設	118
1 遺構	118
2 遺物	122
第四章 斎宮跡の土器編年	123
第一節 斎宮跡の土器設定	123
第二節 斎宮跡第Ⅰ期の土器	126
第三節 斎宮跡第Ⅱ期の土器	147
第四節 斎宮跡第Ⅲ期の土器	177
第五章 光仁・桓武朝の斎宮	192
第六章 内院地区の変遷	203

表 目 次

第1表 斎宮跡発掘調査組織一覧表	9	第15表 S K1045出土土器構成表	158
第2表 牛葉東区画時期別遺構分類表	33	第16表 S K7430出土土器構成表	163
第3表 鍛治山西区画時期別遺構分類表	59	第17表 S K2650出土土器構成表	165
第4表 斎宮跡土器編年新旧対照表	124	第18表 S K7030出土土器構成表	172
第5表 斎宮跡土器編年表	125	第19表 S K7040出土土器構成表	174
第6表 S B1615出土土器構成表	127	第20表 S E4050中層出土土器構成表	175
第7表 S K1255出土土器構成表	130	第21表 S E4050上層出土土器構成表	177
第8表 S K5102出土土器構成表	132	第22表 S E2000出土土器構成表	181
第9表 S K1098出土土器構成表	137	第23表 S K1730出土土器構成表	185
第10表 S K6210出土土器構成表	141	第24表 S K1074出土土器構成表	186
第11表 S E4580出土土器構成表	144	第25表 S D3052出土土器構成表	189
第12表 S K6030出土土器構成表	147	第26表 斎宮跡土師器器種構成表	217
第13表 S K1445出土土器構成表	149	第27表 斎宮跡須恵器器種構成表	219
第14表 S K5200出土土器構成表	155		

挿 図 目 次

第1図 斎宮跡施設図	12	第19図 鍛治山西区画の遺物(5)	106
第2図 位置図	22	第20図 鍛治山西区画の遺物(6)	108
第3図 斎宮跡周辺の条里地割	26	第21図 鍛治山西区画の遺物(7)	110
第4図 平成12年度までの調査位置図	30	第22図 鍛治山西区画の遺物(8)	112
第5図 方格地城区格名称図	31	第23図 鍛治山西区画の遺物(9)	114
第6図 牛葉東区画調査位置図	32	第24図 鍛治山西区画の遺物(10)	116
第7図 牛葉東区画の遺物(1)	48	第25図 斎宮第I期第1段階の土器 (S B1615①)	128
第8図 牛葉東区画の遺物(2)	50	第26図 斎宮第I期第1段階の土器 (S B1615②)	129
第9図 牛葉東区画の遺物(3)	52	第27図 斎宮第I期第1段階の土器 (S K1255)	131
第10図 牛葉東区画の遺物(4)	54	第28図 斎宮第I期第2段階の土器 (S K5102①)	133
第11図 鍛治山西区画調査位置図	58	第29図 斎宮第I期第2段階の土器 (S K5102②)	135
第12図 S E7920土層断面図(1:60)	68	第30図 斎宮第I期第3段階の土器 (S K1098①)	138
第13図 S D6810土層断面図(1:40)	71		
第14図 S E8085土層断面図(1:60)	74		
第15図 鍛治山西区画の遺物(1)	99		
第16図 鍛治山西区画の遺物(2)	101		
第17図 鍛治山西区画の遺物(3)	103		
第18図 鍛治山西区画の遺物(4)	104		

第31図 斎宮第I期第3段階の土器 (SK1098②)	140	第47図 斎宮第II期第4段階の土器 (SE4050中層)	176
第32図 斎宮第I期第3段階の土器 (SK6210)	142	第48図 斎宮第III期第1段階の土器 (SE4050上層①)	178
第33図 斎宮第I期第4段階の土器 (SE4580)	145	第49図 斎宮第III期第1段階の土器 (SE4050上層②)	180
第34図 斎宮第II期第1段階の土器 (SK6030)	148	第50図 斎宮第III期第1段階の土器 (SE2000①)	182
第35図 斎宮第II期第1段階の土器 (SK1445①)	150	第51図 斎宮第III期第1段階の土器 (SE2000②)	184
第36図 斎宮第II期第1段階の土器 (SK1445②)	152	第52図 斎宮第III期第2段階の土器 (SK1730・SK1074)	187
第37図 斎宮第II期第1段階の土器 (SK1445③)	153	第53図 斎宮第III期第2段階の土器 (SK1074) 第3段階の土器 (SK3052)	190
第38図 斎宮第II期第2段階の土器 (SK5200①)	156	第54図 斎王関係系図	202
第39図 斎宮第II期第2段階の土器 (SK5200②)	157	第55図 内院地区 第I期以前 (~斎宮第I~3期)の遺構 (1:1,200)	205
第40図 斎宮第II期第2段階の土器 (SK1045①)	159	第56図 内院地区 第I期 (斎宮第I~4期)の遺構 (1:1,200)	206
第41図 斎宮第II期第2段階の土器 (SK1045②)	161	第57図 内院地区 第2期 (斎宮第II~1期)の遺構 (1:1,200)	208
第42図 斎宮第II期第3段階の土器 (SK7430)	164	第58図 内院地区 第3期 (斎宮第II~2期)の遺構 (1:1,200)	209
第43図 斎宮第II期第3段階の土器 (SK2650①)	166	第59図 内院地区 第4期 (斎宮第II~3~4期)の遺構 (1:1,200)	212
第44図 斎宮第II期第3段階の土器 (SK2650②)	168	第60図 内院地区 第5期 (斎宮第III~1~2期)の遺構 (1:1,200)	213
第45図 斎宮第II期第3段階の土器 (SK2650③)	170	第61図 内院地区 第6期 (斎宮第III~3~IV期)の遺構 (1:1,200)	213
第46図 斎宮第II期第4段階の土器 (SX6666, SK7030, SK7040)	173	第62図 斎宮跡土師器器種構成図	218
		第63図 斎宮跡須恵器器種構成図	220

卷頭写真

- P L 1 斎宮跡航空写真
- P L 2 内院地区斜写真
- P L 3 第119次航空写真

第一章 序 言

第一節 斎 宮 跡

斎 宮 斎宮（いつきのみや）は、天照大神の御枝代として天皇に代わって神宮に奉斎するため伊勢に派遣された斎王の宮殿をしめす。また、伊勢斎王などとして用いられる斎王を示すこともあり、かつ伊勢在任中設置された令外の官であり、斎宮の庶務一般を取り扱う斎宮寮をも包括して用いられる。

その起源は、記紀によると伊勢神宮創始の伝承にあらわれる崇神朝まで遡るが、斎王制度として整うのは律令神祇制が整備されていく天武朝の大来皇女からと考えられる。それ以後、鎌倉時代末期まで60数人の斎王が定められ、約660年続いたが、後醍醐天皇の祥子内親王を最後にこの制度は廃絶した。

斎 王 飛鳥・奈良時代における斎王は、必ずしも天皇の即位毎に派遣されたものでもなく、また設置されない天皇のときもあった。

斎王制度が確立するのは、9世紀以降と考えられ、その内容は『延喜斎宮式』などにみられる。斎王は、天皇即位に際し、未婚の内親王若しくは女王の中から卜定され、宮城内に設けられた初斎院で約1年間、その後宮城外の野宮において潔斎につとめられ、卜定後3年目の9月神嘗祭に奉斎するため、大極殿での天皇との「発派の議」に臨み、長奉送使以下数百人を従えて伊勢に赴いた。

群 行 斎王の伊勢赴任を群行といい、群行に先立ち、大祓が行われ、京機内と群行路にあたる諸国での仏教的な行事は1ヶ月間禁じられた。群行路は、宮都の変遷に伴い変更されている。史実上の最初の斎王とされる天武天皇の大来皇女は、飛鳥の都から、初瀬斎宮（後の野宮）に入り、初瀬から伊賀國の名張、阿保を経て伊勢国との国境にある塙見岬を越え、伊勢国の川口、一志を経て多気の斎宮に入ったとされる。

奈良時代の群行路は、靈亀元年（715）に平城京の南から大和高原を越えて名張に至る「大倭国都祁山の道」が開かれ、名張以東の伊勢道を用いた。

都が長岡京を経て平安京に遷都されてからの群行路は、平安時代初期では、近江国の甲賀から榎川沿いの「倉歴の道」が使われ、伊賀の柘植に出て加太峠越えて鈴鹿頓宮に出ていたが、仁和2年（886）に鈴鹿峠を越える「阿須波道」が開かれると、近江の国府（勢多）、甲賀、垂水、伊勢の鈴鹿、一志の五か所に頓宮を設け、平安宮から5泊6日の行程が定まった。

退 下 斎王は、原則として当代天皇の讓位か崩御により任を解かれたが、斎王の父母や本人の過失なども織れとされ、退任せねばならなかつた。斎王の退下にあたる帰路は、『延喜斎宮式』の規定や『西宮記』によれば、解任が吉事であれば往路の群行路を用い、凶事であれば一志から川口、伊賀の阿保、大和の都介、山城の相楽を通り、最後に船で難波津で禊を行つたうえで、山城の河陽宮を経て帰京した。

斎 宮 寮 斎宮寮は、『統日本紀』大宝元年（701）8月4日条に「斎宮司准寮、属官准長上焉」としてはじめて見え、同上養老2年（718）8月13日条に「斎宮寮公文始用印焉」と載

せられる。また、同上神龜4年(727)8月23日条に「補斎宮寮官人一百廿一人。」とあり、この頃までに寮に昇格している。

斎宮寮の職員は、狩野文庫本『類聚三代格』神龜5年(728)7月21日の勅に、頭(従五位官)の長官、助(正六位官)、大允(正七位官)、少允(従七位官)、大属・少属(従八位官)各1名と使部10人のもとに主神司、舍人司、織部司、膳部司、炊部司、酒部司、水部司、殿部司、采女司、掃部司、薬部司の11司の官人を加えて107人となる。最盛期の平安時代前期には門部司、馬部司を加え、『延喜斎宮式』にみえる長上官26人、番上官101人の計127人に近い。また、同式では、女官(命婦・乳母・女孺)43人、宮主(卜部氏)及び仕丁など77人、将從273人と規定されており、また平安時代中期以降、勅別当や女別當・宣旨・女房などが知られ、総数500人を超える大規模な役所であり、中央官司では天皇の内廷である後宮、皇太子に関する春宮に類似した組織であった。斎宮は、天長元年(824)以降度会離宮であった「離宮院」が「常斎宮」とされたが、承和6年(839)その官舎百余宇を焼失し、再び多気の宮地に戻された。

斎宮寮は、平安時代後期の成立になる『新任弁官抄』によれば、内院・中院・外院で構成していたと考えられる。内院には斎王御殿・神殿、中院には斎宮寮頭の寮庁、外院には主神司と12司らの官舎・寮庫などの建物があったと考えられている。

『延喜式』にも「内院」をはじめ「神殿」「寝殿」等の施設名が散見でき、その一部の存在は、史跡東部に広がる方格地割内に推定することが可能になってきている。

一方、飛鳥・奈良朝における斎宮の実態は、未だ不明な点が多く、その所在についても、当該時期の遺物が多く出土する史跡西部地区に所在したとの推定にとどまっている。斎宮寮の変遷において、平安時代中期以降の斎宮所在地も不明瞭である。

斎宮寮の造営は、斎王の群行に先立ち造宮使が京から遣わされ、殿舎の維持管理は寮官、宮殿の修理は伊勢国司、官舎の修理は大神宮司が各自担当することになっていたが、平安時代後期以降は、ほとんど大神宮司の成功によっている。

これまでの30年間をかけて発掘調査された面積は、計画調査117,047m²、現状変更に伴う緊急調査75,882m²の計192,929m²で、史跡全体の約14%にあたり、1800棟以上の掘立柱建物をはじめ、堅穴住居、井戸、溝、廐棄土坑、道路、などが多くの遺構が検出されている。建物の特徴は、そのすべてが掘立柱建物であり、奈良時代後期から平安時代前期にかけては大型の柱掘形をもち、整然と区画された方格地割内に規則的に配置された建物群も確認され、官衙遺跡としての威容を示している。

出土遺物は、整理箱で約1万箱にのぼり、そのほとんどが土器類である。九割以上が土師器であり、須恵器・灰釉陶器と続く。約6500点を超える綠釉陶器、三彩陶器、銘帯、陶硯など宮廷生活を物語る遺物、土馬、人面墨書き土器、ミニチュア土器等祭祀関係の遺物も多い。

第二節 斎宮跡発掘調査の歩み

1 はじめに

「斎王旧蹟」の顕彰活動については、古く明治時代の中頃から永島雪江、乾覚郎、北野信彦等によって行われ、明治30年代なかばには当時の斎宮村長である櫛谷定次郎らが組織する「斎宮旧蹟表彰会」により地域の各所に標石が建てられている。

また、大正7年には三重県により斎王の森を「斎王宮跡」として名勝旧蹟保存費補助金が交付されており、昭和になっても中村寅次郎によって献身的にその顕彰活動は続けられている。しかし、小俣町の離宮院跡が既に大正13年に国の史跡に指定されて以来今日に至っているのに比べ、「斎王宮跡」は戦後の県文化財保護条例の制定に際しても県史跡の指定はなされず、永らく「幻の宮」のままであった。

調査の開始

一方、地下に眠る遺跡としての「斎宮跡」にかかる考古学的な発掘調査の開始は、昭和40年代の高度経済成長に伴う宅地開発に起因するところが大きい。明和町斎宮の西側に隣接する竹川字古里地内で、県内大手の不動産会社による約70,000m²に及ぶ住宅団地の計画が明らかとなつたのもこの頃である。この畠地や山林となっている付近一帯には塚山古墳群と呼ばれる古墳群が周知の埋蔵文化財として現存し、古代から中世にわたる土器片が多数散布しているほか、永らくその実態が不明なまま伝承し続けてきた「斎宮」の地名を遺す地域に隣接し、明治44年の合祀前までの旧竹神社、旧小倉神社及び旧八幡社の跡地も存し、今も地域の人々によって手厚く管理されている。

このような現地の状況であることから、昭和45年(1970)6月から7月にかけて開発事業計画地域を対象として、埋蔵文化財の有無やその時代・範囲等を把握することを目的に、4m×4mのグリッド30か所を設定して実施した試掘調査が「斎宮跡」の本格的な発掘調査の開始である。その後、多くの地元住民や関係諸機関の理解と協力により、多大な成果を認めながら今日まで30年間にわたりて発掘調査は続けられてきた。

この30年間にわたる斎宮跡発掘調査の歩みについて、ほぼ10年毎に経験してきた発掘調査・研究・保存・活用とその組織等にかかる大きな画期に沿って、第1期から第3期に区分して簡単に整理してみたい。

2 第1期（昭和45年～昭和54年）

古里地区における開発事業計画地での試掘調査と古里A地区から古里E地区の発掘調査に始まり、トレンチによる範囲確認調査を経て、昭和54年3月27日付けによる史跡指定に及ぶ、斎宮跡の発掘調査にとって創草期とも言うべき時期である。

当初の宅地開発事業計画に伴う試掘調査は経費を原因者負担により、調査主体は地元明和町教育委員会、現地調査は県の職員が担当する体制で実施した。

古里地区的調査 この結果をふまえ、開発事業の事前発掘調査として三重県教育委員会が調査主体となり、昭和46年10月から12月まで古里A地区(1,200m²)、同年12月から翌昭和47年3月まで古里B地区(5,000m²)、同年5月から9月まで古里C地区(3,000m²)の発掘調査を実施してきた。

この間、弥生時代中期の方形周溝墓や塚山古墳群の一連である古墳時代後期の削平された古墳の周溝、竪穴住居跡のほか、奈良時代を中心とした掘立柱建物群や幅約3～3.5m、深さ約1～2mの大溝や延々と続く幅約3～4m、深さ約3mの鎌倉時代以降の大溝等の遺構や、蹄脚硯・大型朱彩土馬・綠釉陶器等の官衙や祭祀にかかることが想定できるような特殊な遺物が出土した。

高まる保存運動 これをうけて、民間の有志による呼びかけで遺跡見学会が再三にわたり開催されたほか、県内各地の有識者により「三重の自然と文化を守る会」が組織され、遺跡見学会のみに止まらず、講演会等の開催によりこの貴重な遺跡の保存と全容解明を求める声が日増しに高まってきた。

範囲確定調査 そこで、昭和48年度から地元明和町の協力を得て、三重県教育委員会が主体となり、文化庁から重要遺跡範囲確認調査の補助金を得て、斎宮跡の解明を目的とした発掘調査が本格的に実施されることとなった。当初は、地元との様々な調整等の必要や古里地区で調査の補充を要することもあって実施した古里D地区(2,300m²)の調査に続いて、幅4mを基準としたトレンチ調査に移行してきた。これらトレンチによる調査は昭和48年度のAトレンチから昭和52年度の2Iトレンチ及び史跡指定後の昭和54年度の第29次調査から昭和57年度の第47次調査までの39箇所に及んでいる。

一方、この時期には昭和50年の町道（通称：広域圈道路）の新設に伴う事前調査として遺跡東部に所在する現在の竹神社の東側で幅約7m、南北に延長約1,521mに及ぶ調査が行われ、大型の柱壠形や多数の溝・土坑等を検出した。また、昭和52年に実施した旧参宮街道沿いの竹川及び牛葉集落に跨がる斎宮小学校の校舎建設に伴う調査では、平安時代後期と考えられる四脚門と共に伴う2条の溝等が検出された。

宅地の調査 また、昭和54年度からは史跡指定予定地内における住宅新築等に伴う事前調査も明和町教育委員会を事業主体として、国庫補助事業として実施し、調査データの蓄積が行われてきた。しかしながら、個人住宅の新築等に伴う調査は、農地転用等により宅地化する敷地のうち、住宅の建築部分を除外してその残余の範囲内でのみ実施する小規模な発掘調査に止まり、また新築等をのみ対象とし、既存建物に増築する場合や、既存の建物を全面的に撤去した後に新たに建築するケースは増築と見なして事前調査の対象とはしない等、遺跡の実態解明のためには大きな障害となつており、この規制は史跡指定後も一部を除いて今日まで尾を引くこととなつていている。

遺構の実測に当たっては、それまで磁北方位に基づく任意座標によつていたため各調査区の位置関係は必ずしも正確なものではなかつた。そこで、昭和48年に奈良国立文化財研究所の協力を得て、国土座標に基づく基準点の設定を行い、以後の第7次調査からはその位置的相関関係について漸く正確に把握できることとなつた。

範囲の確定 ともあれ、これらの蓄積された調査成果に基づいて、東西約2km、南北約0.7km、約137.2haに及ぶ史跡指定すべき範囲が確定されたのとともに、斎宮跡の時代としては、遺跡西部の古里地区周辺に飛鳥時代から奈良時代及び鎌倉時代以降の遺構・遺物が主として分布し、現在の近鉄斎宮駅から「斎王の森」を中心とした遺跡中央部では概ね平安時代中期以降の、さらに遺跡東部の通称中町地区では平安時代前期を主とし

た遺構・遺物の広がることと、あわせて遺跡中央部以東ではピット群の集中する範囲が一定の間隔を隔てて広がることがおぼろ気ながら明らかとなってきた。

3 第2期（昭和54年～昭和63年）

史跡指定と 調査事務所

国の史跡指定を受けるとともに、これに伴って国及び県の補助を得て地元明和町が主体となって今日も実施している史跡指定地の公有化事業の開始と、史跡の発掘調査

・保存・出土品を中心とした資料の公開等の拠点としての「三重県斎宮跡調査事務所」の開設から、「史跡斎宮跡」の調査・保護・公開・活用の拠点に止まらず、その情報発信の役割も包括した「斎宮歴史博物館」の開館までの時期で、発掘調査のうえでも発展期と言えよう。

昭和54年3月27日付けによる史跡指定に伴い、以後の斎宮跡の調査・保存は史跡の管理団体である明和町が主体となって策定した「保存管理計画」に基づいて行われることとなった。

昭和54年度の発掘調査開始に当たって、古里地区の試掘調査にさかのばって設定された調査次数、史跡地内の地区割りは、その設定時における検討の不十分さ故に、調査次数では調査の順序や年度又は原因等を示すものとはならず、地区割りについても境界を設定する拠り所とした現在の地割りの農道・溝・畦畔等についての取り扱いが不明確であったり、維持管理や整備による消滅、方格地割との不整合、史跡指定範囲外に遺構の広がることが明らかな周辺地区についての配慮不足等々、様々な問題点が今日一層顕著になっている。

計画調査

発掘調査は、昭和49年度の古里E地区以来久しぶりの面的な調査となった前年度の御館・柳原両地区に統いて面的な調査に移行し、年間3～4ヶ所の面的調査とトレーニング調査を併用して実施することとなった。これにより遺跡の解明は飛躍的に進展し、大型の柱壇形が集中する地域、規格的配置を示す建物群、方格地割の解明につながる溝地帯と一定間隔毎に所在する遺構の空白地域の存在等斎宮跡を遺跡全体の視点から捉えた成果が多く挙げられる。

方格地割の想定 とりわけ方格地割は、溝地帯とこれに付随する構の希薄な地域が存在し、現代の地割を構成する水路や農道によく合致しており、長年月の間幾度となく掘り渡えが行われているため、初期の調査では現代の搅乱溝の底に辛うじて遺された遺構の埋土が認識されていなかったケースもある。しかし、この時期の初期である昭和54年には、その存在が調査担当者の一部では既に想定されていた。ただ当時は、牛葉・中町の両地区で近鉄線路を挟んだ南北の一帯で、百数十mを基調とした7列×4行に及ぶ展開を想定していたものの、東半部と西半部で基調となる距離が若干異なると思われることから、東半部の4列×4行から西半部の4列×4行に、中央の南北列を重複して時期的な変遷を示すものとも考えていた。

土器編年の確立 また、出土遺物のうえでも綠釉陶器・陶硯・土馬・墨書き土器といった特殊遺物に止まらず、蓄積される夥しい土器をもとに斎宮跡に於ける土器編年にも試みがなされ、昭和58年度の三重県斎宮跡調査事務所年報には「斎宮跡の土器」として公表されてお

り、以後長い間斎宮跡の時期判定の基準となってきた。

史跡整備の開始　遺跡の活用の面では、土地公有化事業の進展に伴い、その早急な利用を求める地域住民の強い要望に対応して、昭和57・58年度には、古くから「斎王旧蹟」として伝承されている「斎王の森」周辺で、事前の発掘調査とその成果に基づく掘立柱建物や井戸・方格地割の片鱗に相当する溝等の遺構表示を伴う史跡整備が、国庫補助事業として行われた。その完成を記念して地元住民有志によって組織した実行委員会によって開催された「斎王まつり」は年々発展しつつ続けられ、斎宮跡の保存・調査・活用と地域おこしの核としての大イベントとして定着している。また、発掘調査の中で実施している現地説明会や、この頃始められた小中学生を対象とした体験発掘教室も地味ながら、「斎宮跡」への理解を深められるうえで評価されよう。

以上のような調査成果の蓄積や活用の実績、地元の人々をはじめ多くの関係者の努力、各方面からの要望によって斎宮歴史博物館の建設に向かう時期であった。

4 第3期（平成元年～平成11年）

博物館の開館　斎宮歴史博物館の開館による資料公開や情報発信の充実とともに、公有化済の史跡地での「ひろば」としての活用も促進された「史跡 斎宮跡」にとって充実期とも言える時期である。

史跡西部の古里地区は、斎宮跡の所在解明の契機となる発掘調査が行われた場所で早くから公有化されており、その有効な活用が望まれていた。そこに全国でも例を見ない史跡指定地内に所在するテーマ博物館として「斎宮歴史博物館」が建設され、平成元年10月にオープンした。建築に当たっては事前に建設予定部分の発掘調査を実施し、砂縮めをした上にベタ基礎工法により遺構の保護に努められたものの、周辺では入館者のアクセスとして隣接する県道の拡幅や町道の新設、これに連鎖しての沿道の宅地化等リスクも少なからず生じた。しかし、平成6年度に施工された博物館の南に広がる「ふるさと広場」の整備と相まって、斎宮跡のイベント拠点として定着している。

中心部の解明　発掘調査は、それまでの調査によって知られている大型柱掘形の建物群、大規模な柵列（掘立柱塀）の所在、祭祀を想定される夥しい量の土器が出土する土坑の集中等、既に昭和50年代の半ばから、一時期の斎宮に於ける中心地域（内院？）かと想定されていた遺跡東部の通称中町地域で重点的に実施してきた。

方格地割の東から3列目中央を南北に貫く道路の存在、その両側に配置された規格的な建物群や西加座南地区の小区画掘立柱塀とこれに囲まれた一画、鍛冶山地区の大区画掘立柱塀とその内部の内郭掘立柱塀等、当該地域の様相解明は飛躍的な前進を遂げることができた。

一方で、その成果とは裏腹に近鉄線以南の住宅地区での発掘調査の実施の困難さにより、問題解明の可能性を見送らざるをえない場合も多く、単に調査・研究の分野に止まらず、遺構の復元・活用の面でも大きな障害となっている。

八脚門の発見　とはいって、近鉄線の南側でも住宅新築を内容とする史跡現状変更に伴う発掘調査も様々な規制のなかで断片的には行われてきた。その代表的な成果が平成5年2月に明

らかとなった八脚門の存在である。7列×4列の方格地割南西隅の区画に於ける南辺中央付近に位置し、地元の個人住宅新築に伴って発掘調査を実施したものである。

付近ではそれまでに小規模ながら數カ所で調査が行われ、大型の柱掘形が散在することは知られており、この調査で八脚門とこれに取りつく掘立柱塀が明らかになったことにより、方格地割の南西隅に相当する当該区画でも区画全体を巡る掘立柱塀の所在と方格地割が7列×4列に及ぶことが確実となった。

また、調査の進展とその検討を行ひ上で、積年の調査成果の相関を方格地割の各区画毎に割り込んだ遺構図の作成と各区画の呼称の決定は、早くからその必要性が求められてきた。とくに各区画の呼称については、昭和50年代半ばに決められた現行地割を基にした地区設定、遺構図作成の基準としている国土座標、詳細になりつつある方格地割とその範囲外の取扱いや史跡指定範囲外の位置づけ等様々な問題点の中で、アルファベットと数字の組み合わせによる命名の試みも暫定的になされてきた。しかし、基点をどこに置くか?、アルファベットや数字の方向は?等の問題から小字名を基にした呼称を探ることで現在に至っている。

さらに、遺跡の保存や活用の面では、地元住民・町・県が一体となって史跡内住民の生活権、文化財としての斎宮跡の保存、遺跡を核としての地域起こし等の調和のとれた史跡をめざし、「史跡斎宮跡保存管理計画」の見直しに努力してきた。

整備事業の拡大 そのような中で、平成8年度には長期的展望に立った史跡の保存や活用のあり方を内容とする『史跡斎宮跡 整備基本構想』が策定された。ここで「○○○○ゾーン」として位置づけされた現在の近鉄斎宮駅北側の一帯についてはさらに具体的な整備基本計画が打ち出され、体験学習施設の建設をかわきりに、1/10の遺構復元模型を含む整備事業が平成8年度から進められている。

その前提となる当該地域の遺構の状況把握のための発掘調査も平成7年から徐々に進められている。その結果、約137haに及ぶ平坦な斎宮跡の中でもやや窪んだ湿潤な場所が点在している。中でもこの近鉄斎宮駅北側の一帯は掘立柱建物のあり方や区画設定の様相など、方格地割域における他の区画とは異なっており、近年まで畑地として耕作されてきた周辺に比べて、水田となっていたような土地条件が、斎宮の当時から既に周辺とは違う特異な土地利用のあり方がされていたことを想定すべきであることが明らかになってきている。

5 調査にかかる今後の課題

斎宮跡の発掘調査が着手されて30年、国の史跡に指定されて20年余、調査研究や公開活用の拠点として建設された斎宮歴史博物館がオープンして10余年が経過し、遺跡の実態解明や多くの人々による遺跡への理解は地元をはじめ関係者の努力によって着実に進んできた。

歴史体験館の開館 さらに、近鉄斎宮駅北側の一帯での整備事業も着々と進み、平成11年10月には斎宮歴史博物館が展示替えによりリニューアルオープンするのに併せて、史跡の1/10模型を中心とする当該整備地域の核となり、史跡のガイダンス施設としての「いつきのみ

や歴史体験館」も新たにオープンした。

しかし、現在進められている1/10模型の整備計画に当たっては、様々な問題点のひとつに史跡中央を東西に貫く近鉄線以南の住宅地域に於ける発掘調査が非常に少なく、遺構の把握のうえで南北の格差が極めて甚だしいことがあげられる。このことにより、遺構の復元表示にとって北半部が調査成果に基づく表示がかなり可能なのに比べ、南半部では大幅な推定を加えざるを得ない。近世の参宮街道沿いに形成された集落が広がり、発掘調査の可能な空閑地や畠が少ないとあるが、発掘調査の進行と共に伴う遺跡の解明による当該地域の公有化や現状変更の強化等への地域住民の危惧が、この地域での発掘調査の実施にとって大きな障害となってきた。さらに、史跡斎宮跡の保存管理計画に基づく公有化による間接的な影響か、その地権者である旧参宮街道沿いの集落が生活様式の近代化に併せて徐々に景観を変えてきている。その時代背景こそ各々違うものの、史跡の町として残念な点である。

今後の課題

そこで、今後は遺跡の全体像を解明するための発掘調査が近鉄線以南の地域に於ける空閑地でも可能とするような地域住民の理解と協力、史跡現状変更により住宅等の構造物により凍結されることとなる場所をこそ事前の発掘調査の対象とすることや、既存の住宅を改築する等のチャンスに少しでも発掘調査ができる、旧参宮街道沿いの地域に対する景観への配慮といった行政側の取り組み等、遺跡の保存や解明と地域の住民生活との調和に基づいた遺跡保護・活用・地域振興が最も重要な課題のひとつであると言えよう。

また、今回「内院地区」として報告する地域も約660年余に及ぶ斎宮にとって内院であり続けたとは考えられない。成立期の斎宮や平安時代中期以降の斎宮についても現在の史跡指定範囲は勿論、その周辺地域をも視野に入れた、所在解明のための調査が必要である。さらに、現在の度会郡小俣町に所在する離宮院や赴任・退下の頓宮等の斎宮に関連する様々な遺跡調査の実施についても、今後は斎宮跡の調査・研究を進めていくうえでの必要な課題として挙げられる。

一方、かつては発掘調査の作業における安全管理の不備や設備不足、職員数や予算の制約にもかかわらず多くの関係者の努力と協力によって膨大な調査成果が積み上げられてきた。情報化の進む今日に応じた精度の向上や公開と利用の容易性、調査研究面での利便性等を目標にしたデータ化の努力も現在鋭意続けられている。これまでの調査成果を基に斎宮歴史博物館の展示・普及・研究活動全般についてもより一層の充実を期すことは言うまでもないが、様々な分野から「斎宮」の研究が深められる一助として、専門の研究者はもとより広範な人々の利用が得られるよう願いたい。

昭和45年の開始以来、30年にわたる斎宮跡の発掘調査は、県教育委員会社会教育課の時代から現在の斎宮歴史博物館まで、折衝・調整や経理等様々な業務分野を担当する多くの人々の努力と協力によって支えられてきた。ここでは、その様な関係者の努力を讃えつつ、県教育委員会社会教育課並びに文化課時代については埋蔵文化財担当者全員を、三重県斎宮跡調査事務所の時代にあってはその所属職員、斎宮歴史博物館の開館以降については調査部門と公開部門の職員についてのみ挙げさせていただいた。

年 度	組 職	職 員
昭和 45 年度	三重県教育委員会 事務局社会教育課	課長：深田清六 文化財係長：山本 威 小玉道明・下村登良男・山沢義貴・谷本銳次
昭和 46 年度	三重県教育委員会 事務局 文化課	課長：井上武弘 文化財係長：山本 威 小玉道明・下村登良男・伊藤久嗣・山沢義貴・谷本銳次・吉水康夫
昭和 47 年度		課長：井上武弘 文化財係長：山本 威 小玉道明・下村登良男・伊藤久嗣・山沢義貴・谷本銳次・吉水康夫
昭和 48 年度		課長：井上武弘 文化財係長：山本 威 小玉道明・下村登良男・伊藤久嗣・山沢義貴・谷本銳次・吉村利男・吉水康夫
昭和 49 年度		課長：井上武弘 文化財係長：片岡良昭 小玉道明・下村登良男・伊藤久嗣・山沢義貴・伊藤克幸・谷本銳次・藤原 寛 吉村利男・吉水康夫
昭和 50 年度		課長：井上武弘 文化財係長：片岡良昭 小玉道明・下村登良男・伊藤久嗣・山沢義貴・伊藤克幸・谷本銳次・藤原 寛 吉村利男・吉水康夫
昭和 51 年度		課長：井上武弘 文化財係長：片岡良昭 小玉道明・伊藤久嗣・山沢義貴・伊藤克幸・谷本銳次・藤原 寛・吉村利男 吉水康夫
昭和 52 年度		課長：井上武弘 文化財係長：片岡良昭 小玉道明・伊藤久嗣・山沢義貴・伊藤克幸・谷本銳次・大西素行・藤原 寛 吉村利男・吉水康夫・駒田利治・山田 猛
昭和 53 年度		課長：長井 実 文化財係長：小久保秀和 小玉道明・伊藤久嗣・山沢義貴・伊藤克幸・谷本銳次・大西素行・吉村利男 吉水康夫・駒田利治・田中喜久雄・山田 猛・新田 洋・倉田直純・早川裕己
昭和 54 年度		所長：竹林日出夫 山沢義貴・大西素行・吉水康夫・倉田直純
昭和 55 年度		所長：佐々木宣明 山沢義貴・大西素行・吉水康夫・倉田直純
昭和 56 年度	三重県考古跡 調査事務所	所長：佐々木宣明 山沢義貴・大西素行・吉水康夫・倉田直純
昭和 57 年度		所長：佐々木宣明 山沢義貴・谷本銳次・吉水康夫・倉田直純
昭和 58 年度		所長：佐々木宣明 山沢義貴・谷本銳次・福村直人・倉田直純
昭和 59 年度		所長：佐々木宣明 山沢義貴・谷本銳次・福村直人・倉田直純
昭和 60 年度		所長：佐々木宣明 山沢義貴・倉田直純・泉 雄二・杉谷政樹
昭和 61 年度		所長：横山洋平 山沢義貴・田坂 仁・泉 雄二・杉谷政樹
昭和 62 年度		所長：横山洋平 山沢義貴・田坂 仁・泉 雄二・上村安生
昭和 63 年度		所長：中林昭一 山沢義貴・田坂 仁・泉 雄二・上村安生

年 度	組 織	職 員
平成 元 年 度	斎宮歴史博物館	館長：中林昭一 調査課：田阪 仁・泉 雄二・上村安生・御村充生 学芸課：谷本鏡次・杉谷政樹・樺村寛之・岸田 敦
平成 2 年 度		館長：中林昭一 ○調査課：谷本鏡次・倉田直純・上村安生・御村充生・久保勝正 ○学芸課：谷本鏡次・泉 雄二・樺村寛之・岸田 敦
平成 3 年 度		館長：中林昭一 調査課：吉水旗夫・御村充生・大川勝宏 学芸課：伊藤久嗣・樺村寛之・岸田早苗 普及課：田阪 仁・田中久生・久保勝正
平成 4 年 度		館長：久保富子 ○調査研究課：吉水康夫・野原宏司・大川勝宏 学芸課：伊藤久嗣・杉谷政樹・樺村寛之 ○普及課：田阪 仁・田中久生・久保勝正
平成 5 年 度		館長：久保富子 調査研究課：吉水康夫・野原宏司・大川勝宏 学芸課：伊藤久嗣・杉谷政樹・樺村寛之 ○普及課：田阪 仁・天野秀昭・久保勝正
平成 6 年 度		館長：川村政教 調査研究課：吉水康夫・野原宏司・大川勝宏・赤岩 操 学芸課：田阪 仁・杉谷政樹・樺村寛之 ○普及課：倉田直純・上村安生・天野秀昭
平成 7 年 度		館長：川村政教 調査研究課：吉水康夫・野原宏司・大川勝宏・赤岩 操 学芸課：田阪 仁・樺村寛之・天野秀昭 ○普及課：倉田直純・上村安生・岸田早苗
平成 8 年 度		館長：奥村敏夫 調査研究課：駒田利治・野原宏司・上村安生・赤岩 操 学芸課：藤原 寛・樺村寛之・天野秀昭 ○普及課：田村陽一・岸田早苗・宇河雅之
平成 9 年 度		館長：奥村敏夫 調査研究課：駒田利治・上村安生・赤岩 操・角正芳浩 学芸課：藤原 寛・樺村寛之・天野秀昭 ○普及課：田村陽一・岸田早苗・宇河雅之
平成 10 年 度		館長：大井興生 調査研究担当：駒田利治・上村安生・大川勝宏・角正芳浩 学芸普及G：藤原 寛・新田 洋・樺村寛之・天野秀昭・岸田早苗・宇河雅之
平成 11 年 度		館長：大井興生 調査研究担当：駒田利治・上村安生・大川勝宏・西村美幸 学芸普及G：藤原 寛・新田 洋・樺村寛之・天野秀昭・岸田早苗・宇河雅之
平成 12 年 度		館長：藤澤英三 調査研究G：駒田利治・泉雄二・大川勝宏・西村美幸 学芸普及G：藤原 寛・樺村寛之・天野秀昭・岸田早苗・宇河雅之

第1表 斎宮跡発掘調査組織一覧表

第三節 研究小史

1 近世・近代

江戸期

南北朝時代に斎王制度が廃絶して以降、朝廷の神祇官官僚や伊勢神宮神官等において同制度の復興を目的として、斎王制度の由緒、故事の調査が続けられていた。⁽¹⁾

今日、斎宮研究の嚆矢となったのは、江戸時代後半の19世紀における伊勢神宮神官で園田守良の『神宮典略』と『新积令義解』である。前者は、伊勢神宮の制度及び祭祀を中心とした神宮学であり、後者は、律令格式の研究を背景として伊勢神宮及び斎宮寮を考察した律令学の律令注釈書である。園田は、これらの著作の中で、斎宮寮の官制、組織、神宮祭祀との関係に論及している。

園田の『神宮典略』に収められた史料に立脚し、斎宮寮を内・中・外院にわけ、史料に著された殿舎をもとに、平安京等の宮殿における建物配置を参考にし、斎宮寮の殿舎配置を復原した「斎宮寮内中外院之図」を収録した『斎宮寮考証』を著した御巫清直は幕末から明治前期の神宮神官であり、神祇官官僚を経て神宮皇學館大学教授を務めた。御巫の斎宮寮復原図は、昭和45年から開始された発掘調査により、学史的な存在価値しかもたなくなつたが、その復原論究には今尚学ぶところが多い。

御巫の研究は、近代歴史学の実証主義の影響も受け、現地に残された「御館」「楽殿」等の地名と地形を基に歴史地理学的方法を用い、斎宮寮の所在地について「斎宮寮廃跡図」を『斎宮寮廃跡考』に収めている。この図は、明治前半期の土地利用状況を伝えるとともに、斎宮跡の国史跡指定範囲を決定する際に参考とされた。

明治期

明治期には、文部省に古事類苑編纂掛が設置され、『古事類苑』の編纂が行われ近代国家において、体系的に文献資料調査が開始された。この編纂事業に携わった一人である松本愛重は、「斎宮の制度及沿革」を発表し、後に『大神宮故事類纂』に参画し、この事業のなかでも斎宮寮の研究が生まれている。⁽²⁾

大正・昭和期

大正期から昭和初期にかけては、地元の研究者の個別的研究も活発になる。大西源一は、「旧神郡内における斎宮関連史蹟」「平安時代の斎宮街道」を、鈴木直吉は『斎宮村郷土史』を著し、郷土史学からのアプローチを続けた。地元での地誌も斎宮についてふれ、『斎宮村郷土史』では御巫清直の業績にたって概述をし、明治期以降の顕彰運動についてまとめている。また、阪本広太郎は「斎宮寮の経済一班」で斎宮寮に対する社会経済学的な研究を著している。⁽³⁾この時期において特筆される研究に福山敏男『神宮建築に関する史的調査』が挙げられる。⁽⁴⁾

2 第二次世界大戦後の研究

第二次世界大戦後は、それまでの歴史観の見直しが行われ、科学的、実証的歴史学の道が開かれる。これまでの歴史学で大きな位置を占めていた伊勢神宮の問題についても国家権力による束縛から解放され、自由な研究が進められる事になった。それに伴い、斎宮の研究も活発化する。

第1图 考古勘探图



斎宮起源論争 直木孝次郎は、斎宮寮の基本的な成立年代を神亀年間(724～728)としたのに対し、⁽¹¹⁾
田中卓、滝川政次郎は天武朝(672～686)に求められるとし論争を展開した。⁽¹²⁾ ⁽¹³⁾

この時期から、法政史、律令国家論以外にも、文学、宗教、経済の各分野からの研究も開始され、また斎王の個別研究も進められることになる。

3 斎宮跡発掘調査の開始

発掘調査開始 昭和45年(1970)から開始された民間開発事業に伴う古里遺跡の発掘調査は、斎宮研究を飛躍的に推進することになり、これまでの文献史学、歴史地理学あるいは文学史等における研究にも多大な資料提供をなしている。発掘調査の経緯については本章第二節でふれたところであり、本稿では考古学的な分野での研究史を概述する。

斎宮跡研究における考古学研究の特質は、遺構、遺物に立脚した実証論であり、斎宮寮の所在地論とその構造論、斎宮寮を構成する建物の構造と配置、土器類の時期とその変遷、遺物の生産と流通等と個々にかかえる課題等多岐に及んでいるとともに相互に関連した総合的な研究が求められている。また、約660年間存続したとされる斎宮の変遷を明らかにしなければならないし、令外の官とはいえど歴代天皇の代毎に派遣される斎王は、当然のことながら、藤原宮、平城宮、長岡宮、平安宮等の都城遺跡等の変遷にも影響されており、都城及び伊勢神宮との関連にも留意しなければならない。

土器編年 斎宮寮変遷の根幹となるのは、個々の遺構の時期決定であり、出土する遺物による時期判定が有効であるが、斎宮跡の場合立地条件に影響され、木簡等の有機質等の保存が期待できず、紀年銘を有する遺物の出土がみられず、土器類の編年を時期決定の核としている。斎宮出土の土器類は、土師器が出土遺物の90%以上を占め、土師器の編年を基軸とし、伴出する須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、黒色土器等の広範囲に流通する土器類の編年成果、「律令的土器様式」として捉えられる都城遺跡の土器変遷を参考として、昭和60年「斎宮跡の土師器」としてまとめられた。この1984編年は、長く斎宮跡の土器編年の基準として用いられてきた。その後の出土資料の蓄積、生産地である美濃須衛窯、猿投窯編年の確立と見直しが進んだこと、都城遺跡の土器研究が、古代の土器研究会による『都城の土器集成』等が刊行され、都城遺跡の土器研究が活発化するなかで、都城遺跡と斎宮跡との土器編年の関わりを踏まえ斎宮跡2000年編年を本報告の第五章に提起した。⁽¹⁴⁾

綠釉陶器 また、個別の土器研究としては、綠釉陶器の生産と流通をめぐってシンポジウムを開催した。斎宮跡では9世紀前半にあたる斎宮第II期第2段階で猿投窯14号窯の製品が出現し、次の第3段階において猿投窯黒釜90号期に出土量が多く、尾張、美濃製品に以外にも京都産の製品も含まれている。その後斎宮第III期第2段階の11世紀前半に近江の製品が加わり、消滅していくことが明らかにされている。⁽¹⁵⁾ ⁽¹⁶⁾

黒色土器 黒色土器については、都城遺跡での供膳具における黒色土器の出土比率に比べ、斎宮跡では低く、かつB類の出土はきわめて少ない。定量的に出現する斎宮第II期第1段階から第III期第1段階におけるロクロ土師器の出現と相俟って大きな変革期を迎えることが明らかにされている。⁽¹⁷⁾

朝貢土器	また、天平2年の詔により斎宮寮の経済基盤を国家財政の元に置いたことを裏付けるように、この時期から官窯と推定されている美濃須衛窯の製品と考えられる須恵器が認められることも明らかにされている。 ⁽²⁰⁾
土師器生産遺構	一方、出土遺物の90%以上を占める土師器についても、斎宮跡では近隣に生産地を擁していたことが明らかになっている。昭和48年の発掘調査により、土師器焼成遺構が確認され、国の史跡指定を受けた水池土器製作址の確認以降、三重県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した北野遺跡では、6世紀後半から8世紀中頃までの土師器焼成遺構が225基確認されており、古代の土師器生産遺跡の実態が解明され、伊勢神宮或いは斎宮跡との関係が窺える。 ⁽²¹⁾
方格地割	斎宮跡の方格地割は、奈良時代後期に造営されたと確定できる段階まで調査が進展しており、都城の状坊制に通じ、当初東西5区画、南北4区画の存在が確認されているが、平成4年度(1992)の第96~5次調査で確認された八脚門等の存在により、地割は西側に2区画延びていることも確認されている。しかし、その存続時期については、他の区画とは状況を異にしており、方格地割の成立と変遷については、今後に検討課題を残している。また、斎宮跡の方格地割を都城の条坊制として積極的に捉えようとする方向性も提起されている。 ⁽²²⁾
内院地区の遺構変遷	内院地区的調査の進展に伴い、牛葉東区画及び鍛冶山西・中区画の建物等の変遷については、調査の進展に伴い毎年度報告している『史跡斎宮跡 発掘調査概報』 ⁽²³⁾ でとりあげているところであり、内院区画の成立を光仁・桓武朝期とみる段階に来ている。また、区画内の建物配置や機能については、文献資料の少なさから困難な状況にあるが、都城遺跡との対比のなかで検討を進めようとする試みもなされている。 ⁽²⁴⁾
伊勢道	方格地割との関係で注目される一つに古代の官道としての「伊勢道」の存在がある。これまでの調査で、史跡内で19か所の地点で原則的に両側溝をもつ幅6~9mの道路遺構を確認している。伊勢道については、歴史地理学から足利健亮による伊勢国内の復原がなされている。この伊勢道は、方格地割の造営により少なくとも方格地割の東西端が変更されたと考えられるが、方格地割との接点は確定できていない。しかし、勤使が斎宮跡を通過する際には、南路と北路の二つが存在したことが明らかにされており、方格地割の東西道路がこれにあてられたものと推定される。奈良朝以前の伊勢道が停廃されたことと方格地割開拓の具体的な基準点を、内院地区的鍛冶山西区画の北辺中央に求められると指摘され、両者の関係を考えるうえできわめて重要である。 ⁽²⁵⁾
個別遺物	硯、墨書き土器、人面墨書き土器、櫛、笄、埋納錢等の個別遺物については、博物館展覧会図録等で報告・研究が行われている。 ⁽²⁶⁾
文献史料	文献資料との関わりでは、発掘調査開始直後にまとめられた『斎王宮跡資料』に斎王表、斎宮寮官人、斎宮寮の殿舎等を掲載されているほか、『斎宮編年史料集一』『斎宮編年史料集二』が八世紀までの文献史料を網羅している。文献史料と発掘調査の成果について遺構の性格を追及する試みもなされている。 ⁽²⁷⁾

註

- (1)本稿のうち発掘調査開始までの研究小史は、渡辺寛「斎宮寮研究小史 著作とその人々」(『斎宮寮研究1』斎宮寮研究会 1977)によるところが大きい。
- 斎宮関係の文献は、「斎宮関係文献一覧」「『幻の宮 伊勢斎宮 王朝の祈りと 皇女たち』1999 斎宮歴史博物館(朝日新聞社)に収録されている。
- (2)『大神宮叢書 神宮典略』神宮司庁 1932~1934(臨川書店覆刻1970~1971)
- (3)『大神宮叢書 神宮神事考證』神宮司庁 1936(臨川書店覆刻 1971)
- (4)『古事類苑』神宮司庁 1898
- (5)「斎内親王」『大神宮故事類纂(稿本)』293 神宮司庁 1899~1910
- (6)『瑞垣』18 神宮司庁 1936
- (7)『歴史地理』55~54 1930
- (8)『斎宮村郷土史』斎宮村商工会 1935(『郷土史に見る斎王』1978に再録)
- (9)『斎宮寮の経済一斑』『神宮皇學館史学会会報』1 神宮皇學館史学会 1923
- (10)福山敏男『伊勢神宮の建築と歴史』日本資料刊行会 1976として複刻
- (11)直木孝次郎『奈良時代における伊勢神宮』『続日本史研究』2-2,6,11,12 1965
(後に同『日本古代の氏族と天皇』培文房 1964に再録)
- (12)田中卓「斎王制度の成立について」『神光』10,11 1958
(後に同『神宮の創紀と發展』神宮司庁 1959に補訂加筆所収)
- (13)庵川政次郎「律令における太神宮」『神道史研究』9~4 1961
- (14)倉田直純ほか「斎宮跡の土器群」『三重県斎宮跡調査事務所年報1984史跡斎宮跡 発掘調査概報』三重県教育委員会 三重県斎宮跡調査事務所 1985
- (15)渡辺博人『美濃須衛古跡群資料調査報告書』各務原市教育委員会 1984
- (16)斎藤孝正「東海西部(愛知・岐阜)」『須恵器集成図録』第3巻東日本編5 雄山閣 1995
- (17)古代の土器研究会『古代の土器1 都城の土器集成』1992 『古代の土器2 都城の土器集成II』1993 『古代の土器3 都城の土器集成III』1994 ほか
- (18)泉雄二「斎宮跡の綠釉陶器」「綠釉陶器の流れ」斎宮歴史博物館・三重県埋蔵文化財センター 1990
- (19)大川勝宏「斎宮跡の黒色土器 供膳形態を中心に」『斎宮歴史博物館 研究紀要2』斎宮歴史博物館 1993
- (20)上村安生「考古資料からみた『統日本紀』天平二年七月癸亥条について」
『斎宮歴史博物館研究紀要九』斎宮歴史博物館 2000
- (21)上村安生「東海 三重県を中心として」『古代の土器生産と焼成遺構』 斎跡研究会 1997
- (22)田阪仁・泉雄二「国史跡斎宮跡調査の最新成果から 史跡東部の区画造成プランをめぐって」『古代文化』43~4 古代學協会 1991
- (23)斎宮歴史博物館『第96~5次調査』『史跡斎宮跡 平成4年度現状変更緊急発掘調査報告』明和町教育委員会 1994
赤岩操「方格地割について」平成7年度 斎宮跡調査研究指導委員会資料1995
- (24)山中章「斎宮の交通体系~方格地割交差点の優先関係~」『年報 都城10』 財団法人向日市埋蔵文化財センター 1998
山中章「斎宮「都市」計画~方格地割の計画方法~」『条里制・古代都市研究会』発表レジメ 2001
- (25)斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡 平成7年度発掘調査概報』1996
斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡 平成8年度発掘調査概報』1997
斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡 平成9年度発掘調査概報』1998
斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡 平成10年度発掘調査概報』1999
大川勝宏「光仁・桓武朝の斎宮 方格地割形成にみる斎宮の変革」『古代文化』94~11 古代學協会 1997
- (26)大川操「斎宮跡方格地割における区画内建物の空間構成について」『研究紀要 第8号 創立10周年 記念論文集』三重県埋蔵文化財センター 1999
- (27)足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」『探訪古代の道第一巻』法藏館1988
同「平安京から伊勢神宮への古代の道」『探訪古代の道第二巻』法藏館1988

- (28) 訂(22)に同じ
- (29) 杉谷政樹「古代官道と斎宮」『研究紀要』第6号三重県埋蔵文化財センター1997
- (30) 企画展『古代の現』 斎宮歴史博物館 1996
角正芳浩「斎宮跡の現」『斎宮歴史博物館 研究紀要八』斎宮歴史博物館 1999
企画展『眠りから覚めた文字たち 斎宮跡の墨書き器』斎宮歴史博物館 1997
企画展『古代の祈り 猥いの顔』 斎宮歴史博物館 1990
企画展『日本の櫛 別れの術櫛によせて』 斎宮歴史博物館 1995
駒田利治「斎宮跡の袴帯」『斎宮歴史博物館 研究紀要九』斎宮歴史博物館2000
杉谷政樹・大川勝宏・赤岩操「斎宮跡の埋納残について」『斎宮歴史博物館 研究紀要五』斎宮歴史博物館 1996
- (31) 小玉道明・山澤義貴・谷本鉄次『斎王宮跡史料 発掘調査・文献史料』三重県教育委員会 1978
斎宮歴史博物館『斎宮編年史料集一』 1993
斎宮歴史博物館『斎宮編年史料集二』 1995
榎村寛之「文献より見た斎宮の構造についての覚書 発掘成果との対比の試み」『斎宮歴史博物館研究紀要二』斎宮歴史博物館 1993
榎村寛之「道と墓 文献より見た斎宮の構造についての覚書2」『斎宮歴史博物館 研究紀要六』斎宮歴史博物館 1997

第四節 調査報告書の作成

報告書の内容 今回の報告は、三重県教育委員会が1970年度（昭和45年度）から2000年度（平成12年度）に史跡斎宮跡において、史跡の解明のため継続的に実施している計画調査及び史跡内の現状変更に伴う緊急発掘調査を実施したなかで、斎宮跡の方格地割内において中枢部をなす牛葉東区画及び鍛冶山西・中区画の調査を総合的に検討したものである。当該地区では、牛葉東区画内で第10次、第17-1次、第17-2次、第103次、第108次、第114次調査を実施しており、鍛冶山西・中区画で第21-1次、第25-13次、第29次、第41次、第44次、第46次、第76-8次、第92次、第96-4次、第98次、第105次、第106-3次、第109次、第119次、第122次、第124次の各調査を実施しており、近鉄日本鉄道株式会社の山田線以南の第三種保存地区における調査の進捗に課題を残しているが、鍛冶山西区画の北部分についてはほぼ調査が完了している。これらの調査内容は、それぞれの調査年度に概要報告を行ってきたところである。しかしながら、当該地区は、奈良時代後期に整備されたと考えられる斎宮跡の中枢部にあたる内院地区と判断される内容を具備しており、斎宮跡解明のためには、現時点での成果と課題について問題点を明確にすることが重要となってきたので、これまでの調査資料を再検討して、報告することとした。

作成経過 報告書作成は、平成9年度に基本的な計画を検討し、これまで整理されてきた基本資料の取扱い基準に検討を加えるなかで、第1次調査から現在にいたる発掘調査地点409か所のすべての遺構図面をデジタル化するため、コンピュータを導入することとし、「斎宮跡文化財管理システム」を構築することとした。この管理システムは、第一次開発として概要報告書に採用した1/100遺構実測図をデジタル化し、掘立柱建物・掘立柱廻・井戸の斎宮跡を構成する主要遺構を個々の遺構一覧表とリンクさせ、

検索・測定・表示することを目的とし、平成10年度から平成13年度までの4か年計画で実施している。平成14年度以降は、各年度の資料の追加、遺構と出土遺物等との関連を検索・調査するための第二次開発に着手する計画である。

一方、出土遺物も過去30年に及ぶ調査で整理箱（60×40×15cm）約9,700箱となっている。斎宮跡において個々の遺構の時期判別の基準となる大きな要素を占めている土器類の編年は、1984年度（昭和59年度）に第50次調査までの資料により確立されているが、それ以降16年を経過し、調査次数も第131次に達する今日、既存の編年資料を補完できる良好な一括資料もあり、また時期決定の根拠としてきた須恵器、灰釉陶器、山茶碗等の編年も議論が深まってきており、再検討を必要とする時期にきていた。

土器の基準資料作成のため、平成10年度から「斎宮跡発掘調査報告書刊行検討会」を館内に設置し、永年斎宮跡の保護、調査に携わってきた山澤義貴（三重県埋蔵文化財センター副参事）と谷本銳次（三重県県教育委員会事務局生涯学習課文化財保護室長）を指導・助言者とし、斎宮跡の発掘調査に従事してきた以下の発掘調査担当者を中心検討会を組織した。

斎宮歴史博物館	藤原 寛 駒田利治 新田洋 榎村寛之 上村安生 大川勝宏 角正芳浩
三重県埋蔵文化財センター	吉水康夫 田阪 仁 山田猛 野原宏司 杉谷政樹 竹内英昭 伊藤裕偉 大川操 西村美幸
文化財保護室	倉田直純 泉雄二
明和町教育委員会	中野敦夫

検討会は、従来の編年基準資料と新たに検討する基準資料で、奈良時代前期から平安時代末期までの出土遺物を対象に、平成10年度において6回の検討会を実施し、既存編年資料を補完すべき資料の選定にあたった。

平成11年度には、調査報告書の対象地区とした内院地区に推定している牛葉東区画、鍛冶山西・中区画とこの区画と特に密接な関係をもち、調査が比較的進んでいる西加座南区画と同北区画の建物を中心とした遺構の変遷を中心に6回の検討会を実施した。この検討会での検討・調査を踏まえ、各執筆者が改めて遺構・遺物の整理検討を行なながら、平成12年度に執筆による編集会議の討議を経て執筆した。概要報告時点とは解釈が異なる点もあるが、本報告をもって正式の見解といたしたい。本報告書の執筆担当者は次のとおりである。

執筆者	第一章 第一節 山澤 第二節 吉水 第三節 西村 第四節 駒田
	第二章 駒田
	第三章 第一節 上村 第二節 大川（勝） 第三節 大川（勝）
	第四章 第一節 駒田 第二節 倉田 第三節 泉
	第五章 榎村
	第六章 大川（勝）

なお、編集は駒田と泉が、協議して行なった。

外部機関の協力	斎宮跡の調査・研究にあたっては、文化庁文化財保護部記念物課及び「斎宮跡調査研究指導委員」会議の指導・助言によるところが大きいが、この他にも奈良国立文化財研究所をはじめとする諸機関並びに全国の研究者の方々の支援・協力を得ている。その主な事項と研究者名を挙げさせていただき、感謝の意を表したい。
基準点設置	斎宮跡では、国土調査法による第VI座標系を基準として、遺構実測等を行っている。この基準点の設定については、奈良国立文化財研究所の木本全蔵・伊東太作・岩本省三・西村康各氏の現地指導・協力を得て昭和48年度及び昭和60年度に史跡内に基準点を100基設置した。
遺跡探査	昭和48年12月斎宮跡の調査に先立ち、大阪府教育委員会文化財保護課中村浩氏・大阪大学基礎工学部河合研究室鳥居雅之氏によりおプロトン磁力計による磁気探査を行ったほか、平成8年度の第114次調査では、表土除去に先立ち奈良国立文化財研究所の西村康氏によるレーダー探査を実施いただいた。
科学分析	自然科学分析については、土器の胎土分析、プラントオバール分析、花粉分析等を必要に応じて、奈良国立文化財研究所で実施していただいているほか、民間研究機関に委託している。
緑釉シンポジウム	出土遺物の考察をすすめるなかで、斎宮跡を特徴付ける緑釉陶器についてシンポジウムを平成2年2月18日に開催し、奈良国立文化財研究所の巽淳一郎氏、京都府埋蔵文化財調査研究センターの水谷寿克氏、名古屋大学の斎藤孝正氏、滋賀県日野町教育委員会の日永伊久男氏、京都市埋蔵文化財研究所の平尾政幸氏、長野県埋蔵文化財センターの原明芳氏による発表と討論を行った。
2000年シンポジウム	また、今回斎宮跡2000年編年を検討するため、国史跡斎宮発掘30周年記念特別展の開催に合わせて、斎宮跡の土器編年について、数回の土器実見と検討を経て、シンポジウム「斎宮の土器・みやこの土器」を開催した。土器編年にあたっては、三重大学名誉教授で斎宮跡調査研究指導委員会議委員長の八賀晋氏、奈良国立文化財研究所の川越俊一氏、京都市埋蔵文化財研究所の小森俊寛氏、文化庁文化財保護部美術工芸課の斎藤孝正氏、京都橘女子大学の増渕徹氏、向日市埋蔵文化財センター國下多美樹氏による各都城遺跡の報告と斎宮跡出土土器について検討いただいた。
個別研究	斎宮跡の調査研究は、考古学以外にも、文献史学、地理学、国文学、宗教学、民俗学等関連学間の領域は広いことは、改めて言及する必要もないであろう。斎宮歴史博物館開館以前には、「三重の文化財と自然を守る会」等による「斎宮跡の歴史と保存」について各分野の研究者による講演会が開催され、博物館開館以後は、展覧会の記念講演や博物館講座として継承されており、これらの講師の方々に助言を得たことも大きい。以下に助言いただいた研究者の芳名のみ挙げさせていただき、謝意を表したい。なお、敬称は省略させていただきます。
	足利健亮 綾村宏 秋山光和 吾妻俊典 池浩三 伊藤敏子 伊藤みどり 井後政晏 石井進 石丸晶子 井上和人 井上喜久男 猪熊兼勝 岩田貞雄 岩井宏實 植木久 内田昭人 梅村恵子 円地文子 岡田精司 岡田康博 萩美津夫 大村拓生 片桐洋一 加藤允彦 金子裕之 笠井昌昭 亀井正道 亀田博 川尻秋生 菊地康明

北村文治 岸本道昭 切畠健 木下良 京楽真帆子 栗原和彦 黒崎直 黒田日出男
久保哲正 熊田亮介 小林謙一 小山靖憲 小松和彦 桜井敏雄 佐多芳彦 清水真一
清水好子 柴田博子 城ヶ谷和広 進藤秋輝 植山林継 鈴木敏中 狹川真一
高取正男 高島忠平 高島英之 高瀬要一 高橋美由紀 高橋亭 高橋昌明 滝浪貞子
谷口美樹 千野香織 角田文衛 芦純一 所功 東野英之 直木孝次郎 中野イツ
中西進 中井均 永井路子 中森成行 永田信一 仁藤教史 西垣晴次 西口寿生
西村さとみ 西山克 西山良平 西山要一 林博道 林陸朗 橋本澄子 菱田哲郎
藤井一二 藤本孝一 藤原秀樹 古川淳一 松前健 松尾光 横佐知子 宮瀬交二
宮腰健吾 水野正好 三田村雅子 村井康彦 森本晋矢 田俊文 柳澤和明 山中章
山中敏史 山折哲雄 山本ひろ子 山田邦和 矢野憲一 横田義章 横田賢次郎
吉野裕子 吉田恵二 義江明子 米田雄介 渡辺和俊 渡辺博人 和田萃 薩谷寿

協 力 者

調査概報及び本報告書作成にあたり、資料整理作業に次の方々の協力を得た。

赤岩操 石潤誠人 内海晶子 鶴山まり 尾家恵 大西瞳 大瀧靖子 奥田康子
奥野実 角谷和代 川合正宏 川合正宏 川本百合子 熊崎司 坂真弓美 島村紀久子
杉原泰子 鈴木美智子 田中久生 田中里佳 田端由佳 田所美里 刀根やよい
豊田敏子 中桐真紀 中島沙恵 西村秋子 新田康二 野呂美絵子 橋本奈保子
服部芳人 広瀬美緒 前川友秀 松田早苗 松月浩子 森征子 森敦子 森脇景子
八木光代 山口香代 若林真登

また、史跡の現状変更に伴う緊急発掘調査の事業主体として、申請者の指導・調整を担当し、現地調査にも協力いただいている明和町教育委員会斎宮跡課の中野敦夫
森田幸伸 西尾仁 瀬田敏彦 宇都宮英治の協力を得た。

(註)

- (1)斎宮跡調査研究指導委員会は、昭和54年の三重県斎宮跡調査事務所開設と同時に「斎宮跡調査指導委員会」としてその設置が定められ、平成7年に「斎宮跡調査研究指導委員会」として改正され、平成12年度に現在の「斎宮跡調査研究指導委員会」設置要綱として改正が行われた。
- (2)三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財調査報告22『古里遺跡発掘調査報告 D地区』1974 三重県教育委員会
- (3)文部省科学研究費補助金重点領域研究『遺跡探査』『第5回研究成果検討会議論文集』1997 奈良国立文化財研究所内『遺跡探査』事務局
- (4)斎宮歴史博物館・三重県埋蔵文化財センター『縄釉陶器の流れ』展示図録 1990
シンポジウム『縄釉陶器の生産と消費』レジメ 1990 斎宮歴史博物館・三重県埋蔵文化財センター
- (5)斎宮歴史博物館『国史跡斎宮跡発掘調査30周年記念特別展 瓷は語る700年』 2000
斎宮歴史博物館記念シンポジウム『斎宮の土器・みやこの土器』レジメ 2000
斎宮歴史博物館『記念シンポジウムの記録』『研究紀要十』 2000

第二章 位置と歴史的環境

第一節 位 置

地 質 三重県は、日本列島のはば中央に形成された紀伊半島の東部に位置し、南北に細長く、東に伊勢湾、南に熊野灘を臨む山海の国である。地質学上は、西南日本を東西に継続する中央構造線により、北側の内帶地域と南側の外帶地域に区分される。

外帶地域は、紀伊半島の屋根にあたる標高1,300～1,600m級の台高山脈を頂点として、東へは標高を減じながら多気山地・度会山地・朝熊山地と連なり、先志摩の台地に接する。志摩半島の海岸線は隆起と海食により複雑なアス式海岸を形成し、風光明媚な地域としてよく知られている。また、南へは標高1,000m級の起伏の大きな山地地形を成し、熊野灘に面する海岸部では100mに及ぶ海食崖がみられる。このように紀伊半島先端部は、山岳地形を成しており、人の踏み入れない聖地として古代から靈場とされ、熊野詣・大峰山修験道・朝熊脂なども行われた地域である。この地域は、古代国家にあっては、伊勢国の度会郡及び多気郡の一部、志摩国の答志郡・英虞郡、紀伊国の北牟婁郡・南牟婁郡が含まれる。

内帶地域は、東は伊勢湾に臨み、北は養老山地、西は鈴鹿山脈・布引山地に囲まれた伊勢平野を抱える伊勢湾西岸地域、西を笠置山地、北は高旗山地（信楽高原）、南を室生山地に囲まれた地溝盆地の上野盆地（伊賀盆地）に大きく区分され、それぞれ伊勢国と伊賀国に独立した地域であった。伊勢国側は、西の鈴鹿山脈で近江国と境をなし、南端の加太峠を経て布引山地に連なる。鈴鹿山脈の東斜面は、西斜面にあたる近江側に比べ、急傾斜であり、山麓に多くの扇状地を形成している。扇状地は地盤隆起を受け台地状となっていところも多く、平野部における堆積地層の丘陵台地と相まって里山の環境をつくり出している。鈴鹿山脈・布引山地を分水嶺として、大小の河川は伊勢湾と大阪湾へ注いでいる。伊勢側では、北から木曾・長良・揖斐川の木曾三川、鈴鹿川、雲出川、櫛田川、宮川等、大小の河川が東の伊勢湾に流れ込んでいる。これらの河川は、その流域に沖積平野を形成し、肥沃な耕地を生み出している。旧郡界は、沖積地を取り込んで、河川と丘陵台地により限られていた。

位 置 斎宮は、伊勢平野南部の櫛田川と宮川に挟まれた明野原台地と呼ばれる洪積台地上に置かれた。この明野原台地は、櫛田川右岸の玉城丘陵・大仏山丘陵の低丘陵の北方に形成された台地で、西端は祓川が北流して段丘崖をなし、台地中央部にはほぼ南北方向の低地に大堀川が北流し、東端は宮川が形成した沖積地へと連なっている。北方は、伊勢湾に臨む海岸平野となり、緩やかに伊勢湾へ傾斜している。

斎宮跡は、この台地の西端部に位置し、台地の西は、櫛田川の支流祓川が蛇行して北流し、最大比高約4.7mの沖積地となっており、台地上は西端が標高約14m、東端で約9mとなり緩やかに北東方向に傾斜しているが、台地上は平坦な地形となる。

旧 地 形 西端の段丘下には、現祓川が蛇行して北流し、櫛田川と祓川により形成された沖積地が広がっている。この祓川は、承和14年(847)頃は多気河と呼ばれており、竹川と

も記され、また稻木川とも呼ばれていた。現在の祓川は、松阪市法田町辺りで櫛田川本流と分流しているが、承和14年には櫛田川の流路が北西へ一里すなわち6町ばかり移動し、多気郡と飯野郡との郡界もそれに従って変更させたことがみられるよう祓川は櫛田川の本流であり、分流点以北は、櫛田川の氾濫原をなしていた。現地形にも段丘の西側に沿って、河道の流路を示す地割りが認められ、流路の変遷の一端を物語っている。

微 地 形

史跡内は、西端に祓川が蛇行して北流し、祓川と段丘との間に広がる沖積地は標高10.1~8.1mで南から北北東の方向に低くなっている。段丘上は、史跡の南西部が標高14.5mと最も高く、北東方向へ同心円状に緩やかに高さを減じていく。史跡中央部からは、等高線は標高11m~9mのラインがほぼ南北方向に見られ、東側へ平行して低くなっている。史跡中央部の東寄りに位置する「斎王の森」の南側では、標高10mの等高線が西側に入り込んでおり、窪地状の地形を成している。一方、旧参宮街道沿いでは、標高14~10mの等高線が東へ張り出していくのと相まって、史跡中央部が浅い谷状地形を形成し、自然流路を形成している。

第二節 歴史的環境

旧石器・ 縄文時代

櫛田川及び宮川流域に属するこの地域は、旧石器時代から人々の生活が営まれ、県内でも多くの旧石器時代の遺跡が確認され、それらは上流から中流域の河岸段丘上に営まれたものが多い。大台町の出張遺跡では、ナイフ型石器を中心チャートを石材とした石器が出土しており、出土石器のなかに核と接合できた剝片も確認された。櫛田川の上流域にあたる飯南町粥見井尻遺跡では縄文時代早創期の竪穴住居から日本最古の土偶や矢柄研磨器をはじめ隆線文・爪形文土器なども出土している。⁽³⁾また、中流域では、多気町の高皿遺跡で、草創期を中心とした石器群が出土しており、左岸の鴻ノ木遺跡では、早期前半に位置付けられる大鼻式の押型文土器を伴う竪穴住居・炉状遺構が確認されている。⁽⁴⁾この大鼻式の押型文土器は、多気町の坂倉遺跡などでも出土⁽⁵⁾しており、北勢の亀山市周辺から布引山地山麓に分布している。

度会町森添遺跡では、縄文時代中期から晩期に及ぶ十数層の文化層を検出し、竪穴住居8棟・炉跡等を確認している。⁽⁷⁾出土遺物では、関東系や瀬戸内海地方の土器の影響を受けた土器が多く出土したのとともに、朱彩の土器や辰砂の製作に用いられたと考えられる叩石や凹石が認められ、朱を媒介として東西日本の交流が行われていたことを示唆している。この辰砂は、中央構造線上に位置する当地域から産出されるもので、伊勢水銀の名で古代から良く知られ、勢和村丹生地域を中心に採掘が行われてきた。

弥生時代

水田農耕文化が伝播するにつれ、稲作に適した沖積地への進出が行われ、遺跡も中流域から下流域に広がりを見せるようになる。九州地方から伝播したこの弥生文化は、遠賀川式土器を伝え、県内では伊勢湾西岸の雲出川流域に大和地方から伝えられたと考えられ、三雲町中ノ庄遺跡がその代表的な遺跡として知られる。⁽⁸⁾遠賀川式土器は、



第2図 位置図 (1:75,000)

伊勢湾の南北に広がり、北は鈴鹿川流域の上箕田遺跡など、南は明和町金剛坂遺跡⁽¹⁾などで確認されている。金剛坂遺跡は、祓川右岸の洪積台地上で史跡斎宮跡の南西側に隣接して位置し、この地域を代表する縄文時代から弥生時代の遺跡であり、4次にわたる緊急発掘調査が行われ、竪穴住居・方形周溝墓などが確認されている。弥生時代の遺跡は、櫛田川下流域に多く分布しており、殊に祓川右岸の洪積台地上や低位河岸段丘上に多い。西出遺跡⁽²⁾からは縄文時代晩期の人面土版も出土するとともに、弥生時代中期から後期にかけての竪穴住居も確認されている。金剛坂遺跡の南西の低位河岸段丘上に位置する寺垣内遺跡⁽³⁾や神殿遺跡⁽⁴⁾でも多くの方形周溝墓や竪穴住居が報告されている。また、史跡西部の古里地区においても弥生時代中期を中心とする遺構が確認されており、この地域が弥生時代から開発されてきたこと示している。

櫛田川北方の沖積地を東流する金剛川は、小規模な河川であるが、その流域の草山遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡であり、竪穴住居・掘立柱建物・方形周溝墓が多数検出されたのをはじめ、人・動物・鏡などの器材を形取った小さな土製品を用いた5世紀の祭祀遺構も確認されている。また、弥生時代の小型銅鐸が出土している。下流の中期後葉の涌早崎遺跡、後期の堀町遺跡からは銅鐸形土製品が出土⁽¹⁵⁾しており、涌早崎遺跡の銅鐸形土製品は明和町の北野遺跡⁽⁵⁾出土のものと細部の製作手法が類似しており、広域的な弥生文化圏が形成されていたことが窺える。

弥生時代の方形周溝墓は、集落内部の階層性を反映した墳墓として捉えられるが、4世紀には集落を越えた地域集団の首長墓の出現が見られる。この過渡的な墳墓形態として、櫛田川中流右岸の集護遺跡と下流左岸の瀬干遺跡の前方後方形墳丘墓が確認されているが、この地域での古墳成立の具体相は、まだ明らかにされていない。

古墳時代

古墳時代には至れば、伊勢湾西岸でも雲出川流域における向山古墳・筒野1号墳・西山1号墳等の前方後方墳を嚆矢として古墳文化の展開がみられる。雲出川以南の4～5世紀の古墳文化は、中村川流域（雲出川流域）・坂内川左岸・坂内川右岸・金剛川・櫛田川右岸・宮川右岸の流域に区分して捉えることができる。これらの流域では、大型の古墳が地域の首長墓として築造され、雲出川以南の地域では前方後方墳と相前後して、坂内川流域の深長古墳⁽⁵⁾や金剛川流域の久保古墳⁽⁶⁾・清生茶臼山古墳⁽⁷⁾が大型円墳の形態を採用する。5世紀前半には、伊勢湾西岸最大を誇る全長約115mの前方後円墳である宝塚1号墳⁽⁸⁾が築造され、卓越した首長の出現が認められる。平成10年度から開始された史跡整備に伴う発掘調査で、陸橋をもつ方形の作り出し部と、周溝内から祭祀儀礼に用いられたと推定される儀杖・劍・衣笠を伴う船形埴輪をはじめ圓い型埴輪・盾型埴輪等が出土し、その保存状況の良好さから古墳祭祀の復元が可能とされ全国の注目をあびている。一方、この時期櫛田川右岸の玉城丘陵では、大型方墳の権現山2号墳が築造される。

これら首長層の関係は、時間軸と支配領域との実像も明確ではないが、後続する古墳の分布・築造状況や律令国家体制下において櫛田川以北が旧飯野郡、櫛田川以南が旧多気郡・度会郡に編入されたことを考慮して、櫛田川右岸における古墳文化の推移について、概観することにする。

5世紀後半には、玉城丘陵では神前山1号墳⁽⁹⁾、高塚古墳⁽¹⁰⁾、大塚古墳⁽¹¹⁾等の帆立貝式の大型前方後円墳が明和町内の丘陵上に続々と造営される。古墳造営は、古墳時代後期の6～7世紀に至っても衰えることなく、小規模な群集墳が營々として築造され、玉城丘陵で49群522基、大仏山丘陵で11群33基が確認されている。⁽²²⁾発掘調査が行われた河田古墳群⁽¹²⁾では6世紀中葉に木棺直葬を埋葬施設とする古墳築造が開始され、7世紀前葉に横穴式石室も導入され、狭い尾根上に密集して古墳が營まれる。

また、丘陵地以外の台地上にも古墳の造営は広がり、史跡内でも総数42基は存在したと推定されている塚山古墳群⁽¹³⁾が存在しており、斎宮存続時期においても古墳群は存在していた。塚山古墳群の北方には、総数160基ほどの坂本古墳群⁽¹⁴⁾があり、現存する坂本1号墳⁽¹⁵⁾は全長30mながら前方後方墳の形態をもち、木棺直葬の主体部からは金銅装頭椎太刀・鉄刀等が出土し、出土した須恵器から7世紀前半の築造と考えられ、最も新しい前方後方墳であることが判明した。⁽²³⁾斎宮周辺における古墳が前方後方墳の形態を採用し、金銅装頭椎太刀の出土は畿内政権との繋がりを示唆している。

一方、台地中央部でも小規模な古墳群が7群約28基ほど点在しており、曾根崎古墳群⁽¹⁶⁾などが調査されている。

宮川流域においては、古墳の分布は少なく、突出した古墳は限られているが、落合古墳群⁽¹⁷⁾は5世紀初頭から5世紀後半まで營まれた初期群集墳として注目される古墳群であり、前期古墳の存在が初めて確認された。⁽²⁴⁾数少ないこの地域の古墳の中で、外宮神域内の高倉山の山頂に築かれた高倉山古墳は、全長18.6mの全国屈指の規模を誇る横穴式石室を有する円墳であり、6世紀後半の築造と考えられている。しかし、後続する古墳の存在が確認されておらず、築造の背景は不明である。

飛鳥時代以降

斎宮跡の南東から南に広がる低丘陵地には、全国でも最大規模を誇る土師器の生産遺跡が分布している。斎宮跡の東約1.8kmには土師器生産遺構を全国的に解明する端緒となった国史跡「水池土器製作所址」⁽¹⁸⁾が位置し、その西方に近接して1990年から5次にわたる緊急発掘調査により225基の土師器焼成坑を調査した北野遺跡が所在している。北野遺跡⁽¹⁹⁾では、6世紀中頃から8世紀中頃まで約200年間にわたり、土師器の生産が行われていた。この地域は『倭名類聚抄』に「有貳」とみえ、有爾郷は古代より神宮に調進する土器を焼成していた地として知られている。⁽²⁵⁾土師器生産の背景には、北野遺跡でみられるように7世紀後半に焼成坑が増加する要因として、斎宮の設置が関わったものと考えられ、斎宮跡の方格地割が造営される8世紀後半には、北野遺跡の土師器生産は、周辺の地に生産地を移したと考えられる。

古墳時代後期以降、土師器とともに古代の土器を構成する須恵器についても『延喜式』では美濃・尾張から調達する規定がみられるが、出土須恵器の検討から在地で生産していた可能性が強いことが指摘されている。この地域周辺の須恵器生産窯は、松阪市の根跡窯跡群⁽²⁰⁾、多気町の中尾窯跡⁽²¹⁾・明気窯跡群⁽²²⁾、玉城町の大仏八端古窯跡群^{(20)・(23)}、原古窯跡群⁽²¹⁾・市寄窯跡群⁽²²⁾が知られており、7世紀中頃から8世紀に操業の中心時期を置くことが確認され、10世紀でも泉貢窯跡群では操業が行われているのと、その上限に6世紀に遡る可能性が高いことが指摘されている。

条里制

斎宮跡の南側には、条里遺構が広がっていたが昭和63年～平成2年の甫場整備事業により消滅している。昭和50年に作成された1/3,000の「農業基盤総合整備事業（齊明地区）」図及び先学の研究によりその復元と斎宮の方格地割を検討してみる。

斎宮跡周辺の条里遺構は、玉城丘陵と明野原台地に開まれた河岸段丘上で、斎宮跡の南に広がっている。また、斎宮跡の東部地域にも部分的ではあるが、条里遺構が残されていた。後者の条里地割は、前者の条里とは分断された状況にあり、基準軸の方向も異なっている。

斎宮跡の南に広がる条里遺構は、多気郡の11～14条にあたり、用水を南側丘陵地の溜め池による灌漑に依っており、開発は比較的古いものと考えられている。⁽⁴⁵⁾南北線（阡線）が正しい南北か、または数度西に偏したもの主方向としている。測定値は、N7°W前後であり、方格地割のN4°Wとは異なり、条里地割と方格地割の相互の施行基準はなかったと考えられる。

方格地割南限の標高は12.6～9.8mであり、これに対し地割南限に接する現水田面の標高は12.0～9.4mとなっており、約0.5mの高低差をもって東へ傾斜している。したがって、条里地割施工に際して、方格地割の位置する地域が乾燥地帯で、水稻栽培には適さなかったことが、条里地割と方格地割が重複しない理由の一つと考えられる。

また、方格地割の南限と条里地割北限の間には、約20mの空閑地が認められ、両者は相互に規制されたことも考えられる。明治36年の絵図には、この空閑地を「本伊勢道」とし、参宮街道を「今いせみち」と記しており、時期の特定ができないが、この空閑地がかつて道路として機能していたことを窺わせる。現在のところ、明確な道路遺構及び区画施設を確認していないが、八脚門の存在からも当該部分に方格地割の南限を区画する道路と側溝で構成された区画施設を想定することが可能である。

第三節 古代の交通

古代の道路

斎宮と神宮は、宮川を挟んで約15km離れており、両者とのほぼ中間の度会郡小俣町本町には、斎王の離宮であり、9世紀前半の天長元年(824)から承和12年(839)の16年間、斎宮が置かれた国史跡「離宮院」(23)が位置する。⁽⁴⁶⁾離宮院には、古代の官道に設置される度会駅も併設されて、更に神宮の太神宮司や勅使の宿泊施設である駅使院も置かれ、神宮にかかる行政・交通機能の拠点であった。

この伊勢道は、平城宮・長岡宮・平安宮からの公卿勅使・年中四度使等をはじめ斎王群行の路として、東海道鈴鹿駅家から東海道と分岐する官道である。この伊勢道に関しては先行研究があり、伊勢道駅路は伊勢平野の内陸部、丘陵に移り変わる傾斜変換沿いに平野に突出する山地や丘陵の先端を結ぶ直線的な計画道路と考えられている。

史跡斎宮跡地内でも、史跡西部から東部にかけて直線的な道路遺構が確認されており、この伊勢道に比定されている。この道路遺構は、基本的にその両側に幅約2mほどの側溝を伴っており、道路幅は溝芯々で6～9mとなっている。ただ、史跡西部では道幅が狭く約4mほどの規模となり、北側の側溝が判然としない部分もある。史跡



第3図 斎宮跡周辺の条里地割(1:12,000)

内を北北西から南南東に直線道路として通るこの伊勢道は、奈良時代の官道であり、奈良時代後期に方格地割が整備されたことにより、そのルートを変更したと考えられ、変更後の伊勢道と方格地割の位置関係についても検討すべき課題が残されている。

註

- (1)「伊勢太神宮司解案」『平安遺文 古文書編第一卷』242 1974 東京堂出版所収
伊勢太神宮司解 申請官符事
壹紙、被載応令如旧東寺領掌勅施入庄武箇處狀
壹丸川合勅旨田隣拾陸町 桓武天皇御施入
在多氣郡飯野郡
壹丸国庄百捌拾五町玖段百捌拾步 元贈四品布施内親王勅施入四箇庄内也云々^ノ
在飯野郡 多氣郡
四至 限東字保村高岡限西中万氏連墓 限南多氣郡佐奈倉崎限北四神山里並大溝
(中略)嘉祥二年班田之時、□式箇莊田為百姓口分治田、何況不定四至、
六十六町本領田、寄於事相伝、両郡在河、号多氣河、飯野郡有河□北、多氣郡在河東南、
彼河以承和十四年之比、古河移流於西北一里許也、爰多氣郡取□河之西北為郡境、(後略)
米殿郡川等
- (2)三ツ木貞夫ほか『出張遺跡調査報告書』大台町出張遺跡調査会 1979
- (3)『平成8年度 三重県埋蔵文化財センター年報8』三重県埋蔵文化財センター 1997
- (4)山田猛・松葉和也『高丘遺跡発掘調査概報』三重県埋蔵文化財センター 1996
- (5)山田猛・田村陽一ほか『鴨ノ木遺跡(下巣編)』三重県埋蔵文化財センター 1998
- (6)山田猛「押型土器群の型式学的再検討——三重県下の前半期を中心とし——」『三重県史研究』第
四号 三重県 1988
- 山田猛ほか『大鼻遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1994
- (7)奥義次・御村精治ほか『森源遺跡発掘調査概報I・II』度会町遺跡調査会1987・1988
- (8)谷本銳次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1972
- (9)仲見秀雄ほか『上笠田遺跡』三重県立神戸高等学校
- (10)山澤義貴・谷本銳次『金剛坂遺跡発掘調査報告』明和町教育委員会 1971
田村陽一・浅尾悟・宮田勝功「金剛坂遺跡」『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査
報告県営』三重県教育委員会 1988
- (11)『三重県埋蔵文化財年報1――昭和60年度――』三重県教育委員会 1986
- (12)『三重県埋蔵文化財年報1――昭和60年度――』三重県教育委員会 1986
- (13)『三重県埋蔵文化財年報1――昭和60年度――』三重県教育委員会 1986
- (14)山澤義貴・谷本銳次ほか『古里遺跡発掘調査報告――C地区――』三重県教育委員会 1973
谷本銳次『古里遺跡発掘調査報告――D地区――』三重県教育委員会 1974
- (15)『草山遺跡発掘調査月報』松阪市教育委員会 1982~1985
- (16)福田昭『松阪市大津町 湧早崎遺跡発掘調査報告書』松阪市教育委員会 1992
- (17)小濱学ほか『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 堀町遺跡』三重
県埋蔵文化財センター 2000
- (18)西村修久ほか『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 上ノ垣外遺跡』
三重県埋蔵文化財センター 1996
- (19)宇河雅之ほか『額干遺跡・綾垣内遺跡・大蓮寺遺跡・柳辻遺跡・北ノ垣内遺跡』三重県埋蔵文化財セ
ンター 1996
- (20)向山古墳・筒野1号墳・西山1号墳
- (21)下村登良男「南勢地方の大型古墳」『八重田古墳群発掘調査報告書』松阪市教育委員会 1981
竹内英昭「中南勢地域における古墳時代の諸段階」『三重県史研究』第15号 三重県 1999
- (22)増田安生『松阪市深長町 深長古墳』『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』
三重県教育委員会 1989

- (23)伊藤裕偉「第五章 松阪市中・西部地域 第六章 柳田川流域」『日本の古代遺跡52三重県』保育社 1996
- (24)福田哲也ほか『国史跡 松阪宝塚1号墳調査概報』松阪市教育委員会 2001
- (25)駒田利治「椎現山2号墳」『ふびと34』三重大学歴史研究会原始古代史部会 1978
- (26)下村登良男「神前山1号墳発掘調査報告書」明和町教育委員会 1973
- (27)原始古代史部会「玉城丘陵上の古墳群について」『ふびと36』三重大学歴史研究会 1979
- (28)原始古代史部会「玉城丘陵上の古墳群について」『ふびと36』三重大学歴史研究会 1979
- (29)西村美幸「玉城丘陵とその周辺の群集墳について」『研究紀要——創立10周年記念論文集——』第8号 三重県埋蔵文化財センター 1999
- (30)吉水康夫『河田古墳群発掘調査報告I』多気町教育委員会 1974
川村輝夫ほか『河田古墳群発掘調査報告IV』多気町教育委員会 1983
- (31)野原宏司「第112次調査」『史跡斎宮跡 平成7年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 1996
- (32)『平成9年度 三重県埋蔵文化財年報』三重県埋蔵文化財センター 1998
- (33)西村美幸『曾根崎遺跡(第2次)・曾根崎古墳群』三重県埋蔵文化財センター 1997
- (34)伊藤裕偉「近畿自動車道(勢和~伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告 第7分冊 落合古墳群』三重県埋蔵文化財センター 1992
- (35)原始古代史部会「伊勢市高倉山巨石壙について 三重県主要古墳基本調査4-」『ふびと24』三重大学芸術歴史研究会 1965
- (36)竹田憲治『北野遺跡(第5次)発掘調査概報』三重県埋蔵文化財センター 1996
- (37)小林秀「中世後期における土器工人集団の一形態伊勢国有爾縛を素材として」『研究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター 1992
- (38)上村安生「考古資料からみた『統日本紀』天平二年七月癸亥条について」『斎宮歴史博物館 研究紀要九』斎宮歴史博物館 2000
- (39)『松阪市史』松阪市史料編纂委員会 1978
- (40)下村登良男「中尾古窯址発掘調査報告」『河田古墳群発掘調査報告III』多気町教育委員会 1986
- (41)宇河雅之「明氣窯跡群」「明氣窯跡群・大日山古墳群・甘楠遺跡・巣鴨遺跡」三重県埋蔵文化財センター 1995
- (42)前川嘉宏「大仏八端窯跡群」「玉城町史」玉城町史料編纂会 1995
- (43)山澤義貴「度会郡玉城町6号・同7号発掘略報」『ふびと』22 三重大学芸術歴史研究会 1964
前川嘉宏「原窯跡群」「玉城町史」玉城町史料編纂会 1995
- (44)宇河雅之「伊勢 中南勢 生産遺跡」「古代の土器5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)」古代の土器研究会 1998
- (45)谷岡武雄「土地割からみた柳田川下流域平野の発達と開発」「平野の開免」古今書院 19
弥永貞三・谷岡武雄『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版 1979
倉田康夫『条里制と莊園』東京堂出版 1976
- (46)「明治三十六年一月十二日夜零北」の注記がある。
- (47)『統日本紀』
- (48)御村義耕・榎本義謙ほか『斎宮院発掘調査報告書』小畑町教育委員会 1980
小濱学『斎宮院跡(法楽町地区)発掘調査報告』小畑町教育委員会 2000
- (49)足川健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」「探訪古代の道』第一巻 「平安京から伊勢神宮への古代の道」「探訪日本の道』第二巻 法藏館 1988
藤本利治『伊勢園』『古代日本の交通路』第一巻 大明堂 1987
- 岡田登『伊勢国度会駅家所在地考』『創設十周年記念皇學館大学史料編纂所論集』 皇學館大学史料編纂所 1989
- (50)杉谷政樹「古代官道と斎宮跡」『研究紀要』第6号三重県埋蔵文化財センター 1997

第三章 内院地区の遺構と遺物

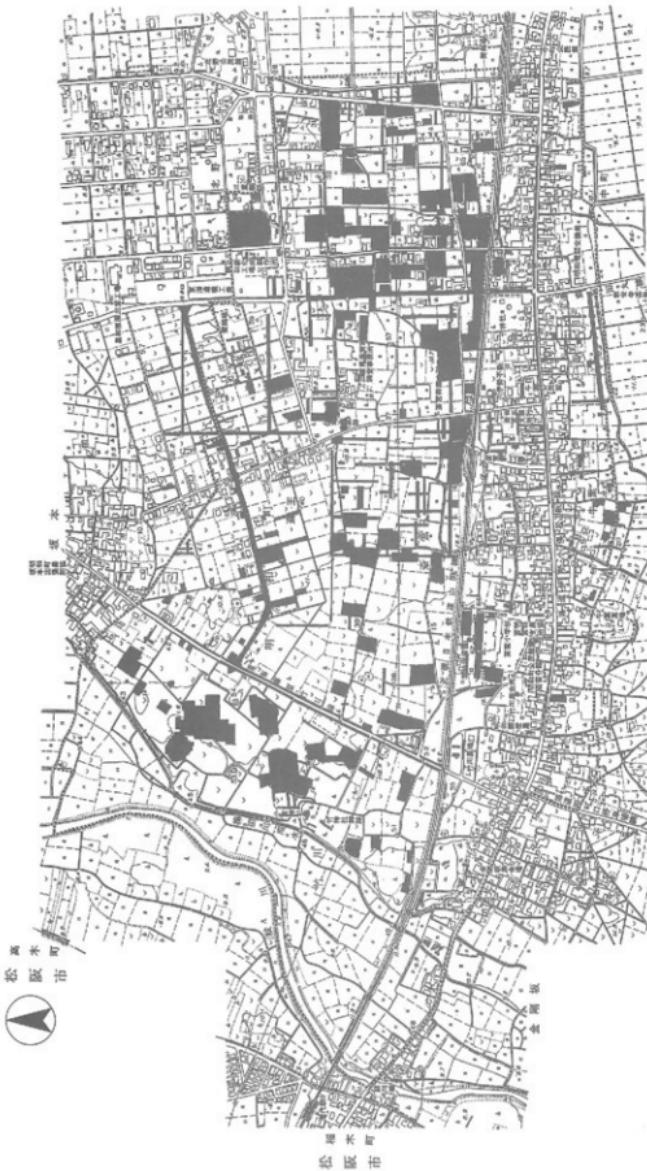
第一節 斎宮跡の方格地割と内院

斎宮跡では、範囲確認調査の段階から東西南北に規則的に繋がると見られた溝の存在が判明しており、調査の進展とともにこの区画溝は溝芯々間の距離を約120mを基準として敷設されており、当初は「斎王の森」を北西隅として東西5区画、南北4区画が整然と配置されていたことが確認され、方格地割と呼称している。また、史跡南辺近くで平安時代初期（斎宮第II期第1段階）の八脚門が確認されたことにより、この方格地割は西側に更に2区画拡がることも明かになった。

この方格地割は、奈良時代後期（斎宮第I期第4段階）に造営されたと考えられ、後述するように区画中枢部では大きな改修も認められており、斎宮跡の変遷を考えるうえできわめて重要な位置を占めている。方格地割は、基準軸が北から西に約4°振れ、各方形区画内が一边120m(400尺)を確保できるように計画造営されており、各区画は縦横の道路とその側溝で区画されている。道路幅は、溝芯々間が約13.3mと推定され、45尺で計画施行されたものと推定できる。溝の規模は、遺構確認面で多少の差異はあるが上幅約2.1m前後であり、約7尺前後の基準に従ったものと考えられる。この方格地割のなかで東から三列目の方形区画は、北側の2区画内に幅約10mの区画内道路を設け東西幅が約130m(440尺)と他の区画に比べ広くなっている。しかも、南から二つ目の区画では、この区画基準を越えて大型の建物配置がなされた時期があること、並びに掘立柱の板塀によって二重に囲まれた空間が存在することなどから、斎宮第I期第4段階から斎宮第II期第3段階頃までの中枢部と考えられる。また、掘立柱塀は、この区画の西側に位置する区画で確認されているほか、八脚門が確認された区画で推定されている以外は認められず、区画施設の在り方からみても中枢部と考えられる。斎宮における空間の呼称にかかる史料は、限られており、この時期に最も近い史料の『延喜式』中でも、「内院」の用語が認められ、詳細な規定は必ずしも明らかでないが斎宮の中核部を意味する空間を示すものと理解され、掘立柱塀に囲曉された二つの空間、牛葉東区画及び鍛冶山区画を「内院地区」と呼称して報告する。

また、方格地割の存在は、出土遺物や文献資料でも明確ではなく、各区画の呼称にあたっては、積極的根拠が存在しない現段階では、各区画が所在する地区の小字名を区画の呼称としてきており、本報告でもこれに従い、第5図に示した区画名称により報告することとした。

方格地割の解明は、東から3列目が他の区画と異なった基準で造営されている他、東西7区画・南北4区画で構成される区画のうち、北西隅の4区画は、区画間道路・溝を設げず、大きくまとめられた大きな区画として造営され、区画外周施設も直線的な道路等で区画されていくなく、また造営時期も後出する可能性が高いなど他の区画とは異なる様相を示している。また、方格地割の南部部分が民家密集地域となっており、発掘調査がほとんど実施できない状況にあることなどから、南端に想定される東西の



第4図 平成12年度までの調査位置図



第5図 斎宮跡方格地割区格名称図

大路についても解明が進んでいないなどの課題を抱えている。

しかしながら、当館でも既存調査資料のデジタル入力を行い、国土座標を用いた造営規格の解明に努めている。また、山中章氏による「斎宮方格地割の設計」（「第17回条里制・古代都市研究会」発表 2001.3.3）研究も進められており、斎宮方格地割と斎宮跡の変遷を解明する基礎資料として、本報告で内院地区の遺構と遺物について報告する。

第二節 牛葉東区画

1 遺構

牛葉東区画周辺では、これまでの調査の成果から東西約107m×南北約95mの掘立柱塀が区画内を開むように巡っていることが推定されている。これは東隣の鍛冶山西区画で推定されている東西約165m×南北推定規模約118mに及ぶ大規模な掘立柱塀に次ぐ規模のものであり、奈良時代の後半から平安時代前期の斎宮を考えるうえで極めて重要である。

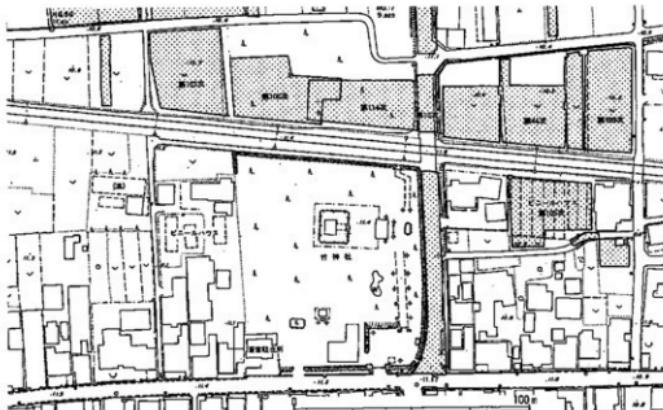
これまでの調査は、区画の北端で西から東へ第103次・第108次・第114次が実施されており、東端では南北に第10次調査(広域圏道路)・第44次調査・第106-3次調査が実施され、南端では第17-1次調査・第17-2次調査が実施されている。調査面積はあわせて約4,000m²である。

(1) 斎宮第I期第3段階(I-3期)

この時期の遺構には、堅穴住居2棟がある。

SB7045

第103次調査区の南端で一部を検出した。調査区外に続き、東側にSK7046と重複するため遺構全体の様相は不明だが、一辺約4mの方形の堅穴住居と想定される。遺構



第6図 牛葉東区画調査区位置図

		遺構の種別														
		S B		S A	S E	S K		S D		S F						
第I期	第3段階	7045	7285													
	第4段階	0575	0576	0584	7310	7644		0590	6991	6992	7003	6990				
		7645	7654					7252	7643	7692	7010	7693				
										7694						
第II期	第1段階	7302	7647	7648	7658	0587	7046	7260	7261	0590	6991	6992	7003			
		7659	7660	2655	6999	7000	7630			7252	7692					
	第2段階	7047	7293	7294	7300		7296	7650		0590	6991	6992	7003			
		7301	7649	7655	7656					7252	7692	7251	7275			
第III期	第3段階	7020	7024	7033	7299	7653	7016	7008	7017	7039	7053	7004	7032	7034	7035	
							7055	7250	7262	7263		7257	7258	7259	7264	
							7274	7278	7279	7280		7271	7273	7295		
	第4段階	7018	7019	7021	7023	7025		7287	7288	7290	7325					
第IV期	第1段階	0580	0581	0583	7027	7037		7631	7632	7633	7634					
	～	7038	7041	7048	7313	7638										
	第2段階	7639	7640	7641	7642	7677		7031	7651	7652	7661		7307	7308	7309	7327
		7678	7679	7680	7681			7675					7328			
縦 倉 不明	第3段階						0588	7051	7052	7289		0578	0579	0582	0586	
							7312	7314	7318	7324		0589	7255	7256	7265	
							7636	7662	7663	7664		7268	7277	7311		
							7665	7666	7671	7672						
							7673	7674	7676	7685						
							7637	7667	7668	7669		6996	6997			
							7670	7684								
							0585	0592	7691			0591	6998	7001	7002	
												7267	7306	7657	7686	
												7687	7688	7689	7690	

第2表 牛葉東区画時期別遺構分類表

面からの深さは約0.4mで、土師器杯A・杯G・皿A・甕A・鍋B・高杯、須恵器杯A・杯B・蓋などの比較的多量の遺物が床面から浮いた状態で出土した。柱穴やカマド等は検出されなかった。

SB7285

第108次調査区中央部の南端に位置し、北辺の一部が検出されたのみで、一辺約7mの規模と考えられる。貼床・柱穴やカマドなどは確認されなかった。遺物には土師器碗A・皿A・鉢・甕Aや須恵器杯A・壺K・甕Aなどがあり、土師器皿Aにはb手法の調整をもつものがある。SB7045よりやや大型だが、ほぼ同時期のものであろう。

(2)斎宮第I期第4段階(I-4期)

この時期の遺構には、掘立柱建物7棟、道路4条、溝7条がある。

区画東部のSB0575・7654・7310は、北側の桁行筋を揃える建物である。このうち、

SB0575・SB7310の妻柱の柱掘形が掘立塀SA7000の柱掘形と重なっており、その新旧関係から掘立柱塀に先行する建物群と判断した。

道路側溝

北西隅の東西道路SF6990と南北道路SF7010は、I-4期に成立した方格地割の区画道路である。SD6991とSD6992は、SF6990の側溝である。北側溝SD6991は後世の搅乱・削平を受けているため断続的に確認され、南側溝SD6992はII-4期のSD6995に北肩を掘削されているが、いずれも幅約0.5mで、概ねE3°Nである。SD6991は溝底高が10.1~10.3mと東へ緩やかに傾斜するものの、SD6992にはほとんど溝底の高低差がない。この溝によって画される道路の幅は、2条の芯々間で約13.3mである。

また、SF7010の東側溝となるものにSD7003がある。幅は約0.3mと狭く、溝底高はおよそ10.3~10.4mと緩やかに北へ傾斜している。長さ約16m分を検出したが、南部はIII-1期のSD7012に掘削されている。

なお、この溝底には0.1mほどの間隔で掘削時の鋤先痕とみられる窪みが連続して残っている。SF6990の中央部で北と南に分かれて溝の掘削を進めた様子が窺われ、開削後、短期間のうちに埋没したものとみられる。これら3条の道路側溝は埋土に含まれる土師器片から埋没時期をII-3期に比定できる。

南辺道路側溝

南辺道路の南側溝にあたる溝である。SD0590の2m北に並行するSD0589は、埋土・SD0590・7692堆積状況から、さらに北側のIII-3期のSK0588と同じ時期と判断されるので、SD0590をこの時期の道路側溝とした。この溝に対応する北側溝は、大部分をSK0588に削平されているが、SD7692が考えられる。両者の距離は、溝の芯々間で13.6mとなる。また、SD7692と北辺道路の南側溝SD6992の距離は、約122mである。東辺道路の西側溝SD2660と西辺道路の東側溝SD7003との距離が溝芯々で約120mであるので牛葉東区画は南北方向の方がわずかに長いことが想定される。

SD7643

SB7644・7645の柱掘形と重複し、これらの建物より古い溝であるのでII-1期の時期とした。埋土は黒色土で遺物は出土していない。

SD7252

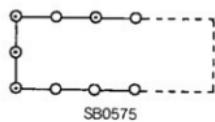
第103次調査のSD6992に続き、方格地割の東西道路SF6990の南側溝を成すものである。折戸10号窯式に相当する須恵器杯Bが2個体出土している。

SB0575

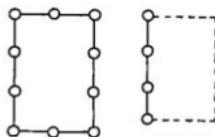
区画の東側、第10次調査区と第114次調査区にわたり検出された梁行2間の東西棟建物で、さらに東へ続き、桁行は4間ないしは5間が想定される。柱間は、桁行2.4m等間、梁行2.1m等間で、棟方向はE5°Nである。柱堀形は、0.8~1.1mの方形である。桁行筋から0.8mの箇所に幅0.3m、深さ0.3m前後の溝が建物と並行に位置しており、建物に付随する柴垣などの施設かもしれないが、SD0578・0579に削平されているため全様は不明である。

SB0576

SB0575の2m南に位置する南北棟建物で、桁行3間、梁行2間で、棟方向はN5°Wである。柱堀形は、1.0~1.5mの略方形で、柱間は桁行、梁行ともに2.4mである。



SB0575



SB0576

SB0584

SB0584 10次調査区の南側で、西側桁行筋の3間分が検出された。柱間2.1mの南北棟建物が想定される。

SB7654 北東部にある桁行4間、梁行2間の東西棟建物で、柱間は、桁行、梁行ともに2.4m等間である。柱掘形は一辺0.8~1.0mの方形で、柱痕跡は径約0.3mである。棟方向はE5°Nである。

SB7310 第108・114次調査区で確認され、桁行6間、梁行2間の東西棟建物である。柱間は桁行、梁行ともに2.4m等間である。柱掘形は一辺約0.8mの方形で、柱痕跡は径約0.3mである。棟方向はE5°Nである。なお、第114次調査で検出した東側妻柱ならびに第108次調査で検出した西側妻柱柱掘形はどちらも掘立柱塀SA7000の柱掘形と重なっており、SB7310の方が古いことを確認した。平成6年度発掘調査概報では、SB7310の時期を平安時代中期(II-4期)と報告しているが、平成8年度発掘調査概報で奈良時代後期(I-4期)に訂正している。

SB7644・7645 区画中央部で北側桁行筋のみを検出したものであるが、東西棟建物と想定される。

柱掘形の重複からSB7644の方が古く、桁行3間、柱間は2.4m等間である。一方、SB7645は桁行4間、柱間は2.7m等間である。棟方向はどちらもE4°Nである。

(3) 斎宮第II期第1段階(II-1期)

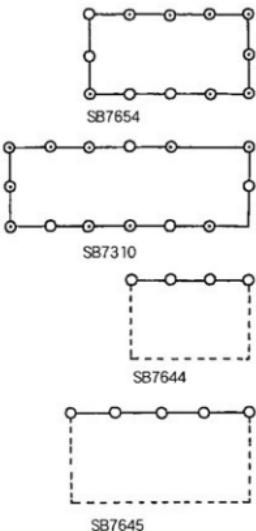
この時期の新たな遺構には、掘立柱建物6棟、掘立柱塀4条、土坑4基がある。

SA7000 掘立柱塀SA7000はII-2期まで継続され、3次にわたる調査で東西約107mのほぼ全容が明らかになり、以下のようなことが確認できた。

柱穴の重複ではなく、建て替えられた痕跡は認められない。また、約107mの間に掘立柱塀の切れ目はなく、門の遺構は考え難い。柱掘形は一辺約0.9~1.6mまでの間でややばらつきがあるものの、東西方向に長方形になる傾向がうかがえる。柱痕跡は径約0.3mで、同時期の掘立柱建物の柱痕跡よりも掘立柱塀の方がやや大きい。柱痕跡の底の標高は、北辺西側や北辺中央では9.7~10.1mの間でばらつきがみられたが、北辺東側では9.6m前後で安定している。なお、柱間の平均は2.97mである。

SA2655・0587 SA7000と同様の掘立柱塀でこの区画を囲むものであるが、断片的にしか検出されていない。

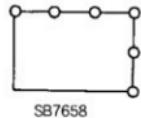
**SA7000に伴う
掘立柱建物** 区画中央東寄りで、ほぼ同一場所で建て替えが繰り返されているSB7646~7648とSB7658~7660の二群がある。いずれも東西棟建物で、棟方向はE4°Nである。また、前者の一群の北側桁行と後者の一群の棟通りとが概ね柱筋を揃えている。建物の規模は、いず



れも3間×2間が想定されるが、前者の一群については北側の桁行で2間を検出しているのみである。その東への続きについて、3間目にあたる柱穴はSK7634と重複するため確認されず、4間目の柱穴の想定される箇所で検出を試みたが、柱穴は確認できなかった。このことから4間以上は考えがたく3間と想定した。

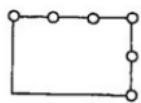
SB7658～7660は、前者の建物の東北に位置する建物である。桁行3間×梁行2間と規模が小さいわりには柱掘形が一辺1.0～1.5m前後、柱痕跡が径約0.3mと規模が大きく立派な建物であることから、日常の生活空間としての建物よりは何か特殊な用途の建物であると想定され、おそらく斎王が交代する度に建て替えが行われたものと考えられる。SB7646～7648も、同じ場所で同じ規模で建て替えが行われていることから、これらの建て替えは相互に連動するものと考えられる。

SB7658 桁行3間×梁行2間の規模で、南側桁行の大半はSK7691に搅乱される。柱間は桁行、梁行とも2.4m等間で、柱掘形の重複により、SB7658→7659→7660であることを確認した。なお、重複のため、柱痕跡は不明である。



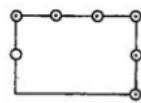
SB7658

SB7659 SB7658を建て替えたもので、柱間など建物の規模は変わらない。やはり、SB7660の柱掘形のために柱痕跡は確認できなかった。



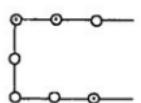
SB7659

SB7660 SB7658～7660の3棟の中で最も新しい建物で、柱間は桁行2.5m等間、梁行2.4m等間である。柱掘形は0.8～1.0mのはば正方形で、柱痕跡は径0.3～0.4m、検出面からの深さは0.7m前後である。柱掘形から、土師器杯A・皿A・高杯、須恵器杯Aの破片が出土しており、9世紀初めの建物と考えた。



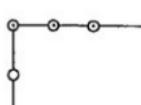
SB7660

SB7646 桁行、梁行とも柱間は2.4m等間で、桁行は2間を確認しているが、東側はII-3期の土坑SK7634と近世以降の搅乱土坑SK7691のため不明である。梁行は2間である。柱掘形は一辺約1.0～1.2mの方形で、柱痕跡は径約0.3mである。3棟の関係は、SB4646→4647→4648である。



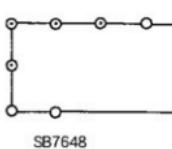
SB7646

SB7647 北側柱筋2間分と西側側柱を検出したのみである。柱掘形は桁行2.4m等間、梁行は3.0m等間である。柱掘形の重複からSB7646より新しくSB7648より古い建物である。



SB7647

SB7648 SB7646～7648の3棟の建て替えのうち最も東による建物である。西側梁行2間と北側桁行3間分を検出したが、東への続きは土坑SK7634・7691のため不明である。柱間は桁行と梁行とも2.7m等間である。柱掘形は0.8～1.0mの方形で柱痕跡は径約0.3mである。柱掘形から完全あるいはほぼ完全の土師器杯A・椀A・皿・蓋、須恵器杯A・杯B・蓋が出土している。

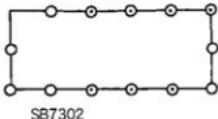


SB7648

- SB7302 区画中央部の5間×2間の東西棟建物で、柱間8尺の大型建物である。西側妻柱筋は、SA7000の西から13間目の柱穴と筋を揃えている。ほぼ同じ位置で同規模の建物が3棟確認でき、SB7302→SB7301→SB7300の順で建て替えが行われている。建て替えはその度に極わずかに柱穴の位置が西に移動する。この時、SB7301と西妻柱筋を揃えて掘立柱塙SA7000の北側でSB7294が同一規模で建てられる。その後SB7301がSB7300に、SB7294がSB7293に建て替えられ、SB7300の西側に概ね北梁行筋を揃えてSB7047が建てられ、3棟が並立する。その時期はII-2期である。
- SK7046 区画西部の南にある短径で約2m、遺構面からの深さが約0.6mの楕円形土坑で、土師器杯・高杯・甕、須恵器甕が出土している。
- SK7630 区画東部の北にあり、規模は確定しないが、東西方向で1.8m、南北方向は現存で1.7m、遺構検出面からの深さは約0.3mである。北側の一部は第108次調査のSD7309と重なり、新旧関係は土坑の方が古い。出土遺物には、土師器杯A・皿A・甕A、須恵器杯A・蓋・盤Aがある。埋土は黄橙色土と黄灰色土の混入土である。
- SK7260・7261 区画中央北にある直径3m、深さ0.3~0.4m程の不整形な土坑で、SK7261が先行する。両者から土師器杯A類を中心に当該期の多量の遺物が完形品も混えて出土している。

(4) 斎宮第II期第2段階 (II-2期)

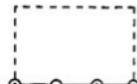
- 前時期から継続する遺構の他に、掘立柱建物8棟、土坑2基、溝5条がある。
- SB7649 区画東部の西よりでII-1期に東西棟建物が建て替え続けられた空間にある建物である。桁行5間×梁行2間で、柱間は桁行、梁行ともに2.4m等間である。柱掘形は、0.6~0.9mの方形で、棟方向はE 4°Nである。この建物の梁行筋は、南北とも第108次調査で検出した西側のSB7300の桁行筋と揃える。SB7649の西側妻柱とSB7300の東側妻柱との間の距離は3.9mと非常に近い位置にあるが、ある時期、両方の建物が並んでいた可能性がある。
- SB7655・7656 区画東部北にある土坑SK7650と重複し、土坑よりも古い建物である。両者の建物の新旧関係は不明である。建物の柱掘形からの遺物は少なく、SK7650との重複関係から建物の時期を判断した。
- SB7655は、南側桁行筋3間分を検出した東西棟である。I-4期の掘立柱建物SB7654の柱掘形と重複しており、調査の過程では柱抜き取り痕跡かとも思われたが、別個に柱痕跡がみられることから、別の建物であると判断した。柱間は2.4m等間、柱掘形は、0.5~0.7mの略方形で、棟方向は



SB7302



SB7649



SB7655



SB7656

E4°Nである。

SB7656は、南側梁行と桁行1間分を検出した南北棟である。柱間は梁行が1.8m等間、桁行は2.1m等間である。柱掘形は、0.3~0.5mの略方形で小さく、棟方向はN2°Wである。

SK7296 区画中央部の北にある一辺約3.5mの方形土坑で、深さ0.2m程と浅い。遺物は多くないが、埋土に多量の破碎した炭化材が混入していた。

SK7650 区画東部で調査区の北端にあるために全容は不明であるが、現存で東西約4m、南北約2mである。遺構検出面からの深さは、0.3~0.5mである。埋土は上層から黒褐色土→にぶい黄褐色土である。最下層にみられる黒褐色土、あるいは黒色土に橙色ブロックが混入する土は、重複する柱穴あるいは小土坑の埋土であると考えられる。出土遺物には、土師器杯A・皿A・甕A・高杯、須恵器杯A・杯B・蓋・甕Aがある。

道路側溝 区画中央部の北側で検出したSF6990の南側溝の一部となるみられるSD7251や、中央部で検出した溝芯間約4.5mを隔て平行する南北溝SD7275・7276がある。小規模な溝で性格は不明だが、土師器、須恵器が比較的多量に出土している。

SD7298・7316 中央部のSA7000の北側のSD7298や中央部の南で検出したSD7316は、出土遺物がほとんど無いが、埋土が黒色土でSA7000柱穴埋土に近く、この時期には存在したと考える。幅約0.4m、深さ0.3~0.4mの逆台形状で、SD7298は第103次調査のSD7036と対応する可能性がある。

(5) 斎宮第II期第3段階 (II-3期)

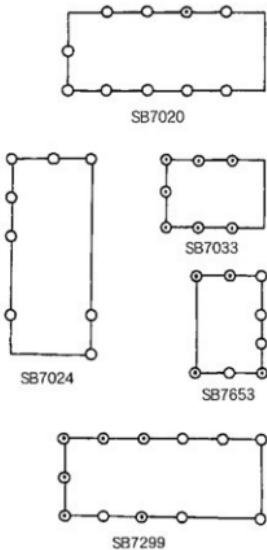
掘立柱建物5棟、掘立柱塀1条、土坑20基、溝12条がある。

SB7020・7024 区画西部にあるL字形配置になると考えられる建物で、同時期に存在した建物と考えられる。

両者ともに5間×2間の規模で、柱間は桁行・梁行とも2.4m等間である。棟方向は、SB7020がE4°N、SB7024がN4°Wである。また、SB7020の南側柱とSB7024の北妻柱はその柱筋を揃えている。

SB7033 区画西部にあり、東梁行の柱列をSD7015に掘削されているが、3間×2間の東西棟と考えられる。柱間は、桁行が2.0m、梁行が2.1m等間であり、棟方向はE4°Nである。建物の周囲には、柱筋から約2m西側と約1.5m北側に幅0.5~0.7mのSD7035とSD7034が巡る。

SB7299 区画中央部にある5間×2間の東西棟建物で、SA7000の柱穴跡と重複し、棟方向もE1°Nとこれまでのものと変化がみられる。柱間は桁行、



梁行ともに、2.4m等間である。柱掘形の規模は、最も大きいもので一辺 1.3×1.4 mである。柱痕跡は径0.3m強である。

SB7653 区画東部の西よりにある桁行3間×梁行2間の南北棟建物である。柱間は不揃いで桁行は北から $2.4m + 1.8m + 1.8m$ 、梁行は東から $1.8m + 2.2m$ である。柱掘形は0.5～0.6mと小さくなり、平面形は方形がくずれ円形に近いものとなっている。柱痕跡も0.2m前後と小さくなる。棟方向は正方位である。

SA7016 区画西部にあるSB7024の西側に2.8mの間隔をおいて並列する柵列で、検出された北端の柱穴もSB7020とSB7024の柱筋に揃い、2棟の建物と共存した施設と考えられる。これらは柱穴の遺物からII-3期でも新しいものとみられる。

土 抗 区画西部にあるSK7008・SK7017・SK7039・SK7053・SK7055はいずれも円形あるいは不整円形の土坑である。このうち、SK7017は長径約3mの不整円形の土坑で北半分を検出した。II-3期の新しい時期の土器が大量に投棄されていた。大半は土師器で、杯・皿・鉢・甕と若干の須恵器がある。

SK7250・7288 区画中央にある土抗で、比較的多量の遺物が出土した。SK7250からは土師器杯A・皿A・高杯・鍋B・甕A・竈、黒色土器、須恵器杯A・甕A、綠釉陶器の他に漆の付着土器、須恵器転用硯、製塩土器、土錘や木炭片が、SK7290は直径1m弱の小土坑ながら杯A・甕A・鍋Aを中心とする土師器類、製塩土器、土錘、木炭片が出土している。これらはII-2期の遺物も若干含み、土坑の埋没時期としてはII-3期の古い時期のものと考えられる。このような当該期の多量の土師器類や製塩土器、炭化材を含む土坑は区画西部でもSK7017があり、土師器類の中に小型～中型の甕A・鍋Aなどの煮沸具を含むという共通点もある。この他特筆できるものとしてはSK7274から斎宮跡では初例の銅製鉈尾が出土している。

SK7631 区画東部の西よりにある土抗で、掘立柱塀SA7000の柱掘形と重複する。南北約3.8m、東西約3.7mの不整形な椭円形の土坑で、深さは0.3～0.6mである。埋土は、上層で暗灰茶褐色土、橙褐色土と黄茶褐色土の混入土などがみられたが、下層では暗褐色土であった。いずれの層からも時期差のない土師器杯A・杯B・皿A、須恵器甕A、灰釉陶器碗の破片が出土していることから埋土の違いは堆積の差と判断した。

SK7632 SK7631と重複する現存で南北3.0m、東西1.3mの長椭円形の土坑である。遺構検出面からの深さは約0.2mである。埋土は暗灰褐色土で、炭化物を含んでいる。土師器杯A・皿A、須恵器杯A・甕A、灰釉陶器碗が出土している。

SK7633 SK7632の南にある南北3.0m、東西3.2mの不整形な椭円形の土坑である。遺構検出面からの深さは約0.2mである。埋土は橙褐色土に淡黄茶色土と灰茶褐色土が混入する土である。土師器杯A・皿A、須恵器蓋が出土している。SB7646～7649の4棟の掘立柱建物と重複しており、掘立柱建物より新しい土坑である。

SK7634 SK7633の東にある南北2.6m、東西2.4mのほぼ円形に近い土坑である。遺構検出面からの深さは約0.6mである。埋土は橙褐色土に淡黄茶色土が混入する土である。土師器杯A・皿A、須恵器甕Aが出土している。

SD7004 区画西側南北道路SF7010の東側溝SD7003を踏襲した溝と考えられ、幅約0.5～0.6m

で溝底の高低差はない。土師器杯Aや灰釉陶器が出土しており、II-3期の新しい時期に埋没している。ほぼ真北向き、SD7003とはやや方向が異なる。

SD7032 区画西部にある東西溝で、溝の方向はE 6° Nと、東西道路南側溝SD6992などとやや異なる。幅約0.5mで、II-3期の新しい時期の土師器杯A・皿A・小皿などの大きな破片が埋土中にみられる。

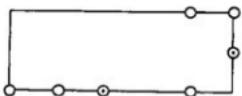
SD7253・7264 いずれも区画中央部にある性格の不明な溝である。東西溝SD7264は、II-2期のSD7259の延長上にあり、同一の機能のものかもしれない。また、南北溝SD7271はその埋土と上部に多量の土器片を含んでおり、包含層の上部にまで達していた。土器類はすべて小片となっており土坑状になっていない点から、この溝が廃絶する際に溝内やその上部に廃棄がなされたものとみられる。遺物は、土師器杯A・皿A、須恵器、灰釉陶器や土鍤、製塩土器、木炭片などで、II-3期を中心とする。

SD7257・7258 区画中央にある逆L字形を呈する一連の溝である。幅1.3~1.8m、深さは最深部で約0.6mで、南端は調査区内で止まっており、東端はII-3期のSK7263、SD7264が重複しているが、浅くなりつつもさらに調査区外へ伸びていくものとみられる。このうちSD7273は、SA7000と重なっており、SK7281のため重複関係は明らかではないが、SA7000廃絶後に開削されたものと考えられる。遺物はII-3期の古い時期を主体としているが、新しい遺物もみられ、埋設の時期はII-3期の終わり頃と考えられる。

(6) 斎宮第II期第4段階 (II-4期)

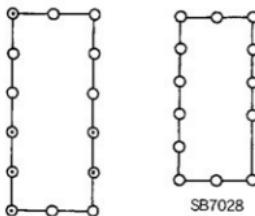
掘立柱建物10棟、土坑8基、溝4条がある。

SB7018・7025 区画西部にあるL字形配置をとる前代のSB7020・7024が建て替えられたもので、いずれも5間×2間の規模を受け継ぐが、柱掘形の規模は前代より小形になる。



SB7018

SB7028 SB7025同じ位置で建て替えられた5間×2間の南北棟で、SB7025の敷地を踏襲している可能性がある。柱掘形から折戸53号窯式期の灰釉陶器陶器を模したと見られるロクロ土師器が出土した。



SB7021 SB7018に重複して建てられた3間×2間の身舎に南面庇を持つ東西棟で、E 2° Nとやや棟方向は振るもの、位置的にはSB7028と対応する関係にあるものと考える。



SB7019・7023 SB7019は5間×2間の南北棟の身舎に東へ1間分の庇出を持つもので、SB7021より古い。SB7023もSB7025のプランに重複するが5間×2間の東西棟に変化し、SB7019に後出するものである。

- SB7270** SB7025の東方に位置する5間×2間の南北棟で、柱掘形はおよそ0.5m前後と小振りで、棟方向はN 2°Wである。
- SB7682・7683** 区画東部で、北側の桁行のみを検出した。柱掘形が重複しており、その前後関係からSB7683の方が新しい。
- SB7682は、今回の調査では4間分を検出しており、柱間は2.8m等間である。さらにこの建物は東の第10次調査区へもう1間分延び、東側妻を1間分であるが検出している。柱掘形は一辺0.6～0.7mの方形で柱痕跡は径約0.25mで、前代よりやや小さくなるようである。
- SB7683も4間分を検出している。さらに西へ続いていた可能性があるが、土坑SK7691のために不明である。柱間は2.0m等間である。柱掘形や柱痕跡の大きさはSB7682と大差ない。いずれも、柱掘形から出土したわずかな土師器杯A・皿Aからこの時期と判断した。棟方向はどちらもE 4°Nである。
- SB7315** 区画中央部で北側の桁行3間のみを検出した。柱間は2.7m等間で、南側へ続く東西棟建物が想定される。第108次調査では、この建物の時期を平安時代初期（II-1期）としている。その根拠として、SA7000から36尺の距離にあること、東西4間の建物と想定した場合SA7000の東西正中線と同軸になる可能性が高いこと、柱掘形は一辺0.8～1.2mと大型であることなどがあげられているが、第114次調査では、桁行は3間であることを確認しており、また、SA7000の東西正中線と同軸にはならないことも確認された。また、柱掘形が大きい建物がIII-2期まで継続していることも確認されており、柱掘形の規模のみから、建物の時期決定の根拠には成りえないことを確認している。このような状況から、この建物の時期決定について柱掘形の埋土中の遺物をみるとII-1期やII-2期に遡るもののは一切みられず、II-4期の遺物を含むため、積極的に時期を古くする根拠もみられず、建物の時期をII-4期と判断した。
- SK7030** 区画西部にある2.4×2.9mの円形土坑で、遺構面から約0.3mの深さがある。出土した遺物の大半が土師器杯Aで、他に皿A・鉢・台付鉢・甕Aと僅かに灰釉陶器碗・皿、須恵器がある。検出した段階で数点がまとまって投棄された状況がみられた。
- SK7040** 区画西部にある2.7×0.9m、深さ約0.3mの長楕円土坑である。遺物はSK7030よりも新しく、II-4期でも新しい。
-

SK7320～7322 区画中央部の東よりにある重複する土坑である。SK7321からは斎宮跡では最古に属する玉縁口縁の白磁碗片が出土した。土師器杯A・皿Aが大半で煮沸具は少ない。わずかに灰釉陶器や須恵器も含まれ、炭化材もみられる。これらの土坑は一部重なりあっており、SK7221→SK7320・7322の前後関係があるものの、後述のSB7313が建てられるまでの短期間のうちに集中的に使用されたものと思われる。

SK7635 区画東部の西よりにあるII-3期のSK7631と一部重複しながら西へ続く南北1.8m、東西2.2mの楕円形の土坑である。重複の新旧関係はSK7635の方が新しい。埋土は暗褐色土で、土師器杯A・皿A、須恵器甕A、灰釉陶器椀が出土している。

溝 区画西部にあるII-2期頃に埋没したSD6992を踏襲するSD6995と、E6°Nとやや向きを変えて掘削されたSD7009・SD7011がある。SD7036は幅0.6mの溝だが、深さは0.1～0.3mで部分的に落ち込み状の部分がある。

(7) 斎宮第III期第1段階～第2段階 (III-1～2期)

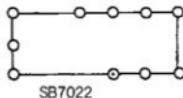
掘立柱建物24棟、土坑17基、溝17条がある。

SB7022・7026 これらは区画西部にあり、SB7022は先代のSB7023と規模が5間×2間と同じであるが、柱間は、桁行2.0m、梁行1.9mと規模を縮小して北へ移動して建てられている。SB7026は3間×2間の東西棟で、柱間は桁行2.1m、梁行2.0mであり、これらは柱掘形が径0.3～0.4mの小規模なものである。

SB7042～7044 区画西部にある東西棟建物で、SB7042・7044は5間×2間、SB7043は4間×2間の規模である。いずれも梁間は2.4mで、桁行はSB7043が2.4m、SB7042が1.9m、SB7044が2.45mである。柱掘形は、0.7～0.9mのほぼ方形である。なお、この3棟は重複の関係から後述の区画溝の掘削より古い時期の建物である。この溝の掘削はIII-1期のある時期以降と想定され、III-2期には埋没している。よって、区画の溝とそれに用まれた掘立柱建物の存続時期は、III-1期から第III-2期にかけての時期幅を持ち、溝埋土と柱掘形からの出土遺物からは時期の断定はできない。以下に述べる掘立柱建物はその時期幅での建て替えが想定されるものである。

SB7037 区画西部にある4間×4間の比較的大型の総柱建物と考えられる。柱間は、桁行・梁行ともに1.8mで柱掘形は0.7～1.0mの円形で、棟方向はN2°Wである。

SB7027・7038 区画西部にある2間×2間の総柱建物で、柱間はともに桁行2.0m、梁行1.9mで、柱掘形は、0.8m前後



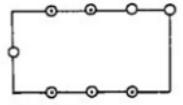
SB7022



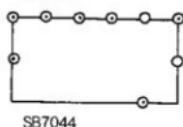
SB7026



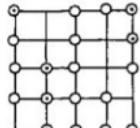
SB7042



SB7043



SB7044



SB7037

の円形である。棟方向はE 4°Nである。重複関係はないが、柱穴埋土の遺物からSB7038が先行するものと考える。

SB7041・7048 区画西部にあるSB7041は、調査区の南に延びるため規模は不明であるが、東西 4 間 × 2 間以上の総柱建物で、N 1°E の棟方向である。SB7048も調査区の南に延びるため規模は不明であるが、柱掘形が0.4m程度の東西 2 間 × 南北 1 間以上の総柱建物である。

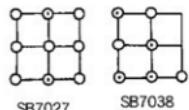
建て替え さらに牛葉東区画内で「コ」字区画が 3 つ並ぶ一番東の区画内の西端と東端の二か所で、掘立柱建物はそれぞれ建て替えが繰り返される。西端の一群は古い順にSB7313→7638→7639→7640→7641→7642で、6 棟が重複する。いずれも南北棟建物で、SB7639・7641が桁行 4 間 × 梁行 2 間の他は桁行 5 間 × 梁行 2 間である。棟方向はSB7641がN 3°Wである他は全てN 4°Wである。

SB7313 第108次調査で西側桁行と北側妻、東側桁行の一部を検出し、第114次調査で規模が確定し、桁行、梁行とも 2.4m 等間となった。柱掘形は一辺 0.7~0.8m の方形、柱痕跡は径 0.25m 前後である。概報では建物の時期をIII-1期としているが、改めて検討した結果、III-2期に変更した。

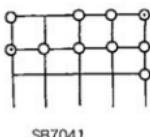
SB7638~7642 SB7638の柱掘形は、0.5~0.7m の円形で、桁行、梁行ともに 2.1m 等間である。他の建物も概ね柱掘形は 0.5~0.7m 前後の円形あるいは橢円形とやや丸くなる傾向がみられるが、今まで斎宮跡で検出されているこの時期の建物の柱掘形としては大きいものである。柱間もSB7639が桁行と梁行ともに 2.4m 等間で、SB7640が桁行と梁行ともに 2.1m 等間、SB7641が桁行 2.1m 等間、梁行 2.8 m 等間、SB7642が桁行 2.1m 等間、梁行 1.8m 等間といずれもしっかりしている。

東端建物群 東端の一群は、古い順にSB7677→7678→7679→7680→7681で、SB7680が東西棟建物である他は南北棟建物である。

SB7677 桁行 5 間 × 梁行 2 間で、柱間が桁行 2.4m 等間、梁行 2.1m 等間である。棟方向は N 4°W である。



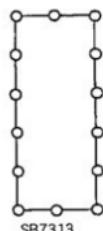
SB7027 SB7038



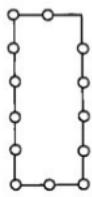
SB7041



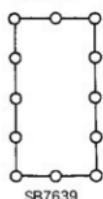
SB7048



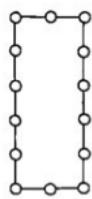
SB7313



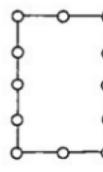
SB7638



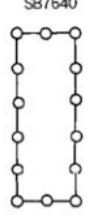
SB7639



SB7640



SB7641



SB7642

柱掘形は0.7m前後の橢円形、柱痕跡は径0.25～0.3mである。

SB7678 桁行5間×梁行2間で、柱間は桁行2.1m等間、梁行2.2m等間である。棟方向はN5°Wである。柱掘形は0.7～0.9mの方形あるいは橢円形である。柱痕跡は重複により不明なものが多いが、確認できるものでは径0.25～0.30mである。

SB7679・7680 規模が小さくなり、桁行が3間となる。柱間は桁行、梁行ともに2.1m等間である、柱掘形は径0.7m前後の円形で、柱痕跡は径約0.2mである。SB7680は西側妻と南北の桁行を1間分検出したのみである。第10次調査区へ続くものと思われるが、溝や土坑と重複しているために第10次調査区では柱掘形を確認できなかった。柱間は桁行、梁行ともに2.1m等間と想定される。柱掘形は径0.7m前後の円形で、柱痕跡は径0.2m前後である。

SB7681 桁行5間×梁行2間の南北棟建物で、棟方向はN2°Wである。柱掘形は一辺0.8～1.1mの隅丸方形で、柱痕跡は径30cm前後である。柱間は、桁行が2.4m等間、梁行が2.1m等間である。この一群の中では最もしっかりとした建物である。

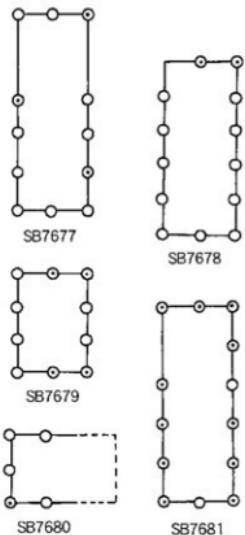
土 抗 区画西部にあるSK7272・7281～7284・7286・7291・7292は、径およそ1.5～4.5mの不整円形の土坑で、底部の形状も凹凸があり、深さも0.6～0.9mと幅がある。いずれも埋土が地山崩壊土ブロックを多量に含む人為的な攪乱状になっているという共通点があり、埋土断面は地山土を含んだ様々な土が層理状に堆積している。

分布についても先述の区画溝SD7269の内側に集中する傾向が窺われる。これらの土坑の性格は推定ではあるが、以上の内容から樹木の根の痕跡ではないかと考える。III-1期あるいはそれ以前の段階からSD7269の内側にあたる部分には建物や溝などの遺構はみられず空閑地となっている。厳密に「遺構」とできるか問題はあるが、当該期の各区画の土地利用を考えさせるものである。

SK7652 区画東部でも北辺西よりで検出した土坑である。南北4.2m、東西1.2mと細長く、遺構検出面からの深さは0.13mと浅い。埋土はにぶい黄褐色土である。土師器杯A・小皿・甕Aと灰釉陶器椀が出土している。

SK7651 SK7652を掘り下げた北辺で検出し土坑である。さらに調査区の北へ続くものと思われる。灰黄褐色土の埋土から、土師器杯A・小皿・甕Aが出土している。

SK7661 区画東部の北辺東よりで検出した土坑である。南北3.0m、東西2.8mの橢円形で遺構検出面からの深さは0.15m前後と浅い。埋土は灰黄褐色土である。土師器杯A・小皿、灰釉陶器椀が出土している。



SK7675

区画東部の調査区南東隅にあり、さらに東へ続く土坑で、深さは0.3m前後である。埋土は暗灰黄色土である。土師器杯A・小皿、鉄製品が出土している。

道 路 側 溝

区画西部にある東西溝SD6993とSD6994は、東西道路SF6990に関わる最後の南北側溝である。幅はそれぞれ約0.5m、約1.0～1.3mで、SD6993は極緩やかに東へ傾斜している。土師器片、須恵器片、ロクロ土師器類や百代寺窯式期とみられる灰釉陶器碗などが出土している。この両者は溝心間で約9.5mあり、幅30尺前後の道路として機能していたと考えられる。

それに対してSD7005～7007は一連の南北溝で、かつての南北道路SF7010の上に開削される。幅は最大で約3m、深さは0.3～0.5mほどある。SD7012～7015はこれまでの建物密集地を「コ」の字形に囲むように開削されている。幅が約2.0～2.7m、深さは遺構面から0.3mほどで断面は浅いU字形である。溝底の高低差は顕著ではない。この溝によって区画される範囲は東西で約17m、南北で20m以上になるが、溝の北辺と西辺は初期からの区画道路の内側に収まるように掘削されている。なお、III-I期に存続したであろうSB7042～7044の柱掘形と重複しており、掘立柱建物より新しい。「コ」の字状区画に伴う建物としてはSB7037がそのほぼ中央に位置し、調査区内では単独で建てられていたものと考えられ注目される。

牛葉東区画では「コ」の字状の区画配置は3か所以上になり、いずれも平行あるいは直交するなどしてその方向に規則性があり、幅3m前後の空閑地をつくる点で共通する。特にSD7269・7307の調査区南壁断面に注意すると、調査前は旧地形の弱い起伏かと考えていた盛り上がりがSD7269・7307の間隙部によく対応し、そこに山林土とはやや異なる黒ボク状土や地山崩壊土の混土が盛られており、SD7328埋没後盛土され、その後、SD7269が掘削される。この事から、この少なくとも二次にわたる盛土や版築などは認められないが幅1.5m程度の土塁あるいは築垣であった可能性もあるが断定はしがたい。

SD7254・7269・7307～7309・7328は、区画西部の第103次調査で「コ」の字配置を呈するSD7012～7015と対応するものである。SD7269の西辺・北辺・東辺は各々SD7015・SD7254・SD7307にそれぞれ平行して幅3m前後の空閑地をつくる。この結果から第103次調査でもSD7013にSD6994が対応していると考えられる。これらの溝は、幅およそ3～4.5m、深さは地表面から0.3～0.5mと浅いもので、断面は弱いアーチ状である。また、SD7328はSD7307の底で検出された溝で、これらの溝が数次にわたり再掘削されている可能性もある。

(9) 斎宮第III期第3段階（III-3期）

この時期の遺構には土坑22基、溝11条がある。

SK7051・7052

いずれも区画西部の北にある東西道路SF6990路面上にある。SK7051は、東西1.1×0.6m、深さ約0.3mの長楕円形土坑で、土師器小皿、ロクロ土師器、山茶碗が一括して投棄されていた。SK7052は、直径約1.2m、深さ約0.3mの円形土坑で、同様に土師器片、ロクロ土師器片が出土している。

- SK7289 区画中央部西よりにある直径約2.5mの不整円形である。深さ0.2mで、ロクロ土師器台付杯の完形品や椀の他、土師器杯Bなど比較的多量の遺物が出土している。
- SK7304・7305 区画中央部にある土坑で、多量の土器の出土があり、土坑内と認定できたものの他、黒褐色の包含層の下部にも当該期の遺物が多量に含まれている。特にSK7305からは多量の土師器皿・小皿・高杯、ロクロ土師器杯・台付杯・高台付杯や須恵器の他、判読できないが仮名習書したとみられる土師器皿類や調度品の一部と考えられる金銅製のL字形金具が出土している。時期的にはIII-3期でも前半のものと考えられる。
- SK7636 区画中央部西よりにある掘立柱建物群の東にある土坑で、すぐ北にはII-4期の土坑SK7635がある。南北1.7m、東西1.9mの楕円形で、遺構検出面からの深さは0.4m前後である。埋土は暗灰褐色土である。土師器皿、ロクロ土師器皿が出土している。
- その他の土坑 SK7662～7666・7671～7674・7676・7685は、区画東にある掘立柱建物群を取り囲むかのように建物の周囲にある。これらの土坑の規模・形態は、概ね2～4mの楕円形で、遺構検出面からの深さは0.3～0.4mである。埋土は茶灰褐色土あるいは黄灰褐色土で、いずれも土師器皿・小皿、ロクロ土師器皿などが出土している。
- 溝 区画中央部の西よりにあるSD7255・7256・7265・7268・7277は、III-1期には掘削されたSD7254・7269の肩部にある幅0.3～0.4mの細い溝である。類似する溝に、SD7267があるが、遺物はなく、上面から「洪武通寶」が出土しており、明確にこの時期に伴うものかどうか判断できない。また時期の不明な区画中央北のSD7306も同様のものかもしれない。
- SD7311は、区画中央にあるN5°Eほどの方向で延びる南北溝で、幅約0.8m、深さ0.3～0.4mの断面逆台形である。底部高にはほとんど高低差はなく、埋土にIII-3期の遺物を含むもののSK7305が重複しており、掘削は若干遡るかもしれない。
- (10)鎌倉時代
- この時期の遺構には土坑6基、溝2条がある。
- SK7637 区画中央部南端にあるII-1期の掘立柱建物群と重複する土坑で、さらに南へ続く。現状では、南北1.7m、東西3.6m、遺構検出面からの深さは0.3mである。埋土は、にぶい黄褐色土である。土師器小皿が出土している。
- SK7667～7670・7684 区画東部でIII-3期の土坑群に重複して検出したものである。規模や形態に変化はなくね比較的浅い土坑である。埋土は茶灰褐色土あるいは黄灰褐色土である。いずれも土師器皿・小皿が出土している。特にSK7670から出土した小皿には、鳥の絵が墨で描かれており注目される。
- SD6996 区画西部にある東西溝である。幅約0.25mで、残存する深さは約0.1mの溝だが、位置的にみてII-2期に埋没したSD6992がSD7003との交差部分を越えて西へ伸びていた部分の痕跡である可能性もあるが、今回出土した山茶椀からは13世紀後半に埋没したものとみられる。
- SD6997 区画西北部にある東西道路SF6990と南北道路SF7010の交差点部分を斜めに横断するよう開削された溝である。溝底の海拔高は10.4～9.9mで、北西に向かって傾斜し

ており、N35°Wの方向である。土師器類やロクロ土師器類が出土しており、III-3期から鎌倉時代の初めにかけてのものであろう。

(11)その他

その他時期不明の遺構として、柵列1条、土坑1基、井戸1基、溝12条がある。

SA0585 区画東部の南側で14間分が検出された。柱間は約3mと広い。南側は未調査区へ統き、北側はSD0578と重なる。その重複関係は不明であるが、SD0578の開削により、削平されたとするならば、III-3期より古い遺構と考えられるが断定できない。

SK7691 区画東部の中央にある東西約16m、南北は調査区の外に延びるため約8m以上の不整形な大きな土坑である。遺構検査面からの深さは、1.6~1.8mである。埋土の状況から近世以降に土取りのために掘られたもので、すぐに他の土を入れて埋め戻したというより、凹んだ状況のところへ何回にもわたって土が堆積した様子がうかがえる。

SD7657・7688 区画東部にある黒褐色土の埋土の溝で、溝の壁はほぼ垂直に掘られており、遺構検査面からの深さは0.2~0.3mである。土師器の細片がわずかに出土しているが時期は不明である。掘立柱建物の周囲にみられる柴垣のような施設に伴うものかもしれない。

SD7686・7687 区画東部にある斜行溝で、深さは約0.1mと浅い。本来は2条の溝が並んでいたと思われるが、東側のSD7687はほとんど削平されている。埋土はにぶい黄橙色である。

その他の溝 区画西部にあるSD6998・7001・7002はいずれも鎌倉時代以降の開削と判断される。

2 遺 物

牛葉東区画の調査で出土した遺物は、I-4期から鎌倉期にかけてのもので、甕などの煮炊形態が少ないので特徴的である。また、この区画内では北辺西にあたる第103次調査や北辺中央の第108次調査では方格地割内部では異例と思われる量の土錘や製塙土器が出土しているが北辺東の第114次調査では土錘が3点、製塙土器が8点と少なく、同じ区画の中でも機能の違いを反映していると思われる。

ここでは、竪穴住居や土坑からの出土遺物を中心として各時期の一括遺物について主に報告する。

(1)斎宮第I期第3段階(I-3期)

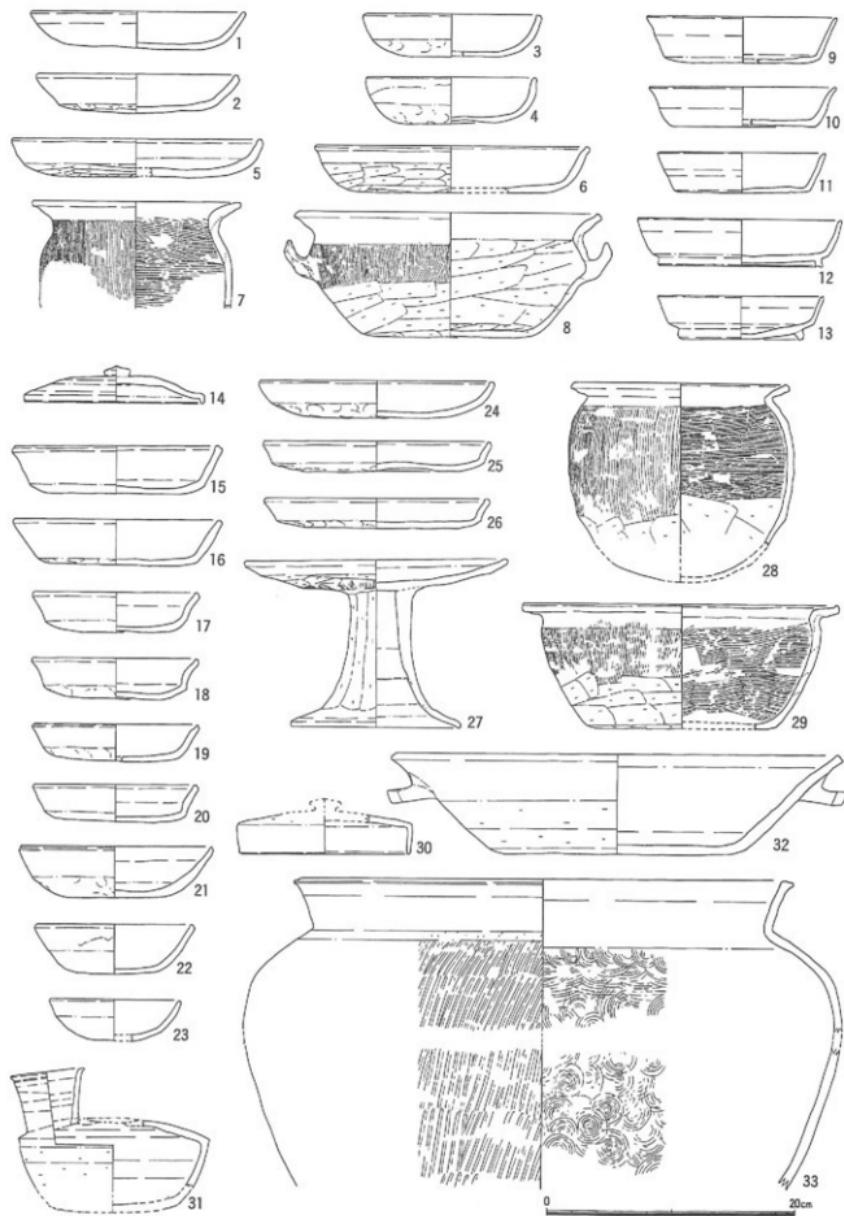
SB7045 この時期の遺物にはSB7045出土の(1~13)がある。出土遺物の割合は、土師器約90%、須恵器約10%で、土師器の供膳形態と煮炊形態の比はおよそ2:1になる。

土師器杯の中では、破片数でカウントすると丸い体部と厚い器壁を持つ椀形態の杯G(3・4)が約7割を占める。底部ヘラケズリする杯A(2)や皿A(5・6)なども少ないが出土している。なお、(6)は口径に比較して器高の深いものである。煮炊形態では甕A(7)や鍋B(8)がある。

須恵器は、供膳形態と貯蔵形態が破片数ではほぼ同数である。杯類では無台の杯A(9~11)と有台の杯B(12・13)とがほぼ同数である。

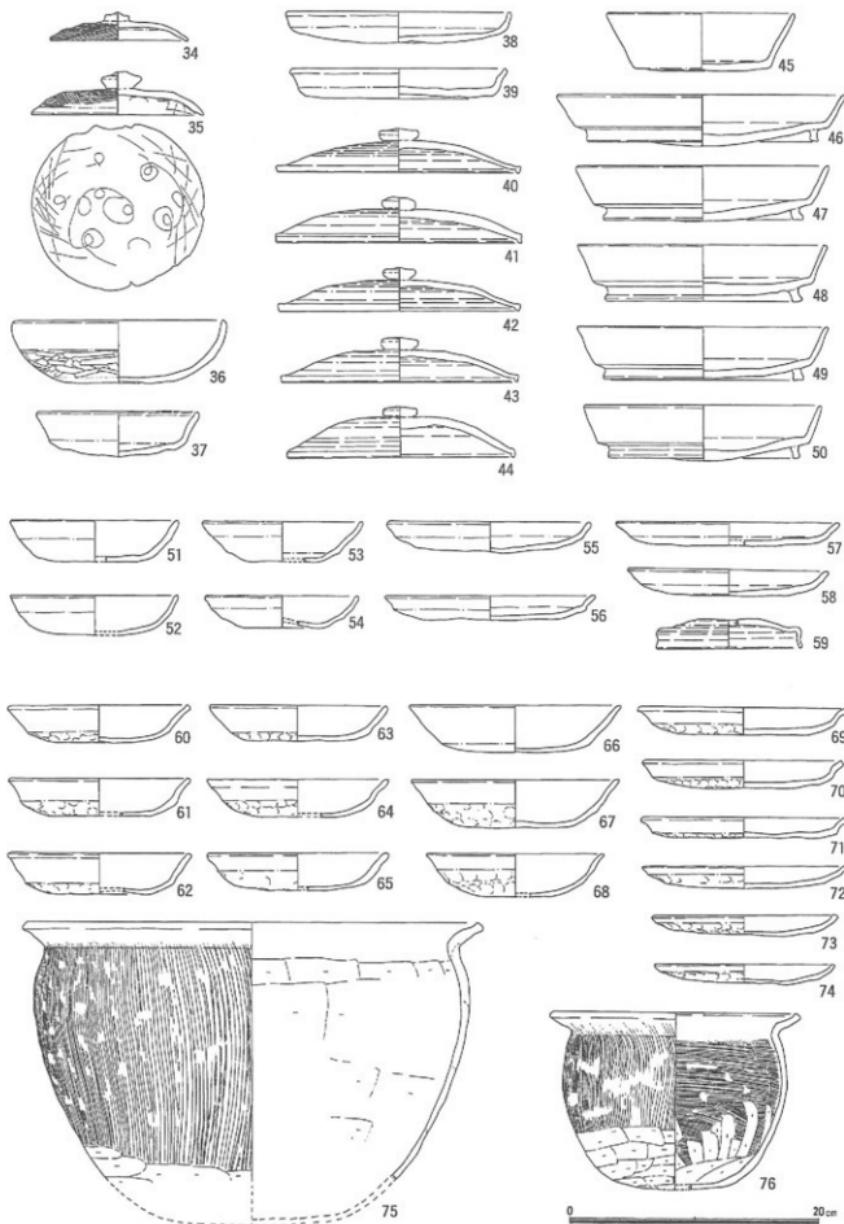
(2)斎宮第II期第1段階(II-1期)

この時期の遺物にはSA7000柱掘形、SK7261、SB7648柱掘形出土のものがある。



第7図 牛葉東区画の遺物(1) SB7045:1~13 SA7000:14 SK7261:15~33

- SA7000** 柱掘形から須恵器蓋(14)が出土している。産地は特定できないが、遺構の時期と矛盾はしないと思われる。
- SK7261** 残存状況の良好な土師器杯A(15~20)・椀A(21・22)・杯G(23)・皿A(24~26)・甕A(28)・鉢(29)・高杯A(27)、須恵器杯A・壺蓋(30)・平瓶(31)・甕C(33)・盤B(32)、製塩土器、土錐が出土しており、土師器供膳形態の割合が高いものの、内容的には多岐にわたっている。
- SB7648** 柱掘形からは土師器杯A・椀A・蓋・皿A、須恵器杯A・杯B・蓋が出土している。須恵器杯蓋(44)は、北西隅の柱掘形から垂直に立つような状況で出土しているが、その他は南西隅の柱掘形から重なるような状況で出土した一括遺物である。
- 土 師 器** 杯A(37)は外反する口縁をもち、口縁端部のみやや内湾気味になる。口径は、やや歪みがあり13~14cm、器高は3.6cmである。口縁部はヨコナデ、底部はオサエの後ナデを施すe手法で調整する。内面には螺旋状暗文が施される。口径のわりには器高の深い杯で、器壁も厚く、古い様相を示し、奈良時代的なものから平安時代的なものへの移行期にあたる特徴をもつ。
- 椀A(36)は口径17.4cm、器高5.0cmの深い杯である。底部はオサエの後ナデを施し、口縁部下半はヘラケズリ、上半はヨコナデ調整する。
- 蓋(35)は外面を丁寧にヘラミガキ調整し、内面には螺旋状暗文と放射状暗文を施す。口径14.0cm、器高3.5cmで、他にも口径のやや小さい(34)など2点が出土している。
- 皿Aは、口縁部が内湾気味に立ち上がるもの(38)と底部は平坦で口縁部が外反するもの(39)がある。(38)は口径18.4cm、器高2.5cm、(39)は口径17.6cm、器高2.4cmである。いずれも口縁部ヨコナデ、底部はオサエの後ナデを施すe手法で調整される。
- 須 恵 器** 盖(40~44)は口径19.2~19.6cm、器高3.6cm前後である。天井部は陣笠状になり、口縁部はほぼ垂直あるいはやや内側に折り返されるが、(40)のように端部が厚くなるものもある。天井部は頂部を中心にして2/3ほど回転ヘラケズリ調整される。(44)は口径18.4cm、器高4.1cmで天井部は陣笠状であるが、他に比べ中央部が盛り上がる。回転ヘラケズリの範囲は1/2である。径高指数(器高÷口径×100)は18~19である。
- 杯には、杯A(45)と杯B(46~50)がある。杯A(45)は口径15.0cm、器高4.7cmで底部外面は全面回転ヘラケズリを行う。杯Bの法量は、口径19.0~20.4cm、器高4.2cm、径高指数が21~23のもの(47~50)、口径23.2cm、器高4.2cm、径高指数18のもの(46)とに分かれる。いずれも底部と口縁部の境は明確に屈曲し、稜をなすものである。口縁部は直線的にやや開いて立ち上がる。高台は「八」字状に外に開き、(46)は外端のみで接地するが、他は下端全体で接地する。高台と底部の接合部分は内外とも丁寧にナデられている。また、(46・50)の底部は高台よりも突出し、古い様相を残す。(45・46)以外は美濃須衛窯の製品でⅣ期第3小期前半に相当する。
- (3) 斎宮第II期第2段階 (II-2期)
- SK7650** 土師器杯A・皿A、須恵器蓋がある。
- 土 師 器** 杯A(51~54)は、この段階から口縁部の外反が弱く内湾気味に立ち上がる杯Aが



第8図 牛葉東区画の遺物(2) SB7648:34~50 SK7650:51~59 SK7017:60~76

なくなり、杯Aは底径が小さく口縁部がまっすぐのびる(51~54)と底部が平坦で口縁部が外反するものとの2種類になる。いずれもe手法で調整する。

皿A(55~58)は、杯A同様、口縁部が内湾気味に立ち上がるものがなくなる。口縁部と底部の境が明瞭でなく断面弓状になるもの(58)、ほぼ平坦な底部から口縁部が外反するもの(56)や、両者の中間的なもの(55・57)がある。いずれも杯同様にe手法で調整する。

須恵器 蓋(59)は、口径が11.6cmの壺の蓋で、つまみが欠落しているものと思われる。天井部は、中心部から2/3ほど回転ヘラケズリを施す。口縁部は内傾した後外反する。

(4) 斎宮第II期第3段階 (II-3期)

SK7017 総数6651片の土器類を取り上げたが、その99%以上が土師器であり、さらに土師器のおよそ88%は杯A・皿Aなどの供膳形態である。

土師器 杯A(60~68)には、口縁が幅広くヨコナデされてやや外反するもの(60~65)と、底部と口縁部の境が不明瞭で弓状にまっすぐのびるもの(66~68)がある。両者の比率は破片数で47:53とほぼ同率といえる。

皿A(69~74)では、外反して立ち上がるるもの(69~71)と、杯同様に断面弓状のもの(72~74)がある。両者の破片数の比率は32:67で後者の割合が高い。その他、鍋A(75)や甕A(76)が出土している。

その他 また、他の土坑に比べて製塩土器の比率が比較的高い点、また炭化材も混入している点も注意される。数点ではあるが黒窯90号窯式期の灰釉陶器碗が出土している。

(5) 斎宮第II期第4段階の遺物 (II-4期)

SK7635 杯A・皿Aが出土している。

土師器 杯A(77・78)は、前段階までに認められた口縁部が外反するものとまっすぐにのびるものの区別が不明瞭となり、法量も縮小化の傾向にある。(77)は口径14.2cm、器高3.1cm、(78)は口径13.2cm、器高2.6cmである。色調も浅黄橙色やにぶい黄橙色のものが目立ち、前段階までの褐色をしたもののは少ない。

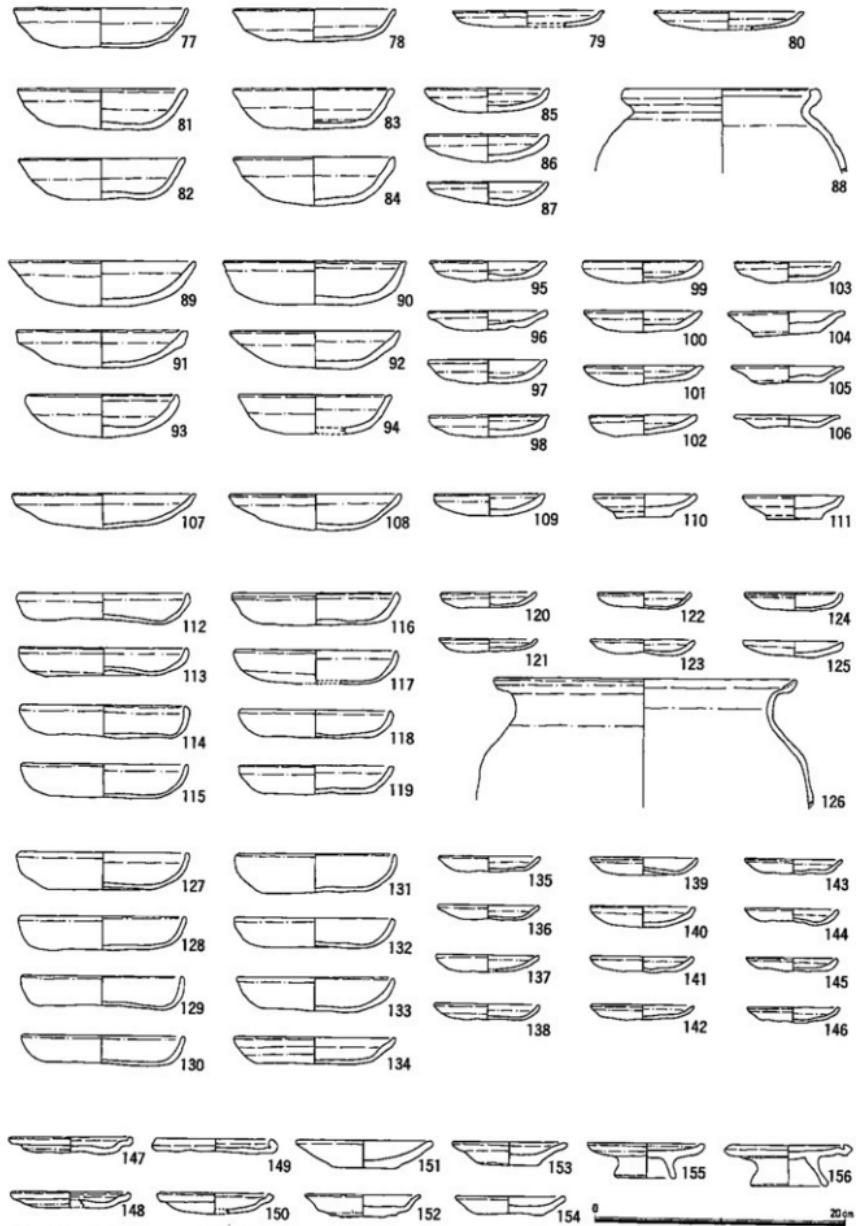
皿A(79・80)は、口縁部が外反し、端部が外方へつまみ出される。口径は12cm前後で小形である。皿の色調も杯と同様な傾向を示す。

(6) 斎宮第III期第1段階 (III-1期)

SK7651土師器 杯A(81~84)は、口径13.0~13.8cm、器高3.3cm前後であるが、(84)のみ器高3.9cmとやや深い。底径が小さく口縁部がまっすぐのびるものが多い。器壁も6mm前後で前代までのものに比べて厚手となり、胎土も密ではあるが砂粒が多く混ざる。e手法で調整されるが、口縁部のヨコナデの範囲は口径の1/3と狭くなる傾向が強い。

小皿(85~87)は、断面弓状の皿である。口径10cm前後、器高は1.7cmから2.3cmである。前段階からみられる小皿である。口縁端部の形態では、前代からの系譜を引く(85・87)とIII-3期に特徴的な端部が肥厚し、外側に面をもつ(86)の萌芽がみられる。

甕A(88)には、球形の体部に「く」の字形に曲がる口縁部がつく。口縁部はヨコナデされ、体部外面はオサエ後ナデ、内面は板状工具によるヨコナデを施す。口径は16.0cm



第9図 牛葉東区画の遺物(3) SK7635:77~80 SK7651:81~88 SK7685:89~106 SK7663:107~111
SK7668:112~126 SK7670:127~146 遺物包含層：147~156

である。

(7) 斎宮第III第3段階の遺物 (III-3 期)

SK7685・7663出土の遺物がある。

SK7685 土師器杯 (89~94) は、底径が小さく口縁部がまっすぐのびるもの以外に口縁部と底部の境が明瞭でなく断面弓状の杯が多くなる。(93・94)は口径12.4cmで他のものに比べやや小ぶりで、口縁端部が凹むという特徴をもっており、斎宮以外の遺跡も含めてあまり例をみないものである。(91)の口縁端部も肥厚し、強いヨコナデにより外側に面をもっており特徴的である。(89~94)は、前代同様に器壁が厚く、胎土も密ではあるが砂粒が多く混ざっているものである。

小皿(95~103)は、断面弓状の皿である。口径8.6cm~9.7cm、器高は1.7cm~1.9cmで、口縁端部のみヨコナデする。

ロクロ土師器 (104~106) は、口縁部が外反し、器壁が薄くて器高の浅い(105・106)とやや厚く器高の深い(104)がある。いずれも底部は糸切り未調整である。

SK7663 土師器杯(107・108)は、断面弓状で口縁端部のみヨコナデするもので、その範囲も1/3以下と狭くなる。また、器壁も薄くなる傾向にある。口径は、14cm~15cmで器高は2.8mm前後と浅くなり、より皿という感じが強くなる。

小皿(109)は、断面弓状の皿である。口径9.0cm、器高は1.8cmで、口縁端部のみヨコナデする。

ロクロ土師器(110・111)は、口縁部が内湾し、器壁がやや厚く器高が深い。いずれも底部は糸切り未調整である。

(8) 鎌倉時代

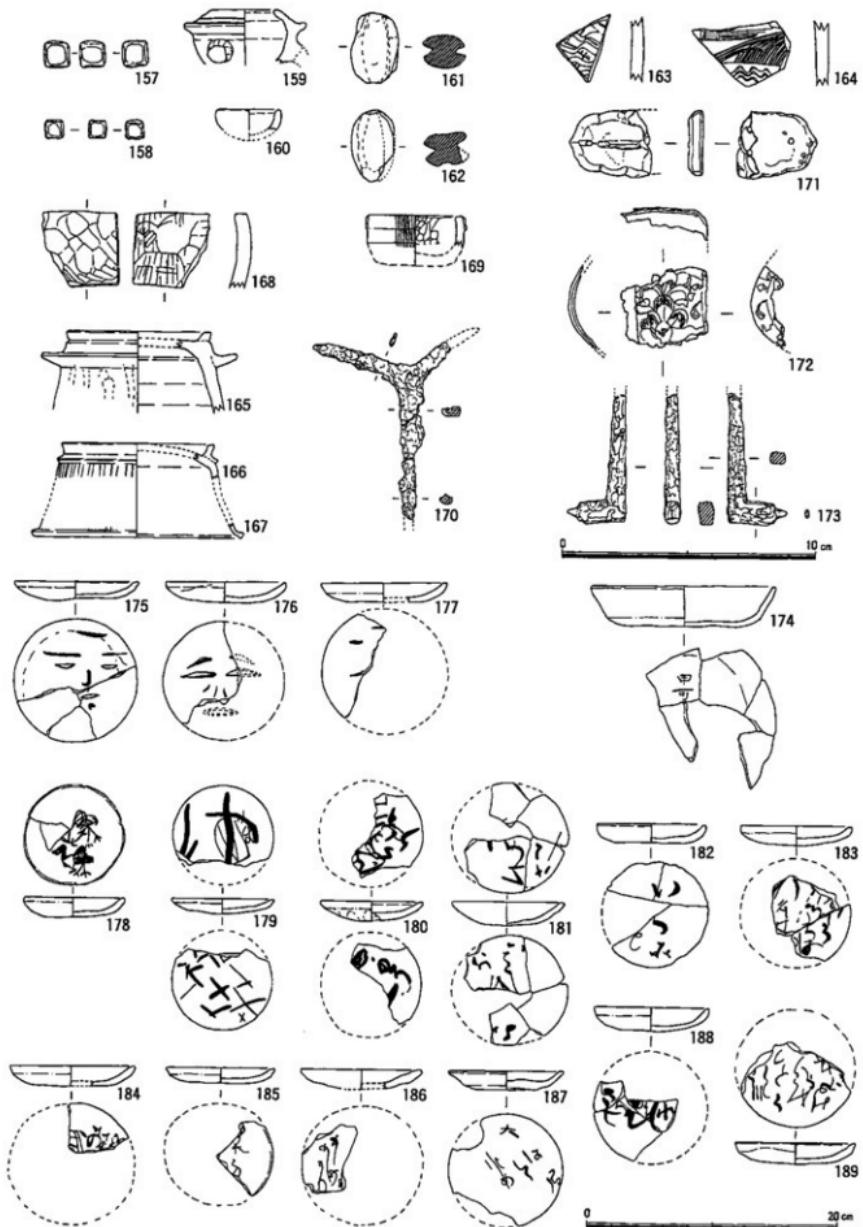
SK7668・7670の出土遺物がある。

この時期の皿は、ほぼ平坦な底部から口縁部がやや内湾気味に立ち上がるものが多いため。器壁は薄くなり、底部より口縁部の方が厚く、端部は肥厚する。

SK7668出土のものは口縁端部の外面をヨコナデするものが多いのに対して、SK7670出土のものはわずかに外面のみをヨコナデするものが多く、SK7670出土の皿の方が新しい様相を示す。口径を比較するとSK7668出土のものは13cm後半代~14cm前半代のものが中心で、SK7670出土のものは13cm前半代のものが圧倒的に多く、縮小化の兆しがうかがえる。

SK7670出土の(134)は、口縁部のヨコナデが2単位みられるもので、胎土も非常に細かい金雲母片を大量に含んでおり、かつ色調もにぶい橙色である。明らかに他の皿と異なるものでその特徴から中勢地域からの搬入品と考えられる。斎宮跡、あるいは南伊勢地域での出土例としても非常に稀なものである。

小皿は、前代のように器壁の厚いもの(125・140・141・146)も僅かに残るが、断面弓状で器壁の薄いものが主体となる。口径は7cm後半代~8cm前半代のものが多く、皿と同様に縮小化がみられる。



第10図 牛葉東区画の遺物(4) その他の遺物：157～189

鍋は、口縁部の折り返しは幅広く、折り返し部分にはヨコナデが施され、やや凹んだ状態になる。頸部はナデが施され、比較的長い。口縁部・頸部・体部の区別が明瞭なものである。SK7668から口径24.2cmの(126)が出土している。

(9) 遺物包含層の土器

(147～149)はいわゆる「て」の字状口縁の小皿である。また、(150・156)はコースター形皿で(156)には脚台がつく。これらは京都で出土する土師器皿と類似した資料であるが、胎土は非常に細かい金雲母片を含み色調は淡黄色で、SK7670出土の(134)と似ている。このことから、京都産のものではなく、京都から波及した「かたち」をこちらで生産したものと思われる。なお、脚台のつく土師器小皿で一般的にみられるのは(155)のようなものである。ロクロ土師器(151～155)は、様々な形態のものがみられるが、底部はロクロ回転糸切り未調整である。(153)の底部はやや突出する。

(10) その他の遺物

牛葉東区画で出土した遺物には、多量の土師器類の他に特殊遺物とされるものが多種多様にある。その内訳は、綠釉陶器85片、貿易陶磁器84片、黒色土器5点、瓦器8点、製塩土器530点、土錘134点、ミニチュア土器4点、円面鏡など硯類71点、漆付着土器7点、朱付着土器30点、かな習書土器と墨書き土器50点、フイゴ羽口107点、軒平瓦片1点、石鍋1点、温石1点、サイコロ形土製品2点、鉄釘などを含む金属製品30点以上である。以下、主なものについて概述する。

サイコロ形 土製品

(157)は一辺2cm、(158)は一辺1.5cmの角がやや丸くなった立方体の土製品である。サイコロの目は表現されていないが、(157)には墨痕がわずかに残っており、墨で書かれていた可能性も残る。平安時代末期の土師器皿を大量に含んでいる遺物包含層から出土している。11世紀後半頃のものとみてよからう。

サイコロには、土・木・骨・角・牙で作られたものがあるが、正倉院に伝世している聖武天皇ご遺愛品の中にも象牙製の骰子がある。⁽¹⁾その他、出土品では広島県の草戸千軒町遺跡で鎌倉時代の骨製のもの、⁽²⁾鎌倉市の藏屋敷遺跡や千葉地遺跡でも鎌倉時代の骨製のものが出土している。土製のもので、平安時代末期のものには、大分県宇佐市⁽³⁾の宇佐弥勒寺旧境内出土の例がある。もし、今回の出土品がサイコロであれば、今回の中地が11世紀後半にはかなり私的な空間であったと想定する事も可能であろう。

ミニチュア

土師器三足鍋(159)、土師器壺(160)、滑石製石鍋(169)のミニチュアがある。滑石製石鍋のミニチュアの類例は大宰府の觀世音寺出土品がある。⁽⁴⁾

土　　錘

牛葉東区画北辺中央にあたる第108次調査の際に方格地割の中心部の調査としては異例といえる131点が出土している。西側の第103次調査では出土せず、東側の第114次調査では3点で、同じ区画内でも特異な出土のしかたである。形態・法量上のバリエーションもあり、変型工字形土錘(161・162)と管状土錘がある。前者は第51次調査で有溝土錘が報告されているが斎宮跡では類例の少ない資料である。県下においても鳥羽市贊遺跡、志摩町阿津里貝塚など伊勢湾口部での出土例はあるが、平野部での出

- 土例はない。管状土錘も、やや中膨らみで細身のもの、その両端が強く絞られるもの、算盤玉状に中程で膨らむもの、大型で全体が均等な太さのものなどがある。
- 陶枕 (163・164)は、第10次調査の遺物包含層から出土しているもので、綠釉単彩の小片で陶枕の一部と考えられる。いずれも胎土は白く緻密であり、濃緑色の釉が片面にかけられている。北宋のものと考えられ、10世紀後半のものと思われる。
- 円面硯 (165～167)があるが、牛葉東区画では脚の一部などの細片が多い傾向にある。
- 石製品 (168)は滑石製石鍋を転用した温石である。温石の出土例は少ないが、玉城町岩出遺跡群の他、芸濃町下川遺跡⁽⁷⁾で滑石製石鍋を転用した温石が出土している。
- 鉄製品 鉄製雁股鎌(170)は、斎宮での弓矢具としては第86次調査の奈良時代後期の土坑から出土した鉄鎌に続く2例目である。近隣の良好な出土資料としては平安京法住殿跡の12世紀中葉～13世紀初頭の武家層の土壤墓例⁽⁸⁾があるが、これと比較しても保存処理後に判明した全長は14.4cmで大型の部類に入るものとみられる。中茎は、長く股部は大きく広がる特徴もある。鳴鏑の装着痕跡は明確ではない。
- 金銅製品 銅製鉈尾(171)は、明確な金属製の帶飾具としては斎宮跡では初出である。3箇所の鉈留部があり、外面中央に葉脈状に突帯を付け、外縁は花弁状につくる。
- (172)の金銅製品は、2枚が重なっているようである。文様は花弁が描かれているようで、魚々子地に毛彫で花弁を表現している。何かは限定できないが調度類の飾りの一部ではなかろうか。11世紀後半頃のものである。(173)の金銅製金具も調度品の一部と考えられるが、厨子や衣架などが想定されるが確定できない。
- ヘラ描き土器 土師器杯A(174)の底部外面には、細いヘラで「申可」あるいは「甲可」と二文字刻書されている。後者の場合、平城京第123～26次調査SD5870から出土した木簡に「伊勢國安濃郡長屋郷甲可石前調銭壹貫」とあり人名の可能性もある。ただ、この木簡には神龜四(727)年十月の墨書きがあり、土器の年代とは60年～100年前後の隔たりがあり、直接、関連するものではなかろう。
- 人面墨書き土器 (175～177)は、土師器の小皿底部外面に人の顔を描いた土器である。(175)は額に一文字が引かれ、女性を表現したものであろうか。表現方法が類似するものには大阪府門真市普賢寺遺跡出土資料がある。これらはこの区画の東端の南北溝SD578から出土しており、11世紀後半の資料である。この溝に含まれる遺物は11世紀前半から12世紀前半までの幅をもち、特に溝がほぼ埋没した上面のくぼみに一括して土師器を廃棄した土器だまりが数カ所みられ、大量の遺物が出土している。
- 鳥描き土器 (178)は内面に鳥の絵を描いた土師器小皿で、鎌倉時代のSK7670から出土している。
- かな墨書き (179～189)の墨書き土器は、平安時代末期から鎌倉時代にかけての土師器杯・小皿の外面あるいは内外面にひらがなを習書したものが大半である。そのほとんどは判読できず、筆ならしか習書と思われる。当時、ひらがなは女文字であったため、女官が書いたものであろう。女性の顔を描いた土器とともに牛葉東区画における女官の存在を示す資料である。

(註)

- (1)『東大寺獻物帳』『寧樂遺文』中巻
- (2)福島政文「第Ⅳ章遺物 5骨角製品」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ 北部地域南半部の調査』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994
- (3)『蔵屋敷遺跡』鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会 1984
- (4)『千葉地遺跡』千葉地遺跡発掘調査団 1982
- (5)『弥勒寺』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1989
- (6)森田勉「滑石製品器一特に石鍋を中心としてー」『佛教藝術』148号 每日新聞社 1983
- (7)伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告一度会都玉城町岩出所在、チカノ辻・角垣内・蚊山地区的調査ー』三重県埋蔵文化財センター 1996
- (8)この出土例は伊藤裕偉氏にご教示いただき、三重県埋蔵文化財センターにて実現させていただいた。
- (9)寺島孝一・片岡肇他『法住殿跡』財團法人古代學協會 1984
- (10)『門真市史』第1巻 門真市 1988

第三節 鍛冶山区画

1 鍛冶山地区の遺構

鍛冶山西区画の沿革 今回報告する内院地区のうち鍛冶山西区画は、最大で東西7列、南北4列まで確認している奈良時代後期から平安時代前半まで展開した方格地割の中で、東から3列目、北から3列目に位置する区画である。

斎宮跡の方格地割は、他の区画が少なくとも東西方向において、区画道路内側の溝芯々間で約29.6mを一尺とすると400尺(約120m)を基準としているのに対し、本区画のみ440尺(約130m)の幅を持っているとともに、その北辺道路から区画の南北センター ラインに沿って幅約10mの南北区画間道路が西加座北・南の2区画を貫通している事が知られており、昭和56年度の第44次調査で方格地割の区画道路やその内側を囲繞する掘立柱塀の一部が確認された頃から、この地区的傑出性が指摘されてきた。

鍛冶山西区画では平成に入ってから重点的に計画調査を実施しており、平成12年度末の段階で区画の北半分にあたる近鉄山田線以北分の面積の約35%の調査が終了しており方格地割全体の中でも調査率の著しく高い地区となっている。掘立柱塀による内外二重の構造や大型掘立柱建物の計画的配置、大規模な土器廃棄が行われた数多くの土坑などが見つかっており、平安時代斎宮の内院地区として搖るぎない優越性を保っている。しかしながら近鉄線以南の地区については史跡現状変更にともなう狭小な調査が大半で、依然詳細な実態解明に至っていない地区も多々残している。特に区画の南辺については確定できてはおらず、区画全体の規模・構造については制約されたデータに揺らざるを得ない部分もある。

本節では、鍛冶山西区画で検出した方格地割成立期から衰退期までの遺構について、時代及び遺構の種別について記述する。



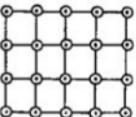
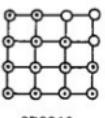
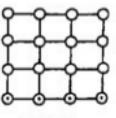
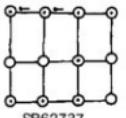
第11図 錬治山西区画調査位置図

(1) 斎宮跡第I期第1段階～第2段階 (I-1～3期)

- 古代伊勢官道 SD2404** 奈良時代以前に遡る可能性のある古道がE15°Sの方向に第88次・98次調査で南北両側溝が確認されている。北側側溝は、第88次調査ではSD2404、第98次調査ではSD6801と呼称されている。SD2404は幅0.9～1.3m、遺構面からの平均深さが0.2m、SD6801も幅0.7～0.9m、深さは0.1～0.3mで一定ではなく、溝の断面は浅い「U」字形で、溝の底部標高は第98次調査区の西端で約9.2m、第88次調査区の東端では約8.8mだが、第98次調査区の東端付近では約9.3mの部分もあり、逆にやや深く掘り下げられたところも見られる。
- SD6252・6802** 南側側溝は第88次調査でSD6252が、第98次調査でSD6802が検出されている。SD6252は幅0.7～0.9mで、深さは0.1m程度しかなく痕跡的に確認されたのみで、両端が調査区内で途絶している。SD6802は、第98次調査区内で連続して検出されているが、調査区西半では断面形状は深い逆台形で、幅0.7～0.9m、深さ0.35～0.45mだが、調査区東半で、幅約0.7～1.0m、深さ0.1～0.25mと浅くなる。
- SF6800** 上記の南北側溝で区画された道路部分は第98次調査ではSF6800と呼称されている。道路幅は、南北両側溝の芯々間で約8.8～9.0mで、平城宮・京の造営尺である一大尺=35.5mをあてるとおよそ25大尺となる。道路上には後代の遺構が重複しており、整地層なども認められなかったため、上面は削平を受けている可能性はある。両側溝の埋土はややシルト質を含む黒褐色土で遺物は出土していない。第88次調査区で南側溝SD6252が奈良時代中期とされる土坑SK6223・6224より古く、道路の存続期もこの前後までと推察される。
- 鍛冶山中区画の総柱建物** 鍛冶山中区画内には後述する大型掘立柱塀SA2800に先行あるいはほぼ併行する総柱構造の掘立柱建物群がある。鍛冶山西区画の成立に遡る時期のものだが、後代、本区画の成立にも大きく関連する事も予想されるため、概述する。

		造構の種別														
		S B			S A		S E		S K		S D		S F		S S	
第I期	3段階	2780	2810	6237	6238				6210	6211	6212	6213	2404	6801	6800	
									6512	6216	6217	6218	6552	6802		
									6220	6221	6222	6223	2787			
									6224	6225	6226	6227				
									6228	6229						
	4段階	8050	7385	7375	7165	1411	6760	7920	7392	7393	7394	7395	7152	7153		6805
		7175	7180	7185	6840	6770	2813		7397	7386	2575	7386	7161	7162		7403
		6841	6842	7155	7160	2800	7150		7413	7414	7415	7416	7163	7164		7404
		7950	7941	6740	8050	2705	8080		7417	7418	7419	6756	6775	6776		
	1段階	2790				7199			6763				6777			
		8060	8061	7382	7918	2675	6780	8085	7391	7179	6807	6808	6810	6804		
		7919	7947	7948	8091	6790	7400		6809	6757	6759	6762	8077			
第II期	2段階	2680	2685	7190	8062	7400			1414	1416	2709	1415		6785		
		7384	7380	7370	1400				1418	1419	1420	2707				
		7390	6726	6725	6736				2706	2708	1425	1422				
		6735	7915	7916	7917				1424	1423	7378	7379				
		7908	7939	7940	7915				7383	7433	7401	7420				
									7424	7413	7414	7415				
									7416	7417	7418	7419				
									6744	6753	6758	6761				
									6764	6765	6767	6783				
	3段階	7191	2650	2659	7412	7170	7171		6784	6793	6754					
		7411	7410	2700	7405	7172	7482		6792	8081	8084	8087				
第III期	4段階	6728	7372	7374	6729				1412	2683	2684	2686	2682	1429		
		6732	6733	6734	6737				2687	7426	7427	7428	7387	7481		
		6738	6739						1459	8055	8072	6751	8053	8054		
									6754	6814	1413	2650	8063	8064		
	1段階	1431							2688	2685	2701	2702	1459	1460		

第3表 錫冶山西区画時期別分類表

SB2780	第46次・88次調査区にある4間×4間の総柱建物である。柱間は東西1.8m、南北2.1m等間で、柱掘形は一辺約1.2m、柱痕跡は直径約0.4mと比較的大型である。棟方向はN5°Wである。一部の柱穴は後述するSA2800bより古いことが確認されており、柱穴出土遺物からも少なくともI-3期まで遡る建物である。		SB2780
SB2810・6237 ・6238	SB2810は第46次調査、SB6237・6238は第88次調査で確認された3間×3間の総柱建物である。柱間はSB2810で東西1.7m、南北1.6m、同様にSB6237はそれぞれ2.0m、2.45m、SB6238で1.9m、1.7mとばらつきがある。棟方向についてもそれぞれE2°N、E3°N、E3°Nと一定はしないものの、方格地割の造営方位に近似したものとなっている。時期的にはSB2810がI-3期の遺物を含むSK2812より古く、柱掘形の規模も似ている事からSB2780に近い時期が想定され、SB6237・6238は重複関係ではSB6238が古く、これがII-1期と想定されているSB6241よりも古く、SB6237はI-3期のSK2798よりも新しい事からこの2棟についてはI-4期頃のものと推定した。		SB2810
	これらの総柱建物はいずれも柱掘形の規模が比較的大型で、柱間もいずれか一辺が2m以下になる事、特にSB6238には布堀り工法が取られている事、後述する周辺のI-3期を中心とする土坑群からは後代では少ない貯蔵形態の大型須恵器が多数出土している事などから、倉庫として機能していたものと見られる。なお、SB6237には東～東南方向への柱の抜取り痕が認められる。		SB6238
SD2787	第46次調査で確認された溝で、幅約0.4mの断面が浅いU字状から箱堀状に段差を持って深くなる。深さは南端で約0.1m、最も深い部分で0.4mである。第88次調査区に入るところで途切れたり、北に向かって延び、方格地割の区画道路南側溝SD2400の手前約2.6mのところで東に直角に曲がる。南北長17.5m以上、東西長7.2mになる。		SD2787
I-3期の 土坑群	この溝には同時期の建物・土坑等は重複しておらず、また倉庫と見られる建物群を囲むような形状である事から、この一画の区画溝的な性格をもつものと考えられる。出土遺物は整理箱で1箱分の土師器杯・皿・高杯・甕・須恵器杯・杯蓋・甕・長頭壺などがある。SA2800a、SB2790はこの溝の埋土より新しい。		
	なお、約35m東に延長した位置にやや形状は異なるものの、東西溝SD2387があり、かつては連続していた可能性がある。		
	第88次調査区の南西部には当該期の土坑が多数見つかっており、詳細については一部第四章において触れるが、SK6210～6213・6215～6218・6220～6229がそれに該当する。これらは後代の掘立柱構SA2813の内側あるいは周辺で、倉庫群には接していない。		

ない。また、第46次調査区内にはほとんど無く、一部分に集中した様相が窺われる。

(2)斎宮跡第I期第4段階 (I-4期)

囲郭構造の成立 鍛治山西区画では第44次調査を皮切りに掘立柱塀が、区画内を囲繞する事が判明しているが、第44次調査で掘立柱による外郭掘立柱塀の存在が、第105次調査で同じく内郭掘立柱塀の存在が明確となり、当該期において他の区画には類を見ない二重構造を持つ段階が想定されるようになった。

外郭柵列 外郭掘立柱塀はこの時期に成立し、造替を経て平安時代前半期まで存続すると見られている。その変遷は前後2時期の段階が認められるが、I-4期はほぼその第1期に相当すると見られ、西辺・北辺・東辺の掘立柱塀が検出されている。

SA1411 当該期の掘立柱塀は、西辺がSA1411である。第44次調査で13個の柱穴が、第105次調査で11個の柱穴が検出されており、北西隅の柱穴は確認されていないものの、北辺掘立柱塀SA6960から復元して総延長で28分間が検出されている。区画西辺道路の東側側溝との間隔は約7mである。柱掘形の規模は後代のSA2675の柱穴が重複するため全形を窺えるものはないが、掘形が一辺約0.8~1.0mの方形で、やや南北方向に長い長方形になるものもある。検出された柱痕跡は直径約0.3mで、柱間は約3mである。掘形埋土は黒褐色で、出土遺物はない。

なお、SA1411は第105次調査区の南西隅でII-1期の遺物が出土したSK7179より古く、この掘立柱塀の存続期間を示すものと考えられる。

SA6760 外郭の北辺掘立柱塀である。西から第106~3次で10個、第98次調査で15個の柱穴が検出されている。西端・東端いずれの柱穴も確認されていないが、西辺掘立柱塀SA1411及び東辺掘立柱塀SA6770から東西40間となる事が判明している。区画北辺道路の南側側溝との間隔は約7mである。柱掘形の規模は一辺約0.8~1.0mの方形で、柱痕跡は約0.3mである。柱間は約3m(10尺)で、掘形埋土は黒褐色土で、出土遺物はない。

SA6770 従来東西40間の外郭施設の東辺となると見られていた掘立柱塀である。北から第98次で6個、第124次調査では明確ではなく、第119次調査では1個の柱穴が確認されている。柱列に沿って近世のSD6803が重複しているため、柱掘形の全容は不明である。第124次調査以南で柱穴の存在が不明瞭になるとともに、近鉄線以南の第128~1次調査で後出するSA6790が検出されているにも関わらず、SA6970が検出できなかった事から、区画南端まで延びない間仕切り的な性格のものだった可能性も高くなっている。しかし、その南端が第124次調査区内までで止まるのか、第119次調査区内までかは前述のSD6803のため判然としない。第98次調査では柱間約3m(10尺)と復元している。出土遺物はない。

SA2800・2813 SA6960からさらに東へ延びる掘立柱塀で、方格地割の区画で「鍛治山中区画」まで延びている。西から第92次調査で5個、第46次調査で8個、第88次調査で9個の柱穴が確認されている。これまで遺構番号が分離されてこなかったため、この東西方向のものをSA2800、南北方向のものをSA2813とする。SA2800は東西でSA6960をそ

のまま東へ延長した方向で見つかっており、16間分検出されている。柱掘形は一辺約1.0mの方形で、直径約0.3～0.4mの柱痕跡が残る。柱間は約3mで、一部の柱穴には抜取り痕が認められる。黒褐色の埋土で、出土遺物はない。

SA2813は11間分検出されている。近鉄線以南については調査データが無く、現在のところ延長の有無は不明である。一辺約1.0～1.4mとやや大型で、柱間は約3mである。なお、SA2800bには東方向への柱抜取り痕が残るものもある。

SS6805 SA6760とSA6780のほぼ中間にある柱列で、第98次調査でのみ確認でき、第106～3次調査区内では確認できなかった。柱間は約3m等間で、柱穴はSA6760やSA6780の柱間に配置されるようにずれており、柱掘形も直径約0.3mの円形と規模が著しく小さい。第98次調査区内で14個の柱穴を確認し、検出総延長は41.2mである。

他の遺構との重複関係や、また、出土遺物の上からもb手法で調整された土師器杯Aの破片が出土しており、大幅に時期を下らせる事は現時点では考えにくいが、I-4期～II-1期の中に収まると考えられる。

また、これに接するように黒色から黒褐色の埋土で、幅約0.4m、深さ約0.2mの小規模な溝SD6775～6777が断続的に延び、この埋土の上からSS6805は設置されており、相互に関連する可能性がある。SS6805は概報段階では柵列としていたが、他の掘立柱塀との相違点が多い事から、区画施設ではなく、区画外郭掘立柱塀の造営にともなう足場等の遺構であると想定される。

**外郭掘立柱塀の
造営方位** 以上のように外郭掘立柱塀については、北辺・西辺・東辺及び北辺から派生する間仕切り的な南北掘立柱塀があるが、これらの造営方位はそれぞれにE4°NないしN4°Wであり、方格地割に基本的に沿うものである。

**外郭柵列の先行
造構** なお、SA2813は第88次調査区で土坑SK6225より新しく、この段階以降のものである事が分かる。SK6225は多量の土器が出土しており、土器編年の再検討によってI-3期の後半に位置づけられている。また、この鍛冶山中区画の中ではこうしたI-3期の土坑群とともに、先述のI-3～4期頃の倉庫群と考えられる総柱建物が数棟確認されている。SB2780のように掘立柱塀と柱穴をほぼ接するものもあり、SA2813成立直前までのものと考えられる。こうした倉庫群や遺物の存在は、囲郭施設成立直前の当地区の様相が掘立柱塀成立後で変化している事を示している。

内郭掘立柱塀 内郭掘立柱塀は西辺・北辺・東辺が検出されている。外郭掘立柱塀とは異なり建て替えられた痕跡は無く、後代の建物配置等から考えてII-1期には完全に廃絶しているものと見られる。

SA7150 内郭の西辺掘立柱塀で、第44次調査で4個、第105次調査で7個の柱穴を確認している。この2調査区間は近鉄山田線に分断されているが、連続するものと考えられ、また、残存状況は良くないものの、第122次調査でもその延長にあたると見られる略方形の柱穴を確認しており、検出総長は約51m(17間)以上になって、さらに南へ直進するものと見られる。柱間は約3m、柱掘形は一辺約1.0～1.2mの方形で、柱痕跡は直径0.3mである。

SA2705 内郭の北辺柵列で、第109次調査(第44次調査を含む)で10個、第124次調査(第29次

調査を含む)で8個の柱穴が確認されている。柱掘形は一辺約1.0~1.2mの方形で、柱痕跡は直徑約0.3mである。

西端が第44次調査で、第124次調査で東端が確認され、総延長は約60mで、内郭の東西は20間である事が判明した。これは外郭北辺SA6760の半分の長さであるが、この二つの掘立柱塀の東西中心軸は一致せず、SA2705が2間分西にずれた形になっている。また、外郭の北辺SA6760からは約33m(11間分)間隔を設ける。

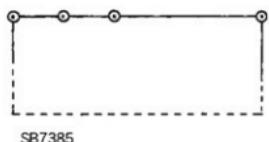
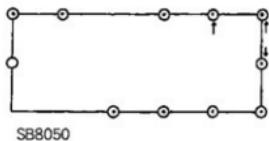
SS7403・7404 第109次調査でSA2705の北と南を挟むようにして柱穴が3個ずつ対応して並んでいる。柱穴は直徑約0.3~0.5mで、柱間約3.0mである。小規模ながら、SA2705にともなう足場遺構の可能性が推定される。

SA8080 内郭の東辺掘立柱塀で、第29次調査で部分的には検出していたものを第124次調査で確定したものである。近世遺構が重複しているため、かなりの破壊を受けているが、北東隅から4個の柱穴を確認している。現状では近鉄線以南まで遺構が連続しているかどうかは不明である。柱掘形の規模は残存部から推定して一辺約0.7mの方形、柱痕跡は約0.4mで、柱間も約3mである。

これまでの調査では外郭・内郭いずれについても南辺を確認しておらず、明確な遺構も確認されていない。また、柱抜取りの痕跡は一切見られない。

内郭内の建物

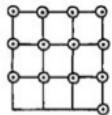
SB8050 第124次調査で検出した5間×2間の建物で、柱掘形の規模は一辺1.0~1.2mの方形で、埋土は黒色土である。柱間は約3mで、柱穴の掘形は、遺構確認面から約0.4mである。柱抜取り痕のある柱穴を持つが、建て替えを行った形跡はない。



SB7385 第109次調査と第124次調査で検出した5×2間と考えられる東西棟建物である。柱掘形の規模は一辺1.0~1.2mの方形で、柱痕跡は直徑約0.5mで掘形埋土は黒褐色土である。柱間は約3mで、南桁行柱筋は検出されていないもののSB8050の西に並立していることから規模を推定した。建て替えられた痕跡は無い。

この2棟の建物は、いずれも内郭掘立柱塀と柱筋を合わせており、SB7385はSA7150から7間(70尺)とSA2705からは4間(40尺)、SB8050はSB7385から2間(20尺)東に位置する。SB8050の東梁行は、SA8080と1間分しか間隔を持たない。

SB7375 SB7385の西に位置する第109次調査で確認した3間×3間の総柱建物である。柱掘形は一辺1.0~1.2mの方形で、柱痕跡は直徑約0.5mと大きく、柱間は東西で1.8m、南北で2.0mである。内郭掘立柱塀とは東側柱筋がSA2705と、北側柱筋がSA7150と柱筋を揃える。倉庫としての機能が想定される建物である。建て替えられた痕跡



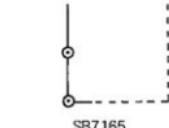
SB7375

は無い。

第105次調査区 第105次調査では、SA7150の内側に位置する当該期の建物の建物群 部分的に4棟確認している。これらは調査時の重複関係から時期的に2つのグループに分けられる。

SB7165・7175 時期的に先行するグループである。SB7165は柱穴2個のみで不確定要素も大きいが、黒褐色の埋土で、柱掘形も一辺約1.1mで、柱間も約3mと推定されている。

SB7165の南柱筋から約7.8m隔ててSB7175がある。北側柱筋をSA7150と揃えている。南北梁行は2間で、東西桁行は3間以上であり、柱間は桁行・梁行ともに2.1m等間である。柱掘形は一辺約1.2mで、柱痕跡は直径約0.35mである。



SB7180・7185 後出するグループで、SB7165を建て替えてSB7180に、SB7175がSB7185に変わる。SB7180は南北桁行で3間以上、東西梁行で2間以上である。柱掘形は一辺約1.0~1.2mで、柱痕跡は直径約0.35m、柱間は約2.4mである。

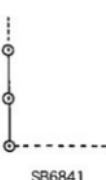
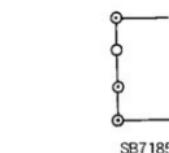
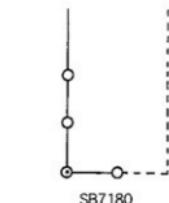
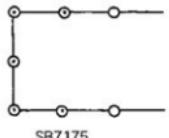
SB7185は南北3間、東西1間以上である。柱間約2.1mで、柱掘形の規模は一辺約1.1m、柱痕跡は直径約0.3mである。なお、SB7185は総柱建物である可能性も考えられよう。

この4棟はいずれも部分的な確認であるが、外郭・内郭掘立柱堀と棟方向を揃えている。また、後出のグループは位置関係からII-2期頃に成立するSA7400とは共存できないため、SB7165・7175が概ねI-4期に、SB7180・7185がI-4期～II-1期にかけてのものと考えられる。

内郭の間仕切り 第105次調査時には報告されていないが、内郭西辺掘立柱堀 SA7199 SA7150の北から12間目と想定される柱穴から東に向かって一辺1.0~1.2m、柱痕跡が直径約0.3m、埋土は黒色土の柱穴を2個確認している。柱間は約3mを測る事ができ、あるいは内郭掘立柱堀内の間仕切り的な施設の一部と考えられ、新たにSA7199とした。これは後述するSA7150の西側にSB7155とSB7160の中軸線の延長上に位置する。ただしこれを掘立柱堀と見ると、I-4期の内郭存続期に位置づけられよう。

SB6840～6842 第105次調査区の南東、第96-4次調査で確認されている。削平が著しかったが、掘立柱柱穴の底部付近が明瞭に残存していた。

SB6840は、東西梁行2間、南北桁行5間以上を、SB6841は南北2間以上、東西1間以上を、SB6842は柱穴1個のみを確認した。柱掘形は一辺約1.0m、柱痕跡は直径0.3~0.4mで、柱掘形埋土は黒色土で共通する。これらは内郭掘立柱堀と、あ



るいは建物相互に柱筋を合わせており、SB6840とSB6841・6842とは2間分(約6.0m)、SB6841とSB6842も2間分の間隔を置いて並立している事から、いずれも柱間10尺のものと見られる。また、建て替えの痕跡も認められない。

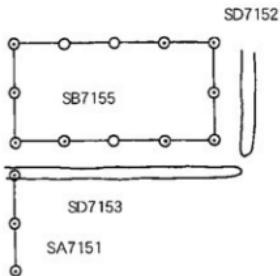
内郭外の建物 内郭外の掘立柱建物は7棟ある。区画内での位置から①内郭西側のグループ、②内郭北東～東のグループ、③外郭の張出部、SA2800内のものに分ける事ができる。

①内郭西側の建物

第105次調査のSB7155・7160がある。いずれも柱間は約3mである。

SB7155 4間×2間の東西棟で、柱掘形は一辺約1.2m、黒褐色の埋土で、柱痕跡は約0.35mである。後代2回建て替えられた痕跡がある。外郭・内郭掘立柱塀とは、いずれも20尺の間隔を開ける。

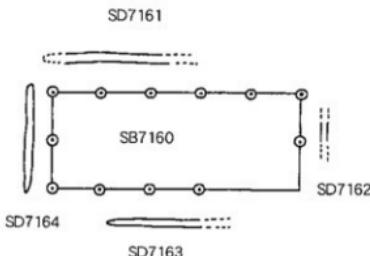
西側梁行の柱筋の延長に、間隔の一定しない3個の柱穴が並び、概報段階でSB7155に取りつく板塀と見てSA7151とした。柱掘形はいずれも黒褐色の埋土で、SB7155とも類似する。柱間は北から順に2.1m、2.7m、3.0mで、柱掘形は北の2個が一辺約1.0m、南端のもののみが約0.8mで、前者より0.3mほど柱穴の底が深い。



また、SB7155の東と南に平行して掘られ、建物と併存していたと考えられる溝のうち、SD7153より古いという関係からも、単純に柵列や板塀と断定できない。何らかの区画・間仕切りに関わる施設とは想定されるが、斎宮跡でも類例が無く、今後の調査例の蓄積に期待したい。

SD7152・7153 SB7155の東側と南側にある雨落ち溝状の溝である。東側がSD7152、南側がSD7153で、幅0.6～0.7m、深さ0.35～0.5mで断面は逆台形である。北側は調査区外にあたり、西側は後代の溝SD7181や土坑SK7183があるため、存在していた可能性を指摘しうるにとどまる。黒褐色埋土からは遺物は出土しなかった。また、SB7155との距離は、柱筋からそれぞれ約2.1mあり、またSD7152とSD7153の間がつながっていない事からも一般の雨落ち溝とは異なるものと見られる。

SB7160 SB7155と約12m(40尺)の間隔を開けて平行に建てられた5間×2間の東西棟である。SB7155とは東梁行柱筋を揃える。柱掘形は一辺約1.2m、柱痕跡は直径約0.35mで、黒褐色の埋土である。掘立柱塀との関係は、外郭とは約3m(10尺)、内郭で約6m(20尺)の間隔を開ける。なお、建て替えの痕跡は認められない。



SB7161・7162 SB7160にも周囲に雨落ち状の溝があるが、SB7155のそれに比して小規模で、残存
・7163・7164 状況も良くない。SB7160の柱筋とは約1.5mの間隔を開け、幅約0.4m、深さは0.3～
0.4mの断面が逆台形状のものである。黒褐色の埋土から遺物は出土しなかった。

こうした雨落ち状の溝を周囲に持つ建物は、鍛冶山西区画では他には無く、雨落ち溝以外の可能性として、建物周囲を覆う柴垣や竹垣等の跡とも考えられ、当区画内において特異な性格の建物であったとも考えられる。

SB7155・7160 この2棟は、いずれも柱間が後代見られなくなる10尺の建物であり、外郭・内郭掘の存続時期 立柱塀と柱筋を揃える点からI-4期の中で成立したと見られるが、これらを建て替え、あるいはその機能を踏襲すると見られるSB2680・2685・7190が、後述するよう区画内を細分するII-1～2期のSA7400の成立と関連づけられるため、その存続期間はI-4期からII-1期の幅の中で考えられよう。

②内郭東側の建物

当該箇所ではこれまでに4棟の建物が確認されている。

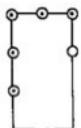
SB7950 第119次調査で確認された桁行6間×
梁行4間の南北2面に庇を持つ大型建物
である。身舎部分の柱間はいずれも約3
m(10尺)で、外郭・内郭掘立柱塀と柱
筋を揃えるが、梁行で3.0m等間、桁行
で2.95m等間と僅かに異なる。また庇出
も北側で約2.1m、南側で約2.7mである。
この身舎部分の柱掘形は大きく、一辺
1.3～1.5m、残存する柱痕跡で直径約0.
45mで、検出面からの深さが0.9～1.1mと、いずれの規模を見ても斎宮跡のこれまで
の発掘調査で最大の建物である。柱掘形の埋土は地山土と黒色土の互層で、埋土内に
径約0.1mほどの礫が多量に含まれている。また、身舎SB7950の桁行の方向に沿った
柱抜取り痕も数個の柱穴で認められた。



SB7950

庇の柱穴は、身舎に比較して小規模で、北側の庇で長辺約1.5～1.0m、短辺約1.0
mの長椭円形で、南庇の柱穴は後代の溝に大きく削られているものの、ほぼ同規模の
ものになると推定される。庇の柱掘形埋土は身舎とは異なり黒褐色土で、柱痕跡は確
認できなかった。また、同位置では同様の建物は建て替えられていない。なお、
SB7950の身舎は、内郭掘立柱塀内のSB7385・8050と柱筋を揃えている。それぞれの
間隔は、SB7385とSB8050が10尺等間で2間分、SB8050とSB7950がSA8080を挟んで
3間分である。この3棟はSA8080の内外ながら相互に関連性
の強いものと見られる。

SB7941 SB7950の東約3.7mに位置する3間×2間の南北棟で、北側
妻柱筋をSB7950の身舎北側柱筋と概ね揃えている。柱間は桁
行2.4m等間、梁行1.8m等間である。柱掘形は一辺約0.6mの
ややいびつな方形で、柱痕跡は直径約0.25mである。棟方向は



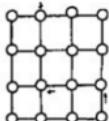
SB7941

外郭・内郭掘立柱塙と揃いN4°Wとなり、II-1期と想定しているSB7947より古いことから、I-4期以前に遡る可能性はあるが、SB7950と併存するものかどうかは現状では判断できない。

なお、同位置にはII-1期以降、南北棟の建て替えが数次にわたり認められる。

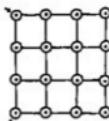
SB6740・8090 SA6770に接して建てられた3間×3間の総柱建物である。

SB6740は、第98次・124次調査で確認した。柱掘形は一辺約0.9mで、柱痕跡は直径約0.4mである。柱間は東西1.8m等間、南北2.1m等間で、柱穴は深く、遺構検出面から約0.8m～0.9mになる。柱穴のいくつかに柱抜取り痕があるが、抜取り方向に規則性は認められない。建物の西側柱穴をII-1期のSE8085に壊されており、I-4期頃のものと推定される。外郭掘立柱塙SA6760と北側柱列との距離は約60尺(17.8m)である。



SB6740

SB8090は、SB6740から南に8.8m(約3間)間隔を開けて建てられた同規模の建物で、南側柱を除いて柱穴の大半をII-3期のSK8093などに破壊され、柱穴底部が僅かに残るだけである。北側柱列を概ね内郭掘立柱塙北辺SA2705に揃えている。



SB8090

このSB6740・8090は、建物規模や相互の位置関係が計画的なものであると窺われる事から、共時性の高いものと考えられ、柱穴の規模などから倉庫建物である可能性が高いと見られ、内郭掘立柱塙内のSB7375ともほぼ同一の規模である事も注目される。しかし、東接する鍛冶山中区画のI-3～4期の倉庫群のように周囲に同時期の遺物を廃棄した土坑は無く、周辺からも貯蔵形態を中心とする大型須恵器などの遺物も出土しない事から、これらとは構造的に類似しても、倉庫としての機能は異なったものであった可能性を考えなければならない。なお、いずれも建て替えの痕跡が無い。

③外郭張出し部内の建物

SB2790

これまでの調査では、第46・88次調査で確認されたSB2790の1棟のみである。

SB2790は、4間×2間の南北棟で、柱間は2.2m等間である。柱掘形は一辺約0.6mの略方形で、柱痕跡は明らかではない。この建物の時期については、第88次調査概報段階では平安時代初期(II-1期相当)としていたが、後述するところより、この段階にはSA2800・2813が外郭掘立柱塙の西への移設にともない廃絶していると見られる事、建物の棟方向はN4°Wで、SA2800・2813の北東隅に配置されたような位置にある事、また、I-3期の溝SD2797の埋土に重複して柱穴が設けられており、SA2813がやはりI-3期のSK6225やSB2780に重複している事と共通する状況から、この外郭掘立柱塙との関連性の上で捉えるべき建物であると考えられ、I-4期からII-1期の中で存続を捉えたい。

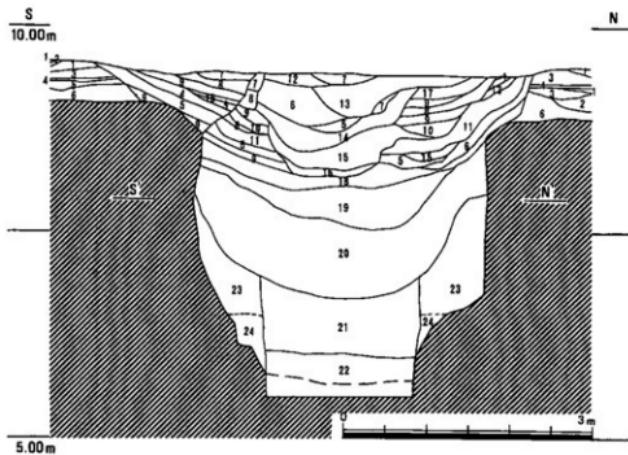


SB2790

第119次調査のこの区画で見つかっている当該期の唯一の井戸である。一辺約5.2mの方形で、遺構検出面から0.8m下で一辺約3.6mの規模になり、以下底部まではほぼ垂直に下がる。底部までは埋土の東半分を掘り下げ確認した。

検出面から約2.8m下のところで井戸枠の痕跡と見られる一辺約2.0mの正方形に暗褐色粘土層が検出され、深さ約3.5mのところでさらにその中で一辺約1.8mの暗緑灰色粘土層を検出して、その南辺付近から井戸枠材と考えられる長さ約1.2mの木製部材が出土した。部材の残存状況は悪く、加工痕などは判別できない。井戸底部は現在でも湧水が著しく、洪積層と見られる砂礫層に達したため、遺構検出面から約3.6m、標高にして約5.7mの地点で井戸底部と判断している。底部付近からは、桃核や用途不明の小木片が多数出土しており一部意味不明の墨痕の見られるものや、布片もある。土器類の出土は少ない。

また、SE7920の周囲では、斎宮跡の発掘調査で初めて掘り込み地業の跡が発見された。東西約12m、南北約13mの略方形の範囲を深さ0.5~0.6mまで平らに掘り下げて黒色土、黄褐色粘土、明赤褐色粘質土や拳大の円礫を互層にして突き固めている。



- ①暗黄褐色粘質土 10YR3/6
- ②暗黄褐色粘質土 10YR5/6に灰褐色土 7.5YR4/2混入
- ③明赤褐色粘質土 5YR5/6
- ④明赤褐色砂質粘質土 5YR5/6
- ⑤黒褐色土 10YR3/1
- ⑥黒褐色土 10YR3/2
- ⑦黒褐色土 10YR3/2C 明赤褐色粘質土と5YR5/6混入
- ⑧黒褐色土 10YR3/2C 明赤褐色粘質土5YR5/6わずかに混入
- ⑨黒褐色土 10YR3/2と明赤褐色粘質土5YR5/6の互層
- ⑩黒褐色土 10YR3/2C 明赤褐色粘質土5YR5/6混入（鉄物化物含む）
- ⑪黒褐色土 10YR3/3@より細かい明赤褐色粘質土5YR5/6混入
- ⑫黒褐色土 10YR3/2@より細かい明赤褐色粘質土5YR5/6混入
- ⑬黒褐色土 7.5YR3/2C 明赤褐色粘質土5YR5/6混入（炭化物、3cm~10cm大礫含む）
- ⑭黒褐色土 10YR3/2に赤褐色粘質土ブロック混入
- ⑮明赤褐色砂質土 5YR5/6に黒褐色土10YR3/2混入
- ⑯黒褐色土 2.5YR3/2
- ⑰黒褐色やや砂質土 2.5YR3/1
- ⑱黒褐色やや砂質土 10YR3/2
- ⑲黒褐色土 10YR3/2（炭化物含む）
- ⑳暗褐色土 10YR3/3@より大きい明赤褐色粘質土粒 5YR5/6混入
- ㉑暗褐色砂質土 10YR3/4 (1cm~3cm大礫多く含む)
- ㉒暗褐色土 7.5YR3/4
- ㉓暗褐色粘質土 7.5YR5/3 (粘質かなり強い)
- ㉔にぶい黃色砂質土 2.5YR6/3 (2cm~10cm大礫を多く含む、地山層)
- ㉕黒褐色土 10YR3/2 (3cm~5cm大礫含む)

第12図 SE7920断面図 (1 : 60)

整地層内からの遺物は無いが、これに先行する柱穴を埋土の断面観察から確認する事ができる。この整地層の上からSE7920は掘られ、またII-1期以降の建物が重複している事からI-4期には鑿井され、II-1期までには埋没した事が窺われる。

周辺の地形は強固な洪積世台地を基盤としており、構造的に土壤改良を要する事はないため、この地業はこの井戸を造営する上での特殊な目的が想定される。部分的ではあるが、整地層上面には拳大程度の円碟・亜円碟が散見され、かつては敷石がなされていた可能性もある。しかし、現状ではこの井戸屋形となる上部構造を窺わせるものは検出されていない。

外郭掘立柱塙内 この時期の土坑は少なく、遺物をほとんど伴わない。ただし、外郭掘立柱塙の内側側の土坑

に列をなして並ぶものがあり、他の時期のものとは異なる特徴を有する可能性がある。

SK7392~7394 第109次調査では、外郭掘立柱塙北辺に接して、長梢円形のSK7392・7394・7396・7396~7358 7398がある。東西方向に約4.5m前後、南北に約1.5~2.0m、深さは確認トレチにより底部まで確認した部分で約0.9~1.2mほどの規模で、連続して開削されており、相互の重複関係は明確ではない。地山混じりの黒色埋土中の遺物は僅少で、I-4期の土師器杯・碗が見られるが、II期に入る可能性があるものも散見される。埋土の重複関係から、II-1期のSK7391に西端のSK7392が壊されている事からも、これらの土坑群はI-4~II-1期にかけてのものと考えられる。

このような土坑群の並びは、東方の第98地調査区ではなく、西隣の第44地調査区では外郭南北掘立柱塙の内側に沿って同様の形態の、長さ3.0~4.6m、幅1.5~2.0m、深さが0.8~1.5mほどの比較的類似した規模の土坑が連続して見られるが、II期のSD2682より古く、時期的にI-3期前後まで下る可能性もある。

これらの土坑は外郭掘立柱塙に沿って連続し、遺構検出面から比較的深く、出土遺物が少ないという共通性を持ち、これら自身区画施設としての性格を持ち合わせていた可能性も想定される。

その他の土坑 区画全体でも少なく、区画北西部では第44次調査区で1基、第109次調査区で7基、区画東部では第98次調査区で2基あるが、時期決定の根拠の弱いものが大半である。

SK2657 第44次調査のSK2657は、直径約3.0mの略円形の土坑で、出土遺物は少ないもののI-4期の土師器片・須恵器片があり、この時期まで遡る可能性がある。方格地割成立後には鍛冶山西区画と牛葉東区画の区画間道路に相当する部分であり、この時期のものとすると牛葉東区画の当該期の建物群との関連で捉えるべき遺構かもしれない。

SK7386 第109次調査区のSK7386も出土遺物は少ないがI-4~II-1期の土師器片が出土している。**7413~7419** SK7413~7419は調査区のほぼ中央部を東西に断続的に掘られた、長さ2.0~3.0m、深さ0.7m前後の細長い土坑群で、底部の形状は不整形で一定しない。いずれも黒色の埋土で、SK7414・7416・7417とSK7418・7419の間隔は短いのに対し、SK7417とSK7418の間のみ約4.5mと広い。出土遺物はいずれの土坑も僅少で、土師器杯・皿などの磨耗した小片がある。この土坑の連続する方向は概ね内郭掘立柱塙の東西方向に沿っており、これと何らかの関係が想定されるが、性格については不明である。II-1期のSA7400やII-2期のSB7390の柱穴より古い。

- SK6756・6763 第98次調査区のSK6756とSK6763はいずれも小規模な土坑で、出土遺物は少ないもののI-4期相当と見られる遺物が出土している。SK6769は東西約3.6m、南北約4.0mの大型土坑で黒ボク系の埋土を持つ。完掘されておらず、出土遺物も少ない。
- 溝 開削時期がここまで遡る可能性はあるものは、II-1期にはあったと見られる足場溝
- SD6775～6777 SS6805の柱穴より古いSD6775～6777が想定されるのみである。これらの溝はSS6805に先行して部分的には断続しているものの、SS6805に沿った形で開削されており、幅約0.4m、深さ約0.2mの小規模なもので、底部に部分的に鋤先痕の可能性があるくぼみが連続して認められた。区画の造営そのものに関わる遺構である可能性がある。

(3) 斎宮跡第II期第1段階 (II-1期)

区画構造の変容 II期に入ると、鍛冶山西区画の構造に大きな変化が起こる。I-4期の二重構造を形成していた内郭掘立柱塀が消失し、外郭掘立柱塀でも張り出した構造を作成するSA2800a・bが廃絶しても建て替えは行われない。また外郭北辺全体が南に約2.2m移動するとともに、区画内全体の建物配置が大きく変容する。現在第二節でも見たように、この時期に牛葉東区画でも区画全体を囲郭する大規模な掘立柱塀が成立したと考えられており、これは方格地割を中心とする斎宮全体の構造変化の画期と考えられる。

外郭掘立柱塀の変化 外郭掘立柱塀の最大の変化は鍛冶山中区画内まで伸びていたSA2800・2813の消失である。これにより第92次調査で確認されているSD6517が開鑿され、これを南北区画道路の西側側溝として、西加座北・南区画と東加座北①・南①の間の区画道路が延長され鍛冶山西区画と鍛冶山中区画が分断されて方格地割全体の中に収まる。第六章でも触れられるが方格地割の完成はこの段階に対応する可能性が高い。

この区画の分断とともに、鍛冶山西区画内の外郭掘立柱塀も大規模な代替を受ける。I-4期に鍛冶山西区画を囲堀していたSA1411・6760・6770は、全体に南へ2.2m移動した形にすべて造り替えられ、SA2800・2813が廃絶したのを受けて前代には完全には閉じていなかった可能性のある東辺掘立柱塀は少なくとも近鉄線を超えて延長され、区画南辺まで続く可能性が高くなる。そして、内郭を構成していた掘立柱塀はすべて廃絶して新規には造営されない。以下、それぞれの遺構について個別に記述する。

SA2675 新たに造営された区画西辺の掘立柱塀である。柱間はSA1411同様約3m(10尺)等間で、柱掘形は一辺約1.2m、柱痕跡は直径約0.4m、掘形の深さは約0.6mでSA1411に比べやや深くなる。第44次で13個、第105次調査で11個の柱穴が見つかっており、検出総長は約80mである。造営方位はN4°Wで変わらない。柱掘形の埋土は主に黒色土で、出土遺物はほとんど無い。

SA6780 北辺の掘立柱塀である。柱間は10尺等間で、柱掘形は一辺約1.1mの方形でSA6760よりやや大きい。柱痕跡は直径約0.3mである。南へ約2.2m移動した事で区画北辺道路南側溝との距離は溝芯から約9.0mになる。第106-3次調査で7個、第109次調査で8個、第98次調査で16個の柱穴を確認している。東西両端の柱穴は確認されていないが、総延長118.4m(40間)になる。柱掘形の埋土は主に黒色土で、出土遺物はほとんど無い。

SA6790

東辺の掘立柱塀である。柱間は10尺等間で、近世以降の溝SD6803に埋されているものの、柱掘形は一辺約1.0m、柱痕跡はほとんど分からないが、残存しているものでは直径約0.3mである。柱掘形の規模は先行するSA6770と比べるとほぼ同じかやや縮小する。北から第98次調査で5個、第124次調査で5個、第119次調査で7個、第128-1次調査で3個の柱穴を確認している。これにより、SA6790は近鉄線以南まで続く事は確実で、区画東辺の道路が新たに成立した事とあわせて区画南辺まで延びていると見られる。柱掘形の埋土は主に黒色土で、出土遺物はほとんど無い。

掘立柱塀の門

なお、第124次調査では、掘立柱塀北端から9個目にあたる柱穴を確認できていない。このことは、SD6803による削平の可能性も否定はできないが、当該地点に門等の施設があった可能性も指摘しておきたい。

鍛冶山西区画の
細分

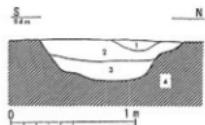
II-1期以降、前代のような内外二重構造がなくなると、区画内部を細分する施設が現れる。大きくは掘立柱塀と区画溝に分かれる。

SA7400

区画西部を画する掘立柱塀である。第109次調査では確認できたが、第105次調査では確認されていない事から現在の近鉄線の下で途切れているものと見られる。第109次調査で12個の柱穴を検出しており、柱掘形は一辺約0.6mの方形、柱痕跡は直径約0.3mと外郭の掘立柱塀に比べ小規模である。柱間は約3.0m等間で、北端はSA6780に接続しておらず、約6.0mの間隙を開ける。また南北の柱筋をSA6780に揃えるものの、SA2675とは揃えておらず、造営方位もおよそN3°Wと外郭掘立柱塀と比べてやや東に振ったものとなっている。SA7400は前代の内郭を構成する掘立柱塀と異なり、区画内の空間を間仕切りするような性格のものに変化したと考えられる。造営時期は他の建物群との位置関係から当該期からII-2期までの間頃に想定される。

SD6810

第98・124次調査で検出した幅約1.0m、深さ0.4~0.8mの断面が逆台形の溝で、I-4期のSE7920から北に延び、SA6760から約4mのところで東に直角に折れ、SA6770の3.6m手前まで徐々に浅くなって消失する。東西方向で全長約27m、南北方向で約22mになる。深さは、屈折部分で標高約8.85m、第98次調査区南端で約8.8m、東端で8.9m、東西方向のはば中程で8.9m、南北方向のはば中程で8.8mと溝全体ではほとんど高低差は無く、第124次調査区内に至って9.4mと急激に浅くなっており、断面も浅いU字形となる。SE7920との重複関係は明らかになっていない。また東端が区画の外まで延びておらず、底部は平坦な形状である。遺構埋土を見ると、検出面下約0.3m付近で明瞭に上下2層に分かれ、出土遺物は極めて少量で、下層から須恵器瓦片が出土している。これらの所見からも積極的に流水の痕跡が見いだし難く、SE7920から延びているとはいえ、単に排水用の溝とは言い難い。第119次調査での調査区北壁の断面観察でもこの鍛冶山西区画内の区画施設と考えると、SD6810の南北



①黄褐色粒質ブロックまじり黒色埴塗上 (10YR2/1)
②均質な黒褐色砂質埴土 (2.5Y3/1)
③堅硬なのにごこちの悪い黄褐色埴土 (10YR6/8)
④黄褐色粒質埴土 (10YR5/6)

第13図 SD6810土層断面図 (1:40)

溝は溝芯より計測して、外郭掘立柱塀SA6770から約28mの距離にあり、第六章でも触れるがII-1～2期の区画の間仕切り施設SA7400と対照的な位置にある事は偶然とは考え難い。

時期についても、SE7920の排水施設とは考え難い条件が多く、また、第98次調査区内での出土遺物や遺構の重複関係を再検討した結果、II-2～3期の遺物を含むSK6779やII-2期のSK6764の埋土を掘削して開墾されている状況から、積極的にI-4期にまで遡らせるのは困難と考え、本報告をもってII-1～2期の間に時期を確定し、下層はII-2期までに、上層はII-3期には埋没したものと見られる。

区画内の建物群 I-4期においては、内郭内に1群ないし2群、内郭外に3群程度の建物のグループが想定されたが、それらは区画施設の大幅な造替によりこれも大きく変更されている。先述した区画施設をもとにII-1期の建物のグループを整理すると、A SA7400以西の建物群、B 区画中央北部の建物群、C SD6810以南を中心とした区画北東部の建物群の3つに大きく区分できる。建物はすべて掘立柱建物である。

A SA7400以西の建物群

SA7400は柱間約3m等間になるとはい、造営方位がN3°Eと方格地割や外郭掘立柱塀によりややずれた造営になっている。こうした事からこの一画には当該期の建物としてはSB7155・7160が存続しており、それにあわせてSA7400が造営されるのに前後して、II-2期には建て替えが行われたと考えられる。

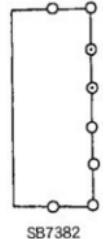
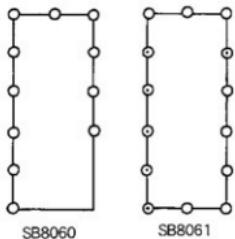
B 区画中央北部の建物群

第124次調査で確認したSB8060・8061、あるいは第109次調査で確認したSB7382もこの時期まで遡る可能性がある。いずれも桁行5間、梁行2間の南北棟で、I-4期の内郭掘立柱塀SA2705が廃絶したち成立している。

SB8060・8061 SB8060は、全く同一規模で3回の建て替えが行われており、そのうち2回目までがII-1期に含まれる可能性がある。これらは柱掘形が一辺約1.2mの方形で大型の建物である。SB8061では柱痕跡が残り、直径約0.4mになる。柱間はいずれも約2.4mで、棟方向は外郭掘立柱塀に合わせる。SB8060はその南妻側柱筋を東のグループのSB7918と揃えている。

SB8061は、SB8060とはほぼ同位置で建て替えしており、柱掘形も最大で一辺約1.3mになるものもある。いずれも灰茶褐色土を基調とする。この後、もう一度建て替えが行われている。

SB7382 SB8060・8061と柱筋で約39m(約130尺)の距離を置いて並立する同一規模の南北棟建物である。柱掘形は一辺1.0～1.2mで、柱痕跡は0.35～0.40mである。灰褐色土を基調とする掘形埋土内には直径0.3m前後の礫を多量に含んでおり、あるいは根固



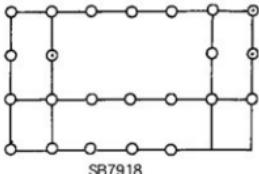
めに使用された可能性がある。この後、2回の建て替えを経ている。

C 区画北東部の建物群

第119次調査を中心に確認された、I-4期の大型建物SB7950以降の建物群である。以後基本的な建物配置は変わり、逆「L」字形ないしは鍵の手状の建物配置が踏襲されていく。

SB7918

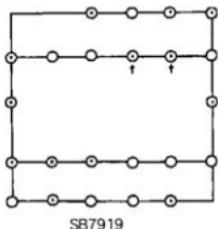
桁行6間、梁行3間の東西棟で、桁行2.4m等間、梁行2.7m等間である。柱掘形は、身舎で一辺約1.0～1.2mの略方形で、柱痕跡は直径約0.35mである。4間×2間の身舎に3面庇をもつ建物である。東西庇の柱掘形の規模は身舎のものとほぼ同規模であるが、南面庇の柱掘形は直径約0.7mの円形である。南庇出は約3.0mである。SB7919に建て替えられる。



SB7918

SB7919

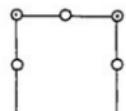
SB7918を建て替えてできたもので、桁行5間、梁行4間の南北両面庇を持つ東西棟で、柱間は、桁行2.4m、梁行2.7mある。柱掘形は一辺1.0～1.2m、柱痕跡は直径約0.35mである。庇の柱掘形は直径約0.7mの円形ないし略方形である。棟方向はSB7918を踏襲している。



SB7919

SB7947

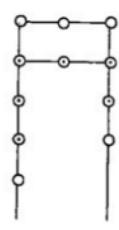
SB7918と鍵の手状の配置を構成するもので、南北棟になるものと思われる。梁行2間、桁行は1間分検出しており、さらに南に伸びると考えられる。柱掘形は一辺約1.0～1.2mで、柱痕跡は直径約0.3m、柱間は3m等間である。埋土には黒色土が混入する。



SB7947

SB7948

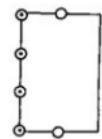
SB7947が建て替えられたもので、北へ約6.0m移動する。梁行は2間、桁行で4間分検出しており、北側1間分のところに側柱とほぼ同規模の柱穴を検出しているが、柱筋を違えるため東柱と想定した。身舎の柱掘形は長辺約1.2～1.4mの長方形である。身舎部分の柱間は桁行で2.4m等間、梁行2.7m等間である。SB7947同様、SB7919と対になって鍵の手状の構成となるものである。なお、この2棟の南北棟は外郭掘立柱塀SA6790に接近した位置にあり、SB7947で約2.6m、SB7948で約3.2mの間隔になる。



SB7948

SB8091

第124次調査で確認したもので、桁行3間、梁行2間の南北棟となると見られるが、東側桁行柱筋を後代のSK8093に壊されている。柱掘形は一辺約0.7m、柱間は約2.4m等間、柱痕跡は直径約0.3mである。建て替えは行われていない。



SB8091

SE8085

第124次調査で確認された大型の井戸である。井戸掘形は一辺

約6mの略方形で、北は第98次調査区内で近世以降の搅乱に壊されているが、少なくとも東・南・西に深さ約0.3mの略方形の土坑がそれぞれの方向に伸びるように掘られ、内部に砂質の混ざった粘質土が充填されていた。

この埋土は、井戸掘形の埋土とは明瞭に区別できなかったが、I-4期のSE7920と同様に井戸を開墾するにあたって周辺の掘り込み地業が行われたのではないかと見られるが、SE8085の場合、版築された痕跡は明瞭ではなく、全体に規模も小さい。

発掘調査では、SE8085には昭和時代の井戸が重複して開鑿されているため、掘形埋土の東半分を、遺構検出面から深さ約2.3mまでの調査にとどめた。

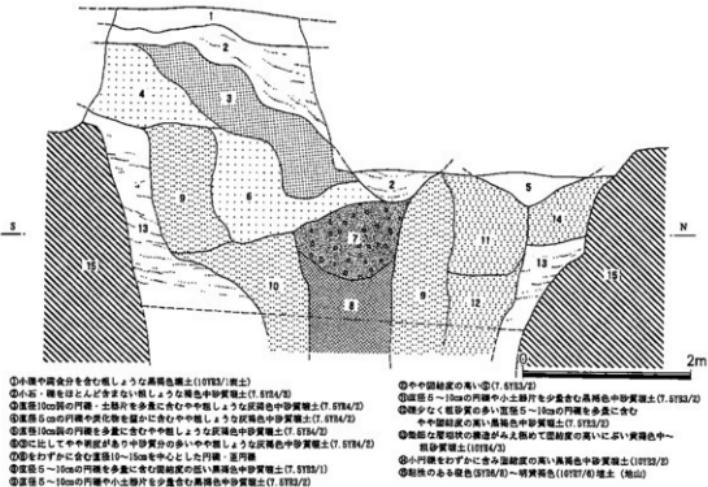
埋土には多量の砂礫が混在しており、遺構埋土の断面観察では遺構検出面下約0.8mほどで直径0.6mほどの井戸枠の痕跡とも思われるラインが看取されたが、井戸掘形全体の規模と対比しても小規模すぎるために断定はできない。

また、遺構検出面から1.2~1.3mの深さで北東・南東・北西の3方向掘形隅部に三角形状のテラス部を持ち、以下掘形も直径4.8~5.0mの円形になる。柱痕跡などは確認できなかったが、井戸壁形の基礎部分になる可能性もある。

出土遺物は整理箱1箱分と少なく、土師器杯A・杯B・高杯・甕・瓶・竈、須恵器杯・甕、灰釉陶器碗のII-3期までのやや磨耗の進んだ破片が出土している。SE8085は、これまでの発掘調査の中で他には斎宮存続期の井戸を全く検出していない鍛冶山西区画にあって、第119次調査で確認されたI-4期のSE7920の後を受けて造営されたものと見られ、内院区画の中の特殊な性格を持った井戸と推定される。

土 坑

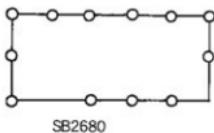
鍛冶山西区画ではこの時期以降、区画全体でも北西と東北の隅部に当該期の土坑が集中するが、この時期のものは依然少ない。この地域と調査区分別に報告する。



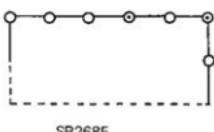
第14図 SE8085土層断面図 (1 : 60)

- (1)区画北西部
①第109次調査区
SK7391 第109次調査区の土坑で、I-4期のSK7392より新しく、II-2期以降のSK7420に西側を壊されている。出土遺物はやはり少ないが、土師器皿片などとともに東海の須恵器編年で折戸10号窯式期併行と見られる杯蓋がある。
- ②第105次調査区
SK7179 調査区南西隅の直径約3.0m、深さ約0.35mの不整形土坑で、土師器杯A・杯C・皿A・蓋・高杯・甕A・甕C・額、須恵器杯B・蓋・甕が整理箱1箱分出土した。なお、この土坑は先述のとおりI-4期のSA1411より新しく、外郭掘立柱塀の時期の一端を示すものの一つといえる。
- (2)区画北東部
①第98次調査区
調査区北辺近くに多い。
SK6807～6809 外郭北辺掘立柱塀SA6780の北側外にある近世以降の溝SD6798の下部で検出した土坑で、東西約4.0～4.5m、南北約1.5～2.0mで、遺構検出面からの深さは約0.9～1.0mである。上半の大部分はSD6798に破壊されているが、底部で深さ約0.3mが残存しており、II-1～2期の土師器、須恵器の小片が少量出土している。
- SK6757** 外郭北辺掘立柱塀SA6780の内側で確認した約3.0×2.5m、深さ約0.4mの楕円形土坑で、整理箱1箱分の土師器杯・椀・皿・高杯・蓋・鉢・甕・甕、須恵器蓋・鉢・甕が出土した。一部I-4期の遺物が混在する。
- SK6759** 調査区中央部付近にある東西約2.7m、南北約2.3m、深さ約0.5mの略椭円形の土坑で、土師器杯A・杯B・皿A・蓋・高杯、須恵器杯A・杯B・蓋の他、木炭片が整理箱で1箱出土した。
- SK6762** SK6759の東に位置する約4.5×2.0m、深さ約0.8mのやや大型の土坑で、整理箱で2箱の土師器杯・皿・蓋・高杯の小片の他、盤・蓋などの大型の須恵器類が出土した。
- SK6815** 調査区北東隅近くの長さ約1.3m、深さ約0.2m小土坑で、整理箱1箱分の土師器甕と須恵器長頸甕などが出土している。
- SK6811** 調査区西部の直径約1.2m、深さ約0.4mの小規模な土坑で、出土遺物も当該期の土師器杯が1片見られるのみだった。
- ②第124次調査区
SK8078 SD8077の北側にある直径約1.4m、深さ約0.5mの円形の土坑で、埋土はSD8077とほぼ同じ地山土混じりの黒色土である。遺物は土師器の小片が出土したのみである。
- 溝** 土坑と同様にこの時期のものは、第105次調査例のように掘立柱建物の周囲を巡る特殊なものを除き、後世の再開墾も想定しなければならないが、区画内では確認されているものは極めて少ない。
- SD6804** 第98次調査区で幅約0.6m、長さは約2m分だけ検出したもので、遺物は少ないが土師器杯・皿・甕・甕、須恵器杯B・壺・甕の破片が出土した。あるいはもう一時期新しいものである可能性もある。その南側で、後代の区画溝と見られるSD6810の北

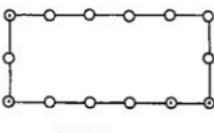
	延長にあたるが、相互に連続するものではない。
SD8077	第124次調査で確認した東西方向の溝で、全長4.7m、幅1.3m、深さ0.4m、断面は浅いU字状になる。埋土は黒色で、遺物は土師器の小片が僅かに出土したのみである。I-4期のSB8050が廃絶したのち開削されたものである。
	(4) 斎宮跡第II期第2段階 (II-2期)
	この時期の建物配置は、前代の圓郭施設の大幅な改変のあとを受け、基本的には大きく配置を変えず建て替えが繰り返される段階である。掘立柱塀などの区画施設は前代のものがそのまま継続していくと考えられ、建物配置のグループについてもII-1期のものが継続する。これらの地区に沿って他の遺構についても報告する。
①SA7400以西の建物群	
SB2680	基本的にI-4期～II-1期の建物配置を踏襲したもので、3棟の建物がある。 第44次調査で検出した桁行5間、梁行2間の東西棟である。柱掘形の規模は一辺0.8～1.0mの方形で、柱痕跡は不明である。柱間は桁行2.4m等間、梁行は2.7m等間である。SA2675とは約7.2m(24尺)の間隔を開け、南側柱筋を揃えている。棟方向はE3°Nである。
SB2685	第44次調査で北半分の桁行を5間確認したもので、5間×2間の東西棟と推定される。柱掘形は一辺約1.2mの方形で、柱痕跡は残存しているもので直径0.3mである。柱間は桁行2.4m等間、梁行は1間分しか確認できていないが、2.7mと見られ、SB2680と全く同規模のものと推定される。棟方向はE3°Nである。
SB7190	I-4期のSB7155を建て替えたもので、桁行5間、梁行2間で、柱間が桁行2.4m等間、2.7m等間に縮小され、SB2680・2685と同規模なものである。柱掘形も一辺約1.0mの方形、柱痕跡は直径約0.3mとなり、これもやや縮小傾向で、柱穴の深さもSB7155より0.2m前後浅くなる。棟方向はE3°Nで、掘形は茶褐色系の埋土で充填される。なお、SB7155には見られた雨落ち溝状の遺構は、SB7190には伴わない。
規則的な建物配置 SB2680 2685・7190	SB2680・2685・7190はいずれも同規模の建物で、相互の位置関係を見るとSB2680が北辺掘立柱塀SA6780から約17.8m(60尺)の距離を置き、それぞれの建物の間隔も均等に約11.8m(40尺)で、相互に規則性を持って併置されている事が窺われる。また、これは先行するSB7155とSB7160の位置関係とも一致する。これらが同時に建設されたかどうかは不明だが、SB7190がI-4期のSB7155を建て替えたものであり、これが一つの基準として計画されている事は明らかで、掘立柱塀の大幅な変更にも伴ってII-2期までに建てられていったものと推定される。あるいはSB7155が建っている



SB2680



SB2685



SB7190

状態でSB2680・2685と建築し、SB7190を建て替えたとも考えられよう。また、これらはSA7400から約9m(30尺)の距離にあり、造営方位も前代の区画造営方位のE4°Nより1°程ずれている事も共通しており、SA7400の造営とも密接に関係しているものと見られる。

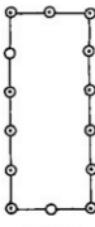
②区画中央北部の建物群

南北棟建物

SB8062

II-1期のものが継続して建て替えられている。

第124次調査で確認された南北棟で、SB8061を僅かに東へずらして建て替えられており、規模はほぼ同じで桁行5間×梁行2間、柱間は2.4m等間、柱掘形は一辺約0.6~0.9mのややいびつな方形で、柱痕跡は直径約0.3mである

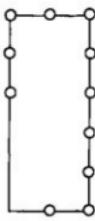


SB8062

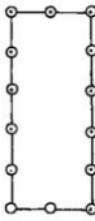
SB7381・7380

第109次調査で確認した5間×2間のSB7382を建て替えた同規模の南北棟である。柱掘形はいずれも一辺1.0~1.2mの方形で、柱痕跡は直径約0.35~0.40mである。灰褐色系の掘形埋土で、SB7381→SB7380の順で建て替えられる。

なお、SB7380に顕著だが、柱痕跡底部に拳大程度の円礫を円形に敷きつめている状況が見られ、柱の沈下・根腐れを防ぐための根固めと見られる。これら区画中央北部の南北建物群は、II-1期のSB7382・8060から継続して建て替えられており、この間の空間については未調査で不明だが、一貫して約130尺という距離や5間×2間の規模を保ち、いずれも2回ずつ建て替えられているという共通性を持つことなど、極めて関連性の強い建物と考えられる。



SB7381



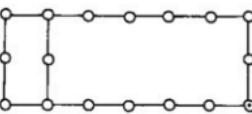
SB7380

東西棟建物

SB7370・1430

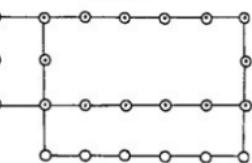
SB7370は、第109次調査で確認した6間×2間で西妻側に1間分の庇を持つ東西棟建物である。

身舎の柱掘形は、一辺1.1~1.3mの方形、柱痕跡は直径約0.4mで、庇の柱穴は一辺約0.6mの略方形である。柱間は桁行2.4m等間、梁行2.7m等間、庇の出は2.7mである。柱穴は深く、遺構検出面から約1.3mにもなる。柱掘形の埋土には拳大の礫が多く含まれ、根固めのためのものと考えられる。棟方向はE4°Nで外郭掘立柱壠に合わせる。



SB7370

SB1430はSB7370を建て替えたもので、身舎部分の規模は同じで、西妻側と南面側の2面に庇を設けている。なお、南庇は柱掘形が一辺約0.7m程あり、庇の出も約3.2mあるため、目隠



SB1430

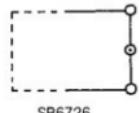
し塙として独立したものになる可能性もある。西側庇の出は約3.0mである。この2棟は外郭北辺掘立柱塙SA6780から約9.0m(30尺)の距離にある。

- SB7390** SB1430の南約4.5mに位置する5間×2間の東西建物で、SA7400と南桁行の柱筋を合わせる。柱掘形は一边1.4～1.1mと大きく、柱痕跡は直径約0.4mである。南北棟SB7380等の北妻側柱筋と南桁行側柱筋を揃えるが、二者の柱筋の間隔は3.7m程になり、あるいは併存した状況も想定できる。柱間は桁行2.4m等間、梁行2.7m等間で、SB7370・1430の身舎と同一規模である。埋土出土の土器片から見て、前二者より新しいものである可能性が高い。
③区画北東部の建物群



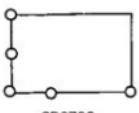
SB7390

- SB6726・6725** 第98次調査で確認した桁行2間、桁行は1間分しか確認できていないが3間と見られる東西棟で、SB6726が先行する。柱掘形は一辺0.5～0.6mの方形で、柱痕跡は直径約0.2m、柱間寸法は2.4m等間である。外郭掘立柱塙に柱筋を合わせている。

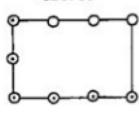


SB6726

- SB6736・6735** 同じく第98次調査で確認された桁行3間、梁行2間の東西棟で、SB6726・6725とは同一規模のものと推定される。I-4期ないしはII-1期からの区画溝SD6810を挟んでSB6726にSB6736、SB6725にSB6735と対応する関係にあると見られ、両者は約22mの間隔を開けて東西の柱筋を揃えて並立していたと見られる。

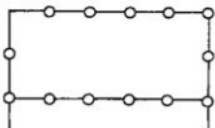


SB6736



SB6735

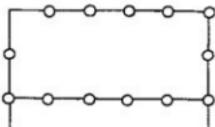
- SB7915～7917** 第119次調査区から第124次調査区で確認されている一連の建物で、前代のSB7918・7919から引き続き建て替えられたもので、いずれも5間×3間の東西棟で南側に庇が付き、外郭掘立柱塙に沿うE4°Nの棟方向を見る。



SB7915

柱間は身舎部分はいずれも桁行2.4m、梁行2.7m等間で庇の出が異なる。SB7915は、身舎の柱掘形が一辺約0.8～0.9mの略方形、庇の柱掘形は直径約0.6～0.9mの楕円形、庇の出は2.4mである。

SB7916はSB7915を建て替えたもので、身舎の柱掘形が一辺約1.0～1.2mの略方形、庇の柱掘形は直径約0.4mの円形で、庇の出は3.0mある。



SB7916

SB7917は最も新しいもので、身舎の柱掘形は一辺約0.4～0.5mの略方形、庇の柱掘形は直径約0.4m円形である。柱痕跡はこれも明確にできていないが、柱穴埋土内に拳大の礫が固め置かれている部分が確認されており、柱の抜取り痕に入れられたものと考えられる。

庇の出は2.7mである。

- SB7938～7940 第119次調査区にある上記のSB7915・7916・7917にそれぞれ対応すると考えられる南北棟である。前代の対応する建物としてSB7947・7948がある。いずれも桁行5間×梁行3間で、西側に庇を持つ。

SB7938は、身舎の柱掘形が一辺約1.1～1.2mの略方形、柱痕跡は直径0.40m、庇の柱掘形は直径0.5m前後の略円形である。柱間寸法は桁行2.4m、梁行2.7m等間で、庇の出は2.7mである。

SB7939は、身舎の柱掘形が一辺約0.6～0.8mの略方形、柱痕跡は直径0.40mで柱掘形は直径0.5m前後の略円形である。柱間は桁行2.4m、梁行2.4m等間で、庇の出は2.1mである。

SB7940は、身舎の柱掘形が一辺約0.5～0.7m、柱痕跡は直径0.40m、庇の柱掘形は直径0.5m前後の略円形である。柱間は桁行2.4m、梁行2.7m等間と推定され、庇の出は2.7mである。

鍛冶山西区画北東部では継続して基本的に庇を持つ東西・南北棟による「鍵の手」状の配置がII-1～2期の中で5回にわたり連続して建て替えられた事になる。

④区画中央部付近の建物

- SB7195 第105次調査区内で、前代までのSB7180・7185の後に建てられた桁行1間以上、梁行2間の東西棟建物で、柱掘形は一辺約0.9～1.0mの方形で、柱痕跡は直径約0.3m、梁行の柱間は3.0m等間である。

柱穴からII-1～2期と見られる土器器杯片が出土しており、遺構の時期もこの前後に想定できよう。

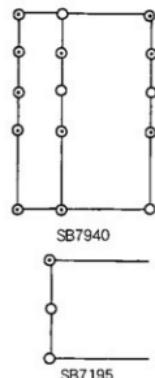
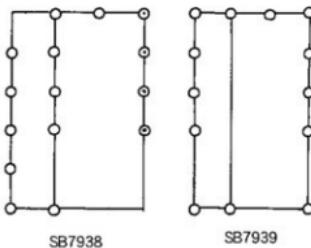
- SE8085 II-1期に初現が求められる井戸SE8085は、その埋土中にII-2期頃までの土器片を含み、区画北東部の当該期の建物とは重複しないので、この段階では依然存続していたと考えられる。

土坑 この段階を境に区画内の土坑の数は急増する。しかし土坑の集中してみられる地域は依然として、区画の北西部と区画の北東部に限られている。

①区画北西部の土坑

(1)第29・44次調査区

第29次調査区と第44次調査区の北東部に集中して28基の土坑が確認されている。これらは一部は連続して掘削されている事が窺える。



- SK1414・1416 いずれも長径約2.0mほどの略椭円形の土坑で、SK1414から整理箱で2箱、SK1416からは少量の遺物が出土した。特にSK1414からは墨書き器（630）が含まれる他、木炭片が混入している。SK1414は重複関係でSK1416より新しく、II-1～2期の土器を含む。
- SK2709 SK1414の南にある長径約4.0m、短径2.2mの不整椭円形で、本報告で新たに遺構番号を付与した。出土遺物は極めて僅少である。
- SK1415 西東約5.8m、南北約5.0m、深さ約0.4mの不整円形の土坑である。出土遺物も多く整理箱で12箱分出土している。土師器杯A・杯G・皿A・高杯・盤A・甕・須恵器蓋・高杯・平瓶・甕C、灰釉陶器碗や木炭片がある。土師器にはII-1期に属すと見られるものが、灰釉陶器には猿投窯編年で黒窯14号窯式期のものが含まれる。また、土師器杯Gには口縁部に油煙が付着するものがある。
- SK1418 第29次調査区の北端で一部を確認したのみだが、整理箱で3箱の遺物が出土している。土師器杯・椀・皿・高杯・甕・須恵器台付杯・蓋の他、黒色土器A類の鉢が出土した。重複関係でSK1420より新しい。
- SK1419 SK1415とSK2707などに挟まれた長径約3.0m、短径が推定で約2.4mの椭円形土坑で、整理箱3箱分の遺物が出土している。土師器杯・杯B・椀A・皿A・高杯・蓋・甕・須恵器杯A・杯B・盤・蓋・甕がある。重複関係でSK1415より新しい。
- SK1420 SK1419の南に続く土坑である。径約2.4m、深さ0.3m前後で、出土遺物は比較的多く、整理箱で6箱分になる。土師器杯A・杯G・椀A・皿A・蓋・高杯・甕A・甕C・甕E・壺E・須恵器杯・壺・甕があり、完形品も多い。
- SK2707 長径約3.4m、短径約2.6m、深さ約0.4mの椭円形土坑で、出土遺物は多く8箱分の土器類が出土している。土師器の杯・椀・皿などの供膳形態が多く、完形品も多数含まれる。杯等の口縁部に油煙状の黒褐色の付着物が見られるものもある。他に土師器甕A・甕C・注口部のつく鉢や、須恵器杯A・杯B・蓋・甕A・甕C・墨書き器(629)、や木炭が出土している。
- SK2706 SK1419の南にある長さ約2.0m、深さ0.3mの土坑で、整理箱4箱分の遺物が出土した。土師器杯A・杯G・椀A・皿A・甕A・甕C・須恵器蓋・灰釉陶器碗と木炭片が出土している。
- SK2708 長径約3.0m×短径約1.4mの長椭円形で、深さ約0.6mの土坑である。遺物の出土量は少なく、一部II-2期頃と見られるものも含まれるが、完形の土師器杯類をはじめ、土師器杯・椀・皿・甕・須恵器甕がある。II-1期の遺物も多数含まれるが、II-2期のSK2706より新しいと見られる。
- SK1425 SK2707に接する直径約3.0m、深さ約0.4mの不整円形の土坑である。遺物の出土量は整理箱17箱と多い。土師器杯A・杯B・杯G・椀A・蓋・高杯・盤A・甕A・甕B・壺E・ミニチュア甕・黒色土器甕・風字硯・須恵器杯A・杯B・蓋・盤・壺・灰釉陶器段皿・綠釉陶器碗・製塩土器と木炭片が出土している。
- SK1422 SK1425の北東にある東西約0.6m、南北約1.2m、深さ0.18mの小規模な土坑だが、土師器杯A・皿A・椀A・須恵器甕Cなどが整理箱1箱分出土している。

- SK1424 SK1425やSK2695に接する一辺約3m、深さ約0.5mの略方形の土坑で、整理箱で36箱の土器類が出土した。土師器杯A・杯G・皿A・椀A・椀B・蓋・高杯・盤A・粗製台付鉢・鍋B・竈、須恵器蓋・高盤・甕C、黒色土器椀、灰釉陶器椀・皿、綠釉陶器椀・蓋が出土しているが、大部分は土師器杯・椀・皿類であり、少量の炭化材もともなっている。斎宮跡1984土器編年中の平安時代前Ⅰ期の基準資料とされてきた。
- (2) 第29・109次調査区
- SK1423 第29次調査のトレントと第109次調査区にまたがって検出されている。東西約3.5m、南北約3.0m、深さ約0.7mの不整円形の土坑で、土師器杯A・椀A・皿A・皿B・甕C、須恵器杯B・台付盤・甕が整理箱8箱出土した。
- SK7378 調査区の西端で検出された土坑で、東西幅は不明だが、南北約7.6m、最大深で約0.9mある。出土遺物は少なく、土師器杯A・皿A・椀Aが見られる。
- SK7379 SK7378のすぐ南に位置しているが、重複関係は明らかではない。調査区の西へ遺構は連続しており、東西幅は不明だが、南北方向は約3.8m、深さは約0.9mある。遺物は極めて少ない。
- SK7383 SK1423の南に接する土坑で南北約2.4m、東西約0.7m、深さ約0.35mの細長い溝状の土坑である。整理箱で約1箱分の遺物が出土しており、土師器杯A・皿A・椀A、須恵器甕があり、特に土師器皿類の割合が高い。
- SK7433 調査区北端のII-4期のSK7393に重複する。長さ東西約1.0m、南北約0.7m、深さ約0.3mで出土遺物は少なく、土師器A・皿A・甕A・甕B、須恵器甕が僅かにある。
- SK7401 調査区北部の直径約2.0m、深さ約0.55mの円形土坑で、少量の土師器杯A・皿A・盤A、須恵器甕などII-2期の土器片と鉄釘が出土しているが、同じくII-2期のSB1430・7370の北西隅と重複し、これらより新しいものである。
- SK7420 調査区北西隅の南北約4.6m、深さ約0.7~1.2mの土坑で、遺構はさらに西に続く。検出範囲が狭いので今後の検討を要するが、北半では深さ約1.2mの落ち込みがあり、SK7392などと同様の外郭掘立柱塀内側を巡る土坑の一部である可能性もある。
- 埋土上部に、土師器杯・皿類を集中的に投棄した部分がある。土師器杯A・杯G・椀A・皿A・甕A・甕C、黒色土器片、須恵器蓋・甕、灰釉陶器壺が整理箱8箱分出土した。
- SK7424 調査区南部の東西にあり、東西約3.7m、深さ約0.3mの方形の土坑で、南北の長さはII-3期の土SK7426・7427に接され、規模は不明である。土師器杯A・皿A・蓋・盤B、須恵器壺片などが整理箱で2箱の出土した。
- SK7413~7419 調査区のはば中央部を東西に断続的に掘られた、長さ2.0~3.0m、深さ0.7m前後の細長い土坑群で、底部の形状は不整形で一定しない。いずれも黒色の埋土で、SK7414・7416・7417とSK7418・7419の間隔は短いのに対し、SK7417とSK7418の間のみ約4.5mと広い。SK7413とSK7414の間は、II-3期と見られる南北溝SD7387が間を通っているため不明である。出土遺物はいずれの土坑も僅少で、一部後世の混入品も見られるが、土師器杯・皿などの磨耗した小片がある。
- 土坑の連続する方向は概ね内郭掘立柱塀の東西方向に沿っており、これと何らかの

- 関係が想定されるが、性格については不明である。
- ②区画北東部の土坑
- (1)第98次調査区
- SK6744 調査区西端にかかる検出長が南北約2.0m、深さ約0.6mの土坑で、II-3期のSK6743に重複される。整理箱で1箱の土師器杯A・皿A、須恵器甕が出土した。
- SK6753 調査区南東隅付近の東西約2.8m、南北約2.1m、深さ約0.4mの不整円形の土坑で、遺構確認面から埋土に木炭片や焼土・焼けた拳大の礫が混在し、II-1～2期の土師器杯A・皿A・椀A・甕・鍋、須恵器蓋・壺が整理箱で10箱分出土しており、特に土師器供饌具に完形品が多い。
- SK6758 II-1期のSK6757に重複する長径約4.5m、短径約3.0m、深さ約0.3mの長円形の土坑で、出土遺物は少なく、土師器杯A・皿A・蓋・鉢・甕、須恵器蓋・壺Aや綠釉陶器片があるが、あるいはII-3期まで下る可能性がある。
- SK6761 SK6762に接する土坑だが、これとの重複関係は不明瞭である。深さは約0.6mあるが、全容は窺い知れない。極少量のII-2期と見られる土師器杯片が出土している。
- SK6764 調査区中央部やや西寄りの東西約4.8m、南北約2.2m、深さ約0.8mの不整橭円形の大型土坑だが、上面から近世遺構の搅乱を受けており、本来は複数の土坑であった可能性もある。土師器杯A・皿A・高杯・壺E・甕A・甕B・甕C・瓶・小型甕、須恵器杯A・杯B・蓋・盤B・鉢・壺・甕Cなどが整理箱で3箱出土した。
- SK6765・6767 調査区南部の小土坑である。SK6765は一辺約1.0m、深さ約0.1mの隅丸方形、SK6767は東西約1.4m、南北約0.9m、深さ約0.3mの隅丸長方形の土坑で、いずれからも小規模ながらほぼ完形の土師器杯A・椀A・皿Aが出土している。その他には、SK6765からは土師器甕ないしは瓶の破片と須恵器小片が整理箱で2箱分、SK6767からは土師器甕と竈片、須恵器蓋と木炭片が整理箱で3箱分である。
- SK6783・6784・SD6785 調査区東部の連続する南北溝状の土坑で、同時期のSD6785で連結されている。これらの南北総延長は約6.6mで、幅は約1.4m、深さはSK6783で約0.8m、SK6784で約0.9m、SD6785で約0.4mである。遺物は少なく、土師器杯A・皿A・須恵器蓋・甕が僅かに見られるのみである。
- SK6789・6793・6794 調査区南東部の土坑群で、長径で1.5～2.8m前後の不整円形の土坑が重複するため個々の規模は明らかではなく、検出時も重複関係は不明瞭だった。SK6789は整理箱で2箱程の遺物が出土しており、土師器杯A・皿A・高杯・甕・須恵器蓋・高杯・台付盤・甕・灰釉陶器椀、土鍤があるが、SK6793・6794の遺物は少なく、土師器杯A・皿A・甕・竈・須恵器杯B・蓋・壺が僅かに見られる。
- SK6792・6794 第124次調査区にかけて検出されており、先述のSK6789・6793・6794と重複する土坑である。重複関係ではSK6794の方が新しい。
- SK6792は南北約2.0m、東西約0.9m、深さ約0.6mの不整円形で、出土遺物のほとんどは第124次調査区から土師器杯A・椀A・皿A・甕A・甕C・竈・須恵器杯B・蓋・壺・甕、土鍤・製塙土器などが完形品を含んで整理箱で12箱出土している。
- SK6794からは土師器杯A・椀A・皿A・須恵器杯A・杯B・甕、内面に陰刻花文

のある綠釉陶器椀片が、やはり第124次調査区を中心に整理箱で9箱分出土している。

(2) 第124次調査区

SK8081 調査区の中央部で検出した土坑で、規模は検出長で約2.0m、深さは約0.2mである。出土遺物は少なく土師器杯・皿片が少量出土したのみである。

SK8084 調査区東部の東西約1.1m、南北約0.9m、深さ約0.5mの椭円形の土坑で、土師器杯A・椀A・皿A・蓋・高杯・甕・瓶・竈・ミニチュア土器、須恵器杯B・蓋・壺や炭化材が出土している。

SK8087 I-4期のSB6740より新しい直径約0.8m、深さ約0.6mの土坑で、土師器杯A・椀A・皿A・甕・須恵器杯A・盤B・甕が炭化材をともなって整理箱で4箱分出土した。

SK8088 調査区北東部の東西約3.2m、南北約2.9m、最大深約0.5mの不整椭円形の大型土坑で、複数の土坑の重複を想定したが、埋土の断面観察や出土遺物の比較からは埋土の重複関係や時期差は確認できなかった。

出土遺物も多く、土師器杯A・杯B・杯G・椀A・皿Aを中心とし、土師器壺E・平底鉢・甕A・竈や須恵器杯B・台付盤・蓋・甕Cの他、大量の炭化材、スサ入りの粘土塊が整理箱で33箱分出土した。特に炭化材は微細なもののみならず、長さ10cm前後、直径5~6cmのものが多く、土師器供膳形態にも二次的に被熱したと考えられるものも見られ、遺構の性格を考える上で注目される。

溝 この段階では溝遺構は、鍛冶山西区画全体で極めて少なく、第98次調査区でSD6804やSD6810がこの段階に残っている可能性が高い他は、第98次調査の土坑状のSD6785があるだけで、他の調査区ではこの時期に明確に想定できる溝遺構は見つかっていない。

(5) 斎宮跡第II期第3段階 (II-3期)

区画内部の再構 成 外郭掘立柱塀については依然前代のまま存続している可能性があるが、後述するようにSB6745などの外郭掘立柱塀北辺にかなり接近した建物も見られ、この段階の中で外郭掘立柱塀については存続上機能が不明瞭になる。また、区画内部再構成部では北東部の区画溝SD6810が埋没し、区画西部を画するSA7400はSA7170に造替されて、区画の南部まで伸びる長大なものとなり、区画北部には新たな区画溝と見られるもので限られた空間が作られるなど、区画内部での変化が明確に現れ、再構成が行われた事が窺われる。

SA7170・7171 SA7170は、SA7400廃絶後にはば同じ位置で造営された南北掘立柱塀である。柱掘形は一辺1.0~1.2m、柱痕跡は直径約0.4mになる。柱間は約3.0mで、造営方位もおよそN4°WとSA7400よりも外郭掘立柱塀に近くなるが、柱通りを揃えておらず、やはり北端で約6.4m、2間強分ほどの間隔を開けているため、区画の間仕切り的な性格は変わらないと見られる。第105次調査で8個、第109次調査で11個の柱穴が確認されており、確認されている総延長は約69m(23間)分になる。この掘立柱塀にともなう門などは明らかではない。

なお、第105次調査区内では、SA7170に重複してSA7171・7172の二条の掘立柱塀

が造られる。いずれも造営方位はE 4°Wで、柱掘形は明確な方形とはならない。

SA7171は、柱掘形の直径約0.45mの不整円形で、同一調査区内でも柱穴底面高が標高で9.6~9.9mと一定しない。柱間は2.95m等間で、第105次調査で約17.7m(6間)分を確認した。

SA7172も柱間約3.0mで、約15.0m(5間分)検出した。柱掘形は直径0.3~0.45mの不整円形である。SA7171とSA7172との前後関係については不明であるが、SA7170とは部分的に認められる埋土の重複関係からSA7170が先行するものと見られる。先にも触れた通り、SA7171・7172は第109次調査区では確認されておらず、現在の近鉄線下で途切れるか、あるいは屈曲すると見られる。

SA7482

第109次調査では、平成7年度の概報段階ではSB7405の庇と考えられていた柱列がさらに北に伸びる可能性が想定され、既に概報でも触れている通り建物と掘立柱塀の位置関係の上からもこれを新たに掘立柱塀とした。他の柱穴との重複が多いため、北端の状況は不明瞭だが、調査区南から8個目までは柱穴を確認できる。柱掘形は一辺0.4~0.7mの略方形で、柱間はほぼ2.1m等間と想定される。造営方位はSA7170と揃える。

区画全体の 建物配置

II-3期の区画内の建物配置は、基本的にはII-2期までのものを踏襲した形になっているが、区画中央北部で新たに小区画を構成する区画溝が「コ」の字状に開墾されて一つのブロックを形造る。

以下、これを踏まえて①SA7170以西の建物群、②区画中央北部の建物群、③区画北東部の建物群、④区画中央部付近の建物に分けて報告する。建物はやはりすべて掘立柱建物で、柱掘形埋土はにぶい茶褐色系のものが多くなる。

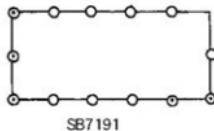
①SA7170以西の建物群

SB7191

第105次調査区にあり、I-4期のSB7155以来この位置での2度目の建て替えとなるものである。柱掘形は一辺0.8~0.9mの方形とやや縮小され、柱痕跡は直径約0.30mである。柱間は桁行2.4m等間、梁行2.7m等間で、5間×2間の東西棟と前代のSB7190と同規模である。

SB2690

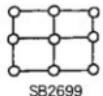
第44次調査で確認した南側柱が調査区外に延びているが、5間×3間と推定される南北棟で、東側に1間分の庇の出がある。柱掘形は身舎部分で一辺1.2mの方形、庇部分では直径約0.8mの略方形である。柱痕跡はあまり明瞭ではないが、残存しているものでは直径約0.3mで、西側柱の中には根固め石と見られる拳大の礫が丸く敷くかれているものもある。柱間は身舎部分で桁行、梁行ともに2.4m等間、庇の出が2.95mである。棟方向はN3°Wである。SB2690の位置にはII-2期での5間×2間の東西棟SB2685などがあり、同規模の東西棟が南北に規則正しく配置されていた。これはII-



3期になって構成が崩れる事になる。因みにSB2690とSB7191の間隔は約12.4mと推定される。

SB2699

第44次調査で確認した桁行2間×梁行2間の建物で、総柱建物になる可能性もある。柱掘形は一辺約0.6~0.7mの略方形で、柱痕跡は不明だが、北側柱筋中央の柱穴には拳大の礫の集中が見られる。柱間は桁行が2.4m等間、梁行が1.8mと安定しない。



同じ段階のSB2690との新旧関係は直接には明らかではないが、SB2699がやはりII-3期のSK2701・2702に重複されないと見られる事から、あるいはSB2699の方が先行する可能性がある。

外郭掘立柱塀 少なくともII-1~3期までの鍛冶山西区画内の建物配置を規制している外郭掘立平行する溝・ 柱塀西辺であるSA2675の内側に連続する溝や土坑が掘られている。

土坑

溝には、第44次調査の南北溝SD2682があり、溝芯でみると掘立柱塀SA2675との距離は約3.0mで平行する。この溝の東肩に平行する方向で長径約3.2~4.0m、幅約1.6~2.0m、深さ1.1~1.5mと深い土坑SK1412・2683・2684・2686・2687が掘られる。

SD2682からは一部山茶碗やロクロ土器等の混入も認められるが、出土遺物の主体はII-3期のもので、土器師杯A・皿A・蓋・高杯・甕・須恵器皿・壺・甕、灰釉陶器碗・皿が整理箱2箱分出土している。土坑からの遺物は僅少で、SK1412・2683・2684・2687・2688からII-2~3期の土器師や須恵器の破片が、遺構の規模に比して僅かに出土しているにすぎない。なお、SD2682と土坑群の前後関係は明らかではない。

また、SK1412の北にも同様の形状の土坑と見られる遺構が部分的に検出されている。このSA2675に平行する土坑群に比較的よく似た状況は、第109次調査区の外郭北辺掘立柱塀SA6780に沿う土坑群にも見られる。規模的にも出土遺物が少ないという共通点もあるが、北辺の土坑はI-4期~II-1期にかけてのものと見られ、外郭西辺に沿う土坑群・溝はII-2期併行の遺物も含むものの、大部分はII-3段階のもので、この段階の埋没が想定される点が明らかに異なっている。

②区画中央北部の建物群

区画中央北部の区画施設 鍛冶山西区画中央北部の建物群はII-1期から既に形成されていたが、II-3期以降、この部分も連続する土坑状の溝で区画されるようになり、これまでの概報でも検討されてきたとおり、鍛冶山西区画内の新たな細分が行われたものと見られる。

第109次

調査区 第109次調査区ではSD1429・7387、SK7426~7428がある。

SD1429・7387 SK7426~7428

SD1429は、外郭北辺掘立柱塀SA6780から約6mの間隔を開けて南に延びる溝で、全長約15m、幅約1.5m、深さ約0.4mで、底部の形状は一定せず、凹凸が多い。その南に続くSD7387は全長約17m、幅約1.2~1.8m、深さ約0.3mで、これも部分的に底部の凹凸が見られる。このSD1419・7387は重複部分も含めて南北総長約30m(100尺)となり、区画西辺を形成して南端で東に直角に折れていく。出土遺物は少なく、土器師・黒色土器・須恵器・灰釉陶器などII-3期後半の遺物が少量見られる。

SD7481

区画南辺を形作るのは溝状に連続する土坑と溝で、第109次調査区内ではSD7481・SK7426・7427・7428である。埋土の新旧関係ではSD7481が後出である。

SD7481は全長約21m、幅1.6m、深さ0.5~0.6mの断面が浅いU字状の溝で、出土遺物はやはり少量の土器片が見られるのみである。

SK7426~7428 いずれもSD7481の下部で検出されている。SK7426は、全長約4.2m、幅約1.7m、深さ約0.7mの長楕円形の土坑で、出土遺物は少なく、土師器杯・皿・鉢の小片が僅かに出土したにとどまる。SK7427は、全長約5.6m、幅約1.8m、深さ約0.7mの長方形の土坑で、やはり土師器杯・皿、須恵器・灰釉陶器の小片が少量出土している。SK7428は調査区の東にさらに延びていくが、検出長で約3.6m、幅約2.0m、深さ約0.5mの長楕円形と見られる土坑で、やはり少量の土師器杯・皿類の小片が出土しているにすぎない。

第124次調査区 この東延長は約6.0mの未調査地があるが、第124次調査区に入ってこの延長と考えられる遺構が認められる。

SD8053・8054 SD8053・8054は調査区の西部で検出したが、その上部のほとんどは後世の削平を受けており、かろうじて底部付近を検出したにとどまる。SD8053は検出長約6.0m、幅約0.9m、深さ約1~2cm、SD8054で長さ約11m、幅約0.5~0.7m、深さ約8cm程度である。遺物は僅かに土師器の小片があり、II-3期ものと想定した。

SD8063・8064 調査区中央部に入るとSD8063・8064がある。いずれも調査区中央部の中で西端が途切れしており、先述のSD8053・8054とは接続しない。

SD8063は検出長約3.8m、幅約1.2m、深さ約0.8mの断面逆台形の溝で、底部には土坑状の落ち込みがある。出土遺物は多く、土師器杯A・皿A・台付杯・台付皿を中心⁽⁴⁾に整理箱8箱分の土器類が出土している所謂「土器溜まり」である。その大部分はII-4期に属するものだが、溝の開鑿時期はII-2期のSB8062の柱穴を壞している事や、SB8054・8053などとの位置関係からII-3期頃に開鑿されたものと見られる。

SD8064はSD8063に平行し、全長は同規模、幅は約0.9m、深さ約0.4mの断面が浅い「U」字形の溝で、やはりII-4期の土師器杯A・杯B・皿A・皿Bを中心に整理箱で約8箱の遺物が出土しているが、開鑿はII-3期に遡らせて考えられよう。新旧関係ではSD8064が古い。

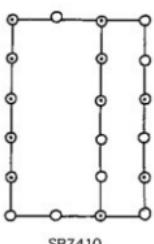
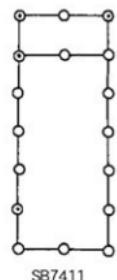
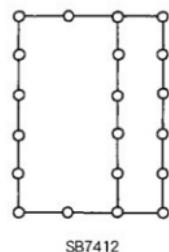
SK1459 区画溝南東角にあたる土坑で、南北約2.8m、幅約1.0m、深さ約0.5mの南北に細長い土坑で、土師器杯A・皿A・高杯・鉢B・甕、黒色土器片、須恵器杯・盤・甕、灰釉陶器椀・綠釉陶器片、釘状鉄製品、炭化材が整理箱で7箱分出土した「土器溜まり」である。遺物の大半はII-4期に属するものだが、遺構の成立年代はII-3期まで遡らせて考えられる。

SD1460 SK1459の北に続く長さ約7.5m、幅は東肩を近世の溝に壞されているため不明だが、検出幅で約1.2m、深さ約0.3mの断面が弓形の浅い溝で、土師器杯A・杯B・皿B・椀・高杯・甕A・甕B・須恵器鉢・灰釉陶器椀・皿、綠釉陶器椀などII-4期を中心とする遺物が整理箱で約30箱分出土している所謂「土器溜まり」だが、これも遺構の開削時期はII-3期に遡らせて考えられる。

SD8066 第124次調査区内で、SD1460と約2.4mの間隔を開けて並走する、長さ約3.7m、幅約0.9m、深さ約0.9mの断面U字形の溝で、土師器杯A・杯B・皿B・椀B・甕A・

	瓶・竈、ロクロ土師器椀・須恵器杯B・高杯・壺・甕、灰釉陶器椀・皿・壺などII-4期の遺物が整理箱16箱分出土している所謂「土器溜まり」となっているが、開鑿時期は遡らせて考えられる。
SK8065	SD8066の北にあるSD8066に埋土を重複される長さ約2.0m、幅約1.0m、深さ約0.8mの深い土坑で、出土遺物は少なく、土師器杯類が僅かに見られるのみである。
SD8069	SD8063・8064の南に約2.4mの間隔を開けて並走する、長さ約4.8m、幅約0.9m、深さ約0.9mの断面「U」字形の溝で、やはり西端は調査区内で途絶し、さらに西への延長は確認できない。土師器杯A・杯B・皿A・甕・須恵器蓋・甕や炭化材が3箱分出土しているが、これもさらに遡った開削時期が想定される。
SK8072	SD8069の東に続く土坑で、長さ約2.3m、幅約1.5m、深さ約0.4mの橢円形土坑で、底部の凹凸が著しい。土師器杯A・皿A・台付皿が整理箱で2箱分出土している。やはり遺構の開削時期はII-3期頃に遡らせて考えられる。
SD1457	SK8072を北東の角として、SD8069が直角に南に折れた位置にある長さ約5.2m、幅約1.3m、深さ約0.3mの浅い断面「U」字状の溝で、大部分を第29次調査で検出した。II-4期の土師器が出土しているが、遺構の成立時期はやはりII-3期頃に求められる。この直角に折れる平面形になるSD8069、SK8072、SD1457は、SD8063・8064、SK1459、SD1460等と対称的な位置関係にあり、共存していたものと考えられる。
第119次調査区	調査区中央部にある東西方向の溝で、検出長約26.4m、幅約0.5~0.7m、深さ約0.1~0.15mで僅かに西から東に向かって傾斜するが、東は同じくII-3期のSK7930の手前で途切れるため、区画外への排水溝とは考えにくい。西は調査区の外へ延び、第124次調査区へ続くと見られ、近世以降の攪乱のため確認できないものの、II-3期以降のSD8066に接続している可能性は高いと見られ、これによりかつてSD6810で囲んだ鍛冶山西区画北東部の一画が再び区画されていると考えられる。
SD7924	出土遺物にはII-4期までのものがあるが、遺構の成立期はII-3期に遡らせて考えられる。ただし、埋土が同じくII-3期のSB7934の柱穴を壊しているので、最終埋没はこれより後である事は明らかである。
第98次調査区	第124次調査区のSD1460の北の延長が確認でき、土坑状に掘鑿された溝が重複しながら北に続く。
SD6750	SD1460の北で一段落ち込むように掘られた溝である。全長約9.0m、幅約1.7m、深さ約0.4mの断面が浅い「U」字形の溝である。II-4期の土師器杯A・台付杯・皿A・皿B・甕・須恵器椀・壺・鉢、綠釉陶器椀や棒状の不明土製品が第98次調査で13箱、第124次で17箱出土している。
SK6751	SD6750底部の土坑状の落ち込みである。検出長約3.2m、幅約1.3m、深さ約0.4m、出土遺物は少なくII-3~4期の土師器杯A・甕・須恵器盤の破片が少量出土した。SD6750の下部で検出されており、SD6750の埋没に若干先行すると見られる。
SD6749	SK6751の北に続く土坑状の溝で、北半が土坑状に落ち込む。長さ約6.0m、幅約1.5m、深さ0.3~0.5mで、少量の土師器杯A・皿A・椀・須恵器甕、木炭片が出土した。

SK6754	SD6749・SK6751に接する南北2.2m、東西1.0m、深さ0.5mの土坑で、出土遺物は土師器片が少量見られるのみで、SD6749・SK6751と一連のものと考えられる。
SD6748	SD6749の北に続くと見られる長さ約4.5m、幅約1.9m、深さ約0.4mの溝で、底部に土坑状の凹凸が見られる。出土遺物には土師器杯A・皿A・鉢・甕や須恵器小片があるが、磨耗が進んでいる。
SK6814	SD6749やSK6751の東に約2.5mの位置にある土坑で、検出長約2.0m、幅約1.6m、深さ約0.5mで出土遺物はほとんど無いが、位置的にII-3期の区画施設の一部である可能性がある。
SD6795	以上の区画溝との連関は不明だが、第98次調査区の東部でII-2期のSK6791に重複する検出長約3.4m、幅約0.7m、深さ約0.6mで、西側を搅乱土坑に壊されており、全長は不明ながら、東端は南北溝SD6786を越えない。土師器杯A・皿A・鉢・鍋の破片が少量出土している。検出長が短いため明確ではないが、西側にあるSD6748・6749などに直交する可能性がある。
区内内建物	上記の区画施設と見られる溝内の建物は、掘立柱建物が9棟ある。 第109次調査区でのII-2期には、SB7370・1430といった庇付きの東西棟が連続して建てられていたが、II-3期にはやはり庇の出は持つもののSB7412の南北棟に切り換えられ、以後2回の建て替えが行われ、古い順からSB7412→7411→7410である。
SB7412	3棟のうち最も古いもので、桁行5間×梁行3間の南北棟で東面に庇を持つ。柱掘形は一辺1.2~1.3mの方形で、残りがよく遺構面から1.1~1.2mの深さである。柱痕跡は他の2棟に重複されており不明である。柱間は桁行で2.4m、梁行で3.0m等間で庇の出は2.7m、柱痕跡は直径約0.4mである。
SB7411	SB7412を建て替えたもので、桁行6間×梁行2間の南北棟で北面に庇を持つ。柱掘形は一辺約1.2~1.3mの方形で、柱間は桁行2.4m、梁行2.7m等間で、庇の出は2.7m、柱痕跡は直径約0.4mである。
SB7410	SB7411を建て替えた桁行5間×梁行3間の南北棟で、再び東面に庇が付く。柱掘形はこれまでと同規模で、柱間は身舎部分で2.4m等間、庇の出が2.7m、柱掘形は約0.4mである。掘形から鉄製紡錘車が出土した。 SB7410は、II-4期まで存続している可能性がある。また、SB7412・7411・7410は、いずれも外郭掘立柱構に棟方向を揃える。
SB2700・7405	いずれも第44次調査区から第109次調査区にかけて検出された南北棟で、SB7405が古い。



SB7405は桁行5間×梁行2間、身舎部分の柱掘形は一辺約0.8mの方形で、柱痕跡は約0.3m、柱間は桁行2.1m、梁行約2.3mである。この建物は概報段階では東側に1間分の庇の出を想定していたが、先述の通り、

この部分は再検討した結果、掘立柱塀となる可能性が高いため、掘立柱塀SA7482とした。

SB7405を建て替えたSB2700は、桁行5間×梁行2間で、柱掘形は一辺0.8m前後とSB7405よりやや大きい。柱間は、SB7405と同規模である。

間仕切りの掘立柱塀との関係を見ると、SA7400ないしSA7170から見るとSB2700で身舎の柱筋との距離が約2.4m、SB7405で約3.0mでSA7482と柱筋を揃えた形で建てられたものと見られる。

SB6720～6722 第98次調査区で検出した南北棟SB6720～6722は、桁行は5間で、梁行は調査区外へ伸びていて、西側の庇の有無は不明ながら身舎部分としては2間の規模と想定される。重複しており古い順にSB6722→6721→6720の順である。

SB6722の柱掘形は一辺約1.2mの方形で、柱痕跡は直径約0.4mである。柱間は2.4m等間で、外郭掘立柱塀とは柱筋を揃えないものの、棟方向は一致させる。

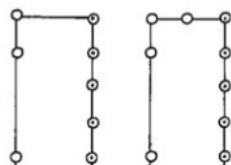
SB6721 SB6722を建て替えたもので、同一規模と思われるが、柱痕跡は柱穴の重複のため不明である。

SB6720 柱痕跡は直径約0.40mである。SB6722・6721・6720の一群は、第109次調査区のSB7412・7411・7410のグループと対応する位置にあり、建て替えの回数も一致する。SB6720はII-4期まで存続する可能性がある。

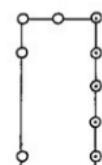
この二群の間は、それぞれ最も古いSB6722の東側柱筋とSB7412の西側柱筋の間で約42m(140尺)の距離があり、計画的な配置が窺われる。また、現在民家があるために未調査のこの間の部分にさらに東西棟などが存在する可能性もある。

なお、この二つの建物群を囲むように後述する連続した土坑状の溝が巡っており、この部分が明確な一つの単位をなしていた事が窺われる。

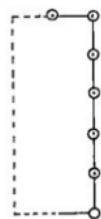
SB7415 第109次調査区の先述したグループの南で検出された建物である。大部分は調査区南外へ伸びており、桁行1間以上×梁行2間を確認したのみだが、南北棟になると見られる。柱掘形は一辺0.8～1.0mの方形で、柱痕跡は直径約0.25mである。柱間は桁行・



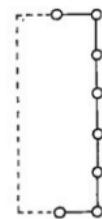
SB7405



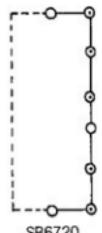
SB2700



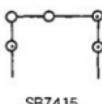
SB6722



SB6721



SB6720



SB7415

梁行とも1.8m等間で規模が小さい。しかし、北側梁行柱筋を東側のSB7395に柱筋で約3.2mの間隔を開けて揃えており、共存する建物と考えられる。

SB7395

SB7415の東側の建物で、大部分が調査区外へ延びて規模は確定できないが、桁行4間以上、梁行2間の東西棟と想定される。柱掘形は一辺約1.0~1.3mの方形で、直径約0.4mの柱痕跡があり、柱間は桁行2.4m、梁行2.7m等間である。北側桁行柱筋をII-2期のSB7380と揃えており、これと関連して建てられた可能性もある。

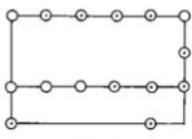


SB7395

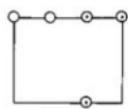
③区画北東部の建物群

SB6745

第98次調査区で検出された桁行5間×梁行3間の東西棟で、南側に庇を持つ。概報段階では桁行9間×梁行3間の建物として報告されていたが、南側柱列及び庇柱列が明確でなく、またこの建物の東5間分の柱掘形と西3間分の柱掘形の規模がやや異なる点から、本報告においては2棟の別の建物として報告する。柱掘形は一辺約0.6mで、柱間は桁行2.1m、梁行2.2mで、庇の出は2.1mである。また時期についても、概報段階では平安時代初期（II-1期相当）としていたが、掘立柱屏S A6780位置関係や、柱掘形内の出土遺物の再検討からII-3期のものと判断した。



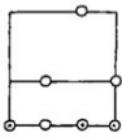
SB6745



SB6818

SB6818

第98次調査の概報段階でのS B6745の西側部分を今回新たに別の3間×2間の東西棟とした。柱間寸法はS B6745とはほぼ同じと考えられるが、柱掘形は一辺0.7mほどとやや大きくなる。棟方向もS B6745とわずかに異なる可能性があり、時期差も想定されるが、柱掘方内からII-1期に相当する遺物が出土しているものの、柱掘形が複数の当該期の遺構に重複しており、S A6780との位置関係や、II-2期には開整されていたとみられるSD6810との重複関係からもII-3期のものと判断した。

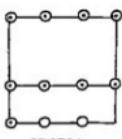


SB6730

第98次調査区で検出した桁行3間×梁行3間の東西棟で、南側に庇を持つ。柱掘形は一辺約0.6mの方形で、柱痕跡は径0.2mである。柱間は桁行2.1m、梁行約2.15m、庇の出は2.7mで、棟方向はE5°Nとこれまでの建物よりやや東に振れる。

SB6730

SB6730を建て替えたもので、身舎部分の規模と棟方向は一致するが、庇の出は2.4mとやや縮小する。



SB6731

SB6731を建て替えたもので、桁行4間×梁行3間で南面に庇を持つ。柱掘形は一辺約0.5mの略方形で、柱痕跡は直径約0.3m前後、柱間は桁行約2.0m、梁行約2.3mと

SB6732より縮小傾向にある。庇の出は2.4mである。このSB6732はII-4期まで存続していた可能性がある。棟方向は、E $5^{\circ}N$ である。

SB7933・7934 II-1～2期にかけて、区画北東部の一画で、これまでの斎宮跡発掘調査で最大の建物であるSB7950の後、5回にわたり庇を持つ東西・南北棟の「鍵の手」状の建物配置が見られたが、この段階になってその構成が消失し、比較的小規模な南北棟のみが建てられるようになる。いずれも第119次調査区で確認されたもので、北の第124次調査区まで延長していると見られるが、ここでは後代の遺構により柱穴は残存していない。

SB7933は桁行で1間分、梁行で2間を検出した。柱掘形は一辺約1.0～1.2mの方形で、柱痕跡は確認されていない。柱間寸法は桁行が3.0m、梁行で2.4m等間である。

SB7934はSB7933を建て替えたもので、桁行3間分、梁行3間で、西側に庇が付く。柱間は桁行2.4m、梁行2.4m等間、庇の出は2.4mである。身舎の柱掘形は一辺約1.0～1.2mの方形で、柱痕跡は直径約0.35m、庇の柱掘形は一辺約0.4mの方形である。

④区画中央部付近の建物

SB7196 第105次調査区内で、SB7195の後を受けて建てられたものである。西側柱列の4個を確認しており、桁行3間、梁行2間の南北棟が想定される。柱掘形は一辺約0.7～0.9mの略方形で、柱痕跡は直径約0.3m前後のものが一部認められた。柱間は桁行と考えられる側で2.4m等間と考えられるが、SB7195などとともに、今後再検討が必要な構造であろう。

土 坑 II-2期と同様、土坑は区画内でも分布に依然①区画北西部、②区画北東部に偏りが見られるがやや拡散傾向にある。以下同様にこの地域と調査区分別に報告する。

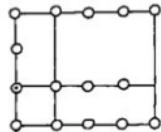
①区画北西部の土坑

(1) 第29・44次調査区

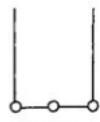
SK1413 第29次調査区の北に一部がかかる土坑で、全体は不明である。少量の土師器杯A・椀Aが出土している。

SK2650 調査区東部の東西5.4m×南北5.0m、深さ約1.0mの大型土坑で、整理箱にして約300箱と、斎宮跡発掘調査史上最も大量の遺物が出土しており、斎宮跡土器編年上のII-3期の基準資料となっている。詳細は第四章で触れるが、約99%を占める土師器杯A・椀A・皿Aなどの供膳形態に多様な黒色土器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器が出土しており、全国最古級と見られるひらかな墨書き土器も含まれる。

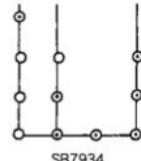
SK2688 調査区中央部南端の約6.8m×4.6m、深さ約0.8mの大型土坑で、土師器杯A・皿



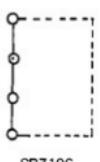
SB6732



SB7933



SB7934



SB7196

	A・甕、須恵器甕が整理箱で1箱分と、規模に比して出土遺物は少ない。
SK2695	調査区北東の東西約2.3m×南北約2.0m、深さ約0.5mの土坑で、整理箱63箱分と大量の遺物が出土しておりSK2650に次ぐ出土量である。土師器杯A・杯B・杯G・皿A・高杯・平底鉢・粗製台付鉢・甕A・甌、黒色土器椀、須恵器杯B・蓋・盤・甕、灰釉陶器椀・皿、綠釉陶器椀・蓋・香炉と少量の炭化材が出土している。
SK2701	調査区中央部の直径約2.0m、深さ約0.3mの浅い円形土坑で、少量の土師器杯A・皿A・甕、須恵器甕が出土している。
SK2702	東西約2.5m×南北約2.1m、深さ約0.3mの楕円形土坑で、少量の土師器杯A・皿A・甕、須恵器甕が出土している。埋土の重複関係でSK2701より新しいと見られる。
SK2703	東西約2.6m×南北約1.1m、深さ0.4～0.7mの長方形の土坑で、底部に一段落ち込みがある。土師器杯A・皿Aが少量出土している。
SK2704	調査区東端の東西1.7m×南北1.0m、深さ1.0mの深い土坑である。土師器杯A・皿A・須恵器甕、綠釉陶器の小片が少量出土している。
SK2694	調査区南東の東西約2.2m×南北約1.6m、深さ0.3mの楕円形土坑で、土師器杯A・皿A・椀A・須恵器甕が少量出土している。
SK2696	調査区東の東西約5.7m×南北約4.0m、深さ約0.7mの大型土坑だが、規模に比して出土遺物は少なく、土師器杯A・皿A・甕、須恵器甕が少量出土したにとどまる。
SK2697	調査区南端で検出した直径約3.0m、深さ約0.3mの円形と推定される土坑で、少量の土師器片が出土したにすぎない。
SK2698	調査区南東隅の東西約5.4m、深さ約0.6mの略楕円形と考えられる大型土坑だが、出土遺物は少なく、土師器杯A・皿A・甕、須恵器甕が少量出土したにすぎない。
二種の土坑	以上見てきた第29・44次調査区の土坑は、SA7400などの間仕切りの掘立柱塀以西に位置するものであるが、調査概報で既に指摘されているとおり、遺物の出土状況からは多量の土器類を出土する土坑とそうでない土坑に区別できる。 前者にはSK2650・2695が、後者にはそれ以外の土坑があたる。SK2688やSK2696のようなSK2650に形状の上では類似したものでも出土土器は極めて少なく、土器の廃棄を中心とするSK2650と異なり、有機物の遺物が廃棄されていた可能性も指摘されている。 また、検出時には不明瞭で埋土断面の観察からも確認できていないが、SK2650やSK2696などは形状から見ても本来短期間に複数の土坑の重複があった可能性もある。
(2) 第29・109次調査区	(2) 第29・109次調査区 SA7170などの東側に位置するものである。
SK1426	第29・109次調査で検出された直径約1.5m、深さ約0.4mの略円形土坑で、土師器杯・皿・須恵器短頸甕などが整理箱2箱分出土した。
SK7388	調査区南西の東西約2.8×南北約2.2m、深さ約0.25mの浅い土坑で、土師器杯A・椀A・皿A・須恵器甕が、整理箱で1箱分出土している。
SK7409	調査区中央部付近の直径約3.0m、深さ約0.4mの略円形土坑で、土師器杯A・皿A・甕A・須恵器甕が2箱分出土している。

- SK7422 調査区東端の検出長で南北約2.8m、深さ約0.8mの土坑である。
- SK7423 SK7422に接する南北約1.6m、深さ約0.3mの土坑で、土師器杯A・皿A・高杯・台付鉢、綠釉陶器小片、木炭が約3箱分出土した。埋土の重複関係ではSK7422より古い。
- SK7425下層 調査区南端の直径約4.0mと推定される深さ約0.2~0.6mの円形土坑で、底部に一段落ち込みがあり、下段をSK7425下層としてII-3期に、上段をII-4期のものとして捉えた。SK7425下層の部分は南北約2.5m程度の規模となる。土師器杯・皿・平底鉢・甕C・黒色土器片・灰釉陶器椀・綠釉陶器片がおよそ5箱出土した。
- SK7430 調査区西の南北約3.0m、東西約1.7m、深さ約0.5mの長楕円形の土坑で、出土遺物は多く、土師器杯A・杯G・椀A・皿A・須恵器蓋・杯・高杯・壺・甕、綠釉陶器椀・ミニチュア土器・土錐・木炭が多数の完形品を含んで整理箱で27箱分出土した。
- SK7432 調査区南東にある南北約4.0m、東西約4.0m、深さ約0.4mの不整形の土坑で、土師器杯A・皿A・須恵器杯・甕等が整理箱で約16箱出土している。
- (3) 第105次調査区
- SK7156・7157 SA7150に重複する直径約2.0m、深さ約0.4mの略円形の土坑で、土師器杯A・皿Aなどが少量出土している。
- SK7158 SK7157に接する一辺約1.8m、深さ約0.2mの方形土坑で、少量の土器片が出土した。
- SK7177 調査区南部の直径約4.5m、深さ約0.35mの不整形土坑で、土師器杯・皿の破片が少量出土した。
- SK7182 調査区北西隅の南北約3.7m×東西1.9m、深さ約0.3mの不整形土坑で、少量の土師器片が出土した。
- SK7183 SK7182の南の直径約1.8m、深さ約0.4mの円形土坑で、少量の土師器類が出土した。
- SK7184・7186 いずれも調査区西部の直径約3.0m、深さ約0.3mの不整形土坑で、少量の土師器類が出土している。
- ①区画北東部の土坑
- (1) 第98次調査区
- SK6743 調査区北西端近くの南北約1.5m×東西約1.0mのややいびつな方形で、深さは約0.3mの土坑である。その埋土上半には中心に南から北に流れ込むように完形品を含む土師器杯A・椀A・皿A・平底鉢を中心に、土師器碗B・甕A・須恵器蓋・黒笛90号笛式併行と見られる灰釉陶器椀・皿の小片と大量の木炭片が整理箱で8箱分出土した。
- 概報では特異な埋納方法による祭祀的な遺構と推定していたが、遺構底部から浮いた状態の出土である事、遺構の南側の肩から流れ込むような埋没状況を呈している事、共伴する炭化物は微細で、意図的な投棄によらずとも土器の間に流入する可能性が否定できない事から、本遺構のみを特異なものと判断できないと考える。
- SK6746 調査区北西の約3.7×約3.1m、深さ約0.9mの楕円形土坑だが、規模の割に出土遺物は少なく、土師器杯A・皿A・須恵器蓋・灰釉陶器小片・綠釉陶器小片・不明鉄製品と木炭片が1箱分出土しているのみである。

- SK6763 調査区中央の残長約1.5m、幅約1.1m、深さ約0.2mの土坑で、遺物は出土していないが、II-3期と見られるSB6745より新しく、これ以降の時期のものと判断した。
- SK6768 調査区中央やや南寄りの直径約3.2m、深さ約0.3mの略円形の土坑で、整理箱で1箱の土師器杯A・皿A・皿B・甕A・須恵器杯B・壺類、灰釉陶器椀、京都産と見られる綠釉陶器椀が出土しており、一部II-4期まで降るものも含む。
- SK6771 調査区南部の約2.0m×約1.5m、深さ約0.7mの楕円形の土坑で、整理箱3箱分の土師器杯A・杯B・皿A・鉢A・鉢B・甕A・鍋、須恵器杯B・椀・蓋・甕の他、弥生土器片・炭化物が出土している。一部II-4期のものも含む。
- SK6772 SK6771に接する約2.2m×約1.6m、深さ約0.5mの楕円形の土坑で、出土遺物は少なく、土師器杯A・杯G・皿A・椀A・甕A・須恵器や綠釉陶器の小片、土錘が出土した。重複関係ではSK6772の方が古い。
- SK6773 調査区南部の土坑だが、周囲を後世に搅乱されており、東西約1.0mの検出長以外の規模・形状は不明瞭で、遺構検出面からの深さは約0.5mである。整理箱1箱分の出土土器は大部分はII-2期と見られるが、器表面の磨耗も進んでおり、一部II-3期の古相と見られるものもあるため、II-3期の遺構と捉えた。
- SK6779 調査区北東隅のおよそ約4.2m×約2.8m、深さ約0.9mのいびつな円形土坑で、底部が段をなしているため、本来は複数の土坑が重複していた可能性がある。出土遺物は極めて少ないが、II-3期の土師器杯A・皿A・甕類、須恵器甕、木炭が出土した。
- SK6788 調査区南東隅の周囲を他の遺構で掘削されており、検出長で約1.0m×約0.7m、深さ約3.0mの円形土坑になると見られる。出土遺物は土師器杯A・椀A・甕、須恵器甕等が少量見られたのみで、SD6786やSK6791より古い。
- SK6791 調査区南東隅の約3.0m×約2.2m、深さが約1.0mの楕円形土坑で、遺構の規模に比して出土遺物は少なく、土師器椀A・皿A・須恵器小片、弥生土器片が少量出土したのみである。重複するII-2期のSK6792より新しい。
- (2) 第124次調査区
- SK8046・8047 調査区西部で検出された土坑だが、遺構上部のはとんどを削平されている。近世以降の搅乱を受けているが、出土した土師器杯Aの小片からこの時期と想定した。
- SK8055 SB8062廃絶後に掘られた南北約1.1m、東西約0.4m、深さ約0.7mの細長い土坑で、少量の土師器杯A・皿A・甕、須恵器蓋が出土している。
- SK8065 調査区中央部の土坑で、上面を一部SD8066に削平されているが、約2.3m×約1.7m、深さ約0.6mの土坑で、出土遺物は少なく、少量の土師器片が出土したのみである。
- SK8071下層 埋土が上下2層に分層できた土坑で、上層もII-4期の「土器溜まり」となっている。南北約3.0m×東西約2.0m、深さ約0.6mの不整円形土坑で、整理箱で2箱の土師器杯A・皿A・皿B・甕A・甕B、京都系の須恵器鉢が出土している。
- SK8086 第98次調査区と一部重複する、南北約2.0m×東西約1.6m、深さ約0.4mの楕円形土坑で、西に接するSK6772より埋土の重複関係で新しい。少量の土師器杯A・甕が出土している。
- SK8092 調査区東部の直径約1.1m、深さ約0.3mの小規模な土坑で、少量の土師器杯A・甕

が出土している。

SK8093

調査区東部の直径約4.3m、深さ約0.4mの大型土坑で、底部は平らな形状になっている。土師器杯A・杯B・皿A・蓋・高杯・鉢B・甕A・甕C・瓶・竈、黒色土器片、須恵器杯A・杯B・蓋・壺・甕、灰釉陶器碗・皿・壺、土錘などが整理箱で8箱分出土しているが、大部分はやや磨耗の進んだ細片で、所謂「土器溜まり」土坑とは性格を異なるものである。

(3) 第119次調査区

SK7928

調査区北部の直径約1.2m、深さ約0.4mの円形土坑で、第124次調査区にも一部が拡がっている。土師器杯Aなどが少量出土している。

SK7929

調査区北部の長径約2.4m、深さ約0.2mの土坑で、これも第124次調査区にも一部が拡がっている。土師器杯Aなどが少量出土している。

SK7930

調査区北東部の東西2.8m、南北約7.5mの深さ約0.1~0.3mの溝状の土坑で、土師器杯・皿・鉢・甕などの小片が磨耗の進んだ状態で出土しており、埋没状況は、第124次調査区のSK8093などに共通する

SK7931・7932

SK7930の北西にある直径約2.0mの楕円形土坑で、土師器類の小片が出土している。

(6) 斎宮跡第II期第4段階 (II-4期)

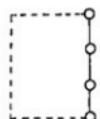
この段階で、鍛冶山西区画の構造と機能は劇的に変退し、建物は極めて一部のものが見られるのみになり、前代には成立していた区画内部を細かく細分する溝や土坑が大量の土師器供譜形態などによって埋められていく。これまでの概報等でも検討されているように、「内院」としての機能は明らかに失われていく段階と考えられる。

建物の群構成は既に見られないが、記述上これまでの区画内の地区区分に従い建物遺構から報告する。

①区画北西部

SB7372

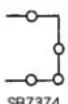
第109次調査区中央北側で東側桁行側柱筋のみ3間分検出しており、南北棟と考えられる。柱掘形は一辺約0.5mの略方形で柱痕跡は明らかではない。桁行の柱間は2.1mで、棟方向はN 5°Wとこれまでの建物よりやや西に振れている。



SB7372

SB7374

第109次調査区中央北側にある桁行2間以上×梁行2間の東西棟と考えられる建物である。柱掘形は一辺約0.6mの略方形で、柱痕跡は不明である。柱間は、桁行約1.6m、梁行約2.0m等間で、棟方向はE 5°Nで、従来の建物よりやや北に振れている。



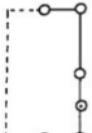
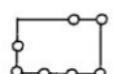
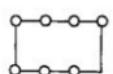
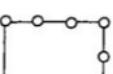
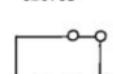
SB7374

第109次調査区内のII-4期に相当すると見られている上記2棟は、いずれも部分的な検出にとどまっているため、今後の調査によって再検討すべき要因が大きい。

②区画北東部

SB6728

第98次調査区で検出された桁行4間の南北棟だが、西側桁行柱筋は調査区外へ伸びて梁行は1間分しか確認されていない。柱間は桁行が2.0m、梁行は2.3mで、柱掘形

	は一辺約0.5m、柱痕跡は直径約0.2mで、棟方向は、N 4°Wである。	
SB6729	第98次調査区西側にある2間×2間の総柱建物で、柱間は東西1.8m、南北1.6mである。柱掘形は一辺約0.45mの略方形で、柱痕跡は直径約0.2mで、棟方向は、E 4°Nである。	
SB6733	第98次調査区の4間×2間の東西棟で、柱間が桁行約1.7m、梁行約1.8m、柱掘形は直径約0.3mの円形と小規模で、棟方向もE 6°Nと以前の建物に比してやや大きく向きを変える。	
SB6734	重複するSB6733より新しい3間×2間の東西棟で、柱間が1.7mで揃う他はSB6733と同規模である。棟方向は、E 7°Nとやはりやや大きく振れる。	
SB6737～6739	いずれも第98次調査区のほぼ中央にある3間×2間の東西棟である。柱間は、SB6737は桁行1.7m、梁行1.5m、SB6738は桁行2.0m、梁行2.15m、SB6739は桁行1.7m、梁行1.5mで、柱掘形は、径約0.6mの円形である。棟方向は、それぞれE 6°N、E 9°N、E 1°Nとばらつきが大きい。	
土器溜まり 溝・土坑	II-3期には開鑿されたと見られる区画溝や溝状となる土坑を中心に、これらの遺構の廃絶にともなうようにII-4期の後半を中心大量の土師器供膳形態が廃棄されており、一部を除き第98・124次調査区内の区画北東部に集中する。遺構番号順に見て、SD 1457・1459・1460・6750～6752・8066・8069、SK8056・8057～8059・8071上層・8072・8073がこれにあたるが、これ以外でも第109次調査区のSK7425上層からこの時期の遺物がまとまって出土している。遺物の内容は土師器杯Aや退化した皿Aの他、小型の台付杯・台付皿・平底鉢・甕・把手付甕・須恵器鉢・甕・灰釉陶器碗・綠釉陶器碗・皿などに越州窯系青磁碗片などが含まれる。また、一部ロクロ土師器の椀と見られるものあり、その時期的な上限を示すものと考えられる。	
その他の土坑	全体に少なく、また規模も小さい。	
SK7408	第109次調査区北部の南北約1.9m×東西約1.6m、深さ約0.2mの略方形の土坑で、遺物は少ない。	
SK7431	第109次調査区南東隅近くの南北約1.6m×東西約1.4m、深さ約0.2mの不整円形の土坑で、土師器杯・台付杯類が整理箱で4箱分出土した。	
SK7955～7960	第119次調査区の南東隅で検出した土坑群で、直径0.5～1.5m前後、深さ0.2～0.3mの梢円形土坑で、埋土の重複関係は明らかではない。埋土中には少量の土師器小片の他、0.05～0.1m大の礫が含まれていた。	
SK8083	第124次調査区中央部の南北約1.4m×東西約0.8m、深さ約0.3mの小土坑で、土師器杯A・盤B・甕A・竈、須恵器蓋・甕、製塙土器と炭化材が少量出土している。	

SK8094 第124次調査区東部の南北約1.9m×東西約1.0m、深さ約0.3mの楕円形土坑で、小片が多いが、土師器杯A・皿A・台付杯・甕B・竈、須恵器杯・甕、灰釉陶器椀・壺、綠釉陶器と炭化材が整理箱で2箱分出土した。

(7)斎宮跡第III期第1段階 (III-1期)

前段階をもって、鍛冶山西区画はほぼ機能的に収束しており、遺構は極一部を除き見られなくなる。

SB1431 第29・109次調査区で検出された4間×2間の南北棟で、柱掘形は0.4~0.5mの略方形で、柱痕跡は直径約0.2mである。柱間は桁行1.85m、梁行1.9m、棟方向はN2°Wでこれまでの区画北西部の建物とは明らかに異なる。



SK7421 第109次調査区中央東部で2.4m×2.2m、深さ約0.8mの略円形の土坑で、底部の形状は不整形である。土師器台付皿などが少量出土している。

SK7429 第109次調査区南部の南北2.4m×東西1.8m、深さ約0.3mの略円形の土坑で、土師器杯・皿類やロクロ土師器の小片が出土している。

SD6512 区画東外となるが、第92次調査区北部で検出された幅約1.2m、検出長約18.5mの南北溝で、調査区北端で僅かに西へ屈曲する。SD6513・6514・6518の埋土を掘り込む状況で検出された。土師器小片が僅かに出土したのみで、詳細な時期は不明である。

(8)その他の遺構

詳細な時期が不明な遺構のうち、奈良時代～平安時代の内院存続期のものと見られるもので重要と考えられるものについて記述する。

第124次調査区 第124次調査区東部でI-4期のSB6740やII-1期に開墾され、II-3期頃に埋没するの焼土面 と見られるSE8085の埋土上面で直径約0.2mの焼土面が約3mの間隔を開けて確認された。上面は明橙褐色に変色しており、周辺には微細な炭化材の混在も認められた。変色部分の断ち割を行ったところ厚さ約0.1mにわたり変色・硬化しており、かなり強い被熱を受けた事が窺われる。埋土内からの遺物の出土は見られず、詳細な時期は不明だが、周辺にはII-2・3期の土器溜まりが分布しており、こうしたものとの関連性からII-3～4期頃のものと推定される。

2 鍛冶山西区画の遺物

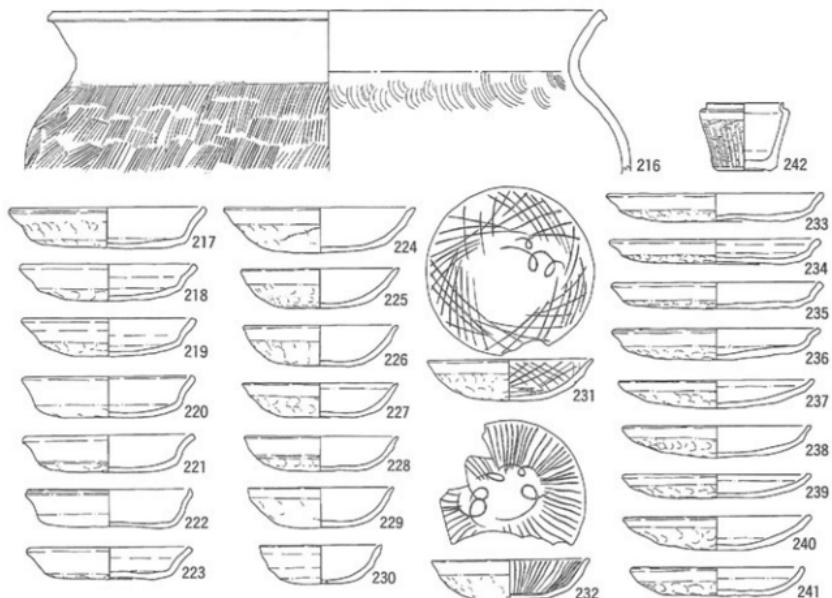
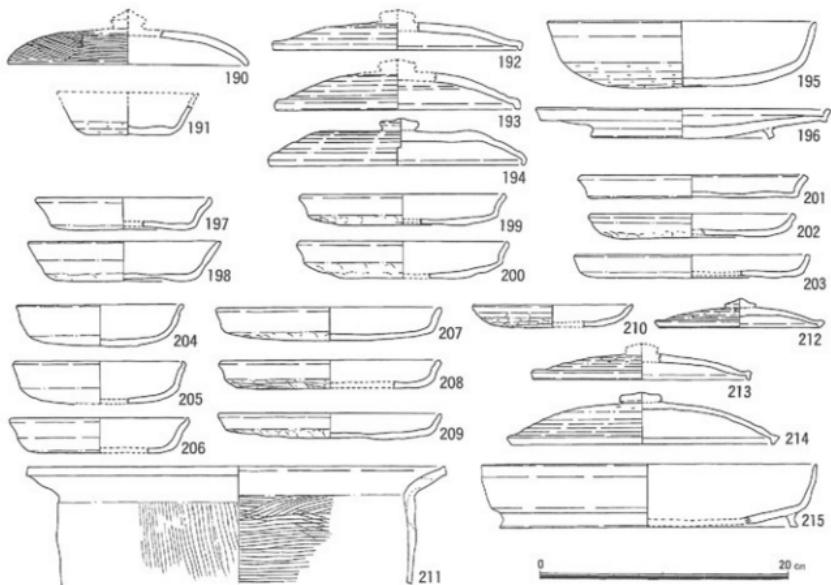
鍛冶山区画の出土遺物量 出土遺物については、大半が土師器を中心とする土器類であり、区画の約35%の調査が終了したにすぎないが、土器類を中心に極めて大量の遺物が出土している。遺物量について概述すると調査年度の古いものから見ると、一部区画外まで続く調査区もあるが、第29次調査で整理箱で110箱、第44次調査300箱、第46次調査22箱、第88次調査106箱、第92次調査25箱、第96-4次調査1箱、第98次調査170箱、第105次調査80箱、第106-3次調査4箱、第109次調査250箱、第119次調査128箱、第122次調査1箱、第

124次調査340箱、第131-1次調査1箱で、総合計1538箱になる。このように見ると、調査面積の差異もあるが、本区画内でも遺物の出土量に格差がある事がわかる。

以下銀治山西区画出土遺物について、編年上の基準資料は第四章で報告するので、比較的良好な一括性を持つもの、区画の性格上取り上げるべき内容もの、あるいは極めて特殊で重要な出土遺物に絞って、主に土坑を中心に遺構を単位として報告する。

(1) 斎宮第II期第1段階 (II-1期)

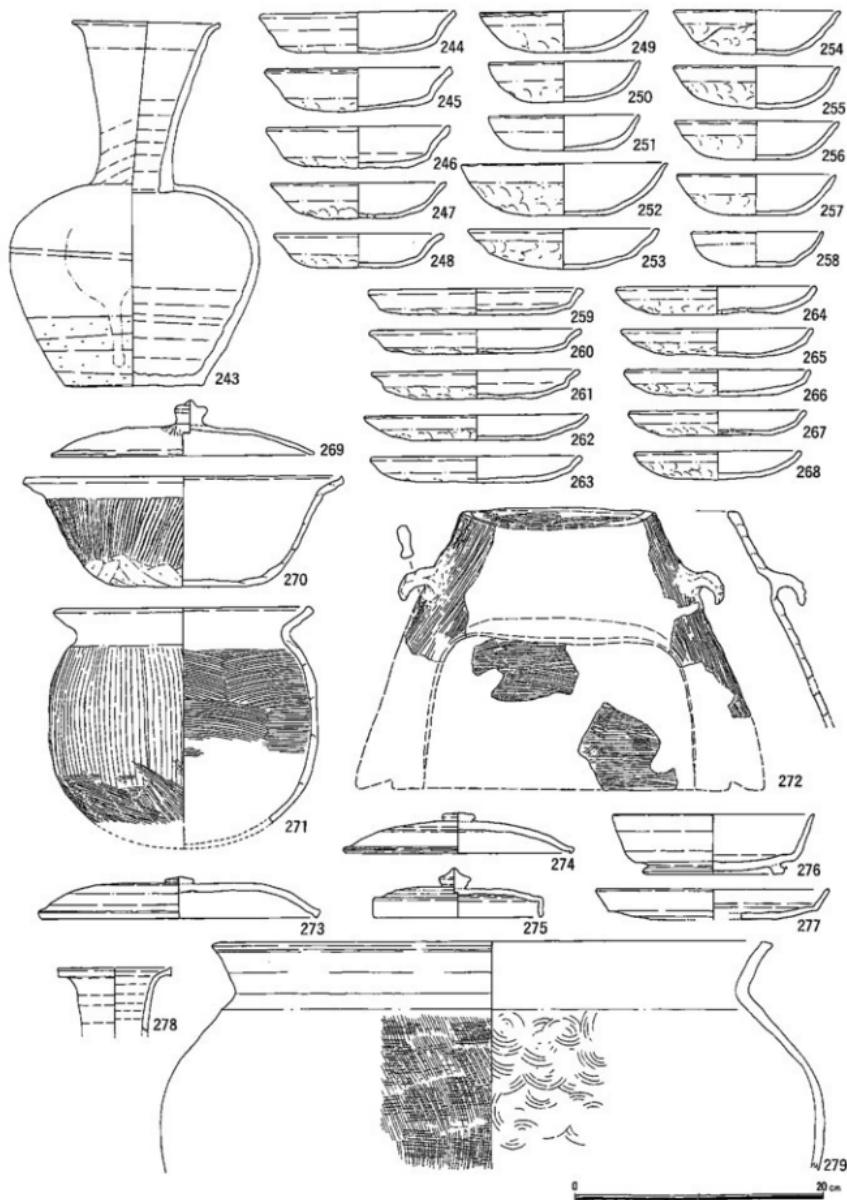
- 僅少な資料** 遺構の報告でも述べたとおり、I-4期～II-1期にかけて、出土状況の良好な資料はほとんど無く、II-1期で僅かに土坑からややまとまった資料が見られるのみである。この段階と見られる大型建物が展開している状況と対称的である。
- SK6762** 第98次調査区の土坑で、遺構の規模に比して出土量は整理箱2箱と少ない。
土師器類は細片が多いが、蓋(190)はつまみ部が欠損するものの精緻な胎土で、外面全面に水平方向のヘラミガキを施す。
- 須恵器** 杯A(191)は、体部下半を回転ヘラケズリで成形し、底部外面はヘラ切り調整を行う。また、低平な蓋(192・193)が多く、口縁端部のかえりもあまり強くない。(195)は、口径21.7cmの鉢で、底部外面全体を回転ヘラケズリで整形する。(196)は、口径23.8cm、高さ2.4cmの低平な台付盤で、内面は転用硯として使用されている。(196)は白色の胎土で美濃須衛窯の製品である可能性がある。
- SK6759** これも第98次調査区の土坑で、全体で整理箱1箱分と出土量は少ない。
- 土師器** 杯A(197・198)と皿A(199～203)を中心で、杯Aは、底部から体部にかけての屈曲が強くなるが、(197)の底部外面はナデ調整するe手法、(198)ではヘラケズリするc手法が見られる。皿Aでは、器高2.5～3.0cm前後の深いもの(199・200)と、2.0cm以下の浅いもの(201～203)がある。調整はe手法によるが、(202・203)のように底部から口縁部にかけて内湾させる前段階の形式のものも含まれる。この他に土師器では杯B・蓋・高杯が、須恵器では杯A・Bや蓋もあるが小片である。また木炭小片も出土している。
- SK7179** 第105次調査区の土坑で、重複関係からI-4期の外郭掘立柱壙西辺SA1411の柱穴により新しく、後続するSA2675より古いと見られ、これらの掘立柱壙の時期を想定する上で根拠となる数少ない資料である。出土量は整理箱で1箱分と少ない。
- 土師器** まだ腰部に内弯する傾向を残す杯A(204～206)や、口径18cm前後の皿A(207～209)が主体となる。皿Aにはc手法を施すもの(208)がある。(210)は形態的に極めて少ないもので杯Cの残存形態のものとした。(211)は、強く「く」の字に屈曲する口縁部を持ち、半球形の体部になると見られるもので、甕Cあるいは鍋になると見られる。土師器には、この他図示していないが蓋・高杯がある。
- 須恵器** 口縁端部を強く内側に屈曲させる蓋(212～214)があり、(214)は天井部が丸く擬宝珠状のつまみが付く。(215)は口径27.4cmの大型の杯Bで残存部位は少ないが、底部中央が接地するほど大きく下がる形状のものと見られる。(214・215)も美濃須衛窯の製品である可能性がある。



第15図 鍛治山西区画の遺物(1)

SK6762 : 190~196、SK6759 : 197~203、SK7179 : 204~215、
SD6810 : 216、6753 : 217~242

SD6810 須恵器	第98次調査区の区画溝と見られるもので、全体に出土遺物は少なく、土師器類は小片が僅かに見られるのみで図示できないが、底部付近から須恵器甕Cの大型破片(216)が出土しており、この溝の時期の一端を示すものと考えられる。口径45.0cmの大型品で、外面に平行叩き目、内面に同心円状の叩き目を施し、白色の胎土を持つ。
SK6815 須恵器	第98次調査区の小規模な土坑で、須恵器長頸瓶の優品が出土している。(243)は、器高30.2cmの大型の瓶で、体部上半をロクロナデ成形したのち、下半を回転ヘラケズリで調整する。底部外面は無調整のままで、砂粒痕が残る。体部を成形したのち頸部を接合するが、頸部下半にはシボリ痕が残る。頸部から肩部にかけて緑灰色の自然釉がかかる。胎土は、黒色粒も混入するが総じて緻密で白色系の良好なものである。
(2)斎宮跡第II期第2段階 (II-2期)	
SK6753 土師器	この時期以降、区画内の各所に「土器溜まり」土坑が出現するのにともなって、出土遺物量も激増する。その大半はやはり土師器を中心とする土器類である。 第98次調査区の「土器溜まり」土坑である。検出時から大量の焼土・炭化材を含んでおり、焼けた拳大の円礫も含まれていた。土師器供膳形態を主体に整理箱10箱分の遺物が出土し、完形品や大型破片が多く、意図的な廃棄が窺われる。
SK8088 土師器	杯A(217~223)は、口径約15cmを中心にして14~16cmの幅にはば納まり、大小の分化はあまり明確に窺えない。椀A(224~232)は、口径16cm程度の大型のもの(224)と13~14cm前後の中型品(225~229・231~232)、10cm前後の小型品(230)に分化すると見られる。椀Aには内面に暗文を施すものが含まれ(231・232)、底部内面に螺旋状暗文、体部内面に放射状暗文を一段施す。(231)では、放射状暗文が格子状になっている。皿A(223~241)は、杯Aのように口縁が外反するタイプのもの(233~236)と、椀のように内弯するタイプのもの(237~241)に分かれる。外反するものは口径17cm前後、内弯するものは16cm前後に集中し、やや小振りとなる。これら土師器供膳形態はいずれもe手法により調整される。(242)は、壺Eで器高は5.5cmで、外面ヘラケズリ調整される。土師器ではこの他に甕・鍋の小片があるほか、須恵器は極めて少なく蓋・壺の小片が出土した。 第124次調査区の「土器溜まり」土坑で、整理箱で33箱分と大量の遺物が出土している。土器の時期区分上の区別はつかないが、複数の土坑が重複している可能性はある。大部分は土師器供膳形態を中心とする土器類である。
杯A(244~248)は、口径16cm以上の大型品、14~15cm前後の中型品がある。(244・245)のように比較的器壁が厚手のものから、(248)のように薄く、新相と見られるものまで幅がある。杯Gも一定量見られ(249~251)、椀Aと比べて厚手で、特に腰部が厚く、外面に成形時の接合痕がそのまま残り、胎土に砂粒が多く、色調もにぶい黄褐色系のものが多い。椀Aは、杯Aと同様の赤褐色系の胎土で、口径17cm前後の大型品(252・253)と14cm前後の中型品(254~257)、10~11cm程度の小型品(258)がある。皿A(259~268)には、口径16~17cm程度で口縁部が外反するもの(259~263)と、口径はほぼ同程度だが口縁部が内弯するもの(264~268)がある。皿類は杯類よりサイズの	



第16図 錫冶山西区画の遺物(2) SK6815:243、SK8088:244~279

バリエーションが乏しい。土師器では、この他に杯B・蓋(269)・鍋A(270)・甕A(271)・甌(272)がある。

須恵器 つまみ部が低平な杯蓋(273・274)や壺類の蓋と見られるもの(275)、杯B(276)、盤(277)、甕C(279)、細頸壺(278)がある。

このほかに、大量の炭化材が出土しており、整理箱5箱分にもなる。また、残存状況も良好で、長さ10cm、直径5~6cmのものが多量に埋土中に混在していた。樹種は未鑑定のため不明だが、広葉樹ではないかと考えられる。また、スサ入りの粘土塊や、出土土器にも被熱によると見られる赤変や、亀裂のあるものが多く。周辺で見つかっている明瞭な焼土面の存在とともに、火をともなう祭祀の形態が想像される。

SK1423 第29・109次調査区の「土器溜まり」土坑である。出土量は整理箱で8箱分と際立ったものではないが、多くの特殊遺物が出土している。

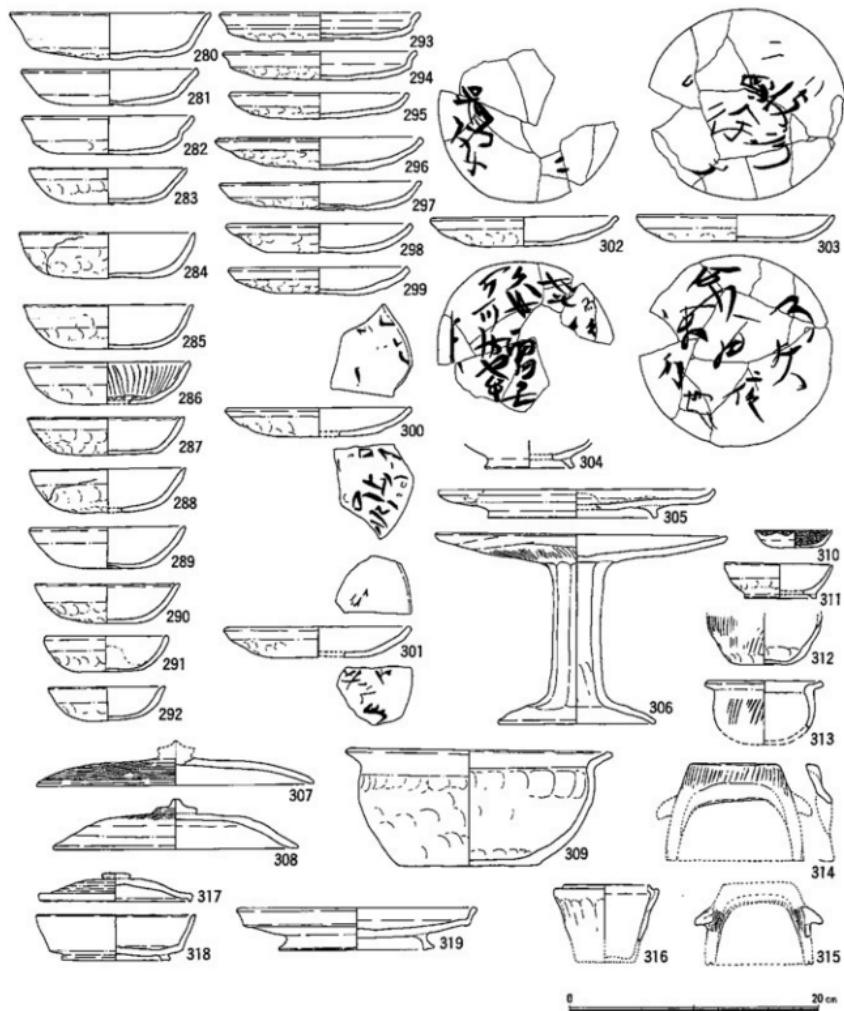
土 師 器 杯A(280~283)・椀A(286~292)・皿A(293~303)類は、SK6753・8088と同様の内容である。杯G(284)もあるが、口縁部に油煙が多量に付着しており、灯明皿のように使用された可能性が高い。皿B(305)は、口径22.6cmと大きく、斎宮跡では極めてまれな器形だが、やはり内面に油煙が多量に付着している。高杯B(306)の、杯部は、復元で口径22cm、器高15.6cmのもので、脚柱部はやや粗雑なヘラケズリで面取りを施す。蓋は、外面をヘラミガキ調整したもの(307)とハケとナデ調整のみのもの(308)があり、(308)のつまみ部の接合はやや雑なものである。鍋A(309)は、口径21.4cmの中型品で、体部内外面をナデ調整のみ行う。

須 恵 器 須恵器(317~319)は多く、灰釉陶器を含まないものの、猿投窯編年で概ね黒竪14号窯式期頃のものと見られる。杯B(318)の口縁部には油煙が付着する部分がある。

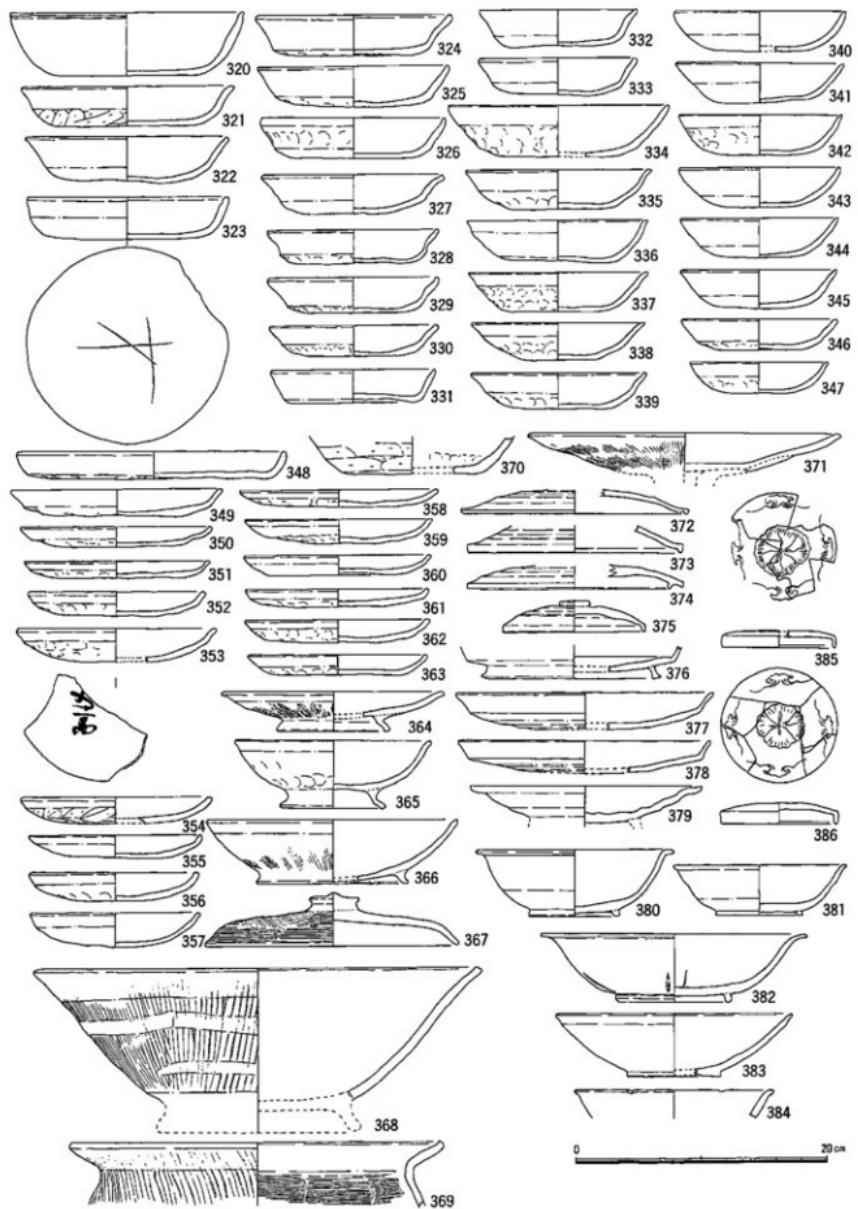
墨書土器 本土坑から出土した特殊な遺物に墨書土器とミニチュア土器がある。墨書土器はすべて土師器皿Aで、一部漢字と判別できるものもあるが、大部分は判読不可能である。いずれも内外面に太い筆を使い、複数の方向から、あるいは書体の不統一から複数の書き手により書かれた可能性がある。(302・303)に顕著で、(302)は内面は判読不可能だが、外面には「久」「而」などと読める部分がある。(303)は内面に「四」「徐」と、外面には「合力」「夜」「世」「神?」「了」などと判読できる可能性のある部分がある。この他(317)も一部ながら同様に太い筆致だが、判読はできない。(300)は極めて細い筆が用いられている部分があり、外面に「水?」「山?」のような文字が認められる。9世紀代の段階の墨書土器で、今回のように稠密に文字を書くものは、斎宮跡の調査では前例がない。

多量のミニチュア土器 また、ミニチュア土器も小土坑からの出土としては多く、土師器壺E(316)、黒色土器A類の杯A(310)、土師器杯B(311)、土師器甕A(312・313)、土師器甌(314・315)のミニチュアがある。斎宮跡の発掘調査でこれまでに約95個のミニチュア土器が出土しているが、一つの遺構からの出土量としてはSK1423の7個というのは最多である。器種的に煮炊形態が目立ち、厄除や疾病の祓いなどに関連する可能性がある。

SK1424 第29・44次調査区の「土器溜まり」土坑で、先述のとおり、遺構の斎宮跡1984年編年では平安時代前I期(2000年編年のII期-2段階に概ね相当)の基準資料とされたも



第17図 錬山山西区画の遺物(3) SK1423:280~319



第18図 鎌冶山西区画の遺物(4) SK1424:320~386

のである。整理箱で36箱分と極めて大量の土器を中心とする遺物が出土しているが、遺構の形状から複数の土坑の重複も想定され、土器は、II-2期相当のものを主体とするがII-1期からII-3期相当のものまで含まれていると見られる。

土師器 杯A(320~333)のうち、(320)は口径18.8cmで、口縁端部外面に横位の沈線があり、内湾する体部を持つ金属器の形状を模倣したと見られる。(321)はやや内湾する体部を持ち、下半をc手法で調整する。やや内湾気味の体部で、口縁端部内面に弱い沈線状のくぼみを作るもの(322)や、口径13.3cmとやや小振りだが底部から体部にかけて強く屈曲するもの(331)などやや古相のものを含むが、大部分は他の同時期の土坑と同様の内容である。

椀A(334~347)については、プロポーション的に杯Gと親近関係が想定されるものもあるが明確に分別できない。やはり大きく大中小のセットが見られる。

皿A(348~363)はe手法で調整し、口径21.6cmと大型品である(348)が古い要素を持ち混入と見られるが、主体は外反する口縁を持つもの(349~351)と口縁部が内弯し、その端部が弱い面取り状になるもの(352~363)もある。

この他の土師器の器種には、皿B(364)、椀B(365・366)、蓋(367)、甕C(369)、盤A(370)、高杯(371)の他、口径36.0cmの粗製盤B(368)がある。外面を粗いハケで調整し、内面には部分的に被熱による変色が見られる。

須恵器 蓋(372~375)、杯B(376)、盤(377・378)、台付皿(379)がある。(374)の蓋は口縁端部に強く面取りを施し、口縁の内側にかえりを付ける特異な形状である。

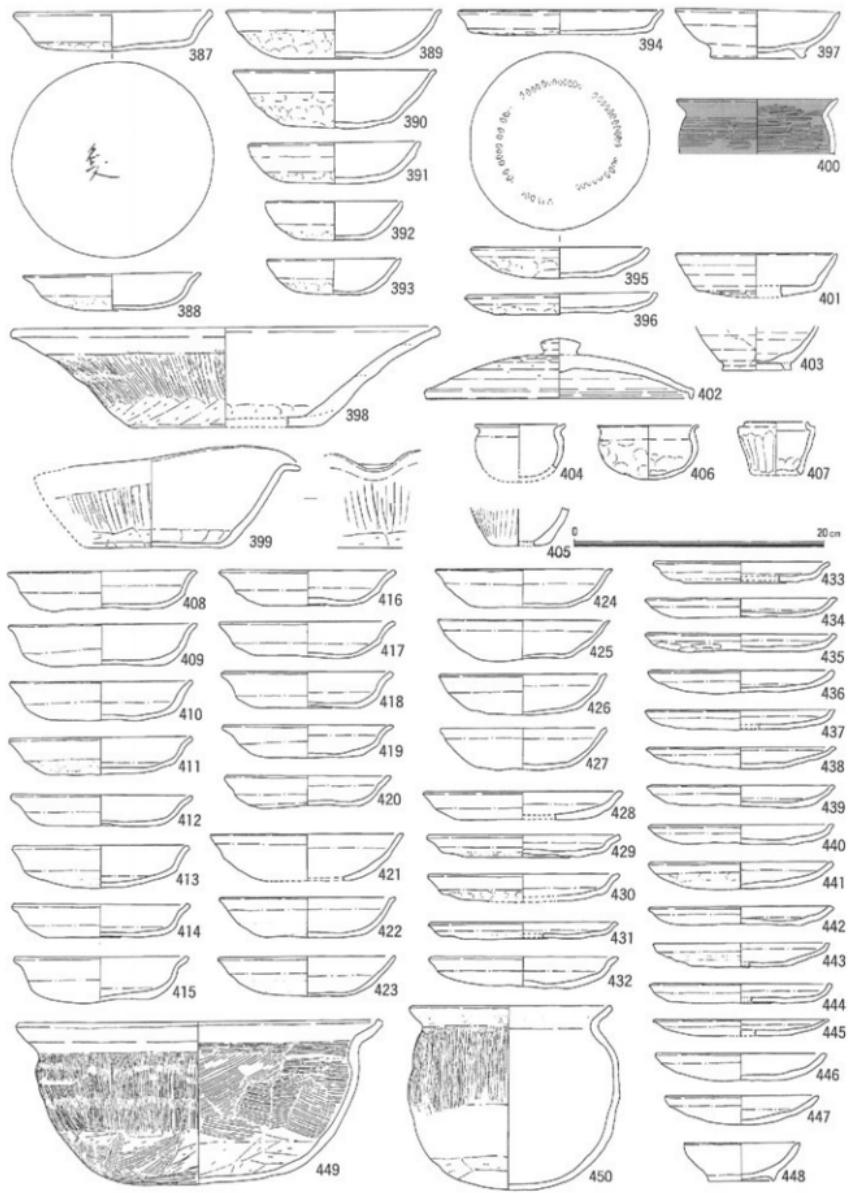
灰釉陶器 椗(380・381)・皿があるが、椀はいずれも口縁部の端反りが強く、角高台を持ち、内面に厚く施釉された、猿投窯編年で黒笠14号窯式期のものである。

緑釉陶器 椗(382~384)・蓋(385・386)がある。椀のうち(382)は体部下半の内外面にヘラ状工具による輪花表現が見られ、(384)は猿投窯産で、口縁端部に刻み目を入れて輪花表現する。(383)は京都産で底部を削り出して蛇の目高台を作り、直線的な体部のものである。蓋(385・386)は、上面に中央と外周の4箇所に陰刻花文を施すものが2点出土しており注目される。

SK1425 SK1424に西隣する直径約3mの大型土坑で、土師器杯A(387・388)・椀A(389~393)・皿A(394~396)・椀B(397)・蓋・高杯・盤A(398)・粗製片口鉢(399)・甕A・甕B・黒色土器B類甕(400)、須恵器蓋(402)・杯A(401)・杯B・盤・壺(403)、灰釉陶器皿、緑釉陶器椀、製塙土器や炭化材が整理箱で17箱分出土した。

土師器 杯A(387)は、底部外面に漢字の墨書きがあるが判読はできない。皿A(395)は、内面に先端が「U」字状になる工具で圓線状に連続刺突を施すが、その意図は不明である。粗製片口鉢(399)は、類例のない形態のもので、厚手の体部の外面を粗いハケで調整し、平底で片口の注口部を持つ形状である。欠損しているため注口部の反対側の形状は不明だが、把手が付く可能性もある。平底の盤(398)などとともに何らかの祭祀に関連するものかもしれない。

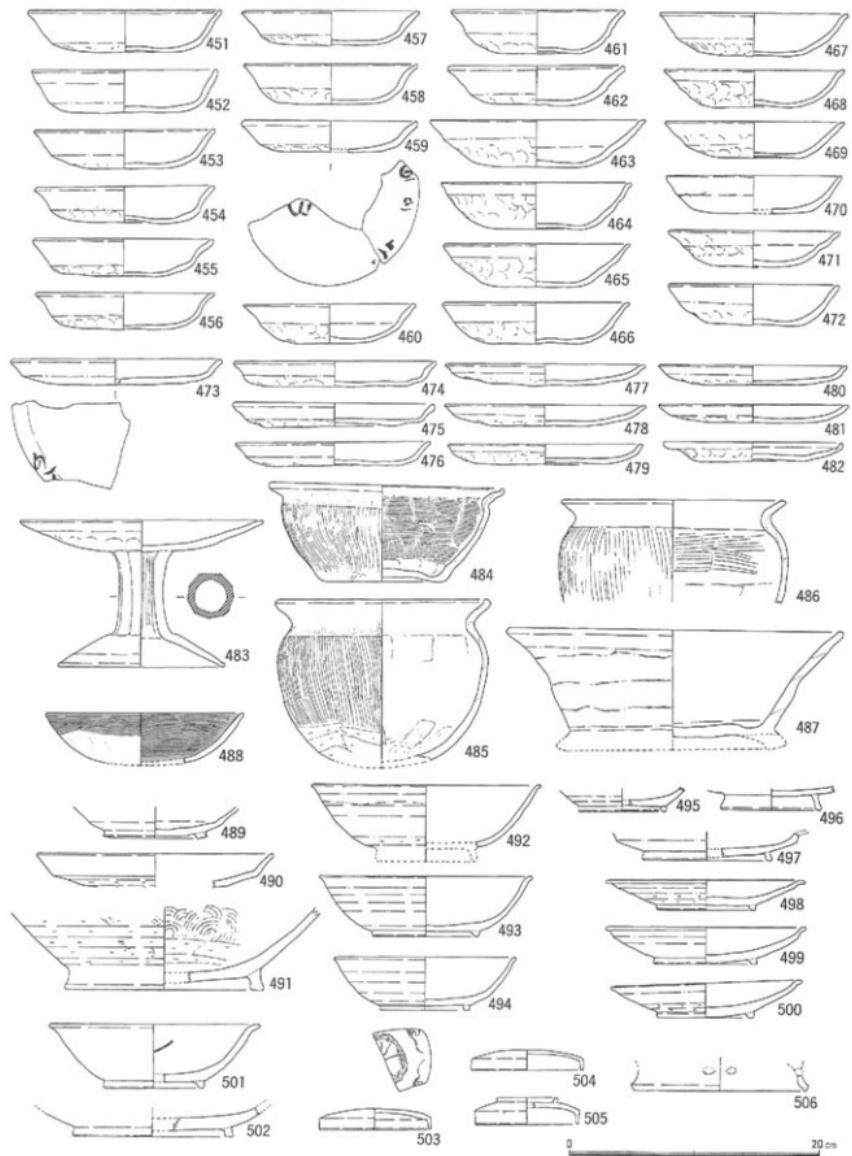
祭祀に直接関わると見られるミニチュア土器には、土師器甕(404~406)と壺E(407)がある。(407)は外面を縱方向のヘラケズリで整形している。



第19図 鎌冶山西区画の遺物(5) SK1425:387~407、SK6743:408~450

(3) 斎宮第II期第3段階 (II-3期)

- この時期の基準資料である第44次調査のSK2650や、第109次調査のSK7430など「土器溜まり」の遺構が増え、これに関連する遺物が多くなる。
- SK6743**
- 土 師 器**
- 杯Aは、大中小型品の明確な区別は困難だが、口径でおよそ13~16cmの幅がある。椀Aもほぼ同様の傾向を示す。皿Aは、口縁部が外反するタイプ(428~433)、内弯するタイプ(433~447)の区別が残るが、(446・447)は器壁が厚く、底部も丸みを持ち、口縁端部の面取りが外傾するようになる。これらの杯・皿は底部から体部へ口縁部の区別はあいまいになり、II-3期の特徴を示すが、器壁の厚みは5mm前後あり、同期の中でも古相のものと位置づけられよう。
- SK2695**
- 土 師 器**
- 第44次調査区の「土器溜まり」土坑出土の遺物で、2.3m×2.0mという規模ながら、整理箱で63箱分と、SK2650に次ぐ出土量である。
- 遺物には、土師器杯A(451~462)・椀A(463~472)・皿A(473~482)・高杯(483)・鍋A(484)・粗製台付鉢(487)・甕A(485・486)・竈、黒色土器A類杯(488)、須恵器杯B(489)・蓋・盤(490)・甕C(491)、灰釉陶器椀(492~496)・段皿(497)・皿(498~500)、綠釉陶器椀(501・502)・蓋(503~505)・香炉(506)と少量の炭化材がある。
- 土 師 器**
- 杯Aは、口径13~16cm程度で、やはり大中小の区別は明確ではない。椀Aでも(463)のように口径17cmを超えるやや大型のものもみられるが、大部分は杯A同様口径13~16cm前後のものである。供膳形態は、全般に器壁が薄くなり、厚さ3~4mm程度のものが多くなり、口縁部のヨコナデ調整の範囲も狭くなる傾向が窺われる点から、総体としてはSK6743より新相を示すものと考えられる。
- 他の器形では、底部外面にヘラケズリ調整を行なわない小型の平底鉢(484)や、剝離のため脚部を欠失するが、胎土に砂粒が多く厚手で、調整も難な口径27.0cmの粗製鉢(487)や、煮炊形態として小型の甕Aがある。
- 須 恵 器**
- 混入とみられる盤(490)の他、腰部に弱い稜をもつ稜椀との形体の識別が困難な杯B(489)、内面に同心円状の叩き目をもつ甕C(491)があるが、量的には灰釉陶器に比して少ない。
- 灰釉陶器**
- 椀・皿が多いが、角高台で釉薬をハケ塗りするものが多く、型式的にはII-3期に先行する猿投窯編年で黒笠14号窯式期の新段階に相当するとみられるものが主体となっている。
- 綠釉陶器**
- 綠釉陶器も多く、口縁部の端反りが強く、淡緑色の均質な釉が掛かり、内面に線刻の文様をもつもの(501)の他、蓋(503~505)の中に陰刻の施されるもの(503)や、香炉(506)など特殊な器形が目立つ。
- 特殊遺物では墨書き土器もある。土師器杯(459)・皿(473)があり、いずれも外面にのみ墨書きされ、ひらがなの可能性もあるが判読できない。
- SK7425上層**
- 第109次調査区のII-2期に属するSK7425の上層遺物で、土師器杯A(507~511)・



第20図 錫治山西区画の遺物(6) SK2695:451~506

椀A(512~515)は、SK2695と同様でII-3期の新相を示すものだが、綠釉陶器椀(519・520)、越州窯系青磁椀(521)や黒色土器風字硯(516)などの特殊遺物が多くみられる。

(4) 斎宮第II期第4段階 (II-4期)

SD6750

第98・124次調査で検出された区画溝とみられる遺構が廃絶する段階で、大量廃棄された土器群の資料である。遺構の底部からやや上の層位で、ほぼ土器のみの堆積層を形成していた。

土 師 器

供膳形態を主体としており、杯A(523~526)・椀A(527~532)・皿A(533・534)や台付杯・皿(535~541)がほぼ9割程度占めている。杯Aと椀Aは、底部が平たく作られるか丸く作られるかで、かろうじて峻別される程度に同化する。いずれも口径が11~14cmと全体的に器形の縮小がみられる。皿Aは、口径11cm前後のものがあり、器高の低平化がすすみ、調整は雑なものになる。台付の器形は、基本的には杯Aや皿Aの形体に高台を付したもので、高台部と本体の接合部にはハケ調整を施すものが多い。

煮炊形態では、甕A(542・543)があるが、いずれも立ち上がり気味の口縁部の端部を内側に折り返して肥厚させ、球形の体部をもつとみられる。(542)は、体部内外面をハケ調整するが、(543)はナデ調整されている。

黒色土器

黒色土器では、A類の大型の鉢(546)とB類の皿(545)がある。鉢は、平底の底部から内窓気味に本体がたちあがり、口縁端部をわずかに外反せるもので、口径が29.9cmある。外面は上半がヘラミガキ、下半がヘラケズリ調整され、内面には幅広の粗いヘラミガキが施される。皿は、口径11.0cmで、同時期の土師器皿同様、円盤状の形態に退化したものと考えられる。

須 恵 器

鉢(547)・椀・壺がある。鉢(547)は、京都産の口縁端部を玉縁状に肥厚させるもので、京都洛北窯の編年で西長尾5号窯式期に相当するものとみられる。⁽⁶⁾平安京の土器編年では平安京III期の中頃からみられるもので、平安京土器編年との時間的な併行関係を考えるうえで重要な資料と考えられる。

灰釉陶器

椀(548・549)は、口径等が小型化し、高台部の断面形がやや台形気味に変化し、灰釉を濁け掛けする点から、猿投窯編年で折戸53号窯式期のものとみられる。

綠釉陶器

椀(550・551)・小椀(553)・段皿(552)がある。東濃ないしは近江産とみられるものに構成が変わる。

青 磁

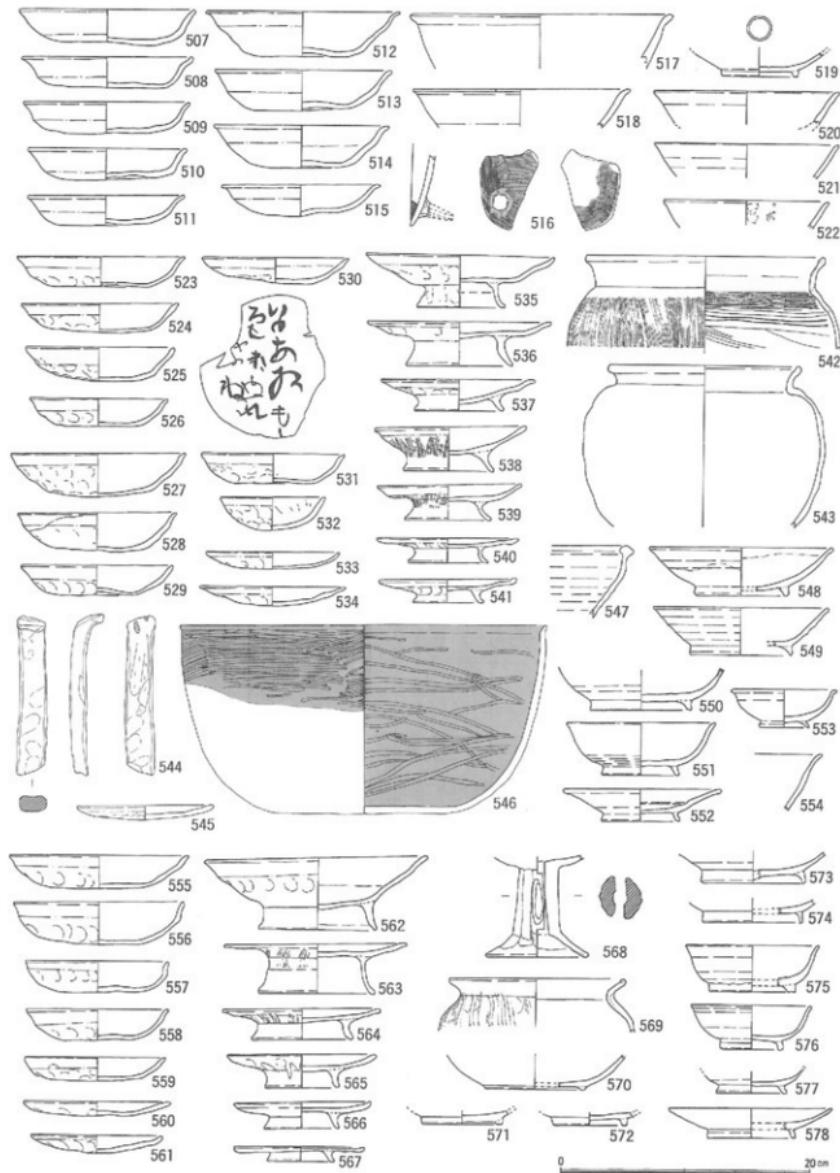
越州窯系青磁とみられる椀(554)も、現在斎宮跡では他の土器群との共存関係が分かる数少ない例である。素地は緻密で、釉薬も均質なものである。

そ の 他

特殊な遺物としては、墨書き器(530)と棒状土製品(544)がある。(530)は、杯Aの外面全面にひらがな文字を墨書きしたもので、「い□あるもろ□ねやれ□□のね」と判読される。通意的なものではなく、習書的なものとみられる。(544)は、土師質の棒状土製品で、基部を欠損しているため全長は窺い知れない。先端部は孫の手状に屈曲し、この部分を中心にわずかに被熱したとみられる変色部分がある。火搔き棒のような用途が想定されるが、斎宮跡のこれまでの発掘調査でも類例が無く、祭祀等にも関わる特殊な器物の可能性もある。

SK8066

SK8068は、第124次調査区の区画施設の一部と考えられる土抗である。



第21図 錫治山西区画の遺物(7) SK7425上層:507~522、SD6750:523~554、SK8066:555~578

土 師 器 杯Aと椀Aの峻別はほとんど不可能になり、体部に丸みがついてくる(555～559)。皿A(560・561)は、ほとんど円盤状のものになり、奈良時代から続いてきた皿の最終的な形態となっている。高台のつく杯・皿(562～567)の比率も増加する。高杯(568)は、この段階では類例の乏しいものだが、II-4期の基準資料であるSE4050中層出土のものなどに比べ、脚部径で約9.0cm小型のもので、脚柱部に長さ5cm程度の縦方向の透かし穴が入れられる。他に甕A(569)・瓶・壺の破片が出土している。

ロ ク ロ 土 師 器 ロクロ土師器(571・572)が、極めて少量ながら初めて現れる。いずれも椀形体のもので、径が6～8cm程度の高台部しか残存していない。III-1～2期になって増えてくるロクロ土師器の椀に比べ低平な形状が窺われ、高台も低くしっかりしたもので、III期以降のロクロ土師器通有の杯類などの器種がみられない事から、これら盛行段階のものに先行するものと捉えたい。

須 恵 器 椭(573・574)・皿・壺があるが土器群全体から見て少量である。

灰釉陶器 椭・皿・壺などの小片が出土しているが、いずれも図示できない。

綠釉陶器 近江産・東濃産のもので、口径10cm前後の小椭(575～577)や皿(578)など小形品が多い。

SK8066の土器群は、ロクロ土師器の出現など、III-1期に相当する要素も認められるものの、主体をなす土師器での皿Aの残存や杯類が椀形体に完全に移行しきっていない点から現段階ではII-4期の後葉の段階に位置づけておきたい。

その他の土器類 II-4期においては、他に特徴的な形態のものがみられる。

土師器甕A(579～581)は、I-4～II-1期にみられたものとは系譜的に連続性が認められない。体部は口径12cm前後と甕としては小型で、(581)のように口縁部の作出が省略気味のものもあり、角状の把手は体部に比べて大型でII-1期などのもののようにへラ状の形態にはならない。いずれも所謂「土器溜まり」からの出土で、粗製の小型壺(583)と同様に何らかの祭祀・儀礼に伴う特殊品の可能性が強い。

土師器鍋A(584)は、II-4期までみられる器種で、体部のハケ調整や底部のケズリ調整は完全に省略され、器壁も薄くなる。口縁の屈曲も弱く、体部からそのまま大きく広がる。

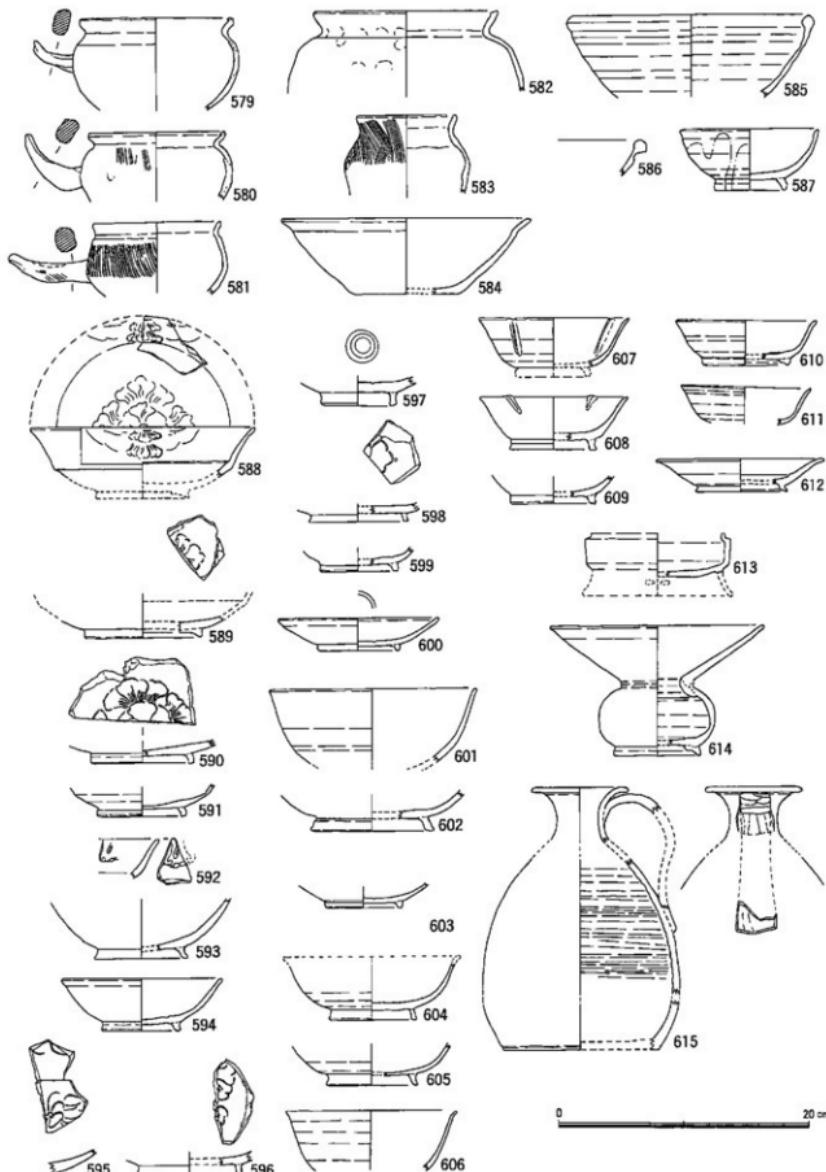
須恵器鉢(585・586)は京都産のもので、SK8071下層の(585)は西長尾5号窯、SD1460の(586)はやや玉縁部が大きく、黒岩1号窯の段階に相当するとみられる。

(5) その他の遺物

包含層出土や、時期不明の遺構あるいは後代の遺構から出土したもので、内院の性格を考える上で重要な遺物や、出土量の僅少な形態のもの等を報告する。

綠釉陶器 稜椀(588～591)・椀(592～599・601～611)・皿(600・612)・香炉(613)・唾壺(614)・把手付瓶(615)などがある。

稜 椋 稜椀はいずれも猿投産のもので、(591)を除き残存部位に応じて口縁部内面ないしは見込み部に棒状工具による陰刻花文が施されている。また、(592)のみは、淡く緑がかかった下地の釉薬の上に濃緑彩で花文が描かれる。底部が残るものには貼付高台が



第22図 錫治山西区画の遺物(8) その他の土器類

付き、三叉トチンの痕跡も残る。高台の断面形状は、(589)は三角形、(590・591)はやや内湾する台形である。器表面は、いずれもていねいにヘラミガキ調整されてから施釉される。

椀・皿 椥は、猿投産(593~599)と近江産ないしは東濃産とみられるもの(601~611)がある。三河二川窯産とみられるものは、現在のところ明確に判断できない。猿投産とみられるものでは、いずれも内外面をヘラミガキ調整し、貼付高台をつける。色調は淡緑色から青緑色を帯びたものまである。

内面に陰刻花文を施すもの(595・596・598)のうち、(595)は淡緑色の施釉で、内面見込み部付近に先端の細い棒状工具で流麗な花文を描き、猿投窯編年で黒窯14号窯式期まで遡るものと考えられる。(598)は花卉が一重のもので、紡錘状に花弁の脈が描かれる。また(597)と皿(600)の内底面には、直径2cm強の円が陰刻される。素地は(594・600)が硬質である他はいずれも軟質の焼成である。

東濃産あるいは近江産とみられるものは、口径の大きな深碗タイプになるもの(601・602)や、腰が張り浅めの形体で、体部から口縁部が緩やかに外反する中~小型の椀(603~611)がある。(607・608)には、体部から口縁部にかけて外面からヘラ状工具で輪花を表現する沈線状のへこみを入れる。皿では(612)が高台の端面に凹線が入り、内面では底部と体部の境に沈線上の圓線を入れて段皿を擬したものとなっている。これらは硬質な焼成のもの(601・602・604~607・611・612)と軟質のもの(603・608~610)があり、いずれも体部はロクロナデで、貼付高台を持ち、底部内外面にトチン痕を残すものも多い。釉薬は不均質で、細かい斑状に濃い部分が現れる。

香炉 第109次調査で出土した香炉(613)は、脚部を欠失しているが、「ハ」の字に開く脚部が付き、陰刻花文・蝶文や透かし穴で装飾された蓋が伴うものである。口縁端部は、蓋を受けるために受け口状に屈曲しており、実際の使用痕と考えられる釉薬表面の微細なクラックや被熱によるとみられる素地までいたる赤変が認められる。

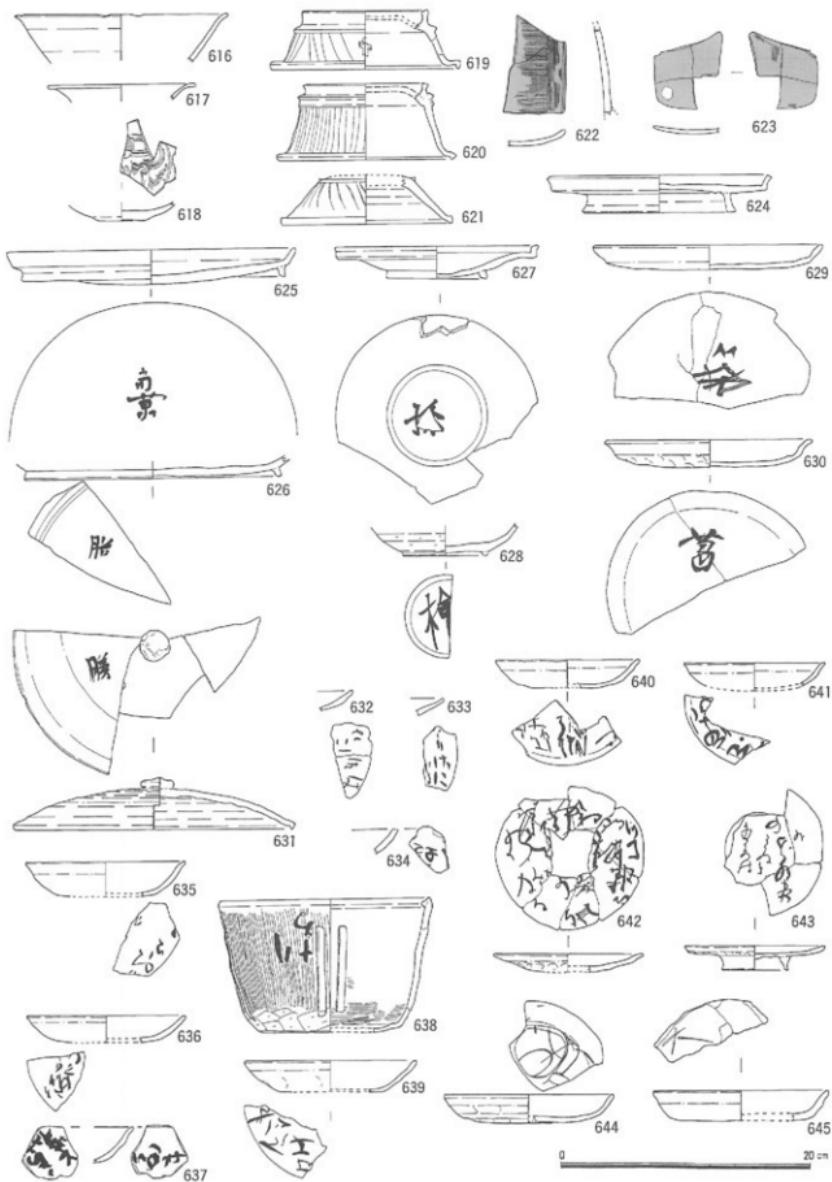
唾壺 唾壺(614)は、第105次調査で口縁部と第109次調査で出土した体部が接合したものである。体部外面と口縁部内外面をヘラミガキ調整を施し、体部内面にはロクロナデ痕を残す。体部内面や破断面は、部分的に橙色になる。端面が凹線状にくぼむ貼付高台を持つ。底部外面には、糸切痕が残る。

把手付瓶 (615)は第98次調査で出土したもので、体部はなで肩から大きく張った胴部に続き、口縁部や底部を除き外面はすべてヘラミガキ調整される。把手部は、細い粘土板を張り付けたのち、ヘラ状工具でケズリ調整して整形される。

初期貿易陶磁 極めて断片的ながら越州窯系青磁の出土がみられる。(616)はSK7432出土のもので、口縁端部の四方に刻みを入れ輪花表現を施したもので、均質なオリーブ色の釉調と灰白色の緻密な素地をもつ。(617)は第98次調査区の包含層から出土した、瓶類の口縁部ともみられるもので、濃いオリーブ色の釉がかかる。

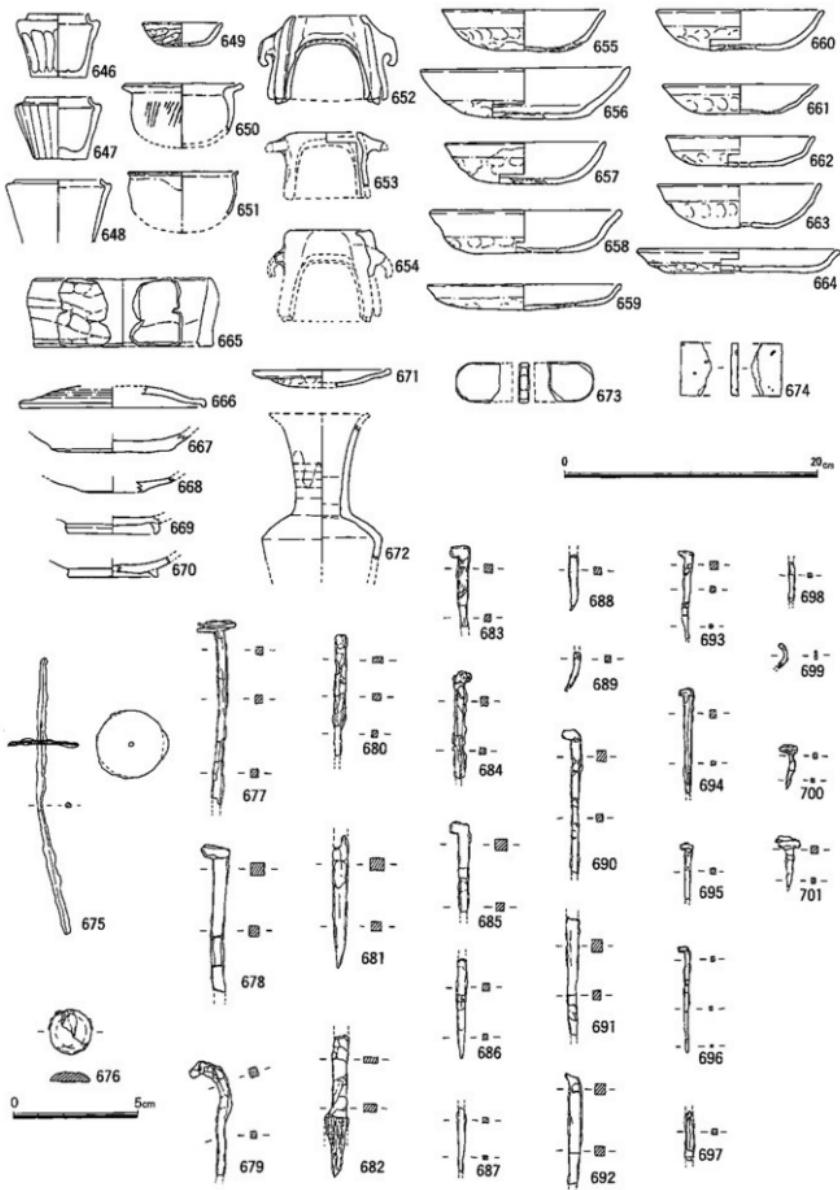
なお、鍛冶山西区画では、牛葉東区画でみられるような唐~五代の白磁碗は今のところ出土していない。

硯類 砚類の出土は転用硯をのぞきあまり多くない。



第23図 銀治山西区画の遺物(9)

- 円面硯** 第46次調査区包含層出土の(619)、第98次調査SK6746・6747出土の(620)、第109次調査SK7433出土の(621)がある。いずれも硯面陸部を欠失する。(619)には脚部に線刻と透かしによる、(620・621)には線刻による装飾が施される。特に(621)は縁帯部が小さいとみられ、特異な形状である。SK6746・6747はII-3期、SK7433はII-2期の遺構である。
- 風字硯** 黒色土器B類の風字硯(622・623)があり、この他第44次調査のSK2650からも出土している。表面には部分的に細かいヘラミガキ痕が残り、縁端は折り返さず、浅い皿状に作る。脚部は欠失するが、小さな突起状のものが2個付くとみられる。
- 転用硯** 大部分は須恵器甕の体部や杯Bの底部を使用するものが多く、図示に耐えるものが多い。(624)は須恵器高盤で、底部内面を硯面として使用痕がつよく残る。
- 墨書き土器** これまで示したものを含めて「土器溜まり」を中心に多様な出土品がある。
- 漢字** 一字を外面底部に書くものが基本的なパターンである。土師器では皿A(629・630)、須恵器では皿B(625・626)・蓋(631)・高盤(627)、灰釉陶器では椀(628)がある。
- (625)は「景」、(628)は「檜」、(630)は「葛」ないし「葛」とみられる。(626)と(631)は「膳」と判読され、いずれも第46・124次調査区と、区画北東部で出土している。区画北東部では、北西部や中央部に比べ、竈などの煮炊形態が多い傾向が窺われ、斎宮寮十三司の「膳部司」との関連も想定される遺物である。いずれも形式のうえでII-4期～III-1期に併行するものとみられる。
- ひらがな** いずれも土師器類に墨書きされているが、大部分は判読すら困難であり、通意的なものは(633)の「りけに」、(638)の「りける」、(643)の部分的に「のころは」と判読されるものなどで、連文節をなしていない。この他は、断片的にひらがなと判断される文字が認められるが、文字と文字の連続性が疑わしいもので、大部分はなんらかの習書の土器と考えられる。なお、(638)は土師器風炉で、四方に2本一組の透かし穴が設けられ、口縁端部は内側に折り返して肥厚させる。文字は、器物に対して上下逆に書いている。(644)は墨書き土器でも、土師器杯A内面に細い筆で連弧を描いているが、意図は不明である。また、(645)は、ヘラ状工具による線刻で、内面に「大」一字を記す。
- ミニチュア土器** 「土器溜まり」遺構を中心に土師器類と黒色土器類が出土している。SK6753(II-2期)、SK1423(II-2期)、SK1425(II-2期)や土器編年の基準資料であるSK2650(II-3期)から土師器甕A・竈・壺E・杯B、黑色土器A類の杯Aが出土している他、土師器壺E(646～648)・杯A(649)・甕A(650・651)・竈(652～654)が出土した。時期的にはII-2～3期のものである。
- 特に竈は、これまでのところ鍛冶山西区画に集中し、他の煮炊形態のものも鍛冶山西区画では多量に出土している。竈神や火所の神に関わるものという見方の他、竈や甕などのミニチュアについては厄除や疾病を防除する祭祀に関わるものともみられ、内院区画での出土という点については、今後の検討・分析が必要であろう。
- 穿孔土器** 同じく祭祀に関わると見られるものとして、底部などが穿孔された土器(655～664)がある。図示したものはいずれも「土器溜まり」土坑からの出土で、今までの知見



第24図 鍛冶山西区画の遺物(10)

では土師器杯Aと皿Aにのみ見られる。また、穿孔の方法は、いずれも内側からの焼成後穿孔という共通点があるが、孔径が1cmを超えるもの(a類)とそれ以下のもの(b類)に区別される。a類(655~660)は区画北西部の土坑からの出土が多く、いずれもII-2期に属すると見られるもので、それに対し b類は区画北東部からの出土で、時期的にもII-3~4期に属すと見られるといった明確な相違がある。

石 带 鍛治山西区画では現在までの調査では第98次調査で蛇尾(673)、第124次調査で巡方(674)がそれぞれ1点が出土している。

製 塩 土 器 同じ内院推定地とされながら、今までの調査では牛糞東区画に比して出土量は僅少である。網羅的にカウントしていないが、主なところで見ると、第98次調査区で7点、第105次調査区で14点、第109次調査区で4点、第119次調査区で21点、第124次調査区で6点の破片が出土している。遺物の性格上祭祀との関連が想定されるが、斎宮跡最大の祭祀関連土坑と見られる第44次調査のSK2650でも10片と、鍛治山西区画では全体的に少ないといえる。出土したものは山本雅靖氏の分類による第2-2期を中心で、基本的に9世紀中葉から10世紀初頭くらいまでに限られていると見られる。

その他の土器類 朱付着土器(666~670)、京都系土器(671)、須恵器壺G(672)が注目される。

朱付着土器は須恵器(666~668)と灰釉陶器(669・670)があり、いずれも内面に朱が付着しており、器表面の磨耗も認められることから朱墨を擦ったものと考えられる。京都系土器は牛糞東区画の他、方格地割縁辺の内山東区画などでまとまって出土しており、斎宮跡全体でも偏った出土状況が窺われる。鍛治山西区画でも第124次調査区の包含層から見つかっているが、いずれも胎土や焼成、色調の点から在地生産された可能性が高い。

須恵器壺Gは、桓武朝の段階を中心に比較的短期間の間に生産・流通したものと考えられているが、斎宮跡では出土量は極めて少なく、これまでに報告されたものでは第66次調査、第111-3次調査、第130次調査とここに図示した第98次調査SD6787出土のものに限られる。(672)は口縁端部と胴下半部を欠失するが、肩の張る、長岡京などでII形式とされる新相の形式である。

金 属 製 品 斎宮存続期のものとみられる金属製品は、圧倒的な量の土器類に比べ、酸性度が高いとみられる土壤により、ごく僅かな量しか出土していない。鍛治山西区画の中でみると第109次調査の鉄製紡錘車(675)が出土している他は釘類(677~701)が出土しているのみである。

鉄製紡錘車 (675)はII-3期のSB7410の柱掘形の中から出土しており、輪径5.4cm、茎長22.6cmで先端は尖り、土圧によるためか茎部にやや歪みがあるものの完形といえる。茎は破断面で観察すると直径約3.0mm、材の厚みは約0.8mmある。鉄製の紡錘車は、斎宮跡のこれまでの発掘調査で、第19次調査、第71次調査のSK4746(飛鳥時代)、第75次調査のSK5072(奈良時代前期)の3例があるが、第71次調査のものは輪部のみのものである。鉄製の紡錘車は皇大神宮の御神宝にもみられるが、第109次調査の例は、その出土状況からも単なる廃棄ではなく祭祀・儀礼的な埋納が想起される。

鉄 釘 釘類は、第105次調査や第109次調査でみられる。第98次調査や第124次調査でも一

部鉄釘類は出土しているが、これらの調査区では大部分が包含層等からの出土品であり、近世以降の混入品も多いため、今回の報告の対象とはしていない。

鉄釘のうち最も古い遺構から出土しているものはI-4期に想定している第109次調査のSK7394から出土したものがあるが、この付近の建物がII-2～3期に多い事と対応して、やはり同時期に属する遺構からの出土が多い。

形態や規格でみてみると、頭部は先端を折り返しただけのものと、先端をつぶして「T」字状に成形したものがあるが、全長は窺い知れないものの太さが1cm前後もあり、断面は方形ないしは長方形の大型品(677～682)と、頭部は折り返しただけのものしか知らないが、太さが6～8mm程度、長さも15cm程度と推定される中型品(683～692)、やはり頭部は折り返して作り、太さが5mm前後の小型品(693～699)があり、この他にも長さが3～4cm、で頭部は「T」字状につくる鉄錐と呼ぶべきもの(700～701)がある。これらは建築物の使用部位により使い分けられたと推定されるが、一部に木質が残るなどの使用的痕跡が認められる他は、具体的な使用方法は分からぬ。

金属製品ではこの他に用途不明の鉛製品(676)がある。一面を平らに仕上げ、ボタン状の形状で直径約1.7cm、厚さ約0.8cmで、穿孔等の加工は行われていない。包含層出土のため、詳細な時期も不明である。

第四節 鍛冶山西・牛葉東区画間道路部

1 区画道路上に設けられた遺構

第44次調査では、鍛冶山西区画と牛葉東区画を分ける南北道路と見られる遺構が検出されている。明確な道路面そのものは不明瞭ながら、両区画の外郭掘立柱塀の外側に南北方向の道路側溝と見られるものが並走している。

また、この道路面上にはII-3期以降の掘り込みも見られ、方格地割の推移を窺わせるものとなっている。本節ではこの部分の遺構・遺物の状況を報告する。

(1) 方格地割の南北区画道路遺構

SF7693

鍛冶山西区画と牛葉東区画を隔てる南北道路SF7693は、SD2660を西側溝、SD2670を東側溝とする。残存状況の良好な部分で、SD2660は、幅約1.8m、深さ約0.1m、SD2670で幅約1.5m、深さ約0.2～0.3mで、いずれも北へ向かって緩やかに傾斜している。両者の間隔は、側溝の芯々間で約12.8mで1尺を0.296mとすると約43尺になる。内側の肩々間で約10.9mである。第44次調査区北方で、この道路と交差する東西道路は、南北両側溝の芯々間が約13.3mでおよそ45尺となるとみられており、方格地割中枢部を貫通する区画道路であっても敷設状況に差がある事が窺われる。路面の部分は後世の多数の遺構に搅乱されており、本来の道路面は残存していないとみられ、盛土造成された痕跡や石などを敷いた痕跡も確認できない。

SF7693の側溝と、その両側の区画の掘立柱塀との位置関係は、牛葉東区画の東辺掘立柱塀SA2655との間隔が溝芯から約5.6m（約19尺）、鍛冶山西区画の西辺掘立柱塀

SA1411・2675と溝芯との間は約7.4m(25尺)となり、両区画の掘立柱塀は近似した規模をとりながら、鍛治山西区画の方が方格地割区画道路とより整合性のある配置を取っているように窺われる。全体の地割と、地割内の施設の施工の具体像を考えるうえで重要な事実と言えよう。

(2)斎宮第I期第1段階(I-4期)

SK2657

SF7693の西側溝SD2660脇に掘られた直径約3.0mの略円形の土坑で、出土遺物は極めて少ないもののI-4期の土師器片・須恵器片があり、この時期まで遡る可能性がある。方格地割成立後には鍛治山西区画と牛葉東区画の区画間道路に相当する部分であり、この時期のものとすると牛葉東区画の当該期の建物群との関連で捉えるべき遺構かもしれない。

藤原京などの都城で発見されている道路上での祭祀遺構と比較すると、道路中央部や交差点ではなく、側溝寄りの道路脇に所在する事や、出土遺物が破片のみで、意図的な埋納が想定しにくい点から、これにはあたらないものとみられる。

(3)斎宮第II期第3段階(II-3期)

SF7693は牛葉東・鍛治山西の両区画が双方機能している段階は、区画間道路としてこれも機能し続けていたと考えられる。第44次調査の成果を再検討しても、II-2期までの遺構は、この部分では全く見つかっていない。この付近に遺構が出現するのは牛葉東区画で掘立柱塀が廃絶し、鍛治山西区画でも廃絶の可能性とともに内部に区画溝による再編成が進んだとみられるII-3期からである。

SD2660・2670

先述の区画道路側溝である。SD2660からは土師器杯・皿・高杯・盤・鉢・甕、ロクロ土師器片・須恵器甕、猿投塗編年で黒雀90号窯式～折戸53号窯式期に属するとみられる灰釉陶器椀・段皿、綠釉陶器片、瓦片が、SD2670からは土師器杯・高杯・甕、ロクロ土師器片・須恵器甕といったII-3期以降の遺物が主体として出土しており、遺構の初源はさらに遡ると考えられるものの、埋没はこの段階から進んだとみられる。

SK2676・2679

第44次調査区のはば中央南より、SD2670の東側にあり、敵密には鍛治山西区画内に入るものの、SK2676は長さ約3.0m、幅約0.8m、深さ約0.5m、SK2679は長さ約5.8m、幅約2.0m、深さ約0.3mの南北に細長い土坑で、両者は繋がった状態で見つかっている。検出時にも新旧関係は明確にされていない。SK2676からは土師器杯・皿類の小片が、SK2679からは土師器杯・皿・甕A・甕C・竈が少量出土した。

SD2652

第44次調査区の西辺近く、SD2660の西側に位置する溝で、検出長19.2m、幅約1.0m、深さ約0.5mの南北溝で、調査区内で北端は途切れるものの、約0.8mの間隔をあけて北に溝とみられる遺構の一部も検出されており、あるいは本来は連続するものであった可能性もある。SD2660とは肩々間で約2.4m前後の間隔で併行しており、あるいはSD2660の廃絶後に再度開鑿された道路側溝であった可能性もまた指摘できる。

SD2671

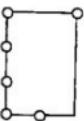
第44次調査区から第29次調査区にかけてSD2670の東側にある検出長4.2m、幅約2.0m、深さ約0.3mの溝で、少量の土師器皿・須恵器甕の破片が出土している。

SF7693の存続 II-3期に断片的に現れるこれらの遺構はSD2660・2670の間に入るものは無く、また、現在のところこれに続くII-4期に明確に位置づけられる遺構もない。こうした点からも当初の道路側溝が再開墾やわずかな移動などの変更はあったにせよ、前節でみたように、鍛冶山西区画が機能的に存続し、牛葉東区画と併存していたと考えられる段階は、この区画間道路も機能を維持していたものと判断できる。

(4) 斎宮第III期第1段階～第2段階 (III-1～2期)

II-4期を経て、III期に入ると、SF7693上に各種の遺構が現れる。

SB2653 3間×2間の南北棟で、柱間は梁行、桁行いずれも約2.1mである。柱掘形は直径0.5m程度の略円形で、柱痕跡は不明である。棟方向もN2°Wと方格地割に対してやや東に傾く。
柱穴からの遺物は僅少で、詳細な時期は判断できないが、一部III期まで下るとみられるものを含み、II-3期頃から埋没が進む区画道路西側溝SD2660に重複しており、この時期以降から、鍛冶山西区画の機能の消失に伴って区画道路の機能もまた失われていった事が窺われる。



SB2653

SK1409 第29次調査区の北端にある土坑で、北側と東側が不明で、検出長で約1.7m、深さ約0.3mである。土師器皿・皿、ロクロ土師器皿などIII-2期頃のものとみられる土器が少量出土している。

SK2651 II-3期のSD2660に重複する土坑で、長さ約4.0m、幅約2.1m、深さ約0.2mで、III-2期以降のものとみられる土師器皿・鍋の破片が少量出土している。

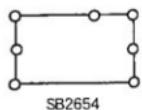
SK2656 第44次調査区の南西部にある直径約1.6m、深さ約0.5～0.8mの不整円形の土坑で、底部の形状も一定ではない。III-2期以降の土師器皿・甕、須恵器短頸壺の破片が少量出土している。

SK2659 第44次調査区南辺にかかる大型土坑で、南辺が調査区外に伸びるため規模は不明だが、東西長で約7.5m、最大深で約0.3mある。土師器皿・高杯・甕、須恵器椀・甕が整理箱で1箱弱と遺構の規模に比べて少量出土しており、I-4期やII-3期に属するものも含まれるが、遺構としてはIII-1～2期のものとみられる。

SK2662・2663 第44次調査区西半の土坑である。SK2662は約4.4m×約4.2m、深さ0.6～0.7mの不整形土坑で、複数の土坑が重複するものかもしれない。SK2663はSK2662の南東の約4.4m×3.0m、深さ約0.9mの椭円形土坑で、いずれからも土師器椀・皿・高杯・甕、ロクロ土師器皿・皿・台付杯・椀、須恵器椀・甕・甕、猿投窯編年で百代寺窯式期に属するとみられる灰釉陶器椀、山茶椀の破片が整理箱で1.5箱分出土した。

SK2667 第44次調査区南端のSK2659に重複する土坑で、SK2659より新しい。南端が調査区外へ伸びていくが、東西長は約2.4m、最大深で約0.8mである。II-3期の遺物を一部含んでいるが、土師器椀・皿・高杯・甕、ロクロ土師器皿・皿・台付杯や平安京の白色土器を模したとみられる椀、須恵器椀・甕、灰釉陶器椀、山茶椀などが整理箱で約1.5箱分出土した。

- SK2674 II-3期のSK2676に重複する長さ約4.0m、深さ約0.2mの溝状の土坑である。土師器杯・甕、ロクロ土師器杯、須恵器甕と方形の用途不明の土製品が出土している。時期的にはIII-1期のものとみられる。
- SK2678 第44次調査区の直径約1.8m、深さ約0.3mの小規模な土坑である。少量の土師器皿・椀・高杯・甕、ロクロ土師器杯・皿・台付杯、須恵器椀の破片が出土している。III-2期のものとみられる。
- 斎宮第III期第3段階から第IV期（III-3～IV期）
- SB2654 III-1～2期の南北棟SB2653を建て替えたものとみられるが、東西3間×南北2間の東西棟に代わっている。柱間は、桁行2.4m、梁行2.1mで、棟方向はE6°Nと方格地割に対してSB2654と逆の方向に振っている。出土遺物は、少ない。
- SE1405 SF7693の中央部に開鑿される大型の素掘りの井戸で、直径約5.6mある。出土遺物は少なく、遺構面から約1.5mの深さまで調査したが、土師器皿・台付皿・高杯、ロクロ土師器杯・皿、須恵器鉢・甕、山茶椀・山皿、白磁皿が整理箱で2箱出土した。
- SE2665 SE1405の南にある一辺約3.9mの方形の井戸である。井戸枠などの痕跡は分かっていない。遺構面から深さ約1.2mまで調査したが、少量の土師器椀・皿・高杯・竈、須恵器壺・甕、山茶椀の破片が出土した。重複関係からSE1405より後出のものとみられる。
- SK1406～1408 いずれもSF7693の北端で検出した土坑で、SK1406は約3.2m×約1.6m、深さ約0.7mの楕円形土坑で、土師器椀・皿・甕、ロクロ土師器皿・台付杯、須恵器甕、山茶椀・山皿が少量出土した。SK1408は、SK1406の東に接しており、約1.8×約1.2mの長楕円形で、深さは約0.2m前後と浅く、重複関係ではSK1406より古い。III-3期に属するとみられる土師器皿、ロクロ土師器杯、須恵器甕の破片が少量出土している。
- SK1407 SK1407は、SK1406の南にあり、ほぼ同規模の土坑である。III-3期～IV期にかけての土師器杯・皿・高杯・器台、ロクロ土師器杯・皿・椀、須恵器甕、山茶椀・山皿、白磁皿(SE1405の破片と接合)が少量出土している。
- SK2658 I-4期まで遡るとみられるSK2657に重複する土坑で、長径約6.5m、短径が3.0m以上、深さ約0.3mほどの浅い土坑で、少量の土師器類やロクロ土師器、須恵器、山茶椀が出土しており、IV期に属するものとみられる。
- SK2661 不整形な溝状の土坑で、検出長約6.4m、幅約2.8m、深さ約0.2m前後と浅い。少量の土師器類、須恵器類、山茶椀が出土している。
- SK2664・2666 いずれも長径約2.0m前後、深さ約0.4mの短楕円形の土坑で、III-3期頃の土師器類や須恵器甕の小片、山茶椀などが少量出土している。
- SK2668 SE2665に接する不整形土坑で、深さは約0.1mと浅い。SE2665より古く、遺物の出土量は多くないが、土師器類や須恵器類にともなってほぼ完存の山茶椀が出土した。



2 遺物

これまで報告したように、当該地区では、方格地割の南北道路衰退後多くの土坑・井戸・溝が穿たれているが、ここでの遺構からの出土遺物は少なく、細片となっているものが多い。注目される遺物についてのみふれる。

白磁皿

白磁皿(618)は区画西辺道路上に作られるSE1405・SK1407からの出土で、やや青みかがった釉調で、底部外面は釉を落とす。内面見込み部に櫛状工具やヘラ状工具で花文を施す。なお、図示していないが、SE1405からは他にも京都系の「て」の字口縁の土師器皿や京都洛北産の須恵器鉢も出土しており、注目される。

注

- (1)「III第44次調査」『三重県斎宮跡調査事務所年報1982史跡斎宮跡発掘調査概報』三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所 1983
- (2)鐵治山西区画以外では、西加座南区画のS B5780・5820に同様の形式が認められる。この2棟も斎宮跡編年II-1期併行の大型掘立柱構に囲まれた特殊な性格の建物と考えられる。
「III第83次調査」「IV第84次調査」『史跡斎宮跡平成元年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 1990
- (3)「II第124次調査」『史跡斎宮跡平成10年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 2000
- (4)斎宮跡において土師器杯・皿類の完形品を中心に一括大量投棄が行われた土坑を「土器溜まり」と呼称してきている。土器の投棄が認められない他の土坑との性格を区別するため、本報告では便宜的に通称的な「土器溜まり」の用語を使用した。
- (5)以下の箇投棄の編年観は、齋藤孝正・後藤健一『須恵器集成図録』第3巻東日本編I 雄山閣出版 1995による。
- (6)京都府埋蔵文化財調査研究センター編「篠古窯跡群II」『京都府遺跡調査報告書』第11冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
- (7)小森俊寛・上村憲章「平安京の土師器編年」『京都市埋蔵文化財調査研究所紀要』第2号 京都市埋蔵文化財調査研究所 1999
- (8)山本雅靖「志摩式製塙土器考」『考古学論集第3集』考古学を学ぶ会 1990

第四章 斎宮跡の土器

第一節 斎宮跡の土器編年設定

経過 斎宮跡の存続時期の中心をなす奈良時代から平安時代では、遺物の90%以上が土師器であり、その実年代については記年銘を有する木簡等の遺物の出土が見られず、時期決定には、困難を伴なっている。このため、遺構・遺物の年代決定には、併存する美濃窯、猿投窯などの須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器や瀬戸窯・常滑窯・渥美窯などの山茶椀、あるいは平城宮・長岡宮・平安京などの都城遺跡出土の土器編年を参考に編年を行っている。第50次調査までは、奈良時代を前半・後半の2時期に、平安時代を初頭・前半・中葉・後半・末期の5時期に分類してきた。

1984編年

資料の蓄積に伴い、これまでの編年基準に対して基準資料を提示し、その絶対年代を明確にすべく、昭和59年度(1984)に「斎宮跡の土師器」(以下「1984編年」という)を公にした。⁽¹⁾この土器編年は、斎宮跡の土器編年の基準として今日までその有効性を保ち、県内の奈良・平安時代の編年基準とされた。その概要は、從来の編年基準のうち奈良時代に新たに中期を設け、平安時代前半と後半をそれぞれ前Ⅰ期・前Ⅱ期、後Ⅰ期・後Ⅱ期の2時期に細分し、後半・末葉といったあいまいな表現を改めすべて「○○期」という呼称を用いることとした。この編年基準により、斎宮跡の土器編年は、飛鳥時代、奈良時代前期・中期・後期、平安時代初期・前Ⅰ期・前Ⅱ期・中期・後Ⅰ期・後Ⅱ期・末期の11段階に編年した。また、平安時代前Ⅱ期は、前後2時期に細分される可能性も示唆した。一方、鎌倉時代以降については、細分をさけ山茶椀等の編年に準拠することとした。

見直しの背景

1984編年から15年が経過した平成12年度(2000)までには、発掘調査も第131次を数え、第51次調査以降の調査の多くが史跡東部の方格地割内で実施されたことにも起因して奈良時代後期から平安時代後期の資料が飛躍的に増大し、かつ良好な一括資料にも恵まれ、1984編年を補足できる状況となってきた。

斎宮跡の実年代決定については、東海地方で生産された須恵器・灰釉陶器・山茶椀等の生産地における型式変遷を参考としている状況にあり、1984編年公表の前後からも猿投窯の実年代については、議論が活発であった。すなわち、高島忠平氏は、黒 笹14号窯式及び黒 笹90号窯式の実年代が10世紀中葉から後葉及び11世紀初めから中葉とされていたのに対し、平城宮東三条大路東側溝の年代から黒 笹90号窯式の年代を9世紀後半に遡らざるを得ないとした。これ以降1970年代後半から1980年代には、『シンポジウム平安時代の土器・陶器猿投窯編年の再検討について』をはじめ、橋崎彰一氏・斎藤孝正氏・前川要氏等の論考があいついで発表された。現在、論者により多少の年代観の相違はあるが、黒 笹90号窯式を9世紀後半におき、灰釉陶器の終末を百代寺窯式の11世紀後半として認知されるにいたっている。⁽²⁾

また、藤澤良祐氏は、灰釉陶器に統く無釉の陶器である山茶椀の成立とその編年に⁽³⁾論及し、11世紀中葉から15世紀前半に及ぶ瀬戸窯の山茶椀の生産を明らかにした。

一方、藤原宮・平城宮・長岡京・平安京等の都城遺跡の基本資料を通して都城遺跡における土器変遷に関する研究も進展し、古墳時代の伝統的要素が残存する飛鳥Ⅰ期から飛鳥Ⅲ期の第1段階、「律令的土器様式」として評価される飛鳥Ⅳ期から平城宮Ⅲ期、律令的土器様式の後半段階とも言え、製作手法の簡略化と省力化による量産指向がみられる平城宮Ⅳ期から長岡京期の第3段階を経て、多種多様な土器構成が台頭し平安京Ⅰ期新から平安京Ⅱ期の律令的土器様式の終焉期とその変遷が迫れるようになってきている。また、平城宮Ⅲ期についても、730年から760年までを古・中・新の三段階に見直されている。⁽⁴⁾⁽⁵⁾

ところで、斎宮跡周辺における土器製作遺跡の調査も大きな進展をみせており、6世紀後半から生産が開始されていた北野遺跡では、7世紀後半に最盛期を迎え、斎宮成立の前夜にあたる8世紀後半には衰退し、土師器生産地を周辺の明和町蓑村・有爾中・明星地区の土器焼成遺跡に移していることも明らかになりつつある。⁽⁶⁾

こうした斎宮跡を取り巻く諸情勢もかんがみ、令外の官として都城遺跡の一角に位置する斎宮跡の土器変遷を、都城遺跡の土器変遷を核として須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器等の生産地の動向も踏まえ、伊勢南部といった地方に位置する官衙遺跡の土器について、生産地を控えた土師器の形態変遷を基軸にすえ、これまでの編年を補足・集成し、斎宮跡土器編年を確立する。⁽⁷⁾

2000編年		1984編年		2000編年		1984編年	
編年区分	基準資料	編年区分	基準資料	編年区分	基準資料	編年区分	基準資料
斎 宮 期	第1段階	SB1615	飛鳥時代	SB1615	SK7430	前Ⅰ期	SK3127
		SK1255		SX2735			SK2650
				SK1225			
				SK2120			
	第2段階	SK5102	奈 良 時	SD0170	平	中 期	SE3134
				SE1800			
				SK3000			
	第3段階	SK1098	中 期	SK1098	安	後Ⅰ期	SE2000
		SK6210		SK1970			
	第4段階	SE4580	代 後 期	SK1291	時	後Ⅱ期	SK1730 SK1074
斎 宮 第 II 期	第1段階	SK6030	平安 時	SK1445	代	後Ⅱ期	SD3052
		SK1445					
	第2段階	SK5200	前Ⅰ期	SK1045			SD3052
		SK1045		SK1424			

第4表 斎宮跡土器編年新旧対照表

区分	年代	標識遺構	都城遺跡	美濃須衛窯	猿投窯
斎宮第I期 第1段階	710	SB1615 (第30次)	飛鳥 平城 平安京 新 古 中 II III IV V VI VII	前 後	第2小期 (I-17古) (I-17新)
SK1255 (第27次)		第3小期 (I-41)			
斎宮第I期 第2段階	730	SK102 (第70-1次)		700 第1小期	第4小期 (C-2)
斎宮第I期 第3段階	770	SK1098 (第21-1次)			前 後
斎宮第I期 第4段階	785	SK6210 (第88次)		第2小期	第2小期 (NN-32)
斎宮第II期 第1段階	820	SE4580 (第69次)			前 後
斎宮第II期 第2段階	850	SK6030 (第86次)		800 第3小期	第4小期 (IG-78)
斎宮第II期 第3段階	850	SK1445 (第34次)			前 後
斎宮第II期 第4段階	900	SK5200 (第77次)		第1小期	第2小期 (K-90②) (K-90③)
斎宮第III期 第1段階	950	SK1045 (第20次)			前 後
斎宮第III期 第2段階	1000	SX6666 (第95次)		950 第2小期	第2小期 (H-72)
斎宮第III期 第3段階	1050	SK7030 (第103次)			前 後
斎宮第III期 第4段階	1100	SK7040 (第103次)		第1小期	(古) (新)
縁倉	1333	SE4050中層 (第61次)			前 後
		SE4050上層 (第61次)			
		SE2000 (第31-4次)			
		SK1730 (第32次)			
		SK1074 (第20次)			
		SD3052 (第50次)			

第5表 斎宮跡土器編年表

第二節 斎宮跡第Ⅰ期の土器

斎王の伊勢群行が確認できる史実の初代は、天武天皇皇女である大来皇女の天武3年(674)と考えられており、この時期の宮殿等斎宮関係の遺構は、史跡の西部に位置することが推定されてはいるものの宮殿跡の詳細は確認されていない。

斎宮跡が一つの大きな画期をむかえるのは、8世紀後半における方格地割造営の時期であり、それは現在の斎宮研究から光仁・桓武朝に求めることができ、その一点を光仁朝における『続日本紀』宝亀2年(771)11月18日条による「遣鐵治正從五位下氣太王造斎宮於伊勢國」におくと考えている。また、桓武朝の延暦4年(785)4月23日条による「從五位上紀朝臣作良為造斎宮長官」も斎宮整備の大きな画期と捉えられる。

一方、土器の変遷は必ずしも歴史的な画期と期を一にしているとは限らず、土器変遷の大きな画期は「律令的土器様式」の中で長岡京期に求めることができる。

従って、斎宮跡土器編年の大きな画期を、大来皇女群行の674年から桓武天皇皇女朝原内親王群行の延暦4年(785)までの時期を斎宮跡第Ⅰ期とし、674年から和銅3年(710)の平城宮遷都までの飛鳥時代を第1段階、平城宮遷都から神亀4年(727)の斎宮寮設置を経て天平2年(730)の斎宮の財政を神宮から自立させる詔までの第2段階、730年から宝亀元年(770)の光仁天皇即位までの第3段階、酒人内親王群行を経て長岡京遷都の延暦3年(784)までの第4段階に区分する。

なお、第Ⅰ期第1段階は1984編年の「飛鳥時代」、第2段階は「奈良時代前期」、第3段階は「奈良時代中期」、第4段階は「奈良時代後期に」にそれぞれ対応する。

(1) 斎宮第Ⅰ期第1段階

壬申の乱の終結によって、皇位繼承問題に終止符が打たれ、飛鳥淨御原宮に遷都が行われ、天武天皇・持統天皇による律令国家への胎動期にあたり、持統8年(694)には藤原宮への遷都も行われている。

都城遺跡の編年では、「律令的土器様式」の成立する段階であり、飛鳥藤原京の編年では「飛鳥Ⅳ」とそれに続く「飛鳥Ⅴ」「平城宮Ⅰ」に該当する。⁽⁸⁾また、猿投窯では、⁽⁹⁾第III期第2小期及び第3小期の一部(岩崎17号窯から岩崎41号窯期)に該当する。⁽¹⁰⁾

斎宮跡では、主に史跡西部を中心に確認されている竪穴住居・土坑などから出土している土器群であり、遺構と斎宮跡との関係は明確ではない。この地域における一般集落と質的に大きな差異はないと考えられ、古墳時代以降の土器様式の流れの中で、土師器杯G・須恵器杯G・杯Hが消失するなかで杯A・杯Bが成立し、規格化と土師器におけるヘラミガキ、暗文をもつ律令的土器様式が出現する。

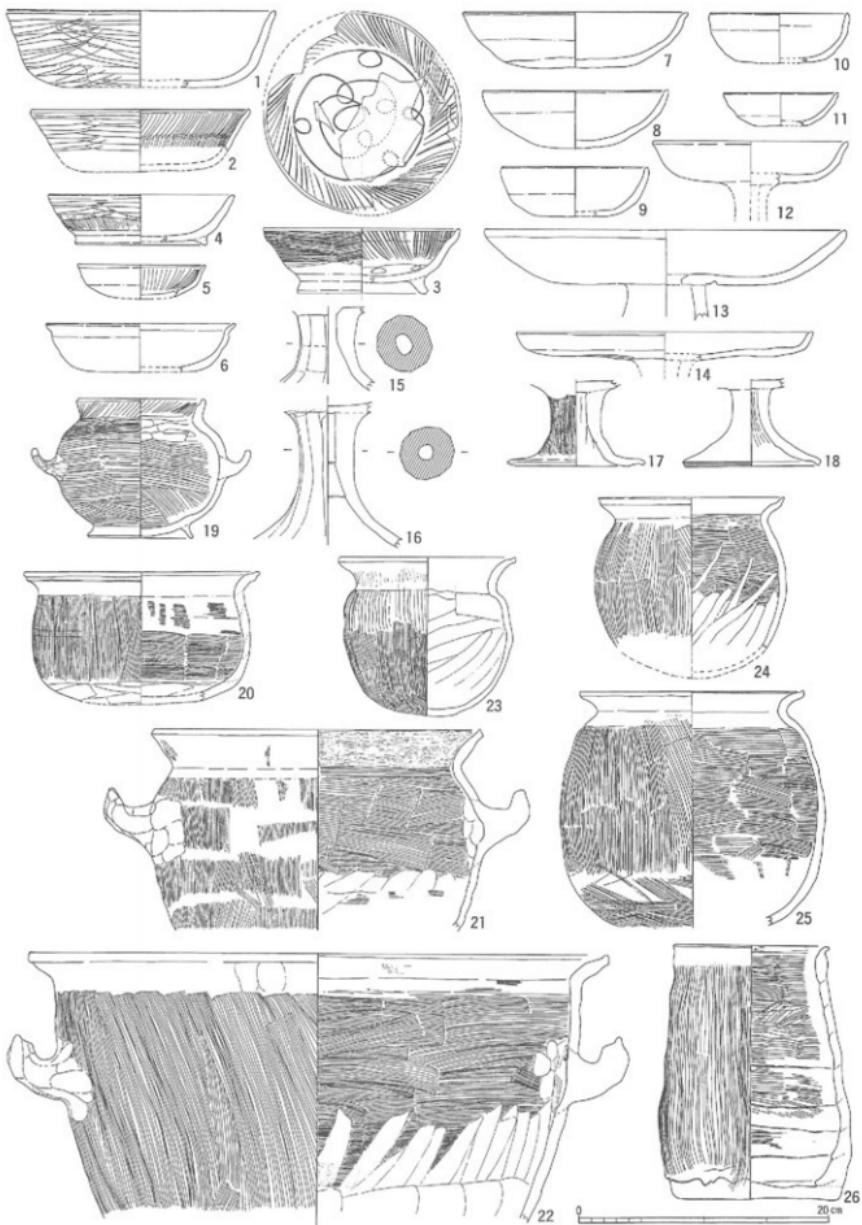
SB1615の土器 SB1615は、第30次調査で確認された長辺約8m、短辺約5mの方形の竪穴住居であり、東壁に円筒型土器(26)を倒立させ支柱とするカマドが付設されていた。⁽¹¹⁾

土師器の杯A・杯B・杯C・杯G・高杯A・高杯B、壺A、鍋A、鍋B、甕A・甕C、瓶、及びカマド支柱形土器、須恵器の杯G、同蓋、杯H、杯A、高杯、壺、甕、及び硯片が出土している。土器の総出土破片数は、第6表に示したとおりであり、土

		種 別	形 態	破片数	比 率
土 器 器	杯 A	供 調	476	20.18%	
		貯 藏	347	14.71%	
		煮 沸	1,415	59.98%	
		その他の	0	0.00%	
		小計	2,238		94.87%
黒 色 土 器	杯 B		0		0.00%
		供 調	72		
		貯 藏	49		
		その他の	0		
		小計	121		5.13%
灰 稚 陶 器	杯 C	供 調	0		
		貯 藏	0		
		その他の	0		
		小計	0		0.00%
		緑 稚 陶 器	0		
製 塚 土 器	壺 A	供 調	0		
		貯 藏	0		
		その他の	0		
土 鍋	壺 C	小計	0		0.00%
			0		0.00%
		土 鍋	0		0.00%
		総 計	2,359		100%

第6表 SK1615出土土器構成表

- 師杯A器が94.87%、須恵器5.13%となる。
- 土 器 器
杯 A　　杯Aは、口径21.6cm・器高6.2cm(1)、口径17.4cm・器高5.0cm(2)のものがあり、杯Aの大形品に分類される。外面はヘラミガキ、内面は、(2)で2段の斜放射状暗文が認められるが、(1)は器面の保存状況が悪く内面の暗文は確認できない。
- 杯 B　　杯Bは、口径15.7~16.2cm・器高5.2cm(3)、口径14.9cm・器高4.1cm(4)の中形品があり、(3)の口縁部外面は、縦方向にハケ調整した後ヘラミガキし、内面には斜放射状暗文が施される。(4)では、器面の残りが悪く、内面の調整は確認できない。
- 杯 C　　杯C(5)は、口径10.3cm、推定器高2.8cmで内面に一段の斜放射状暗文を施す。杯A・杯B・杯Cは、ともに赤褐色をなし、胎土も砂粒を含まず精良である。
- 杯 G　　杯G(7~11)は、「いなか風椀」とも呼称してきた椀形の土器で、胎土に砂粒を多く含み、粘土紐巻き上げ痕跡をとどめることが多く、暗褐色や明黄褐色をなしている。形態は、丸い底部から口縁部が大きく内湾して開き、口縁端部は丸くおさめられるのを基本とするが、端面をもつもの(10)、わずかに外反する例(7)もある。法量は、口径9.1~17.6cm、器高2.7~4.8cmで口径の幅が広い。この杯Gは、古墳時代から認められる器種で、同時代の竪穴住居、群集墳の副葬品としても出土している。
- 高 杯　　高杯は、杯部(12~14)と脚部(15~18)がある。杯部は深い杯部に口縁部が外開する(13)、口径が15.6cmとやや小振りで口縁部が内湾して立ちあがる(12)と、浅い杯部に口縁部が短く直立する(14)がある。脚部は、脚柱部を面取りする高杯A(15・16)とハケ調整のみで面取りしない高杯B(17・18)がある。
- 壺 A　　壺A(19)は、口径10.0cm、器高11.3cm、高台径8.5cmで体部中央上に一対の把手が付く。体部は、球形に近く、口縁部はわずかに外方に開き、端部はヨコナデされ内面が凹む。把手を挿入した後、体部外面を丁寧にヘラミガキし、内面は横方向にハケ調整する。口縁部は、内外面ともに斜放射状暗文を施す。
- 鍋　　鍋には、把手の付かない鍋A(20)と把手の付く鍋B(21・22)がある。鍋Aは、半球状の体部に平底風の底部と、口縁部が大きく外反する。底部内外面をヘラケズリし、体部外面をタテハケ、内面をヨコハケ調整した後上半部をヨコナデ調整する。⁽¹³⁾
- 甕　　甕には、球形の胴部をもつ中小の甕A(23~25)と長胴甕となる甕C(27~29)がある。甕Aは、口縁部が大きく外反して開き、外面を縦方向のハケで調整し、内面をヘラケズリする(23)とヨコハケ調整する(24~25)がある。甕Cは、内湾する口縁部が、大



第25図 斎宮第Ⅰ期第1段階の土器 (SB1615①)

きく屈曲して聞く。外面を縦方向のハケで調整し、内面上半部をナデ調整する(27)と横方向のハケで調整する(28・29)があり、下半部をヘラケズリする。

特殊な土器として、カマドの支柱として用いられていた筒形土器(26)がある。

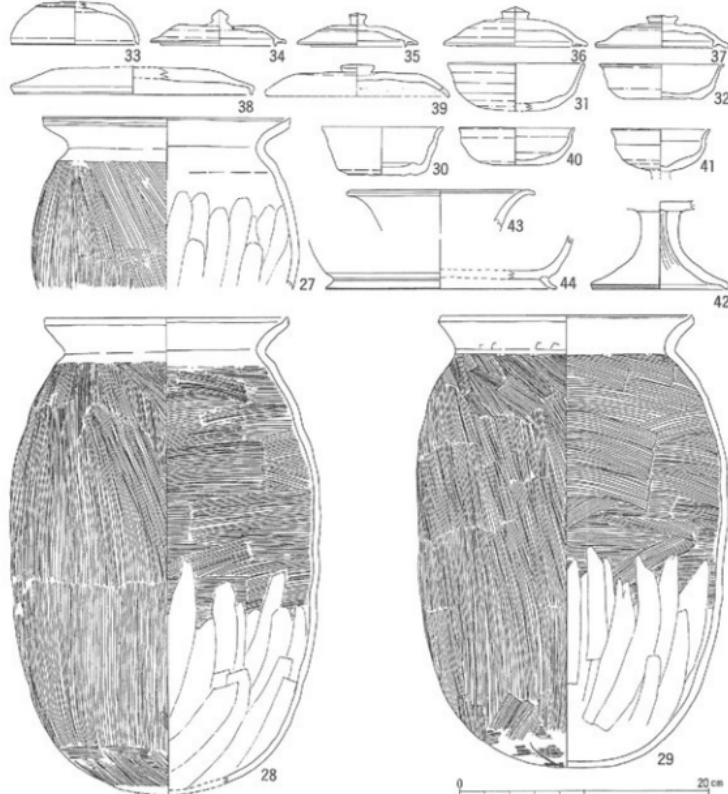
須恵器
杯

杯には、杯H蓋、杯G、同蓋、杯Aが出土している。⁽¹⁰⁾杯G(30)は、口径9.8cm、器高3.8cmの小形品で、底部外面はヘラで切り離す。杯H蓋(33)は、出土数も少なく、また杯Hの出土はない。杯Aは、口径10.1~11.0cm、器高2.8~3.8cmの例(31・32)がある。

杯 蓋

杯蓋には、内面にカエリをもつ例(34~37)と、カエリを消失した例(38・39)がある。前者は、杯Gに伴うもので、口径7.8~10.4cm、器高2.6~3.2cmで、カエリが口縁部から突出する(34・35)と突出しない(36・37)がある。後者は、杯Bに伴う蓋であるが、杯Bの出土はない。

この他に、高杯と考えられる杯部(41)、高杯脚部(42)、壺の口縁部(43)、同底部(44)、のほか甕片も出土している。



第26図 斎宮第Ⅰ期第1段階の土器 (SB1615②)

杯・蓋の小型化と蓋におけるカエリの存在から猿投窯の「岩崎17号窯」期の時期に比定できる。

SK1255の土器 史跡西部の東裏地区で行った第27次調査区で検出した長径4.5m、短径3.2m、深さ0.5mの土坑からの一括遺物である。⁽¹⁵⁾

出土土器には、土師器の杯A・杯B・杯G・皿B・高杯A・高杯B・鍋A・鍋B・甕A・甕B・竈、須恵器杯A・杯B蓋・甕類が整理箱10箱ほど出土している。土器の破片数は、土師器95.64%、須恵器4.36%で、土師器の杯と甕が多い。

土師器

杯

土師器杯は、平底で口縁部がわずかに内湾して立ち上がり口縁端部がつまみ上げられる杯A(45~47)、口縁部がわずかに内湾して開き、外反する高台が貼り付けられる杯B(48)、底部が丸味をもち口縁部が内湾し、椀型に近い形態を示す杯G(49~54)がある。杯Gは、口径10.2~13.0cm、器高3.9~4.6cmが主体をなす。

高杯

高杯は、浅い皿状の杯部に脚径が大きく、脚部が大きく開く例(56)、脚柱部が中空で外面にタテハケを施す例(57)、脚部が中実となり、端部が外方に開く例(58)など各種の形態が認められる。

鍋

鍋は、外開して大きく開く口縁部に半球状の体底部をなす鍋A(59・60)と、これに一对の把手が付く鍋B(61)の2種があり、前者の口径は15.0cm、18.8cmで、後者の口径は33.0cmと後者の方が大形品である。両者とも、外面を縦方向にハケ調整し、内面を板ナデが全面に及ぶものとナデを併用する例がある。

甕

甕には甕Aと甕Cがあり、甕A(62・63)は、口径14.7cm前後で球形の体部に直線的に外反する口縁部が開く(62)、口径15.9cmで、頸部が外弯して開く(63)がある。甕Cは、「く」の字状に開く口縁部をもち、口縁端部が上方につまみ上げられる。甕A・甕Cは、外面を縦方向にハケ調整し、内面を縦方向に板ナデする例(62・64)と横方向にハケ調整し、底部内面をケラケズリする(63・65)の大きく分けて二つの調整手法がある。

須恵器

杯

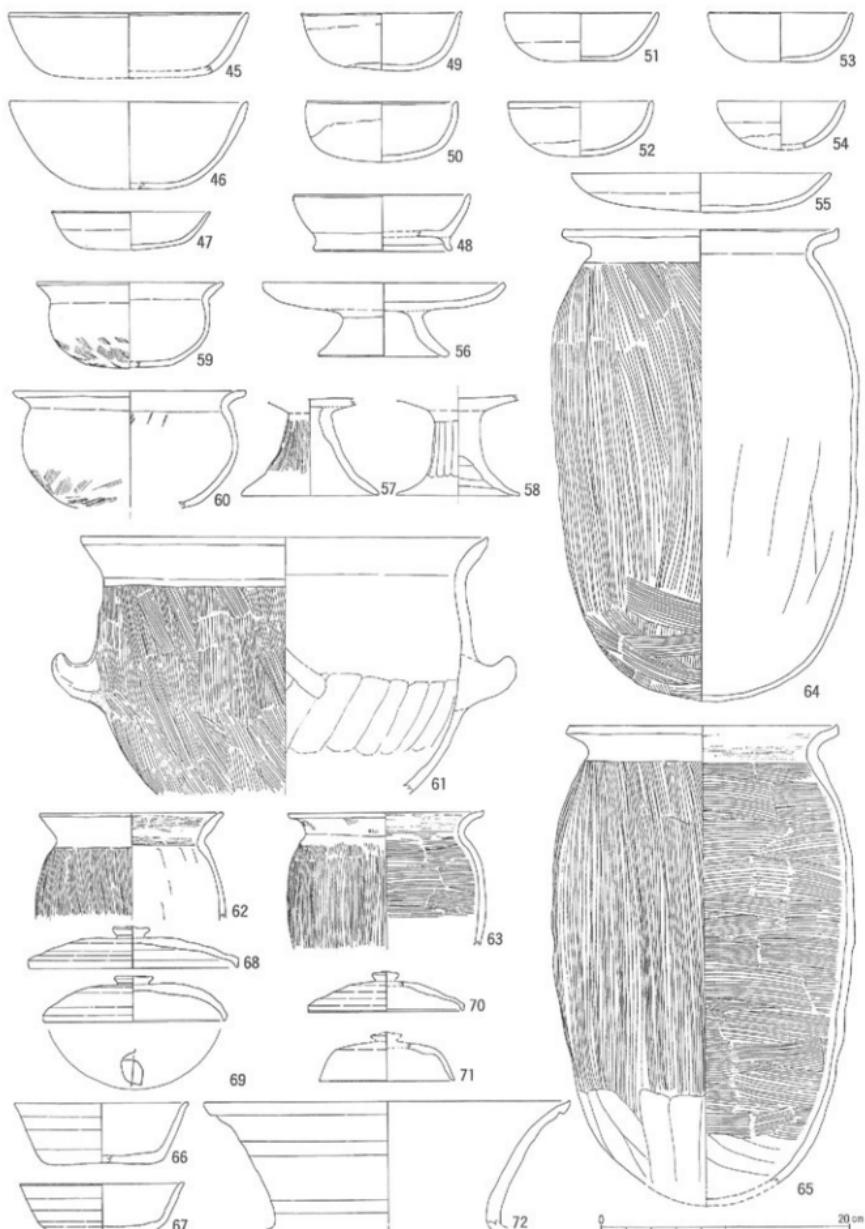
出土量は、土師器に比べ極端に少なく、数点が出土したにとどまる。杯A(66・67)は、口径13.4~14.0cm、器高4.0~5.0cmで平らな底部から口縁部が直線的に開く。底部外面は、ヘラキリのままの例(66)とヘラキリ後ヘラケズリする例(67)がある。

杯蓋

杯蓋(68~70)には、天井部の形態に3種類ほどの差異が認められるが、口縁端部のカエリが消失し、つまみは扁平な擬宝珠となっている。

種別	形態	破片数	比率
七 頭 器	供 繩	98	6.12%
	貯 藏	6	0.37%
	煮沸具	1,497	93.45%
	その他	0	0.00%
	小計	1,601	95.64%
黒 色 土 器		0	0.00%
須 恵 器	供 繩	21	
	貯 藏	52	
	その他	0	
	小計	73	4.36%
灰 色 陶 器	供 繩	0	
	貯 藏	0	
	その他	0	
	小計	0	0.00%
緑 色 陶 器	供 繩	0	
	その他	0	
	小計	0	0.00%
製 塩 土 器		0	0.00%
土 繩		0	0.00%
總 計		1,674	100%

第7表 SK1255出土土器構成表



第27図 斎宮第Ⅰ期第Ⅰ段階の土器 (SK1255)

壺 蓋 壺蓋(71)は、口径11.0cm、推定器高4cmで、平らな天井部が大きく屈曲して下方に垂下する。

甕 甕(72)は、口縁部のみの残存であり、口径29.4cmで、口縁部は大きく外方に開き、端部が肥厚して断面三角形状の縁帶をつくる。

須恵器は、その形態から猿投窯の「岩崎41号窯」期に併行するものと考えられ、700年前後の時期が与えられる。製品は、在地で製作されたものと推定される。

第1段階の土器群は、古墳時代の伝統を色濃く残すものである。また、SB1615は竪穴住居であり、SK1255は周辺で三彩の出土もみられ、飛鳥時代から奈良時代における斎宮中枢部の可能性が濃い地域での検出であるが、土坑の性格も不分明であり、ともに斎宮跡の土器編年を考察するうえでは、次の第2段階以降の土器群とやや異なる性格をもっている可能性もあり、今後の課題のひとつと言えよう。

(2) 斎宮第I期第2段階

大宝元年(701)大宝律令が定められ、「斎宮司准察、属官准長上焉」とされ、和銅3年(710)には平城宮遷都が行われ、律令国家体制の礎が固められる。斎王制度も新たな展開を迎え、皇女を遣わしての伊勢神宮への祭祀が重要性を増していく。養老2年(718)には、「斎宮察公文。始用印焉」官衙の機能を公のものとする。

天平2年(730)には、「詔曰。供給斎宮年料。自今以後皆用官物。不得依旧宛用神戸庸調等物。」とされ、伊勢神宮から自立した律令国家機構の一翼を担うこととなる。1984編年において、奈良時代前期として位置付けてきたものであり、都城遺跡では平城宮Iの後半から平城宮IIに時期に相当し、須恵器生産地の編年では、美濃須衛窯IV期第1小期・猿投窯では第III期第3小期の岩崎41号窯式、第4小期の高藏寺2号窯式の時期に該当する。

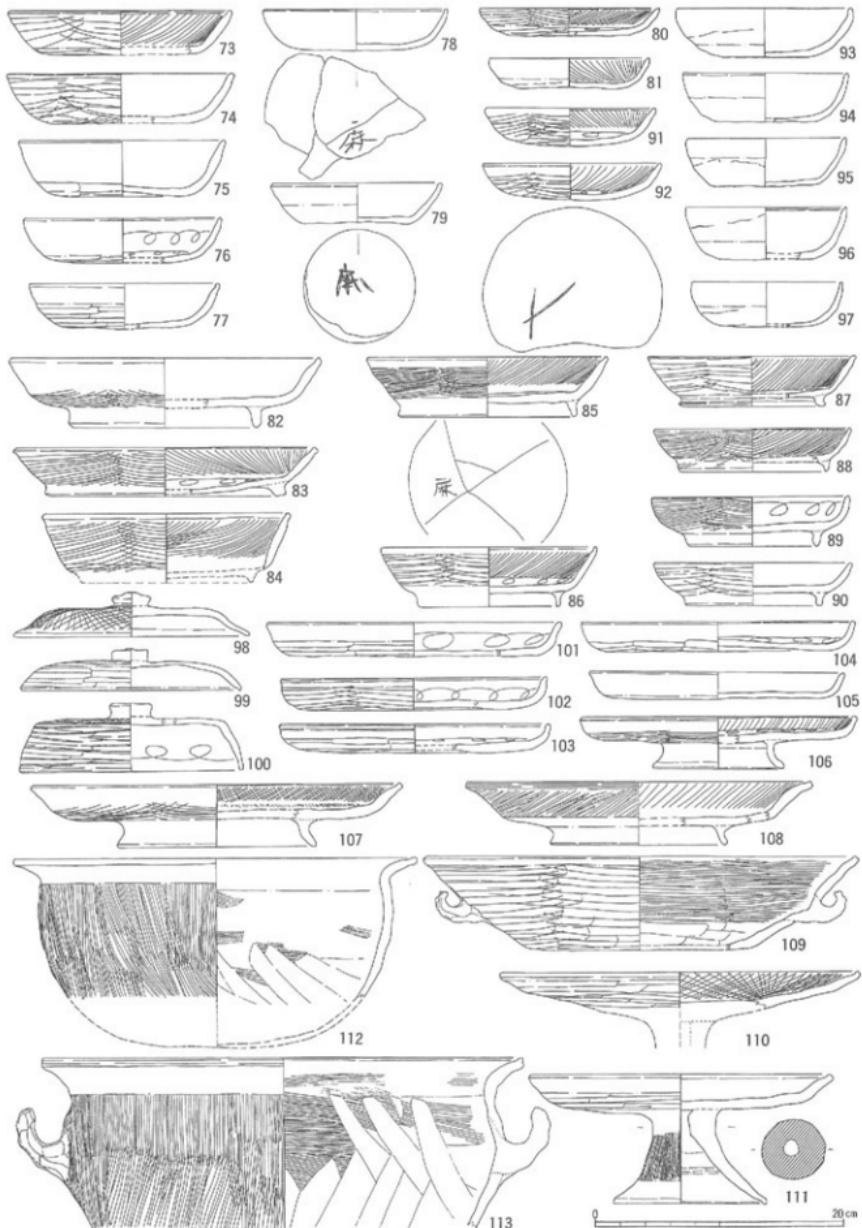
SK5102 史跡西部の塚山地区で実施した現状変更に伴う第70-1次調査で確認された土坑で、南北4.0m、東西5.0m、深さ0.5mの隅丸方形をなしている。土師器、須恵器のはか円面鏡、鉄製U字鋸先、フイゴの羽口等が出土している。土器の破片数は、4,228片で、土師器94.58%、須恵器5.42%である。

土師器 土師器には、杯A・杯B・同蓋・杯C・杯G・皿A・高杯A・盤B・壺・蓋鍋A・鍋B・甕A・甕C・瓶がある。

杯 A 土師器杯A(73~81)には、口縁部と底部との境が丸みをもち、口縁が外上方に聞く形態をなす例が多い。口径は12.9~18.0cm、器高2.3~4.5cmで、法量は、大きくに3つ

種 別	形 態	破片数		比 率
七 師 器	供 膽	1,885	47.14%	
	貯 藏	3	0.08%	
	煮沸具	2,111	52.79%	
	その他	0	0.00%	
	小計	3,999		94.58%
黒 色 土 器		0		0.00%
須 恵 器	供 膽	122		
	貯 藏	107		
	その他	0		
	小計	229		5.42%
灰 雜 陶 器	供 膽	0		
	貯 藏	0		
	その他	0		
	小計	0		0.00%
綠 雜 陶 器	供 膽	0		
	その他	0		
	小計	0		0.00%
製 塙 土 器		0		0.00%
土 鍤		0		0.00%
總 計		4,228		100%

第8表 SK5102出土土器構成表



第28図 斎宮第I期第2段階の土器 (SK5102①)
133

に区分できる。器面の保存状況が必ずしも良くないが、調整手法は、外面をヘラケズリし口縁部内面に一段の斜放射状暗文、底部内面に螺旋状暗文を施し、外面をヘラミガキする例が多い。外面のヘラケズリは、口縁部上部まで及ぶ例(73・74・80)と底部外面のみの例(75・76・78・79・81)があり、前者はヘラケズリの後、ヘラミガキする。後者は、口縁部内外面をヨコナデ調整する。底部外面には「麻」の墨書(79)と、ヘラ描き(78)がある。

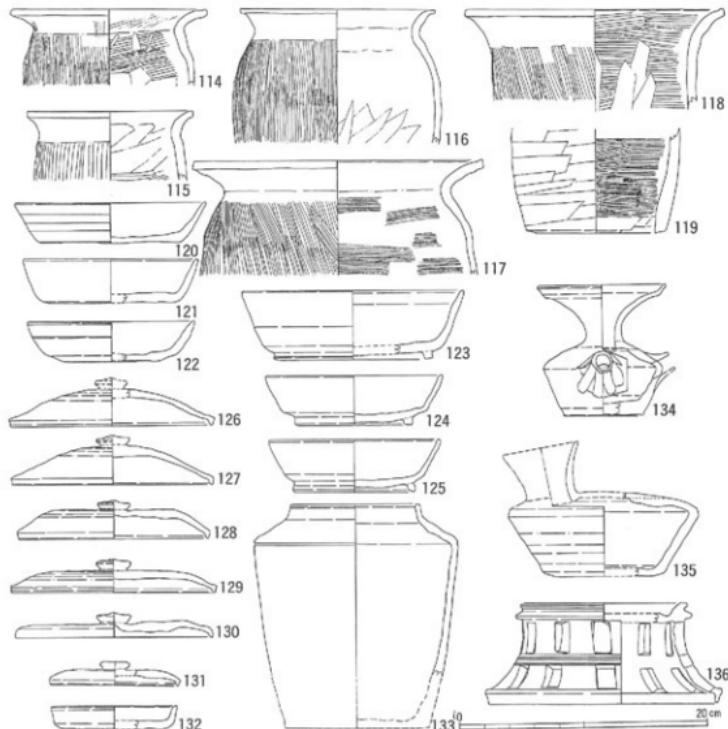
- 杯 B 杯B(82~90)は、法量から口径24.6cm・器高3.9cm、口径20.0~19.6cm・器高4.9~4.8cm、口径17.2~16.4cm・器高4.8~4.0cm、口径16.0~15.8cm・器高4.0~3.5cmの4つに区分できる。小型品は、口縁部と底部の境が丸みをもち、口縁部が内湾する。中形・大形品は、口縁部が外方に大きく開く。高台の形態は、断面形が長方形で先端部が丸みをもつ(82・85・86)、断面が方形状となる(83・90)、端部が外反する(87)例などがあり多様である。口縁部内外面をヘラミガキして調整する例が大半で、口縁部内面を1段の斜放射状暗文、底部内面に螺旋状暗文を施す(86)、口縁部内面を螺旋状暗文とする(89)例もある。
- 杯 C 杯C(91・92)は、口径13.8~14.2cm、器高3.0~3.1cm、底部から口縁部まで大きく内湾する丸底をなす。外面をヘラケズリ後、ヘラミガキし、内面に一段の斜放射状暗文と螺旋状暗文を施す。(92)の外面には、ヘラ記号が認められる。
- 杯 G 杯G(93~97)は、口径12.0~13.8cm、器高3.6~4.2cmで粘土紐を巻き上げて、底部外面を指で押さえて成形した後、内面をナデて平滑に仕上げ、口縁部内外面をヨコナデ調整する。外面に粘土紐の接合痕を残す。
- 蓋 蓋(98~100)は、口径19.0cm、器高3.5cmで宝珠つまみをもち、平らな天井部に緩く屈曲する口縁部もつ例(98)と、口径17.6cm、器高3.2cmで擬宝珠つまみをもち、天井部から口縁部までが大きく内湾する例(99)がある。前者は、天井部をヘラケズリした後、ヘラミガキし、後者は口縁部を同心円状にヘラケズリし、天井部にハケを施す。
- 皿 A 皿A(101~105)は、口径20.4~23.4cm、器高2.3~2.6cmがある。平らな底部から口縁部が丸みをもって立ち上がり、口縁部は垂直気味に立ち上がる例(102・103)とやや外開する例(101)がある。口縁端部は、わずかに内傾する例(102)、肥厚する例(103)がある。外面は、ヘラケズリした後、ヘラミガキを施す例(102)以外は、底部から口縁部にかけてヘラケズリするb手法によるがその範囲は、口縁部中位まで及ぶ例(101・103)から底部にとどまる例(104)がある。外開度の大きいものほど、ヘラクズリの範囲が狭まる傾向がある。内面は螺旋状暗文を口縁部から底部にかけて施す。
- 皿 B 皿B(106~108)は、皿Aに高い高台の付く(106)と口縁部が大きく外開する盤に近い器形に高台が付く(107・108)がある。(106)は、皿部外面をヘラミガキし、内面に斜放射状暗文と螺旋状暗文を施し、底径10.6cm、台高1.9cmの比較的高い高台が付けられる。高台は、大きく外反する。(107・108)は、平らな底部に、口縁部が大きく外開(107)、外反(108)し、端部はともに肥厚し、外方に面をもつ。(107)は、皿底部をヘラミガキし、内面を斜格子状暗文と螺旋状暗文を施し、(108)は皿部外面を斜めにヘラミガキし、内面に斜放射状暗文を施す。高台は、底径の大きなものを貼り付け、

外方に開く。

盤 B 盤B(109)は、口径35.2cm、器高7.5cmで、斜め上方に開く口縁部に一对の把手が付けられる。外面をヘラケズリの後ヘラミガキし、内面は横方向にハケ調整した後、下半部にヘラケズリを行なう。

高 杯 高杯(110)は、口径29.0cmで杯部のみ残存する。杯部中央から直線的に外上方に延びる口縁部は、端部が強くヨコナデされ、わずかに肥厚する。外面をヘラケズリし、内面を斜格子状暗文と一重の螺旋状暗文を施す。(111)は、口径24.0cm、器高10.5cm、脚部径12.2cmである。杯部は、平らな底部に外開する口縁部が短く開き、端部は強くヨコナデされ外上方に面をもつ。脚部は径約5cmで太く短く、外湾して開く。杯部外面を口縁部中位までヘラケズリし、口縁部をヨコナデする。脚部は、中空として杯部に貼り付け、脚中央を縦方向に16面に面取りするヘラケズリした後、縦方向にハケ調整する。端部をヨコナデ調整して仕上げる。

鍋 鍋には、半円球状の体部に大きく屈曲して外反する口縁部が取り付く鍋A(112)とこれに把手が付く鍋B(113)がある。(112)は、口径32.6cm、推定器高約15cmで、体部



第29図 斎宮第I期第2段階の土器 (SK5102②)

外面を縦方向にハケ調整し、内面を上半部を横方向にハケ調整した後、下半部から斜め上方にヘラケズリする。(113)は、口径39.0cmで、推定器高約22cmで底部は丸みをもつが底平に近い器形と思われる。器面調整は、前者と同じである。

甕 甕には、丸底の器形となる甕A(114~116)と胴部が長い長胴甕となる(117)がある。甕A(114・115)の口径は、15.9cmと13.6cmである。球形を成すと推定される体部は、外面を縦方向のハケで調整し、内面上部をヘラケズリ調整する(115)とヨコハケ調整する(114)がある。口縁部は、大きく「く」の字状に外反し、ヨコナデ調整する。甕C(117)は、口径23.6cmで、口縁部の外反度は甕Aよりも大きく、外弯する。器面調整は、外面を縦方向にハケ調整を行い、内面をヨコハケの後ナデ調整する。

瓶 瓶(118・119)は、ほぼ直立する体部に短く外反する口縁部をもつ。外面を縦方向にハケ調整し、内面上部を口縁部内面まで横方向にハケ調整し、下半部をヘラケズリで搔き揚げ、上部のヨコハケに及ぶ。

須恵器 杯A、杯B、同蓋、皿A、壺B、平瓶、甕及び円面硯がある。

杯 A 杯A(120~122)は、口径13.6~15.6cm、器高3.1~4.0cmで、底部と口縁部の境が丸みをもつ。口縁部の器壁が厚く外開する(122)は、器形的に前段階に近い。底部と口縁部が明瞭な境をもち、口縁部が均一な厚さで直線的に外開く(120・121)は、径高指數に差異がある。都城遺跡の杯Aに近い(121)は、底部外面をヘラキリの後ハケ調整する。両者とも口縁部をヨコナデし、底部内面を一定方向のナデ調整する。

杯 B 杯B(123~125)は、口径18.0cm、器高5.4cmの大形品(123)、口径14.0~14.4cm、器高4.1~4.2cmの小形品(124・125)に区分され、口縁部がわずかに外傾して開く。高台は、いずれも角高台で、(124)は筋から内側に付くが、他の例は底部と口縁部の境近くに貼り付けられる。底部は回転ヘラケズリ調整し、口縁部をヨコナデする。

蓋 蓋(126~131)は、口径16.3~16.5cmの大形(126・127・129・130)、口径15.3cmの中形(128)、口径10.2cmの小形(131)に区分され、形態から擬宝珠つまみをもち、下方に挽きだされる口縁部は、端部が外面に面をもち、天井部が陣笠状に開く(126・127)、器高が低く口縁部がわずかに下方に挽きだされる(129・130)に分れる。天井部外面は、回転ヘラケズリし、口縁部をヨコナデする。

皿 皿(132)は、皿Cの小形のもので口径10.2cm、器高1.9cmのものである。

壺 B 壺B(133)は、口径10.2cm、推定器高17cmで、肩部最大径16.7cmで、底部を欠損する。わずかに外開きに立ち上がる体部に、内傾する肩部が付き、短い口縁部が立ちあがれられる。肩部外面に自然釉が掛かる。

甕 甕(134)は口径10.1cm、器高10.5cmで、肩部での最大径は9.7cmである。注口部は、突出し、ヘラケズリされて面をなす。底部は、小さな高台が貼り付けられる。底部外面は、ヘラケズリの後ナデ調整する。

平瓶 平瓶(135)は、口縁部を欠くが、肩部の最大径が15.5cmで、底部に向けて大きく窄み、平らな底部となる。底部外面をヘラケズリの後ナデ調整する。

硯 砚(136)は、径13.4cm、推定器高8.2cm、底部径18.7cmの小形の硯である。緩く外反する脚部中央に2条の沈線で上下を分け、それぞれに長方形の透し孔を配する。

第2段階の土器群には、これまでと土器構成が大きく変革する時期であり、土師器における杯A・杯B・杯Cの盛行とヘラミガキの多用が顕著で、都城遺跡の影響が在地土器生産にも浸透したことが窺える。一方、古墳時代以来の伝統的な型式である杯Gも依然として採用されており、地方官衙における一面を示している。

(3) 斎宮第I期第3段階

天平2年(730)の詔により、斎宮の財政が神宮から自立し、国家財政下に組み込まれ、中央律令国家機構の整備と軌を一にしていると見られる。また、聖武朝における鎮護国家を意図した国分總寺の建立などとともに、神宮における祭祀も重要視され、大来皇女以来臨時的であった斎王が、聖武朝の県皇女以降、天皇の代替わり毎に設置される制度として整えられる時期でもある。宝亀元年(771)の氣太王の造斎宮派遣までの約40年間を第3段階と捉える。

1984編年における奈良時代中期と位置付けた時期に相当し、都城遺跡の平城宮Ⅲ及び平城宮Ⅳに該当する、須恵器の生産地における編年では、美濃須衛窯のⅣ期第2小期或いは猿投窯第Ⅳ期第1小期の岩崎25窯期及び第2小期の鳴海32窯期に該当する。

SK1098

鍛冶山中区画で第46次調査区と第92次調査区に挟まれた地区での現状変更に伴い確認された土坑であり、東西幅約3.5mの溝状の遺構とも考えられるが、南及び北は調査区外へ拡がる。

土 師 器

杯 A 杯A・杯B・同蓋・杯G・皿A・盤A・高杯A・甕A・甕Cがある。

杯 A

口径18.0~20.1cm、器高4.0cm前後の大形(137・145)と、口径13.6~17.4cm、器高2.7~3.6cmの中小形(138~152)に区分できる。口縁部は、直線的に外開する例(137)や、内湾する例(138)、端部が外反する例(145)がある。器面調整は、保存状況が必ずしも良くないので判定できないうが、外面をヘラケズリ調整し、口縁部をヨコナデ調整するb手法による。ヘラミガキや暗文が施されることが少なくなっている。

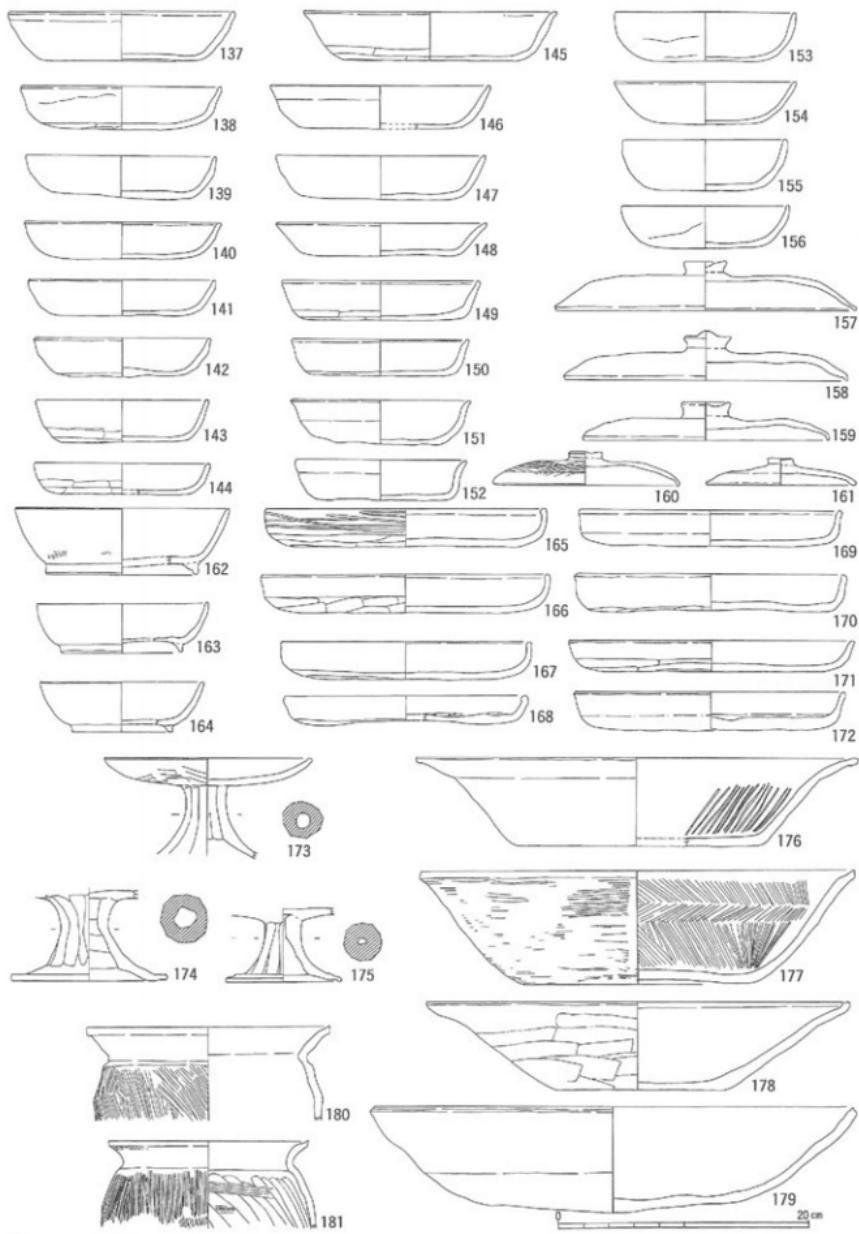
杯 B

(162)は、口径17.0cm、器高5.3cmで、口縁部がわずかに内湾して外方に開く。

杯B蓋には、口径18.8~23.0cm、器高2.2~3.0cmの大形(157~159)と口径11.6~14.6cm、器高2.2~2.8cmの小形(160・161)がある。つまみは、ともに扁平な擬宝珠で、天井部は内湾する。(160)は、天井部外面を四~五分割にヘラミガキし、内面をヨコナデ調整する。

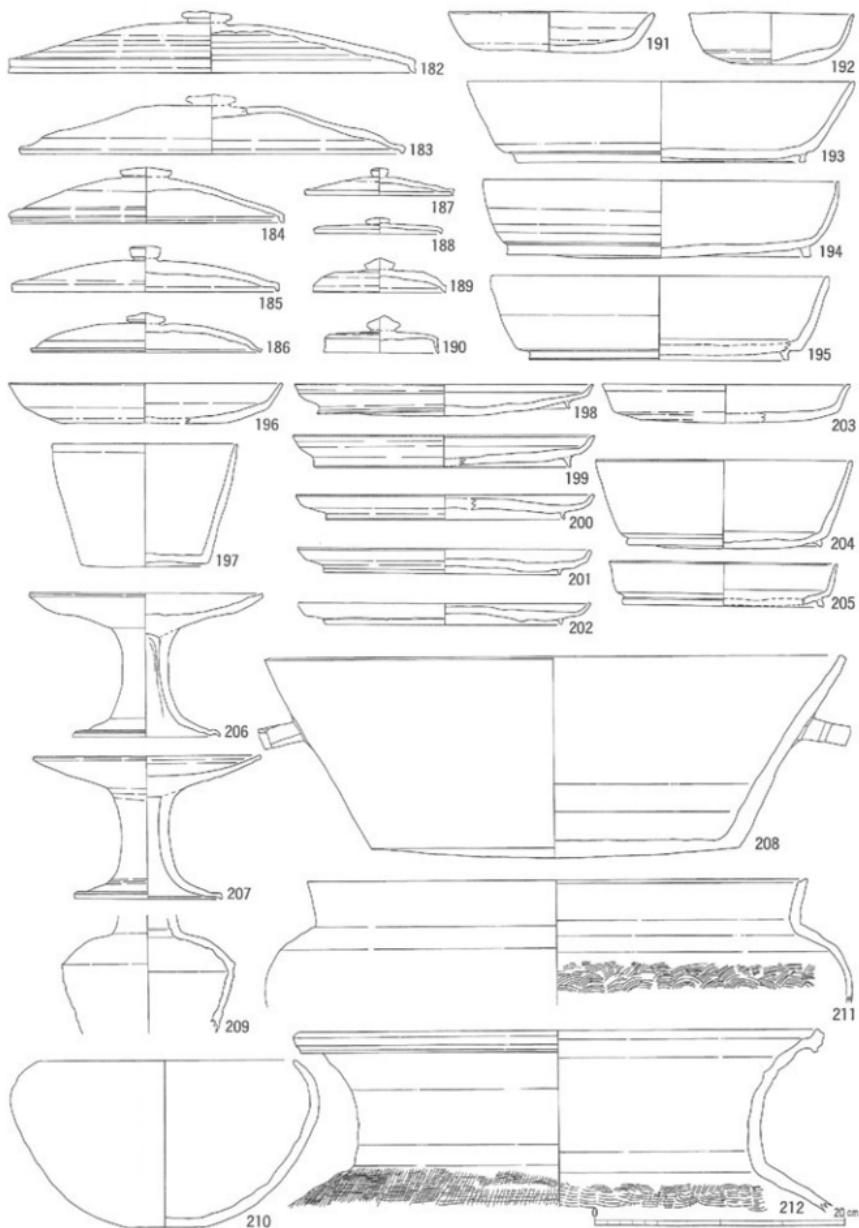
種 別	形 態	破片数	比 率
土 師 器	供 贈	5,360	89.32%
	貯 藏	575	9.58%
	煮沸具	66	1.10%
	その他	0	0.00%
	小計	6,001	95.07%
黒 色 土 器		0	0.00%
須 恵 器	供 贈	132	
	貯 藏	179	
	その他	0	
	小計	311	4.93%
灰 猿 陶 器		0	0.00%
綠 猿 陶 器	供 贈	0	
	貯 藏	0	
	その他	0	
	小計	0	0.00%
製 塙 土 器		0	0.00%
土 鍋		0	0.00%
總 計		6,312	100%

第9表 SK1098出土土器構成表



第30図 斎宮第I期第3段階の土器 (SK 1098①)

- 杯 G** (153～156)は、口径12.8～14.2cm、器高3.5～4.0cmで、口縁部は大きく内湾して開き、粘土紐の接合痕を残し、粗いナデで成形する。
- 皿 A** (165～172)は、口径19.4～23.0cm、器高2.0～3.1cmで、口縁部は内湾して立ち上がり、端部は内側に巻き込まれ肥厚する例(165)や、外方に面をもつ例(170)、わざかに外反する例(172)、丸くおさめられる例(171)などがある。底部から口縁部外面までヘラケズリし、口縁部をヘラミガキするc手法(165)、底部外面をヘラケズリし、口縁部をヨコナデ調整するb手法の例(166～172)があり、後者に底部内面に三重の螺旋状暗文を施す例があるがその他では、内面の暗文は認められない。
- 皿B 蓋** (158)は、口径22.6cm、器高4.0cmで、擬宝珠形のつまみに平らな天井部をもち、口縁部は、外方にさがり端部が垂直に引き出され、外方に面を持つ。天井部外面をヘラミガキし、内面をナデ・ヨコナデで調整する。
- 盤 A** (176～179)は、口径38.2cm、器高8.6cmの丸底で鉢形の器形をなす(179)、平らな底部から口縁部が直線的に外方に開き、端部が外反する口径34.0～35.0cm、器高7.0～8.8cmの(176～178)がある。後者は、一般的に見られる盤であるが前者の例は少なく、鉢と分類した方が良いかもしない。後者では、底部外面をヘラケズリし、口縁部外面を横方向に丁寧にヘラミガキし、内面は底部に螺旋状暗文、口縁部に3段の斜放射状暗文を施す。
- 高 杯** (173～175)は、脚部は下方で大きく外方に開き、端部は垂直に引き出される。脚部は、12面に面取りされるが、縦方向のハケ目が残る。
- 甕** 甕A (180・181)がある。(180)は口径19.4cm、(181)は口径16.0cmで、前者は内面をヨコハケ調整するが器面の保存状況が良くないので必ずしも明確でない。後者は、内面上部までを縦方向のヘラケズリを行った後にわざかに横方向のハケ調整を行う。
- 須恵器** 須恵器には、杯B・杯蓋・杯E・皿A・皿B・皿D・皿蓋・碗A・高杯・壺K・壺蓋・甕A・甕Cがある。
- 杯 A** (191・192)は、口径13.0～16.2cm、器高3.2～4.2cmで、(192)は口径の対し深い形態をなす。底部外面は、(191)はナデ調整、(192)は回転ヘラケズリ調整する。
- 杯 B** (193～195)は、口径26.6～30.8cm、器高6.2～6.8cmで、断面方形の高台が付けられるが、(194)は底部が突出する。口縁部は直線的に外方へ開き、端部は丸くおさめられる。
- 杯B 蓋と考えられるものには、口径31.6～32.6cm、器高4.8～5.0cmの大形のもの(182・183)と、口径18.4～21.8cm、器高3.3～4.5cmの中形のもの(184～186)、口径10.0～12.0cm、器高1.2～2.8cmの小形のもの(187～189)に大別される。大型は扁平な擬宝珠形のつまみをもち、天井部は陣笠状に開き、端部が垂直に引き出され外方に面をもつ(182)と端部が屈曲して引き出される(183)がある。(182)は、美濃窯の製品で美濃須衛窯の第Ⅳ期第1小期から第2小期に位置づけられるものである。中形には、擬宝珠形のつまみをもち、器高が比較的高い(184)、小形にはつまみが擬宝珠状となり、天井部の器高が低く端部が引き出され外方に面をもつ(188)がある。



第31図 斎宮第I期第3段階の土器 (SK1098②)

皿 皿部の器が高い皿A(196)と高台が付く皿B(205)、に区分される。皿Aは、口径21.8cm、器高3.2cmで底部が突出し不安定な底部にわずかに外反して外方に開く口縁部からなる。底部外面を回転ヘラケズリし、口縁部をヨコナデ調整する。

皿Bには、器高3.6cmの中型の(205)がある。底部外面を回転ヘラケズリ、口縁部をヨコナデ調整する。高台は、断面長方形で直立もしくはやや外開きとなる。

盤 盤B(198~202)は、口径23.4~24.0cm、器高1.8~2.6cmで、浅い皿部に高台径19.2~20.8cmの径が大きく低い高台が付く。皿部の底部が突出し、高台がその機能をはたさない例(198)も見受けられる。

椀 梗A(197)は、口径14.8cm、器高9.8cm、底径10.3cmでわずかに上げ底となる底部から直線的に口縁部が外開する。底部外面をヘラケズリ、口縁部をヨコナデ調整する。

高杯 高杯(206・207)は、口径18.0~18.6cm、器高11.4~11.6cmでやや太めの脚部に直線的で浅い皿状に開く杯部がのる。口縁端部は外面に面をもつ。脚端部は外反して開き、端部は下方に引き出される。

壺 壺K(209)は、頸部と体部上部のみの出土であり、頸部径5.4cm、体部最大径14.0cmで肩部と体部の境は明瞭な稜線を持つ。

壺蓋(190)は、口径9.1cm、器高3.0cmで、宝珠形のつまみをもち、平らな天井部から口縁部が垂直に垂下する。

甕 甕A(211)は、口径39.6cmで垂直気味にたつ頸部から外反しながら口縁部が開き、端部は上方に引き出され、内面に面を持つ。

体部外面を格子状の叩き文を施し、内面は同心円状の叩き具の痕跡をとどめる。

甕C(212)は、口径41.4cmで、口縁部はほぼ直立して短く開く。口縁端部は内傾する面をもつ。肩部は丸く外弯し、外面は叩きの後をナデ消し、内面には、同心円状叩き当具痕が残る。

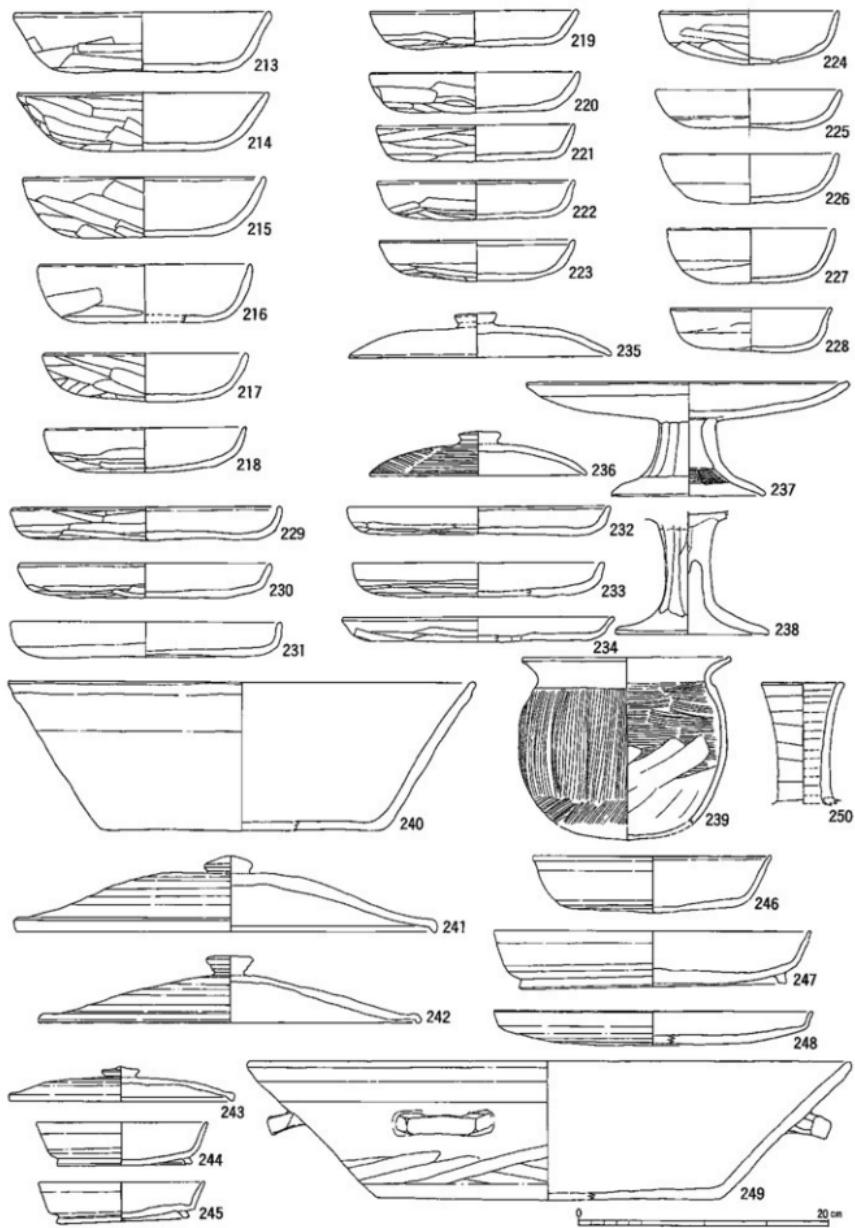
SK6210 史跡東部の鍛冶山中区画に位置し、内院外郭の一部とその東地区を含む第88次調査で確認した長径2.9m、短径2.4m、深さ0.8mで、焼土や炭化物の混入した土坑埋土下層から出土した一括遺物である。この時期の一括資料としては、同じ調査区のSK6220があるがSK6210よりやや新しい要素を含んでいる。

土師器 杯A、蓋、杯G、皿A、高杯A、盤A、甕Aがある。

杯 A 口径15.8cm・器高3.3cm~口径17.4cm

種別	形態	破片数	比率
土師器	供膳	1,715	97.44%
	貯蔵	32	1.82%
	煮沸具	13	0.74%
	その他	0	0.00%
	小計	1,760	94.93%
黒色土器		0	0.00%
須恵器	供膳	92	
	貯蔵	2	
	その他	0	
	小計	94	5.07%
灰釉陶器	供膳	0	
緑釉陶器	貯蔵	0	
	その他	0	
	小計	0	0.00%
	供膳	0	
製塙土器	その他	0	
	小計	0	0.00%
	土鍊	0	0.00%
総計		1,854	100%

第10表 SK6210出土土器構成表



第32図 斎宮第I期第3段階の土器 (SK6210)

・器高4.7cmの中形のもの(216~223)、口径19.8cm・器高4.9cm~口径21.0cm・器高4.8cmの大形のもの(213~215)があり、中間的な法量を示すものがわずかに存在する。

調整は、外面をヘラケズリするb手法であり、底部外面をナデ調整するe手法のものは見られない。ヘラケズリの範囲は、口縁部直下まで及ぶものから口縁部下半までのものがある。

杯 G 杯G(225~228)は、口径13.0~14.9cm、器高3.1~4.4cmで楕形に近い形態を示し、胎土に砂粒を含み、淡黄褐色を示し、粘土紐の接合痕をのこし、外面をナデ調整する。

椀 A 椭(224)は、推定口径14.5cm、器高4.3cmで、丸みのある底部をもち、口縁部はほぼ垂直気味に外開き、楕形の形態を示す。胎土・色調は、杯Aと同じであり、底部外面をヘラケズリ、口縁部をヨコナデする調整手法も杯Aと同様である。底部に、焼成前に3か所の穿孔を行っている。

皿 A 皿A(229~234)は、口径20.4cm、器高2.0cmと、口径22.0cm、器高2.9cmである。口縁部と底部の境は丸みをもち、口縁部は垂直気味に立ち上がる。底部外面をヘラケズリし、口縁部をヨコナデするb手法で調整する。

皿Aには、口縁部が斜め外方に開き、底部をヨコナデ調整する平安時代的な(234)が1点ある。

蓋 蓋は、口径17.6cm・器高3.5cm(236)と口径21.2cm・器高3.5cmの(235)があり、ともに丸みをもつ天井部に擬宝珠形のつまみが貼り付けられる。口縁部は丸みをもったまま広がり、端部は丸くおさめられる。外面はヘラケズリの後、ヘラミガキされるが(235)では明瞭でない。内面は、ナデ調整する。

高 杯 高杯Aは、口径26.0cm・器高9.2cm・脚高6.0cmのもの(237)があり、口縁部は緩く内湾して開き、端部は丸くおさめられる。脚部は太く杯部高と脚高との比率は、1:1.9であるが、脚高の高い(238)も存在する。ともに脚柱部外面を14面、15面の面取する。

盤 A (240)は、口径38.0cm、器高11.9cmで、口縁部は直線的に外方に開き、端部がわずかに細く引き出される。内外面を板状工具によりナデ調整する。

壺 A (239)は、口径16.6cm・推定器高14.7cmで、丸底の小型壺Aである。口縁部は、外方に強く外反し、端部はわずかに肥厚する。体部外面をタテハケ、内面上半部をヨコハケ調整し、その後下半部を斜め方向にヘラケズリする。

須 恵 器 杯B、皿A、皿B、蓋、盤B、壺K等がある。

杯 A (246)は、口径19.0cm、器高4.5cmで、突出気味の底部から直線的な口縁部が外傾して開く。口縁端部は、丸くおさめられる。底部外面を回転ヘラケズリ調整し、体部・口縁部はナデ調整する。

杯 B (244・245)は、口径13.3~13.8cm、器高3.3~3.5cmで、平らな底部は突出気味となり、口縁部は直線的にわずかに外傾する。底部外面を回転ヘラケズリ調整し、体部・口縁部をナデ調整する。

皿 A (248)は、口径25.5cm、器高2.8cmで、突出した底部に、直立気味に短い口縁部が開く。底部外面をヘラケズリ調整し、底部内面・口縁部をナデ調整する。

皿 B (247)は、口径25.3cm、器高4.5cmで、平らな底部は器壁が厚くやや突出気味であり、口縁部はわずかに外傾して開く。底部外面をヘラケズリ調整し、底部内面・口縁部をナデ調整する。

蓋 (241・242)は、口径34.0cm・器高6.2cm、口径31.0cm・器高5.4cmで、陣笠状をなす天井部に宝珠形のつまみが付く。天井部外面をヘラケズリ調整するほかは、ナデ調整する。

盤 (249)は、口径48.4cm、器高11.4cmで、口縁部中央よりもやや上部に、角張った把手が三方に付く。底部外面は未調整で、体部外面下半をヘラケズリする。

壺 K 壺K(250)は、いわゆる長頸壺の口頸部であり緩やかに外彎する。

この段階では、土師器におけるヘラミガキ・暗文の衰退と器面調整にヘラケズリが盛行する時期である。また、須恵器においても、これまで在地で生産されたと推定される製品以外に、明らかに美濃須衛窯と認められる製品が多く確認されるようになり、天平2年(730)の詔を反映したものと考えられる。

(4) 斎宮第I段階第4段階

宝龜2年(771)氣太王の造斎宮派遣は、斎宮造営の初見記録であり、光仁朝以降歴代天皇の御代に派遣されることが定着する最初の斎王の造営使である。次の桓武朝では、延暦3年(784)に長岡京の造営が開始され、延暦13(794)には平安京遷都が行われるなど律令国家体制の大きな変換点を迎える。

斎宮も771年の氣多王の造斎宮派遣の後、光仁朝に酒人内親王・淨庭女王、桓武朝に朝原内親王・布施内親王が相次いで斎王⁽¹⁶⁾として任に着く。この間、朝原内親王の群行に先立つ延暦4年(785)4月に從五位上紀朝臣作良を造斎宮長官に除しており、長岡京造営と呼応するかのように、斎宮の造営が行われている。

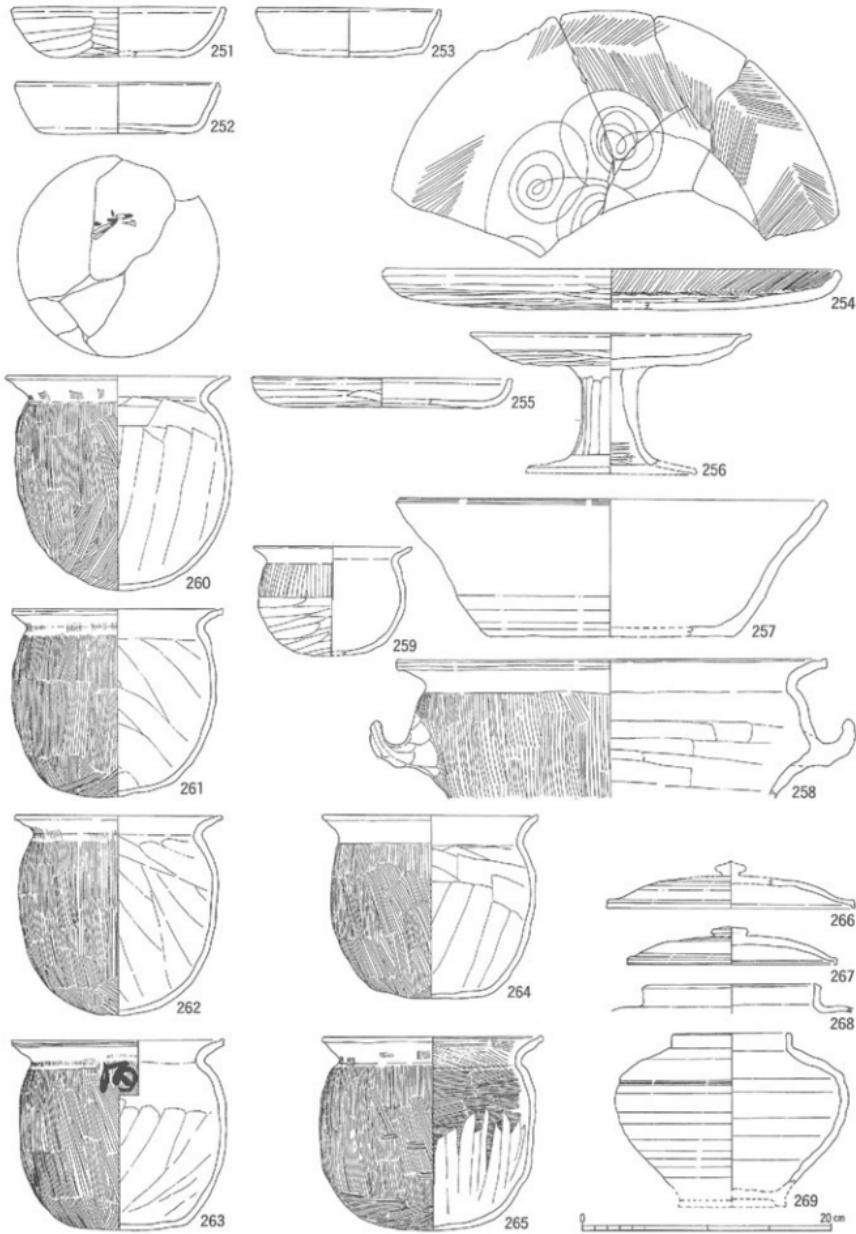
この政治史上の変革は、律令的土器様式を成立させた平城宮土器にも変化が生じる時期にあたり、都城遺跡では平城宮Vの時期に相当する。生産遺跡では、美濃須衛窯の第IV期第3小期、猿投窯の第IV期第3小期折戸10号窯式に該当する。

SE4580 史跡東部の東加座地区の第69次調査で確認した井戸である。径1m、深さ3.3mの円形の素堀り井戸である。整理箱6箱の土器が出土している。

同時期の資料に同じ第69次のSK4585があるが、須恵器が伴出していないことから本資料を採用した。⁽¹⁷⁾

種別	形態	破片数	比率
土 磁 器	供 賧	30	2.86%
	貯 藏	5	0.48%
	煮沸具	1,015	96.67%
	その他	0	0.00%
	小計	1,050	95.63%
黒 色 土 器		0	0.00%
須 恵 器	供 賧	17	
	貯 藏	31	
	その他	0	
	小計	48	4.37%
灰 軸 陶 器	供 賧	0	
	貯 藏	0	
	その他	0	
	小計	0	0.00%
綠 軸 陶 器	供 賧	0	
	その他	0	
	小計	0	0.00%
製 塙 土 器		0	0.00%
土 鍋		0	0.00%
總 計		1,098	100%

第11表 SE4580出土土器構成表



第33図 斎宮第Ⅰ期第4段階の土器 (SE4580)

- 土 師 器** 杯A・皿A・高杯A・鍋B・甕A・瓶がある。SK4585には、高杯B・盤Aの存在も知られている。
- 杯 A** 口径14.8cm、器高3.9cmの中形のもの(253)、口径16.0~17.0cm、器高4.0~4.2cmの大形のもの(251,253)がある。口縁部と底部の境が丸みをもち、口縁部が内湾して開く(251)、口縁部と底部の境が明瞭となり、口縁部が直線的に開き、端部がつまみ上げられる(252・253)に区分される。前者は、口縁部及び底部外面をヘラケズリ調整するb手法、後者はナデ調整する。
- 皿 A** (255)は、口径20.8cm、器高2.4cmで、口縁部は内湾し、端部は丸くおさめられる。底部は、わずかに上げ底状となる。外面は、口縁部直下までヘラケズリする。
- 高 杯** (254・256)は、高杯A(256)と脚部を欠くものがある。高杯Aは、口径22.4cm、推定器高11.2cm、脚高は8.8cmで、杯部高と脚高との比率1:3.7である。杯部口縁部は、緩く外反して広がる。底部外面はヘラケズリし、口縁部をヨコナデする。脚部は、13面に面取りする。(254)は、口径36.2cmで、短い口縁部が外上方に開く。外面は、口縁部端部近くまでヘラケズリし、端部をヨコナデする。杯部内面には、羽状の放射状暗文を施し、底部内面には渦巻状暗文を施す。
- 鍋 B** 鍋B(258)は、口径34.4cmの大形のもので、口縁部は大きく外反し、端部がつまみ出される。外面をタテハケ調整し、内面を横方向にヘラケズリする。
- 甕** 甕Aは、口径12.8cm、器高8.6cmの小形の甕A(259)、口径16.1~18.0cm、器高14.7~17.1cmの中形の甕A(260~265)がある。後者には、底部が平底に近い形態となる(263・264)と丸底のもの(260~262・265)がある。小形甕は、体部外面上半部を縦方向にハケ調整した後、下半部をヘラケズリし、内面をナデ調整する。中形甕は、体部外面を縦方向にタテハケ調整し、内面をヘラケズリする例がほとんどであるが、(265)の内面は、上半部をヨコハケ調整した後、下半部を縦方向にヘラケズリする。(263)の頸部には「酒」の墨書がある。
- 須 恵 器**
- 蓋** 杯蓋、壺B、盤Aが出土している。
- 杯蓋は、口径16.8cm、器高3.0cmのもの(267)と口径19.9cm、推定器高3.8cm(266)があり、つまみは擬宝珠形のものが付くと思われる。口縁端部は屈曲して外方へ引き出され、端部が下方に垂下し、外側に面をもつ。
- 壺 B** (269)は、口径9.0cm、推定器高14cmで、胴部最大径19.0cmは胴部上部にあり、下半は漏斗状にすぼまる。
- 盤 A** (257)は、口径34.4cm、器高10.9cmで、口縁部は直線的に外方に開き、端部は外方に面をもつ。
- SE4580の土師器は、口縁部と底部の境が明瞭になってき、調整手法にも底部外面・口縁部をヨコナデするe手法が出現するなど、長岡京期の特徴が認められる。
- 須恵器は、折戸10号窯式の古段階に相当する。

第三節 斎宮跡第II期の土器

第II期の設定 土師器の供膳形態において、定型化した新しいタイプの杯、皿、椀の出現、セットの確立、調整手法の変化(b手法・c手法→e手法)、量産化をもって第I期と第II期の画期とし、これらのセットの崩壊、ロクロ土師器の出現をもって第III期との画期とする。この間、土師器杯・皿・椀は同一器種内での法量の変化が顕著に認められ、法量の縮小化、器壁の薄手化という変化を迎ることができる。

時代的には、桓武朝の長岡京遷都から村上朝までのおよそ170年間で、斎宮寮としての機能が、ハード、ソフト両面から最も整備された、言わば爛熟期に相当する。

(1) 斎宮跡第II期第1段階

1984編年において奈良時代末期から平安時代初期として位置づけてきたもので、都城遺跡の編年では、長岡京期を含む平安京I期中段階、また、猿投窯編年では、第IV期第3小期の後半(0~10新)から第4小期(IG-78)にかけての時期に相当する。

SK6030の土器 SK6030は、内院の所在する鍛冶山区画の北に隣接する西加座南区画北西部で確認された不整縁円形土坑で、径3.0m×2.5m、深さ0.4mである。出土遺物は、土師器杯・皿類を中心に整理箱で5箱分あり、量的にはさほど多くはないが、長岡京期に相当する良好な資料である。

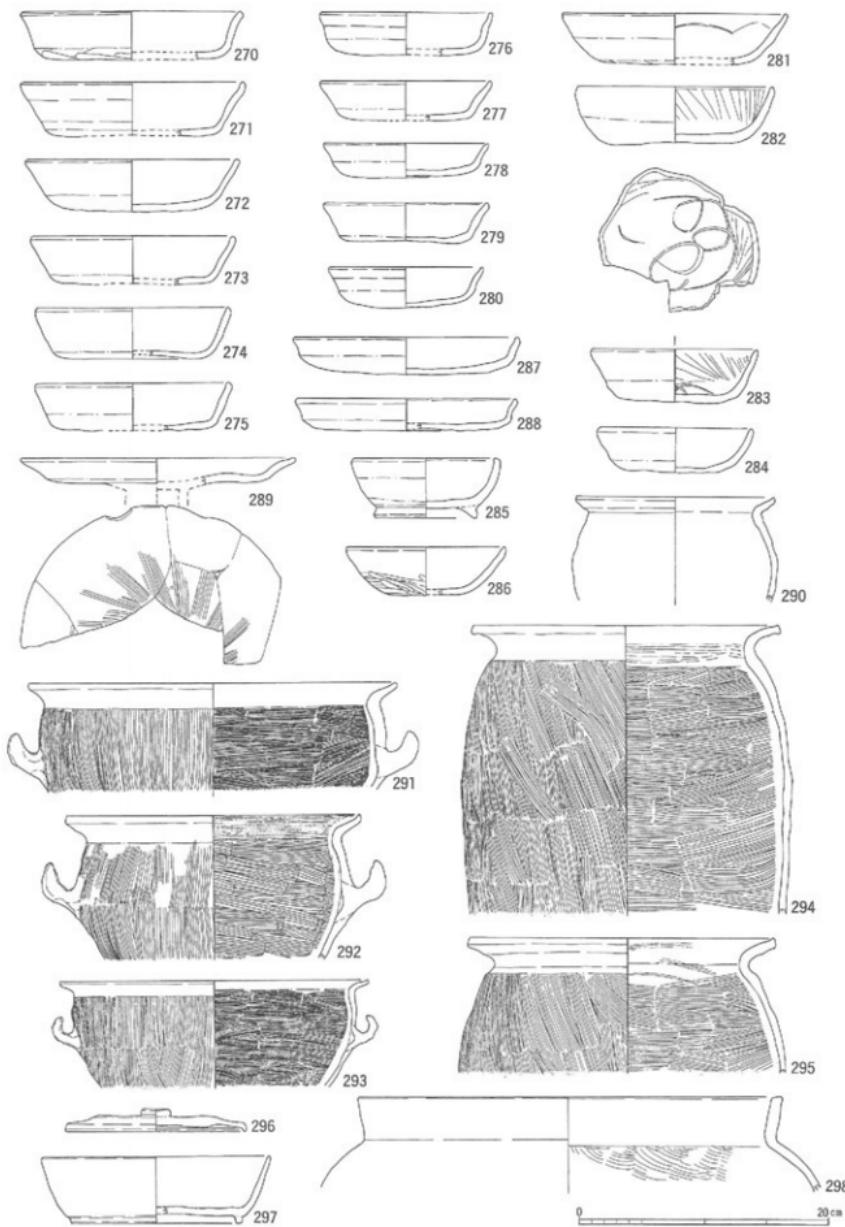
主な器種に、土師器杯A・椀A・皿A・高杯・甕A・甕C・鍋B、須恵器杯B・杯B蓋・甕Cがある。

土 師 器
杯 A 杯Aは、奈良時代の杯の系譜を受け継いでいると考えられるもの(270~276)と本段階から主流となる新しいタイプの杯(277~280)がある。後者は底部が平坦で腰がやや張り、体部は直線的あるいは外反気味に開き、口縁部が内弯気味に立ち上がるもので、前者に比べて口径に対する器高が低く、全体に浅い杯部を呈する。また、前者に認められる粗い放射状暗文や螺旋状暗文、連弧状暗文は施されない。器面調整は、b手法で調整される(270)を除き、他は、ヨコナデ・ナデによるe手法である。法量から、口径15.4~17.8cm、器高3.7~4.6cmの大形のもの(270~275)と口径12.4~13.8cm、器高2.7~3.4cmの小形のもの(276~280)に区分できる。(281~283)口径に対して、器高の深いもので、暗文が施されるものも見られる。

杯 G (284)は、口径12.1cm、器高3.6cmの小形のもので、口縁端部は上方に尖り、外側に

種 別	形 態	破片数		比 率
		個数	割合	
土 師 器	供 膳	147	15.91%	
	(ロクロ)	0	0.00%	
	貯 藏	6	0.65%	
	煮 沸	389	42.10%	
	その他の	382	41.34%	
黒 色 土 器	小計	924		97.16%
		0		0.00%
須 恵 器	供 膳	7		
	貯 藏	7		
	その他の	13		
	小計	27		2.84%
灰 軸 陶 器	供 膳	0		
	貯 藏	0		
	その他の	0		
	小計	0		0.00%
綠 軸 陶 器	供 膳	0		
	その他の	0		
	小計	0		0.00%
製 壱 土 器		0		0.00%
土 鍋		0		0.00%
總 計		951		100%

第12表 SK6030出土土器構成表



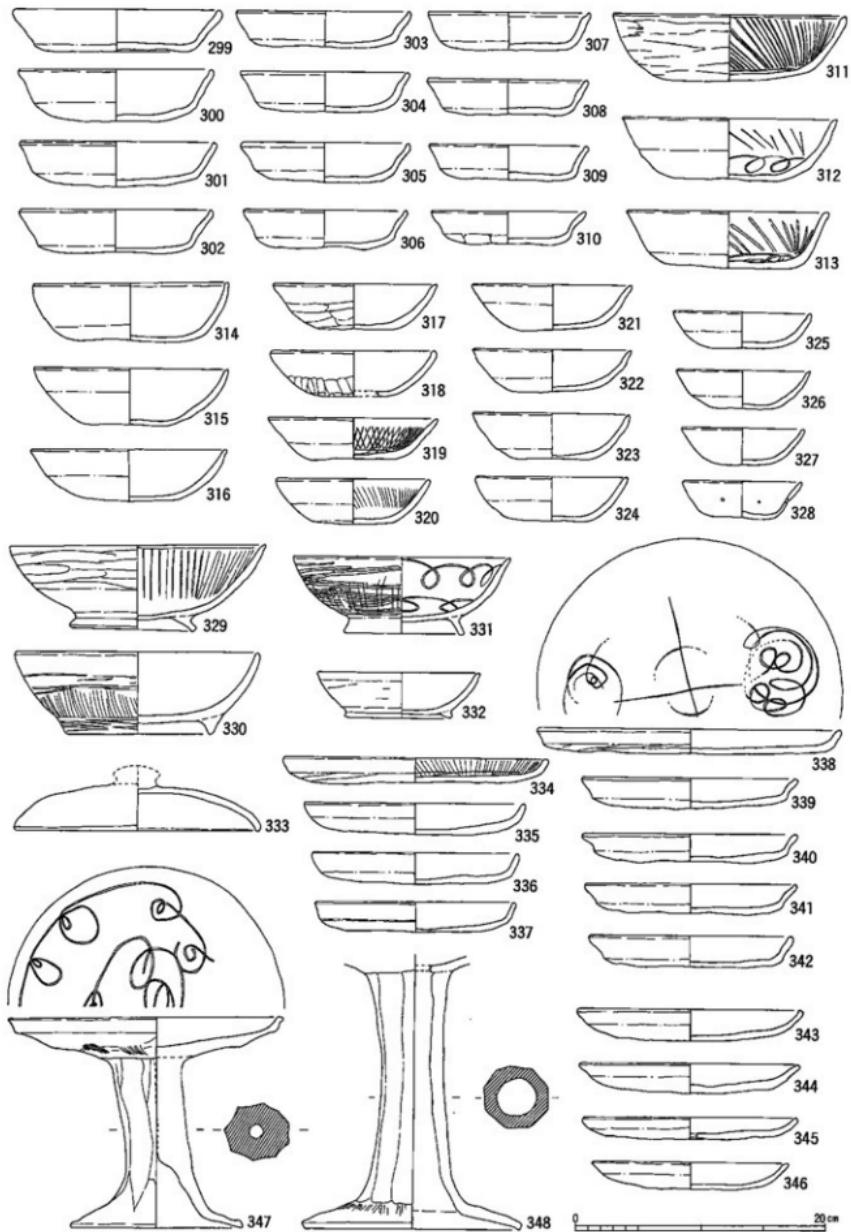
第34図 斎宮第II期第1段階の土器 (SK6030)

内傾する面を有する。

- 杯 B (285)は、体部が内湾気味に立ち上がる小形の杯に外傾する三角形の高台が付く。
- 椀 A (286)は、本段階から出現する新器種で、小さな底部、直線的に大きく開く体部・口縁部から成る。口縁端部は丸く細く仕上げられ、底部から体部中ほどまでヘラケズリ調整が行われる。
- 皿 A (287・288)も本段階から出現する新器種で、口縁部の形態は、新しいタイプの杯Aと同様で、e 手法で調整される。
- 高 杯 (289)は、杯底部が平坦で、口縁部は外反して大きく開く。底部外面には、脚部接合部から外に向かってハケメが放射状に施される。
- 甕
- 甕 A (290)と甕 C (294・295)がある。甕 A (290)は口径16cmほどの小形のもので、体部の調整はハケ及びヘラケズリで調整されるのが通例であるが、本例では、ユビオサエとナデにより調整される。甕 C (294・295)は、口縁部をヨコナデ、体部外面をタテハケ、同内面をヨコハケ調整する。体部下半を欠くが、おそらく内面下半はヘラケズリされるものと思われる。
- 鍋 B (291～293)は、半球状の体部に「く」の字口縁の付くもので、体部中央より上方に一对の把手が付く。口径45.8cmの大形のもの(291)と口径27.8～29.8cmの小形のもの(292・293)がある。調整は甕 C と同様である。
- 須 惠 器
- 須恵器には、猿投窓編年の第Ⅳ期第1小期(I-25)から第3小期(O-10)に対比できるものが認められるが、多くは第2小期(NN-32)以降のものである。
- 杯 B
- 杯 B (297)は、平坦な底部、外傾する体部・口縁部から成り、底部と体部の境近くに低い角高台が付く。
- 杯 B 蓋 (296)は、天井部、紐部とも扁平な小形のものである。
- 甕 C
- 甕 C (298)は、口縁部が上方に短く立ち上がる広口の甕である。口縁部内外面及び体部外面をタタキ後ヘラケズリ調整する。
- SK1445の土器
- SK1445は、西加座南区画南東部で検出した隅丸方形土坑で、一辺4m×3.5m、深さ約0.6mで、多量の土師器杯・椀・皿のはか、「寮□」、「萬」、「万」、「大」等の墨書き土器が14点、製塙土器、小形円面硯(374)等が出土し、祭祀に伴う一括廃棄土坑と思われる。
- 主な器種に、土師器杯A・椀A・椀B・皿A・椀B 蓋・高杯・甕 A・甕 B・甕 C・

種 別	形 態	破片数		比 率
		供 購	(ロクロ)	
土 師 器	貯 藏	89	0.78%	
	煮 沸	1,137	9.91%	
	その他	1,791	15.61%	
	小計	11,472		98.07%
	黒色土器	0		0.000%
須 惠 器	供 購	100		
	貯 藏	0		
	その他	126		
	小計	226		1.930%
灰 紬 陶 器	供 購	0		
	貯 藏	0		
	その他	0		
	小計	0		0.000%
綠 紬 陶 器	供 購	0		
	その他	0		
	小計	0		0.000%
製 塙 土 器		0		0.000%
土 鍋		0		0.000%
總 計		11,698		100%

第13表 SK1445出土土器構成表



第35図 斎宮第Ⅱ期第1段階の土器 (SK1445①)

鉢・瓶、須恵器杯B・杯B蓋・盤・壺蓋がある。

土 師 器

杯 A

杯A(299~313)は、平坦な底部に強くヨコナデされ外反する口縁部が付くもので、口縁端部はさらに上方に屈曲し丸くおさめられたり、外側に弱い面をもつものが多い。器面の調整は、すべてe手法で、SK6030で僅かに認められたb手法のものはない。口径は12.3~16.3cmで、mm単位ではかなりばらつきが認められるが、法量から口径14.7~16.3cm、器高3.4~4.2cmの大形のもの(299~302)と、口径12.3~13.6cm、器高2.7~3.6cmの小形のもの(303~310)とに区分できる。このほか、形態的には奈良時代の杯に系譜を求めるができるもの(311~313)も若干認められる。いずれも口径15.7~18.4cm、器高4.6~5.4cmの大形で深い杯部を呈するもので、(312・313)には、粗い放射+螺旋状暗文が認められる。器面調整は、(311)のみc手法であるが、他はe手法である。

椀 A

椀A(314~328)は、小さく平らな底部、外方に大きく開く口縁部、内湾気味に緩やかに立ち上がる体部から成るもので、本段階から出現し、以後供膳形態の一翼を担うものである。口径15.5~15.6cm、器高4.1~4.5cmの大形のもの(314~316)、口径11.8~13.8cm、器高3.4~3.9cmの中形のもの(317~324)、口径9.2~10.8cm、器高3.0~3.6cmの小形のもの(325~328)に区分でき、中でも中形が主流を占める。器面の調整はe手法を主体とするが、ごく稀に中形品において体部中ほどまでヘラケズリするもの(317・318)もある。また、内面の暗文も放射状暗文を施すもの(320)や斜格子状暗文+螺旋状暗文を施すもの(319)が僅かに認められた。

椀 B

(329~332)は、椀Aに高台の付くもので出土量は少ない。17.4~20.4cmの大形のもの(329~331)と口径13.1cmの小形のもの(332)がある。器面の調整は、体部下半をハケ調整後外面を粗くヘラミガキするもの(330・331)や、外面上半をヘラケズリするもの(329)がある。内面の暗文は、器面の保存状態により不明なものもあるが、大方においては基本的に螺旋状暗文や放射状暗文が施される。(333)は椀Bの蓋であろう。

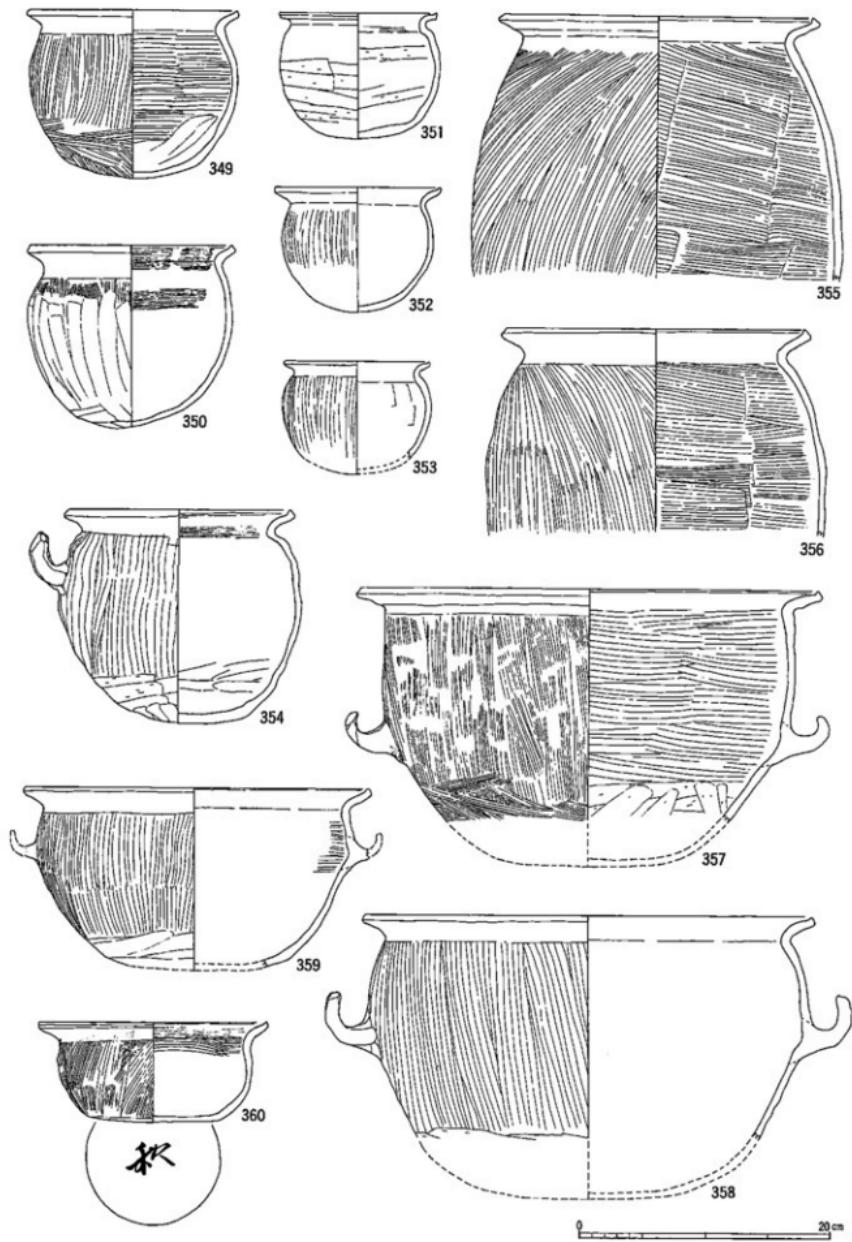
皿 A の細分

皿Aは、その形態から3つに細分できる。

a タイプ(338~342)は、杯Aと同様の口縁部形態を有するもので、口径23.5cm、器高2.0cmの大形のもの(338)と口径15.8~16.8cm、器高2.1~2.6cmの小形のもの(339~342)がある。器面の調整は、大形はb手法、小形はe手法による。暗文は大形の(334)にのみ、底部内面に変形の螺旋状暗文が認められる。

b タイプ(343~346)は、丸く浅い底部に外へ大きく開く口縁部から成るもので、口縁部のヨコナデはaタイプに比べ弱く、底部から口縁部にかけての断面は弧状となる。口縁端部は上面に平坦な面を有するものが多い。口径15.5~17.4cm、器高1.8~2.6cmのものがあるが、出土量に乏しく法量による大小の区別はつけ難い。

c タイプ(334~337)は、平らな底部に内湾気味に外上方へ口縁部が立上がるもので、形態的に奈良時代の様相を受け継いでいる一群と理解される。口径20.8cm、器高2.2cmの大形のもの(334)と口径15.9~17.5cm、器高2.4~2.9cmの小形のもの(335~337)がある。器面の調整は大形がb手法、小形がe手法で、大形に斜放射状暗文+螺旋状暗文が認められる。なお、cタイプの皿は次段階で消失し、以後aタイプ、bタイプ



第36図 斎宮第II期第1段階の土器 (SK1445②)

の皿が第II期を通じて主流となる。

高 杯 脚高が20.8cmの大形のもの(348)と13.8cmの小形のもの(347)がある。(347)は、杯部が盤状を呈し、脚柱部は9角形の面取りが行われる。杯部と脚部の接合は、細い棒に粘土塊を巻きつけた脚柱部を杯部に差し込む。一方、(348)は、杯底部接合面に刻みを施し、中空の脚柱部を接合するものである。

甕 (349~356)には、球形の体部に「く」の字状に外反する口縁部がつく甕A(349~353)と把手のつく甕B(354)、胴長タイプの甕C(355・356)がある。甕Aは、口径14.4~16.0cm、器高11.4~14.7cmの大形のものと口径13.0~13.3cm、器高10cm程の小形のものがある。器面の調整は、体部外面をタテハケ、内面をヨコハケ調整し、底部外面を不定方向のハケ、内面をヘラケズリするもの(349)、縦方向のヘラケズリが体部外面上半まで及ぶもの(350)、体部内外面を横方向にヘラケズリするもの(351)などバラエティに富む。

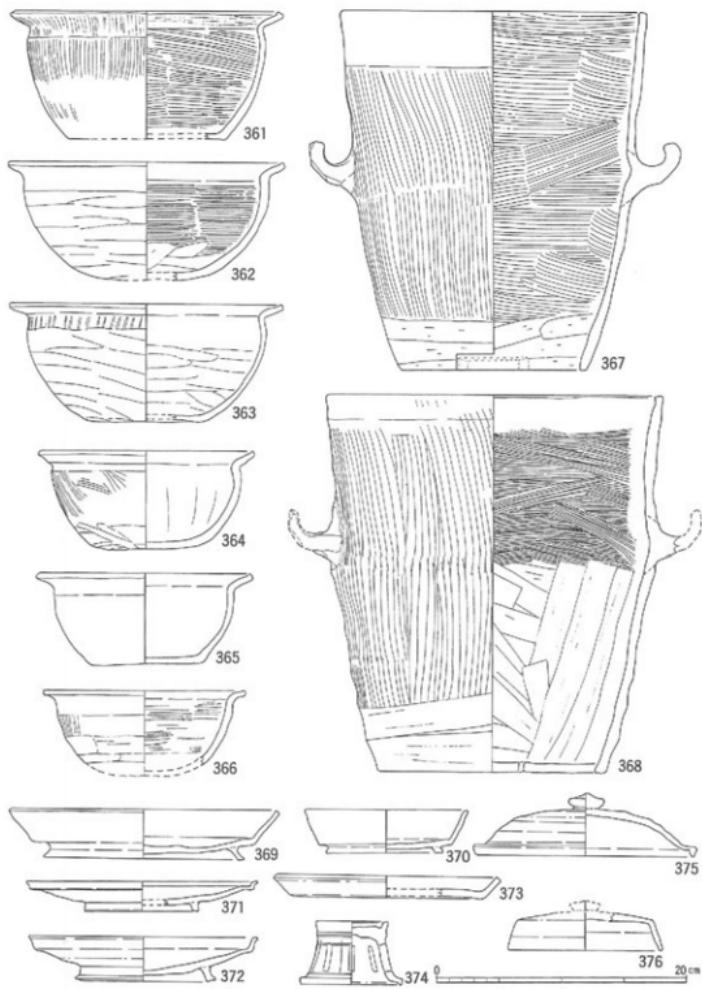
鍋 (357~360)には、半球形状の扁平な体部に大きく外へ開く口縁部が付く鍋A(360)と把手の付く鍋B(357~359)がある。鍋A(360)は口径18.2cm、器高8.2cmと小形で、体部外面及び頸部内面をハケ調整し、他はナデて仕上げる。底部外面に「秋」の墨書きがある。鍋Bは口径35.8~37.0cmの大形のもの(357・358)と口径27.5~32.6cmの小形のものがあり、器面調整は、基本的に体部外面をタテハケ、同内面をヨコハケし、底部は円周に沿ったハケ調整又はヘラケズリを施す。把手の取り付く部位は体部中央よりやや上に位置するものが多い。

鉢 (361~366)は、平底ないしは平底に近い底部に半球形の体部に「く」の字に外反する口縁部が付く。口径21.2~22.0cm、器高9.4~10.3cmの大形のもの(361~363)と口径16.0~17.0cm、器高6.8~7.9cmの小形のもの(364~366)がある。体部内外面を丁寧にナデて仕上げるもの、内外面をハケ調整するもの、内外面をハケ調整の後に内面ナデ調整、外面を底部~体部中ほどにかけてヘラケズリするもの、外面を頭部近くまでヘラケズリするものなど、調整は多種多様である。当段階から出現するこの鉢は、形態的には鍋に近いものであるが、色調・胎土とも供形態の杯・皿類と似ていること、火にかけた痕跡が認められることなどから煮炊形態とは異なる別の用途を考える必要があろう。

瓶 (367・368)は、底部から口縁部にかけてほぼ直線的に開く円筒形を呈し、一对の把手が体部中央よりやや上に付く。器面の調整は口縁部をヨコナデ、体部外面をタテハケ、内面をヨコハケで調整する。底部下端は、内外面を円周に沿ったヘラケズリもしくは体部内面の中ほどまで縦にヘラケズリする。

須 恵 器 **杯 B** 杯B(369~370)は、口径21.4cm、器高4.0cmの大形のもの(369)と口径12.8cm、器高3.6cmの小形のもの(370)がある。いずれも底部と口縁部の境は明瞭で、外側へ開く角高台が付く。口縁部は直線的に外傾するが、大形の方がその度合いが大きい。底部外面は回転ヘラケズリ調整され、他はロクロナデ調整される。

杯B蓋(375)は、丸い天井部に宝珠形つまみが付く。口縁部は下方に折れて端部は細く尖るように終わる。



第37図 斎宮第II期第1段階の土器 (SK1445③)

盤 盤(373)は、平らな底部に外側に開く短い口縁部で、器面のナデ調整は丁寧である。盤B(371・372)は、口径18.0~18.4cm、器高2.4~3.6cmである。底部と口縁部との境は明瞭な稜を有し、口縁部は強く外反して端部は水平に近く引き出される。高台はやや外側に開く角高台で、底部は下方に垂下する。

壺 壺蓋(376)は、平らな天井部に下方に弱く開く口縁部が付く。紐部は不明。

(2) 斎宮第II期第2段階

1984編年において平安時代前I期として位置付けてきたものであり、都城遺跡の編年では、平安京I期新段階に概ね該当する。また、猿投窯編年では、第V期第1小期(K-14窯式期2型式)から第2小期(K-90窯式期1型式)にかけての時期に相当し、僅かながら本窯式期の施釉陶器が新たに加わる時期である。

SK5200の土器 SK5200は、東加座南区画の中央部西寄りで確認された径3.2m×3.0m、深さ0.5mの円形土坑である。土師器供膳形態を中心的に整理箱で20箱の遺物が出土している。主な器種に土師器杯A・杯B・杯G・椀A・椀B・椀B蓋・皿A・高杯・甕A・甕C・鍋B・鉢・竈、須恵器杯A・杯B、灰釉陶器長頸瓶・椀・皿のはか、僅かながら綠釉陶器碗片、黒色土器片のはか円面硲脚部片、鎔付円筒形土器(425)、製塩土器片がある。

土 師 器 杯・椀・皿は、ほぼ前段階の器形を踏襲するが、杯A・皿Aにおいて奈良時代の土器様相を受け継ぐものは、本段階からは認められない。

器面の調整は、一部の例外を除き、e手法で調整され、底部外面にユビオサエの痕跡をよく残すものが多い。色調は赤味を帶びた茶褐色ないしは橙褐色を呈する。

杯 A 杯A(377~385)は、器形、法量とも前段階のものと大差なく、口径15.4~16.6cm、器高3.2~3.8cmの大形のもの(377~379)と、口径12.6~14.0cm、器高2.5~3.2cmの小形のもの(380~385)がある。なお、2点であるが、平坦な底部に直線的に外に開く体部・口縁部から成り、外面をヘラケズリもしくはその後粗くヘラミガキを行う別タイプの杯(401・402)も認められた。

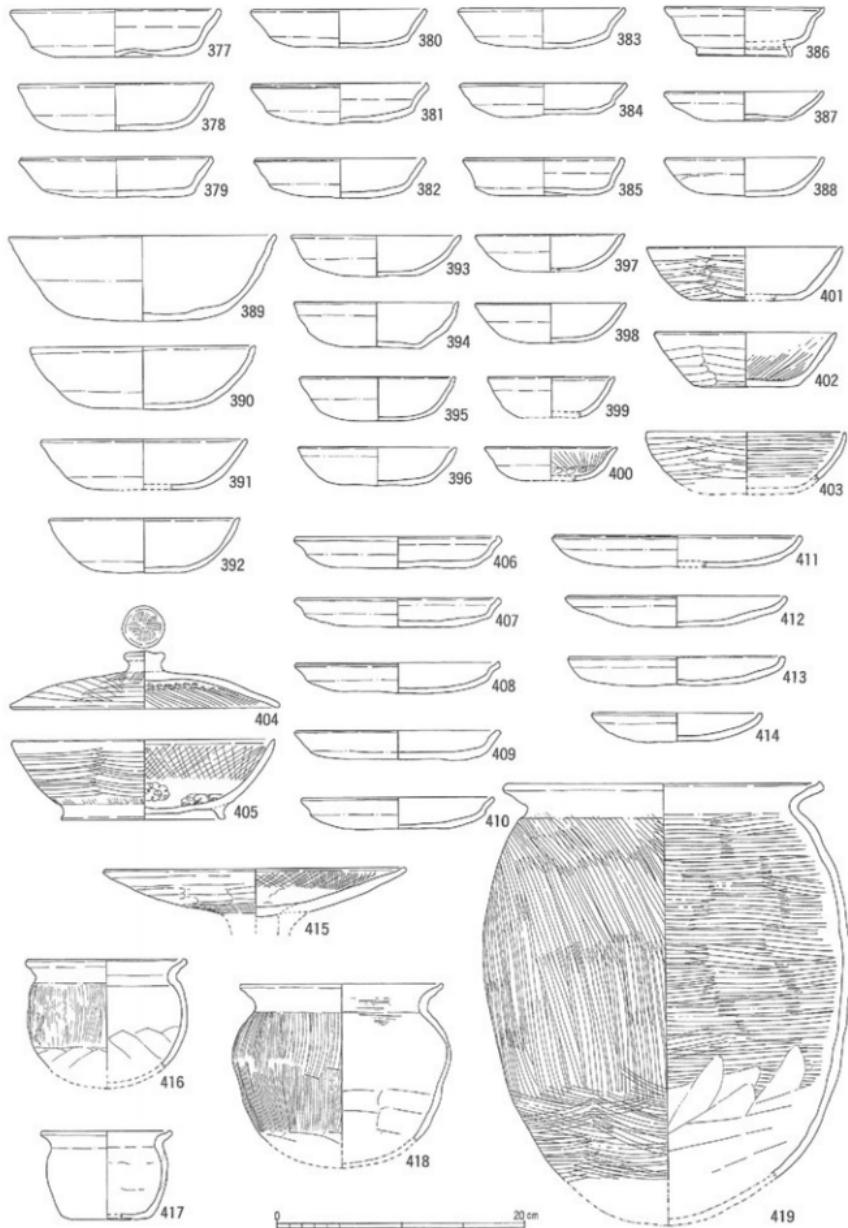
杯 B 杯B(386)は、小形の杯Aに幅の狭い高台が付くもので、1点確認された。

杯 G 杯G(387・388)は、従来「いなか椀」と呼ばれていたもので、斎宮第I期までその系譜を遡ることができる粗製の杯である。胎土に砂粒を多く含み、色調は濁白色あるいは淡褐色を呈する。口縁部外面のヨコナデの範囲はごく狭い。

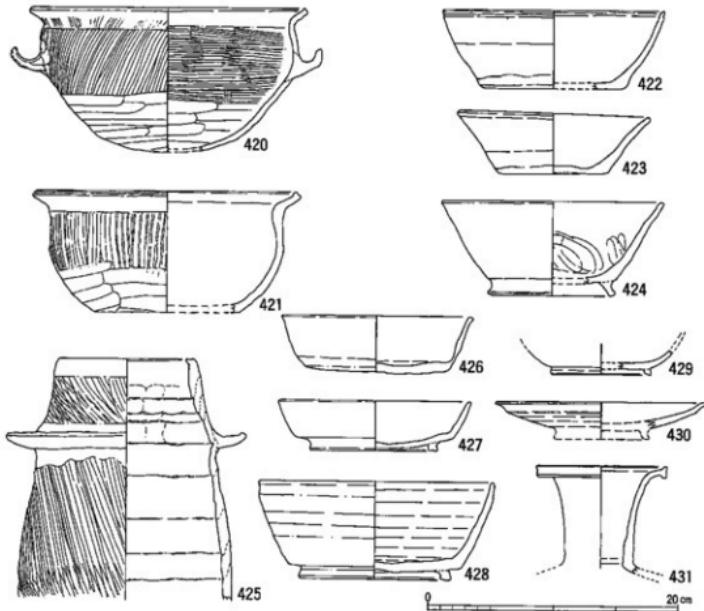
椀 A 楓Aも杯Aと同様前段階のものと大差ない。口径15.0~18.0cm、器高4.0~5.0cmの

種 別	形 態	破 片 数	比 率
土 師 器	供膳具	3,526	49.92%
	(コクロ)	78	1.10%
	貯 藏	3,460	48.98%
	煮 沸	0	0.00%
	その他	0	0.00%
小計		7,064	98.03%
黒 色 土 器		5	0.07%
須 恵 器	供 講	58	
	貯 藏	57	
	その他	0	
	小計	115	1.60%
灰 釉 陶 器	供 講	3	
	貯 藏	2	
	その他	0	
	小計	5	0.07%
綠 釉 陶 器	供 講	0	
	その他	0	
	小計	0	0.00%
製 塩 土 器		6	0.08%
土 錐		11	0.15%
總 計		7,206	100%

第14表 SK5200出土土器構成表



第38図 斎宮第II期第2段階の土器 (SK5200①)



第39図 蒼宮第II期第2段階の土器 (SK5200②)

大形のもの(390~392)、口径11.8~13.6cm、器高3.0~3.6cmの中形のもの(393~398)、口径10.1~10.5cm、器高2.7~3.2cmの小形のもの(399・400)があり、中には口径21.4cm、器高6.9cmの特大品(389)もある。前段階の碗に比べてやや器高が減じる傾向にあり、全体的に浅い印象を受ける。

椀 B 梗B(405)は、口径21.0cmの大形品で、外面下半をタテハケ後全体にヘラミガキ調整し、内面は体部上半を斜格子暗文で飾り、下半から底部にかけては独立した小さな螺旋暗文を随所に配置する。

梗B蓋(404)は、天井部外面を4分割のヘラミガキ、内面に放射状暗文+螺旋状暗文を施す。

皿 A aタイプ(406~410)とbタイプ(411~414)がある。aタイプは口径15.4~16.4cmで法量による大きな差を認めることはできないが、bタイプには口径18.4~19.6cmの大形のもの、口径16.9cmの中形のもの、口径13.4cmの小形のものがあり、前段階では明瞭でなかった同一器種における法量分化が認められる。

高杯 (415)は、脚部を欠いているが、杯部は浅い皿状を呈する大形品である。外面は粗い放射状のハケ調整後ヘラケズリし、内面には斜格子状暗文を施す。

甕・壺 丸底で体部が球状の甕A(416・418)と長胴の甕C(419)があるほか、小形で平底の

壺B(417)もある。甕Aは口径12.6cmの小形のものと、口径17.0cmの大形のものが認められる。甕Cは、推定器高35cmで、奈良時代のものに比べると器高が減少している。器面の調整は甕A・甕Cとも前段階のものと同様である。

鍋 B 鍋B(420)は、小形の部類に属するもので、体部外面をタテハケ、同内面をヨコハケ調整し、底部から体部中ほどにかけて円周に沿ったヘラケズリを行う。

鉢 鉢(421~423)には、前段階のSK1445の鉢と同類のものの(421)のほか、平らな底部から直線的あるいは外反気味に外傾して立ち上がる体部・口縁部を持つもの(422・423)がある。後者の鉢は、口径14.9~17.4cm、器高4.8~6.2cmで、口縁部をヨコナデ、他はナデ調整である。また、これに高台の付く鉢B(424)もあり、体部内面下半には、重なり合う大きな螺旋状暗文が認められた。

須恵器・灰釉陶器 猿投窯編年の第Ⅳ期第3小期(O-10)から第V期第1小期(K-14窯式期2型式)にかけての製品が認められるが、後者が主体を占める。

須恵器杯A(426)は、平底の底部にやや外傾しながら直線的に立ち上がる口縁部が付く。底部はヘラ切りのままである。

高台の付く杯Bには、浅い杯部を有するもの(427)と深い杯部を有するもの(428)がある。底部はいずれも回転ヘラケズリ調整されるが、(428)はそれが口縁端部近くまで及ぶ。高台は低い角高台が付き、外端で設置する。

灰釉陶器長頸瓶(431)は、口頸部しか残っていないが、内外面に透明感のある自然釉が掛かり、原始灰釉陶器と呼ばれるものである。

このほかに、灰釉陶器椀(429)・皿(430)の破片も若干量認められた。

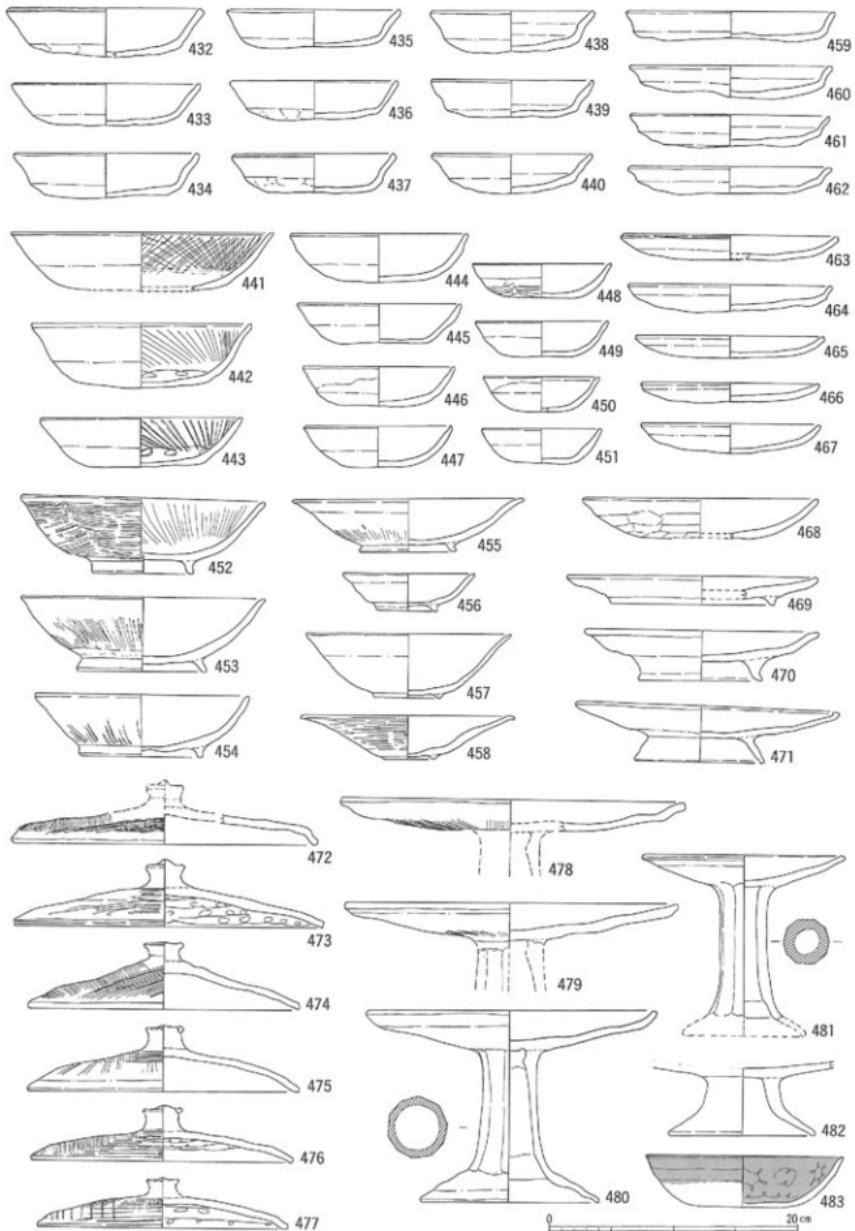
SK1045の土器 SK1045は、柳原区画の南西部で確認した径3.7m×3.4m、深さ0.7mの不整形土坑で、方位が真北を示す大型の南北棟建物SB1046の柱掘形埋土より新しい。土坑埋土からは多量の土師器供膳形態のほか、少量の須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器片、灰釉陶器風字硯(506)などが、整理箱で約40箱分出土している。

主な器種に土師器杯A・椀A・椀B・椀B蓋・皿A・皿B・台付皿・高杯・甕A・甕B・甕C・鍋A・鍋B・鍋X・竈、黒色土器A類杯、須恵器杯A・杯B・杯B蓋・小壺、灰釉陶器皿・長頸瓶・壺蓋がある。

土 師 器
杯 A 杯Aは法量により、口径14.6~15.4cm、器高3.1~3.9cmの大形のもの(432~434)と、口径12.6~14.0cm、器高2.9~3.3cmの小形のもの(435~440)に区分できる。なお、大

種 別	形 態	破片数		比 率
		供 膳	(%)	
土 師 器	供 膳	1,849	46.57%	
	(ロクロ)	0	0.00%	
	貯 嵌	0	0.00%	
	煮 沸	2,102	52.95%	
	その他の	19	52.95%	
黒 色 土 器	小計	3,970		94.50%
		0		0.00%
須 恵 器	供 膳	123		
	貯 嵌	107		
	その他の	1		
	小計	231		5.50%
灰 釉 陶 器	供 膳	0		
	貯 嵌	0		
	その他の	0		
	小計	0		0.00%
綠 釉 陶 器	供 膳	0		
	その他の	0		
	小計	0		0.00%
製 塩 土 器		6		0.08%
土 簪		11		0.15%
總 計		4,201		100%

第15表 SK1045出土土器構成表



第40図 斎宮第II期第2段階の土器 (SK1045①)

形のものは口径が減少し、ほぼ15cm前後のものに集約され、小形のものとの法量差が縮まる傾向にある。

椀 A 口径16.0~21.2cm、器高3.9~5.1cmの大形のもの(441~443)、口径11.8~14.2cm、器高3.1~3.9cmの中形のもの(444~447)、口径9.4~11.1cm、器高2.7~3.1cmの小形のもの(448~451)がある。調整は、ごく稀に底部から体部中ほどにかけてヘラケズリ後へラミガキを施すもの(448)があるが、すべてe手法である。暗文は大形のなかに、放射状暗文+螺旋状暗文あるいは斜格子状暗文が認められるが、量的には少ない。

椀 B 椭Aに外傾する高台の付くもの(452~456)と椭Aとは異なる器形に高台の付くもの(457・458)がある。前者には口径10.5cmの小形のものと、口径17.0~19.7cmの大形のものが認められ、体部下半をタテハケ調整するもの(453~455)や外面をヘラミガキし、内面に放射状暗文を施すもの(452)が見られる。後者は、あまり例のないもので、(457)は大きく外傾する体部、弱く外反する口縁部から成り、三角形の低い高台が付く。胎土は精良で、体部外面はヘラケズリされ、器壁は薄く仕上げられる。また(458)は、小さな底部に外反気味に大きく開く口縁部から成り、三角形の低い高台が付く。口縁端部は水平に引き出され、体部から口縁部にかけて外面を丁寧にヘラミガキされる。

椀B蓋(472~477)は、低い天井部に高い宝珠形つまみが付くもので、口径は19.7~24.6cmである。口縁端部の形態から、端部を丸くおさめるもの、外側に端面を有するもの、斜め下方に屈曲させるものが見られる。器面の調整は、その保存状態により不明瞭なものもあるが、基本的には天井部をヘラケズリもしくはハケ調整後、4分割のヘラミガキを行う。また、内面に2重~4重の螺旋状暗文を施すものも認められる。

皿 A (459~468)は、前段階で分類したaタイプの皿(459~462)とbタイプの皿(463~467)がある。aタイプの皿は口径15.2~16.9cm、器高1.7~2.7cmで16cm前後のものが多い。一方、bタイプの皿は、口径16.1~17.1cm、器高2.0~2.1cmの中形のもの(463・464)と、口径13.9~15.0cm、器高1.5~2.5cmの小形のもの(465~467)があり、前段階に比べて法量による分化、縮小化が認められる。なお、このほかに、口径が18.6cmの大形で底部から体部中ほどまでヘラケズリする別タイプの皿(468)も1点ある。

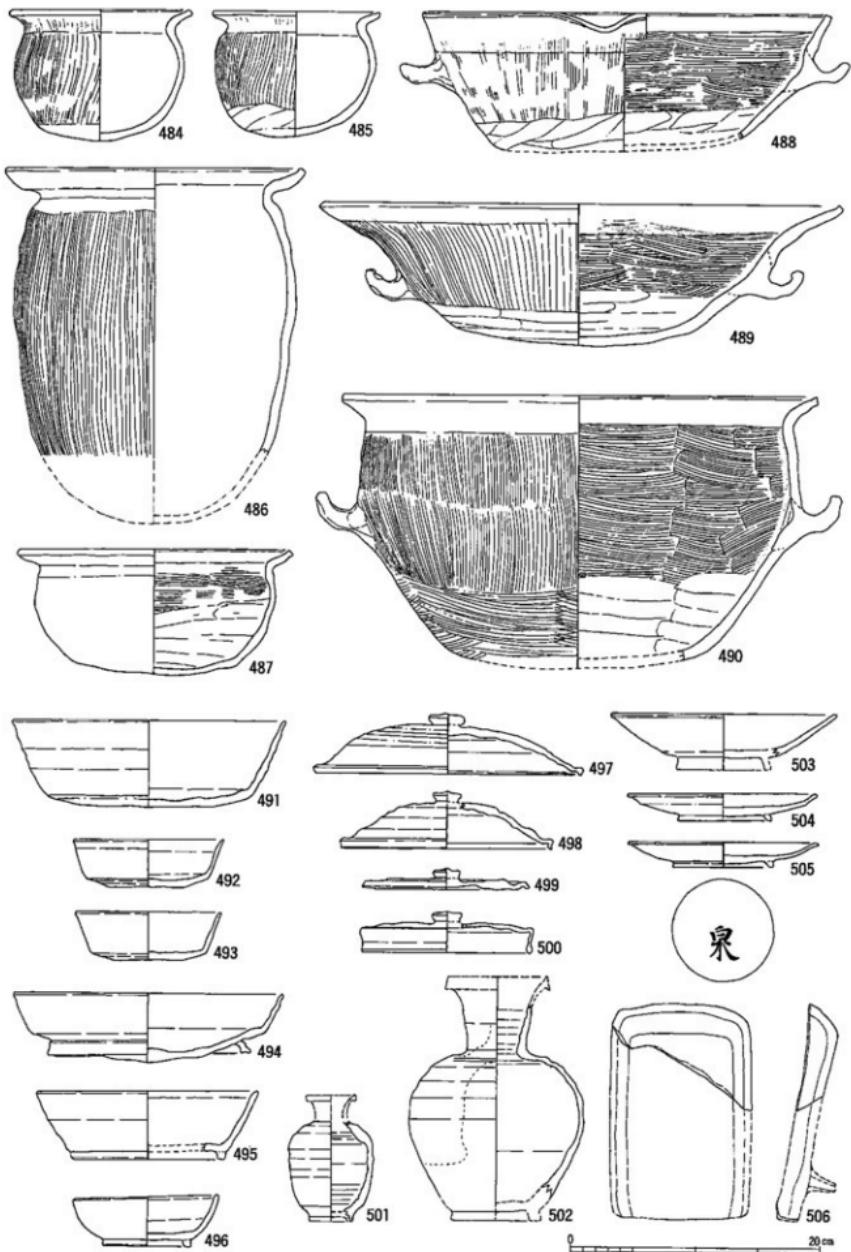
皿 B (469)は、口縁部が水平に近く開き、平らな底部に三角形の低い高台が付く。

(470・471)は、浅い皿部に高さ2cm程の脚台が付くものである。口縁端部が外反し、二等辺三角形の脚台が付くもの(470)と、口縁部が上方に折れ、端部上面に平坦な面を有するもの(471)がある。

高 杯 (478~482)は、大きく開いた浅い皿状の杯部に面取りされた脚が付く。中には口縁部を弱く屈曲させるもの(478)や、底部外面を放射状にハケ調整するもの(478・479)が認められる。

法量から口径23.1~27.6cmの大形のもの(478~480)、口径15.6cmの小形のもの(481)がある。このほか、短い脚部が「八」の字状に開き、器面を丁寧にヨコナデした後、杯部内面に螺旋状暗文を施すもの(482)もある。

甕 (484~486)には、甕A・甕Cがある。甕A(484・485)は口径13.2~14.0cm、器高



第41図 斎宮第II期第2段階の土器 (SK1045②)

9.8～10.2cmの小形品で、外面を比較的ハケメの粗いタテハケ調整後、口縁部をヨコナデし、底部はヘラケズリ、もしくはナデ調整する。内面はいずれもナデ調整である。甕C(486)は、「く」の字状の口縁部がやや内湾気味に外に開き、口縁端部は上方につまみ上げられて外側に外傾する面を有する。体部のタテハケは比較的粗い。

鍋 鍋(487～490)には、扁平な球状の体部に「く」の字状口縁の付く鍋A(487)、これに把手の付く鍋B(488)、あまり例のない鍋X(489・490)がある。(490)は、平底に近い底部に大きく外傾する体部、さらに開く口縁部から成り、一对の把手が付く。(489)は、把手付の片口鉢で、平底に近い底部からほぼまっすぐに外傾して延びる体部・口縁部から成る。器面調整は鍋Aと同様、体部をハケ調整、底部をヘラケズリ調整する。

黒色土器 内面を黒色化する黒色土器A類杯(483)が1点のみ確認されている。器面の保存状態は良くないが、内面に小さな螺旋状暗文が認められる。

須恵器 猿投窯第IV期第4小期(IG-78)から第V期第1小期(K-14②型式)にかけてのものが認められるが、後者が主体を占める。

須恵器杯A(491～493)は、平坦な底部に外傾する口縁部が付く。底部は回転ヘラケズリ調整され、底部と口縁部の境に明瞭な稜をもつ。口径21.7cmの大形のもの(491)と口径12cmほどの小形のもの(492・493)がある。

杯B(494～496)は、大形で深い杯部を有するもの(495)、大形で浅い杯部を有するもの(494)、小形で体部が内弯するもの(496)がある。

杯B蓋(497～490)には、天井部が高くて丸いもの(497・498)と扁平なもの(499)がある。いずれも扁平な宝珠形つまみが付く。なお、(497)の内面には墨書が認められる。

小壺(501)は、体部のみの破片で、ロクロ水挽き成形痕をよくとどめる。肩の一部に自然釉の付着が認められる。

灰釉陶器 皿(504・505)は、体部が直線的に外に開き、口縁端部は弱く外反する。高台はやや外に開く角高台が付き、内面全体に濃緑色の釉が厚く施釉される。なお、(505)の底部外面には「泉」の墨書が認められる。

長頸瓶(502)は、無花果形の体部にやや外傾する頸部が付く。頸部から体部下半にかけて縁がかった淡茶色の自然釉が掛かり、さらに頸部の一部には、濃緑色の釉が掛かる。

壺蓋(500)は、平坦な天井部に下方に屈曲する口縁部から成る。天井部全体に濃緑色の釉が厚く掛かる。

綠釉陶器 皿(503)は、口縁部のみの破片であるが、内外とも丁寧にヘラミガキされ、薄い緑釉が施釉される。胎土や釉調からおそらく京都産のものであろう。

(3) 斎宮第II期第3段階

1984編年において平安時代前II期として位置付けてきたものであり、都城遺跡の編年では、平安京II期古段階～II期中段階に概ね該当する。また、猿投窯編年では、第V期第2小期(K-90)の時期に相当し、土師器を除いた供膳形態では本窯式期の灰釉陶器が須恵器に変わって主要な位置を占める時期である。

SK7430の土器 SK7430は、内院外郭北辺部に密集する土坑群の一つで、径3.0m×1.7m、深さ0.5

mの長梢円形土坑である。法量の似通った土師器供膳形態が、多量の炭化物とともに何枚も重なった状態で出土しており、祭祀あるいは儀式に関わる一括廃棄土坑と考えられる。出土遺物の大半は土師器皿で、土師器杯・椀がこれに続く。土師器甕・鍋類の煮炊形態や須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器の供膳形態は数点にとどまる。このほか、土師器甕Cを模したミニチュア土器(557)や製塙土器が出土している。

主な器種に、土師器杯A・椀A・皿A・台付皿・甕A・鍋B、須恵器杯B、灰釉陶器椀、綠釉陶器椀がある。

土 師 器
杯 A 土師器杯A(507~518)は、口径13.6~16.1cm、器高2.5~3.6cmで、このうち、小形のもの(510~518)では、口径が13cm以下のものではなく、ほぼ14cm前後のものに集約される。また、口径が16cm前後の大形のもの(507~509)は僅かである。全体的に口縁端部の上方への屈曲が弱く、口縁部が外反するのみで終わるものも認められる。また、口縁部の外反が弱いため、椀Aとの区別がつきにくいものも若干量認められる。器面の調整はe手法で、底部外面にユビオサエの圧痕をとどめるものが多い。

椀 A (519~530)は、口径13.0~15.8cm、器高3.3~3.8cmで、口径が10cm以下の小形のものや16cmを越える大形のものではなく、15~16cmの中形品の占める割合が高い。胎土、色調、調整手法は、杯Aと同様である。

皿 皿A(531)には、aタイプの皿(531~539)とbタイプの皿(540~553)がある。両者の割合は圧倒的にbタイプの皿が多く、最も出土量が多い。aタイプの皿は、口径14.8~17.4cm、器高1.8~2.6cmで、多くは16cm前後のものである。bタイプの皿は、口径14.0~15.6cm、器高1.0~2.4cmで、法量による大小の区別なく、ほぼ15cm前後の浅い皿に集約される。なお、口縁端部の仕上げには、上面に平坦面を作るもの(540~543)、外傾する面を作るもの(544~548)、細く丸くおさめるもの(549~553)が認められる。

台杯皿(554)は、厚手に作られた皿部に外傾する高台が付く。

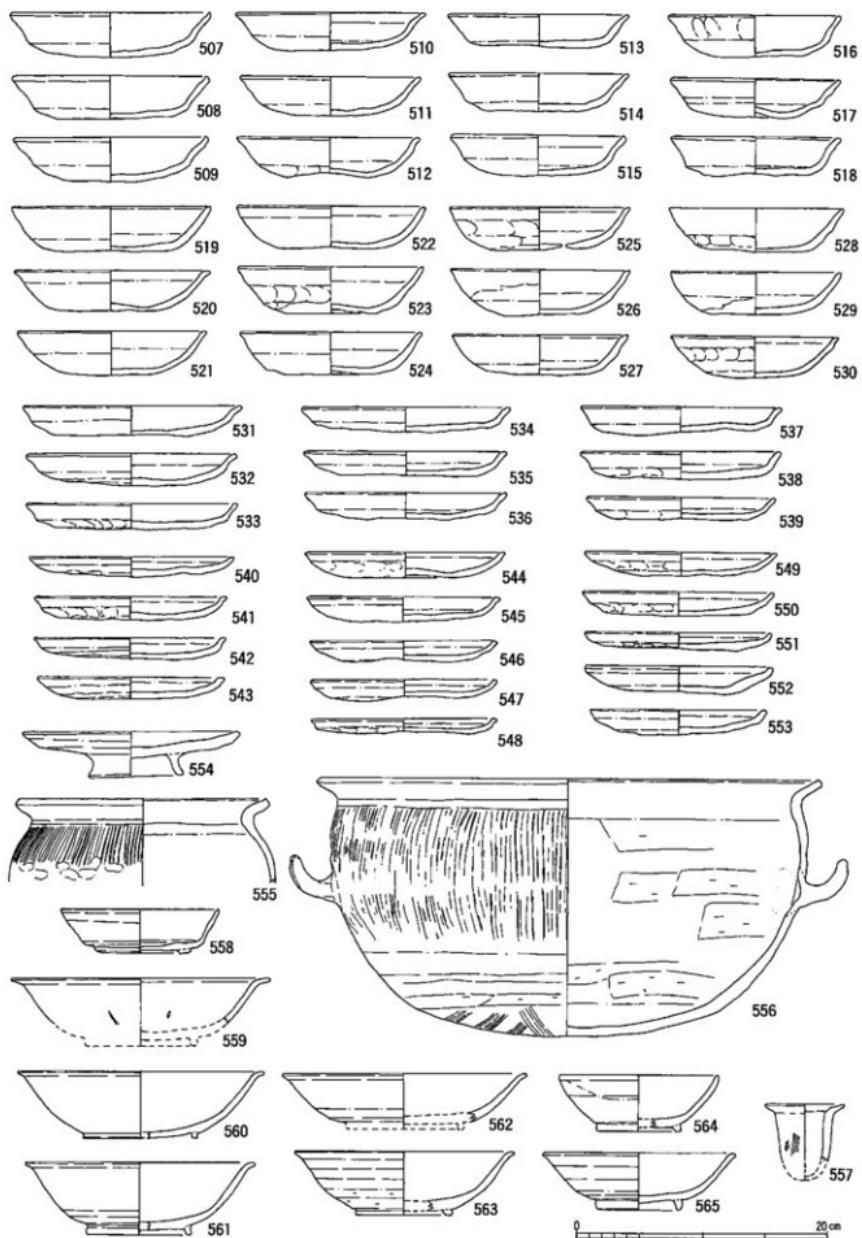
甕 甕A(555)は、口径が19.8cmの大形のものである。口縁部は比較的厚手に作られ、体部外面をタテハケ調整する。

鍋 鍋B(556)は、口径39.6cm、器高20.7cmの大形品で、底部及び体部外面上半をハケ調整、体部下半は横方向にヘラケズリし、内面は丁寧に板ナデを施す。

須 恵 器 須恵器杯B(558)は、平坦な底部に外傾する薄手の口縁部と幅広の低い高台が付く。器面調整は体部・口縁部をロクロナデ調整し、底部外面をヘラケズリする。

種 別	形 態	破片数		比 率
		供 膳	(%)	
土 師 器	供 膳	19,428	98.52%	
	(ロクロ)	0	0.00%	
	貯 藏	0	0.00%	
	煮 沸	91	0.46%	
	その他	201	1.02%	
	小計	19,720		99.71%
黒 色 土 器		0		0.00%
須 恵 器	供 膳	38		
	貯 藏	15		
	その他	5		
	小計	58		0.29%
灰 釉 陶 器	供 膳	0		
	貯 藏	0		
	その他	0		
	小計	0		0.00%
綠 釉 陶 器	供 膳	0		
	その他	0		
	小計	0		0.00%
製 塙 土 器		0		0.00%
土 鍋		0		0.00%
総 計		19,778		100%

第16表 SK7430出土土器構成表



第42図 斎宮第II期第3段階の土器 (SK7430)

灰釉陶器 梗は、猿投窯第V期第1小期(K-14号窯式期2型式)から第V期第2小期(K-90号窯式期2型式)にかけてのものが認められる。

梗 梗(562・563)は、厚手の底部にやや腰の張った体部、外反する口縁端部から成り、低い角高台が付く。調整は底部から体部中ほどまで回転ヘラケズリが行われ、内面全面に黄緑色の自然釉が厚く掛かる。梗(564)は、口縁端部の外反ではなく、体部から口縁部にかけて内窓気味に立ち上がり、低い角高台が付く。内面全面と口縁部に自然釉が厚く掛かる。これらは、成形・調整・施釉手法から猿投窯編年のK-14号窯式期2型式に相当する。梗(565)は、直線的に開く体部、弱く外反する口縁端部から成り、高台は角高台に近い三日月高台である。口縁部外面と内面全面に黄緑色の釉が厚く掛かるが、ハケ塗りか自然釉かは区別がつかない。K-90号窯式期1型式に相当する。

綠釉陶器 梗は、猿投窯編年のK-14号窯式期1型式及び2型式のものが認められる。

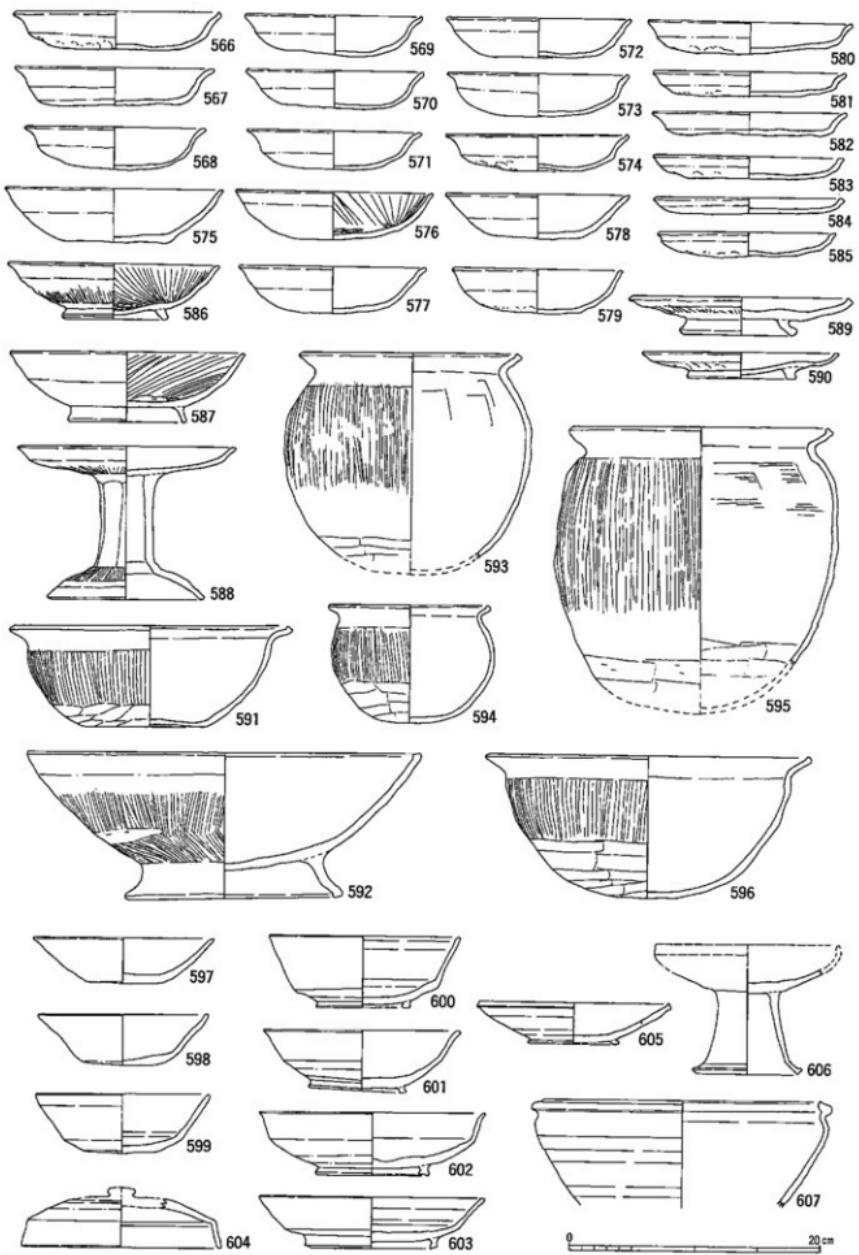
前者の梗(559)は、口縁部が強く外反し、体部下半に外面をヘラによる刻み目、内面を断面三角形状の粘土帯を短く貼り付けた輪花を有する。後者の梗(560・569)は、体部が丸みをもって緩やかに立ち上がり、口縁端部が弱く外反する。高台は低い角高台で、底部内外面に三叉トシンの跡が付く。

SK2650の土器 SK2650も上記のSK7430と同様に内院外郭北辺部に集中する土坑群の一つで、径5.4m×5.0m、深さ1.0mの不整円形土坑である。夥しい量の土師器杯・梗・皿が何枚も重なり合った状態で出土した。出土土器全体に占める割合は極めて低いが、多量の黒色土器、灰釉陶器、綠釉陶器なども出土しており、祭祀あるいは儀式に伴う一括廃棄土坑と考えられている。遺物は整理箱で約300箱分あり、これまで調査された土坑の中で、その出土量、器種の豊富さにおいて群を抜いている。主な器種に土師器杯A・梗A・皿A・皿B・高杯・壺A・壺C・鍋A・鉢・須恵器杯B・梗A・梗B・稜梗・皿・高杯・杯蓋・壺蓋・鉢・甕・黑色土器杯・梗・皿・壺・鉢・甕・小瓶・風字硯、灰釉陶器梗・皿・段皿・耳皿・長頸瓶・短頸壺・小瓶・壺蓋、綠釉陶器梗・稜梗・綠釉綠彩梗・皿・段皿・稜皿・耳皿・唾壺・淨瓶・香炉蓋がある。

土師器 杯A(566~574)は、口径14cm前後の小形のものと、16cm前後の大形のものがあり、小形のものが主流をなす。口縁部はヨコナデされ強く外反するが、口縁部のヨコナデがおよぶ範囲は前段階に比べると減少傾向にある。底部はやや丸みを増し、器壁は全

種 別	形 態	破片数	比 率
土 師 器	供 講	339,955	99.32%
	(ロクロ)	0	0.00%
	貯 藏	43	0.01%
	煮 沸	250	0.07%
	その他	2,034	0.59%
黑 色 土 器	小計	342,282	99.58%
		58	0.02%
須 恵 器	供 講	310	
	貯 藏	225	
	その他	100	
	小計	635	0.18%
灰 釉 陶 器	供 講	436	
	貯 藏	44	
	その他	28	
	小計	508	0.15%
綠 釉 陶 器	供 講	222	
	貯 藏	5	
	その他	4	
	小計	231	0.07%
製 壱 土 器		3	0.00%
土 錦		1	0.00%
總 計		343,718	100%

第17表 SK2650出土土器構成表



第43図 斎宮第II期第3段階の土器 (SK2650①)

体に薄く仕上げられる。なお口縁端部を上方へ屈曲させるものや端部に面を有するものは少ない。色調は椀・皿と同様に橙褐色や明茶褐色を呈する。

椀A(575～579)は、口径14～15cmのものを中心に、若干量16cmを越える大形のものもある。なお、大形の中には、内面に放射状暗文+螺旋状暗文を施すもの(576)も僅かにある。

椀B(587)は、口径19.0cm、器高5.6cmの大形のものである。器面の調整はe手法で、内面に粗い放射状暗文を施す。

皿 A (580～585)には、aタイプのもの(580～582)とbタイプのもの(583～585)があるが、aタイプ皿底部の丸底化、逆にbタイプ皿底部の平底化により器形による両者の区別が付きにくいものも多い。法量からみて両者とも15cm前後のものを中心にまとまる。

皿 B (589・590)は、bタイプの皿に「八」の字形に開く高台が付く。全体に厚く作られ、体部外面下半にハケメが施される。

高 杯 (588)は、唯一全形の分かるもので、口径17cm、器高12.1cmである。杯部口縁は弱く外反し、脚柱部は11面の面取りが行われる。杯底部外面及び脚柱部外面は粗いハケメが施される。

甕 (593～595)には、甕Aと甕Cがある。甕Aは、口径12.6cmの小形のもの(594)と17.2cmの大形のもの(593)があり、器面調整は、口縁部をヨコナデし、体部外面上半を粗いタテハケ、下半から底部を横方向にヘラケズリする。内面は板ナデと思われる。口縁端部は、内側に肥厚し、外傾する面を作るものが多い。甕C(595)は、口径20.2cmの長胴甕であるが、前段階に比べて法量の縮小化が著しい。口縁部の形態・調整について、甕Aと同様である。

鍋 A (596)は、半球形の扁平な体部に外傾する口縁部が付く。口縁端部は内側斜め上方に丸く肥厚する。調整は甕と同様である。

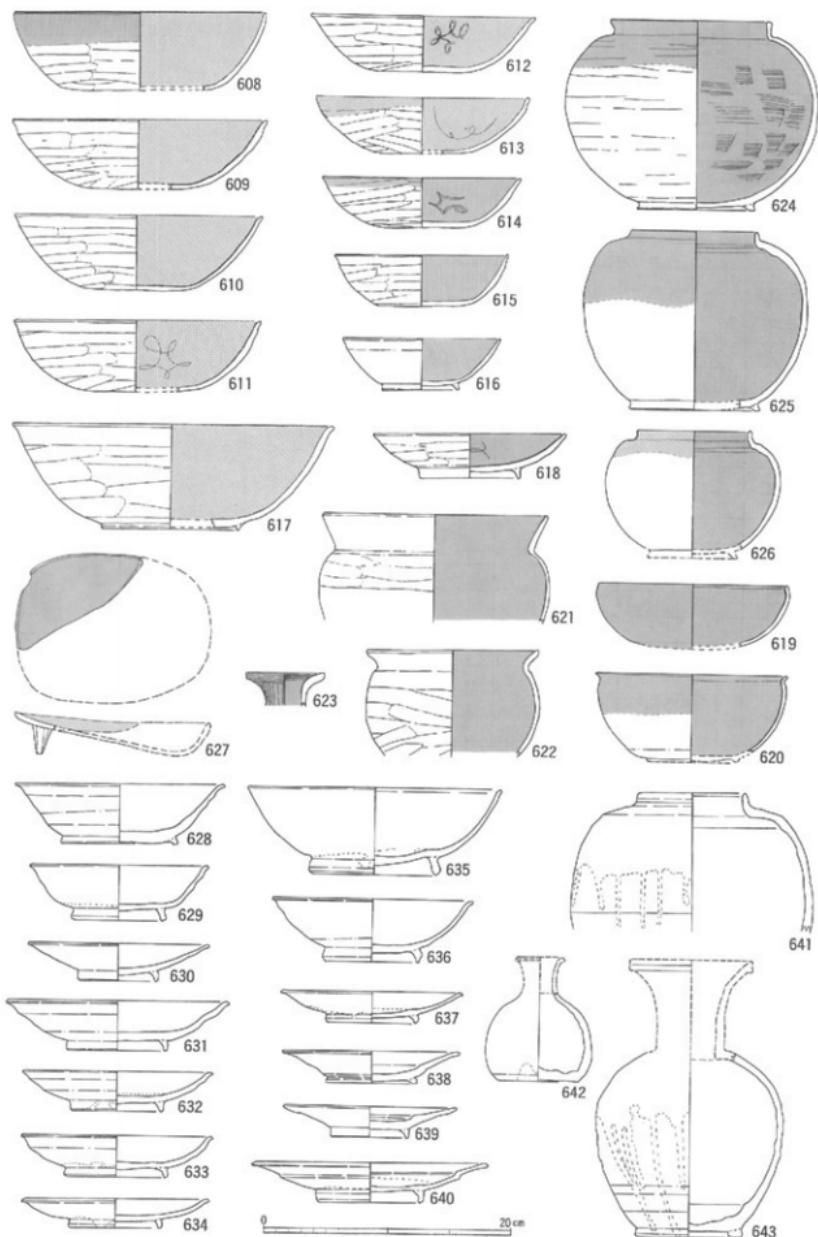
鉢 (591)は、II-1期からの系譜をひくものの(591)と新たに椀形態で高台の付く大形の鉢B(592)がある。(592)は口縁部をヨコナデ、体部外面をタテハケ調整(一部横方向のヘラケズリ有り)し、底部外面は一方向のヘラケズリを行う。口縁端部は内側に弱く肥厚し、上面に平坦な面をもつ。

須 惠 器 猿投窯編年のK-14号窯式期2型式～K-90号窯式期2型式のものが認められる。なお、土師器を除いた供膳形態における須恵器の出土比率は、灰釉陶器や綠釉陶器よりも低く、生産地の動向をよく反映している。

杯 B (603)は、口径17.9cmと大形で、厚手の底部に大きく外傾する体部・口縁部と低い角高台が付く。底部外面は回転ヘラケズリ調整が行われる。なお、杯Bの蓋と思われるものが数点確認されているが、この中では、紐を持たないものの方が多い。

椀 A (597～599)は、底部が平坦で、体部は直線的に大きく外へ開く。底部外面がヘラ切り後未調整で胎土も若干粗い粗製のもの(597・598)と底部の回転ヘラケズリ調整が体部下方におよび一見棘挽風となるもの(599)がある。前者は美濃須衛窯産の製品と思われる。椀B(600・601)は、椀Aの後者のものに低い角高台がつく。

稜 楓 (602)は、体部中ほどに稜を有するもので、口縁部はやや外傾して立ち上がり、



第44図 斎宮第II期第3段階の土器 (SK2650②)

口縁端部は外反して丸くおさまる。底部外面から体部下方にかけては回転ヘラケズリ調整が行われる。

皿(605)は、体部が直線的に大きく開き、口縁端部は上方に鋭く尖る。高台は大きく外傾する低い角高台で、底部と体部との境に付く。底部内面は非常に平滑で、朱の付着が認められることから硯として転用されたものであろう。

高杯(606)は、丸みのある底部に内湾して立ち上がる短い口縁部が付く。脚根部はあまり外側へ開かない。

壺(604)は、丸みのある天井部から屈曲して斜め下方へのびる口縁部から成る。天井部は大半が回転ヘラケズリ調整される。

鉢(607)は、口縁部の独特の形態、胎土、焼成等から京都産と思われる鉢である。外面は肩部から口縁部にかけて黒色化される。

黒色土器
杯

杯(608～615)は、すべて内面を黒色化するA類で、形態的には土器椀Aに似る。底部はほぼ平らで、体部はやや腰が張り内湾気味に立ち上がり、口縁端部は弱く外反する。器面調整は外面をヘラケズリし、内面をヘラミガキする。暗文は器面の保存状態により不確かなものも認められるが、内面体部に外巻きの螺旋状暗文を施す例が多い。法量から見て、口径19.9～20.5cm、器高5.6～6.2cmの大形のもの(608～611)、口径16.0～18.0cm、器高4.0～4.5cmの中形のもの(612～614)、口径13.9cm、器高4.0cmの小形のもの(615)に区別できる。

椀(616・617)は、上記の杯に小さな高台がつくものである。口径26.0cm、器高8.3cmの大形のもの(616)と口径12.6cm、器高4.1cmの小形のもの(617)がある。

皿(618)は、底部から口縁部にかけて緩やかに外へ開き、二等辺三角形の高台が付く。器面調整は杯・椀と同様である。

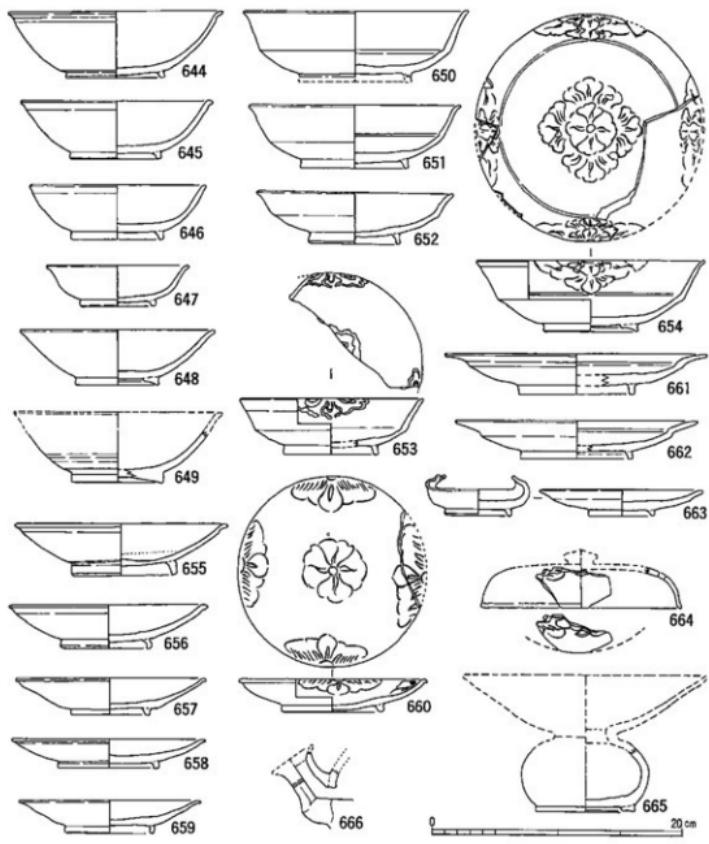
壺(624～626)は、球形の体部に直立する短い口縁部とやや外傾する低い高台が付く。器面の調整は、肩部から口縁部内面にかけてヘラミガキし、体部外面をヘラケズリ、同内面を細かいハケメ調整する例、内外面全面をヘラミガキする例、ヨコナデされた口縁部を除き以下全面をヘラミガキする例がある。法量により大・中・小の3種がある。すべて黒色土器A類であるが、内面の黒色化は外面肩部まで及ぶ。

鉢には、内面を黒色化するA類と外面を黒色化するB類がある。B類(619)は、底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がり、内外全面を横方向にヘラミガキする。A類(620)は、さらに口縁部を短く外反させるもので低い高台が付くものと思われる。

甕は、球形の体部に「く」の字状口縁が付くもので、口縁部が弱く外反する小形のもの(622)と、口縁部の立ち上がりが比較的長く、直線的に外へ開く大形のもの(621)がある。調整は、前者の方が丁寧で、内面全面をヘラミガキし、体部外面をヘラケズリするが、後者では肩部外面のみヘラケズリで、他はナデ調整である。

小瓶(623)は、大きく外反する口縁部片である。口縁部内外面を横にヘラミガキし、頸部は外面を縱にヘラミガキ、内面を横にヘラケズリする。

風字硯(627)は、内外面とも黒色化されたB類で、器壁は非常に薄く作られ、口縁部に沿って浅い沈線が巡る。陸部側底部に面取りされた円錐状の脚が付く。



第45図 斎宮第II期第3段階の土器 (SK2650③)

灰釉陶器

椀・皿・段皿は、猿投窯編年のK-14号窯式期2型式からK-90号窯式期2型式にかけてのものが認められるが、量的にはK-90号窯式期2型式のものが主体的である。K-14号窯式期2型式に相当するものに椀(628)、K-90号窯式期1型式に相当するものに皿(630)、段皿(638・639)、K-90号窯式期2型式に相当するものに椀(629・635・636)、皿(631・634・637)、段皿(640)がある。なお、椀(629)は美濃須衛窯產と思われる。

小瓶

小瓶(642)は、体部外面に淡黄緑色の灰釉がかかる。底部は糸切り痕をとどめる。

広口短頸壺(641)は、肩部から口縁部内側にかけて厚く釉がかかり、釉垂れが認められる。体部下部を欠くが、体部外面下半は回転ヘラケズリを施す。

長頸瓶

長頸瓶(643)も広口短頸壺と同様に肩部から口縁部内側にかけて厚く釉がかかり、

- 軸垂れが認められる。底部は糸切りのままで、体部外面下方を回転ヘラケズリする。
- 緑釉陶器** 緑釉陶器も灰釉陶器と同様、猿投窯産のK-90号窯式期2型式の製品を主体とするが、K-90号窯式期1型式のものや京都産の製品もわずかに認められる。
- 椀** 梗(644~649)には、体部の腰が弱く張り、口縁端部が強く外反し、やや外傾する低い角高台の付くもの(644・645)、体部が直線的に大きく開き、幅広で扁平な内反り高台の付くもの(648)、体部が丸みをもって緩やかに立ちあがり、口縁端部がわずかに外反し、やや高めの角高台の付くもの(646・647)がある。前二者がK-90号窯式期1型式に、後者がK-90号窯式期2型式に相当しよう。このほか、(649)は、底部外面が回転ヘラケズリ調整された内反りの平高台を呈するもので、京都産と思われる。
- 稜 梗** 稜梗(650~654)には、体部中ほどで屈曲する稜が内外面とも鋭く、幅広で扁平な内反り高台の付くもの(654)と体部下半に丸みがあり、稜が弱く、幅が狭くてやや高い高台の付くもの(650~653)がある。前者は、K-90号窯式期1型式に、後者はK-90号窯式期2型式に相当しよう。なお、(654)は、内面底部中央に12花弁宝相華文、口縁部に半截宝相華文が陰刻される優品である。また、陰刻の代わりに濃緑色の釉で宝相華文を描く(653)は、緑釉綠彩陶器と呼ぶべきものであろう。
- 皿** 皿(655~660)は、体部が緩やかに浅く立ちあがり、口縁端部がわずかに外反し、幅が狭くてやや高い角高台が付く。このうち、(660)の内面には、簡略化された宝相華文が施される。いずれもK-90号窯式期2型式に相当する。
- 段 皿** 段皿(661・662)は、体部と口縁部との境に浅い段を有し、やや外傾する角高台が付く。皿と同時期のものであろう。
- 耳 皿** 耳皿(663)は、体部を両側から内弯するように折り曲げ、さらに口縁端部を波状に仕上げる。高台はやや外傾し、端部は丸みのある角高台である。
- 唾 壺** 唾壺(665)は、体部が扁平な橢円形を呈し、高台は幅広で低い内反り高台が付く。緑釉は、光沢のある黄緑色で内面にも施釉される。
- 香炉蓋** 香炉蓋(664)は、破片のため法量は不明確であるが、天井部に陰刻花文や菱形の透孔が認められる。
- 以上のはかに、淨瓶の注口部片(666)や小片のため図示していないが稜皿片も確認されており、器種及び破片数において、緑釉陶器が灰釉陶器を上回る。
- (4) 斎宮第II期第4段階
- これまでの平安時代中期に位置付けられていたもので、折戸53号窯式に相当し、10世紀代の年代を比定していた。斎宮跡では当該期の遺構・遺物が極端に少なく、同時期に比定される良好な資料が少ないため、SE3134の資料が仮に提示してあった。この時期はSE3134のものを10世紀前半から中頃、次の平安時代後I期としたSE2000の時期を11世紀前半の年代を与え、折戸53号窯式の新しい段間に相当する10世紀後半が空白となることで、後I期が10世紀に遡る可能性も考えられるとして、斎宮跡の中では問題がある時期であった。この年代の問題について現在では、東山72号窯跡は10世紀後半に、折戸53号窯式が10世紀前半の年代が与えられ、かっての問題は解決されている。

今回取り上げたSK7030・7040(第103次)は、内院の中心部に近い牛葉東区画で検出した廃棄土坑で、土師器の供膳形態の杯・椀が大半を占めてその他の器種の変遷が追えないという資料的な制約がある。このため9世紀から10世紀に埋没した井戸SE405の資料を補助資料として土師器の変遷を追うこととする。また、遺物の実年代の推定できる数少ない資料が当概期SX6666(第95次)・SX6900(第99次)の2例あり、当概期の年代を比定するひとつの根据ともなっているのでここに紹介する。

実年代

SX6666・6900は、内部に銭貨が納められた平底の甕と土師器の碗・杯類が埋納された土坑で、陶衣壺あるいは地鎮に伴う遺構と考えられる。貨幣は、SX6666が21枚、SX6900が9枚以上確認でき、判読されたものは「延喜通宝」で、判読できないものも大きさから見て、同様の銭貨と思われる。

土師器は、同一形態の甕Xに、ほぼ同一法量の杯AがSX6666で12個体、SX6900で5個体以上が出土している。

延喜年間は西暦907~922年であることから、土師器の実年代の一端を示していると考えるならば、これらの資料は10世紀前半でも古い年代を与えることができる。

SX6666

杯A(667~678)は、口縁部内外面は横ナデを行い、底部外面はe手法である。(668~677)は、口径12.2~12.9cm、器高2.6~3.0cmで、他の2点は若干口径が大きい。

甕X(679)は、口縁部が外反しながら立ち上がり、体部上半にタテハケを施し、底部外面から体部下半にかけてはナデ調整のみの扁平な底部を持つ。斎宮跡ではあまり出土しない特殊な形態である。

SK7030

本編第三章牛葉東区画の第103次調査で検出した2.4m×2.9m、深さ0.4mの円形の土坑で、土師器杯A・椀A・皿・鉢・台付鉢・甕、灰釉陶器碗・皿、須恵器片が整理箱で20箱出土した。土師器の杯・椀などの供膳形態が多く、灰釉陶器、須恵器はわずかな量である。

土師器

杯A(680~683)は、口径12.8~13.5cm前後、器高2.5~3.0cmのものが中心である。SX6666の杯Aと類似するものも見られ、同一時期の資料と考えていいものである。器壁が薄くなり、作りも悪くなり、焼き歪みにより変形したものの中には見られる。

椀A

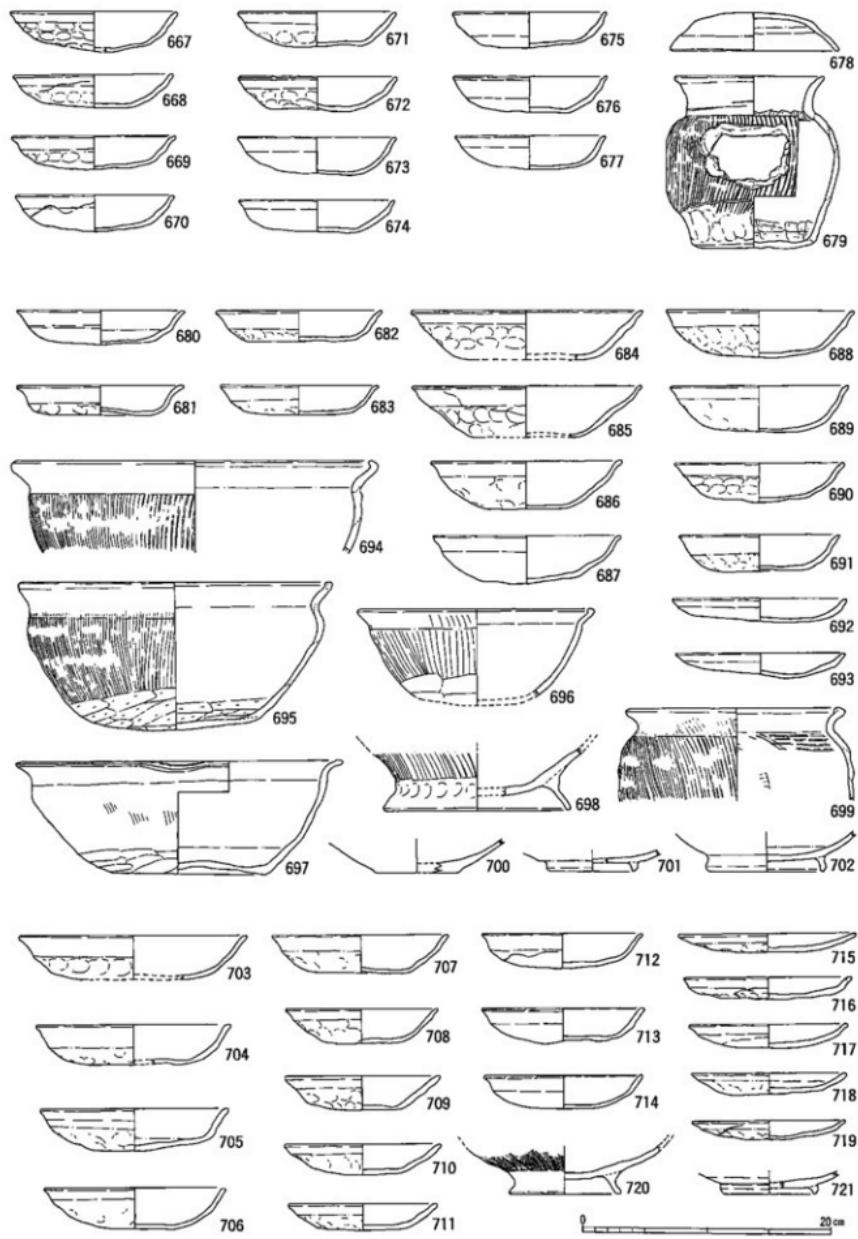
椀A(684~691)は、口径14~15cm、器高3.5~4.0cmのもの(686~689)が中心で、口径13cm前後(690~691)と18cm前後の大型のもの(684~685)もある。いずれも底部外面にユビオサエの痕跡が明瞭に残る。

皿A

皿A(692~693)は、口径14cm、器高2cm

種別	形態	破片数	比率
土師器	供膳	7,535	99.31%
	(ロクロ)	0	0.00%
	貯蔵	0	0.00%
	煮沸	17	0.22%
	その他	35	0.46%
黒色土器	小計	7,587	99.41%
	0		0.00%
須恵器	供膳	14	
	貯蔵	28	
	その他	3	
	小計	45	0.59%
灰釉陶器	供膳	0	
	貯蔵	0	
	その他	0	
	小計	0	0.00%
緑釉陶器	供膳	0	
	その他	0	
	小計	0	0.00%
製塙土器		0	0.00%
土鍤		0	0.00%
総計		7,632	100%

第18表 SK7030出土土器構成表



第46図 斎宮第II期第4段階の土器 (SK6666 : 667~679, SK7030 : 680~702, 7040 : 703~721)

皿 A 程度で口縁部が短く立ち上がる。

鉢 A 鉢 A(694~697)は、口径25cm以上の大型のもの(694・695)と口径19cmの中形のもの(697)がある。体部下半～底部外面はヘラケズリされ、底部はそれまでの平底ではなく若干の丸味を持つものもある。体部外面のハケメがナデで消されるもの(697)もある。なお、(695)は口縁部に歪みがあるものの片口の鉢になるものと思われる。

台付鉢 台付鉢(698)は、底部のみで口縁部の形態は不明である。

甕 A (699)は口径16.6cmの口縁部が外反しながら立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚する。体部の丸い甕 Aになるものと思われる。

灰釉陶器 灰釉陶器椀(701)や皿(702)は、底部片のみであるが折戸53号窯式のものである。須恵器(700)は底部外面に糸切り痕の残るもので、椀になるものと思われる。

ほか ほか SK7040 と同様に第103次調査で検出した
2.7m × 0.9m、深さ0.3mの長楕円形の土
坑で、土師器杯A・椀A・皿A・台付鉢・
甕、須恵器、灰釉陶器が整理箱で9箱出土
しているが、土師器の杯A・椀A・皿Aが
大半を占め、その他の器種は極少量である。

土 師 器 土 師 器 杯 A(712~714)は、口径12.5~13.0cm、
器高2.5~3.0cm、椀 A(703~711)も口径14
cm前後、器高3.0~3.5cmのものが多い。口
径12.5cm以下、器高2.5cm以下のもの(715)
もあり、器形から椀 A の小形のものと思わ
れるが、杯 A、椀 A の識別は困難となっ
ていく。

皿 A (715~719)は、口径12~14cm、器高
2 cm前後で、口縁部が短く立ち上がるもの
(716・717・719)も見られるが、口縁部と底
部が明瞭でないもの(715・718)が多い。

椀 B (720)は、外側に延びる長い高台で、
底部外面にタテハケの痕跡が残る。

灰釉陶器 灰釉陶器 須恵器は少なく、図示できるものはない。

ほか ほか また、灰釉陶器は出土点数が9片と非常に少ない。皿(721)は高台は外傾する。

SE4050 第61次調査で検出した径3.2m × 2.8m、深さ4.8mの素掘井戸である。この調査区
の位置する西加座北区画は、内院地区から見て北端の区画に当たり、寮庫に推定され
ている地区である。井戸の埋土は下層、中層、上層の大きく3層に分かれ、下層は概
ね9世紀、中層は10世紀前半、上層は10世紀後半の時期に比定されている。ここでは
中層の土器について記述し、上層の土器については後述する。

中層の土器 中層の土器 土師器杯A・杯B・椀A・椀B・皿A・皿B・高杯・鉢A・鉢B・甕A・甕C・壺、
ロクロ土師器椀、黒色土器椀、須恵器鉢・甕、灰釉陶器椀・皿・段皿・壺、綠釉陶器

種 別	形 態	破片数		比 率
		供 膳	(ロクロ)	
上 師 器	貯 嵌	0	0.00%	
	煮 沸	58	0.98%	
	その他	497	8.36%	
	小計	5,942		99.15%
黒 色 上 器		0		0.00%
須 恵 器	供 膳	10		
	貯 嵌	23		
	その他	1		
	小計	34		0.57%
灰 釉 陶 器	供 膳	4		
	貯 嵌	2		
	その他	3		
	小計	9		0.15%
緑 釉 陶 器	供 膳	0		
	その他	0		
	小計	0		0.00%
製 塩 上 器		8		0.13%
上 鍾		0		0.00%
總 計		5,993		100%

第19表 SK7040出土土器構成表

		種別	形態	破片数	比率
土 師 器	椀・皿・小壺などが整理箱で10箱ある。	土 師 器	供膳具	1,808	76.38%
	杯 A(722~728)は、口径13.5~14.0cm、器高3.0cmのもの(722~725)と口径11.0~12.0cmのもの(726~728)がある。口縁部の横ナデが弱くなり外反する屈曲部が弱くなる。		(ロクロ)	5	0.21%
	椀 A(729~733)は、口径14.5~15.2cm、器高3~4.0cmの中形のもの(729~731)、やや小型の口径12~13cm、器高3.1cmのもの(732~733)がある。杯Aと比較して器高が深いが、杯と椀の区別が困難となっていく。これら椀・杯の色調は前代までが橙褐色であるのに対して、淡褐色ないしは茶味を帯びた白色となって粗雑な感じとなる。大型のものは器高の深いもの(729)と浅いもの(730~731)が見られるが、椀Bにおいても同様に深いもの(742)、浅いもの(743)の二者が存在する。口径9.4cmのもの(734)も見られるが、多くは口径が14~15cm前後である。		貯藏具	0	0.00%
	皿(735~737)は、口径13cm前後で、口縁部がわずかに折り曲げられるもの(735)と、口縁部の立ち上がりがほとんどなく、口縁部が屈曲しないで丸く底部へと続くもの(736)のほか、口径11cm、器高1.6cmの小形(737)もある。		煮沸具	554	23.41%
	皿B(738~741)は、口径が11~12cmと小形で、杯部は扁平な形で口縁部の屈曲が明瞭ではないものが多い。口縁部の折り曲げられる皿は当概期で消滅していく、脚の付く扁平な小皿が今後の主流となる。		その他	0	0.00%
高 坎	高坎(748)は、口径24.0cm、器高24.9cm、杯部は浅い椀状で、内外面にはヘラミガキは施さない。脚柱部は細長い筒状で、ヘラケズリによる多角形の面取りを行う。透かしを意識したと思われる内部まで貫通しないヘラによる刺突を2対施す。		小計	2,367	89.66%
	鉢(747)は、口径29cm、器高11.0cmの大形の鉢で、片口になると思われる。口縁部の屈曲が弱くなっている直線的に延び、口縁部と体部の境が明瞭ではない。体部下半部はヘラケズリを行う。(746)は、口縁部を欠くが、鉢に脚が付くと思われるもので、当概期の遺構からは個体数は多くないが認められ、火を受けたためか赤色化し、残りが多いものが多い。		黒色土器	61	2.31%
	鍋(749)は、口径33.4cmの大形のものである。体部下半の内外面ヘラケズリを行う。把手は挿入式で、以前のものと比較して小型化している。		供膳具	14	
ロクロ土師器	破片のみで図示は出来ないが、ヘラケズリによって高台を削り出すもので中層からは5点確認できる。混入の可能性があるものの、わずかではあるが出土している。		貯藏具	109	
			その他	1	
			小計	124	4.70%
			供膳具	71	
			貯藏具	1	
			その他	0	
			小計	72	2.73%
			供膳具	14	
			その他	2	
			小計	16	0.61%
			製塩土器	0	0.00%
			土錘	0	0.00%
			總 計	2,640	100%

第20表 SE4050中層出土土器構成表

皿

皿(735~737)は、口径13cm前後で、口縁部がわずかに折り曲げられるもの(735)と、口縁部の立ち上がりがほとんどなく、口縁部が屈曲しないで丸く底部へと続くもの(736)のほか、口径11cm、器高1.6cmの小形(737)もある。

皿B(738~741)は、口径が11~12cmと小形で、杯部は扁平な形で口縁部の屈曲が明瞭ではないものが多い。口縁部の折り曲げられる皿は当概期で消滅していく、脚の付く扁平な小皿が今後の主流となる。

高 坎

高坎(748)は、口径24.0cm、器高24.9cm、杯部は浅い椀状で、内外面にはヘラミガキは施さない。脚柱部は細長い筒状で、ヘラケズリによる多角形の面取りを行う。透かしを意識したと思われる内部まで貫通しないヘラによる刺突を2対施す。

鉢

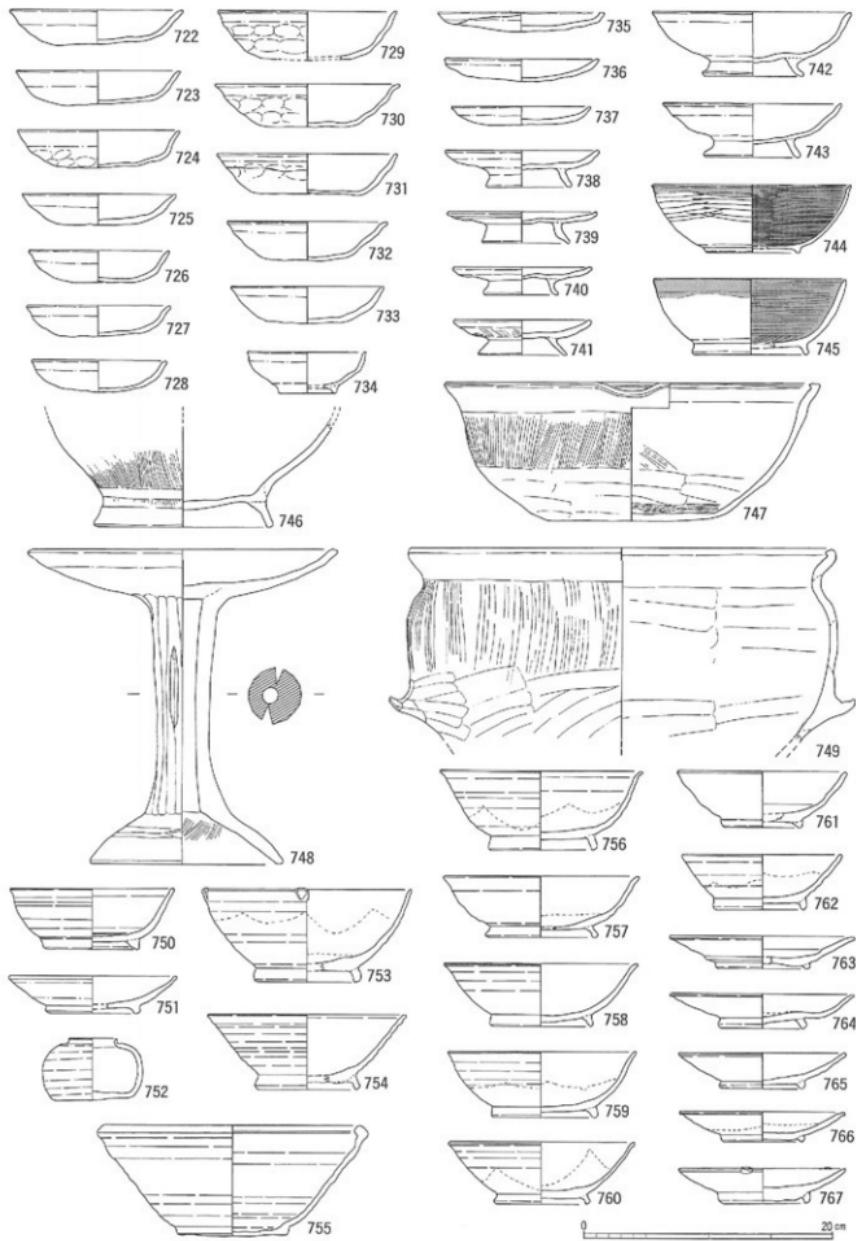
鉢(747)は、口径29cm、器高11.0cmの大形の鉢で、片口になると思われる。口縁部の屈曲が弱くなっている直線的に延び、口縁部と体部の境が明瞭ではない。体部下半部はヘラケズリを行う。(746)は、口縁部を欠くが、鉢に脚が付くと思われるもので、当概期の遺構からは個体数は多くないが認められ、火を受けたためか赤色化し、残りが多いものが多い。

鍋

鍋(749)は、口径33.4cmの大形のものである。体部下半の内外面ヘラケズリを行う。把手は挿入式で、以前のものと比較して小型化している。

ロクロ土師器

破片のみで図示は出来ないが、ヘラケズリによって高台を削り出すもので中層からは5点確認できる。混入の可能性があるものの、わずかではあるが出土している。



第47図 斎宮第II期第4段階の土器 (SE4050中層)
176

黒色土器

椀(744)は、口径15.6cm、器高5.4cmで、口縁部内面に沈線が一条巡るもので、器壁も薄く、外面はヘラケズリの後ヘラミガキが施される。高台が三角形の低いものである。(745)は外面の調整はヘラケズリのみで、ヘラミガキは施されない。高台が外側に踏ん張った形状で、器壁も厚く在地產と思われる。

須恵器

鉢(755)は、口径20.6cm、器高9.0cmで、いわゆる玉縁状口縁を持つ鉢で、底部に糸切り痕を残す。他に口径19cmほどのやや小形のものもあるが、出土点数は少ない。

灰釉陶器

椀、皿は、低くて幅の広い三日月状の高台を持ち、灰釉はツケガケされる。椀は口縁部が外反する器高の深いもの(756)もあるが、口縁部が直線的に開くもの(754)もある。皿は口径13.5cm、器高2.5cm前後のもの(765～767)が多い。(764)は15cmほどの大きなもので、同程度の大きさのものには段皿(763)もある。

縁釉陶器

この時期から近江産や東濃産のものが増えていく。椀(750)は、脚端部内面に沈線が巡り、底部に糸切り痕を残す近江産のものである。

小壺(752)は、口径3.9cm、器高5.0cmの小型の壺で、体部外面は丁寧にヘラケズリを行い、内外面に淡緑色の釉を刷毛塗りする。

第四節 斎宮跡第III期の土器

(1) 斎宮第III期第1段階

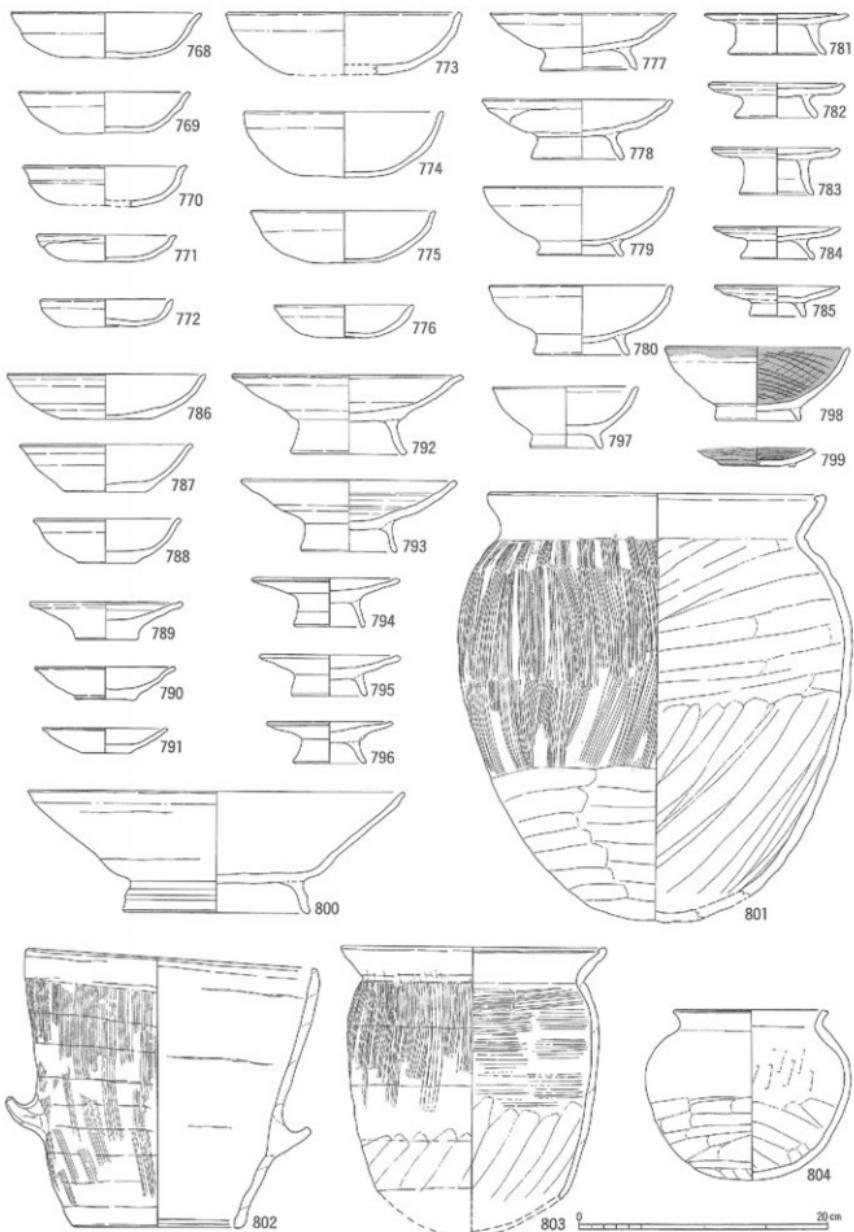
これまでSE2000を標識遺構としたもので灰釉陶器東山72号窯期に相当し、SE4050上層の資料を追加する。当概期は奈良時代から続く律令的土器様式の土器組成が大きく変わる時期である。土師器では、前代から続く杯、椀は分けることが困難となるとともに、灰釉陶器などの椀の模倣したものや新たにロクロ土師器が出現する。ここでは前代からの系譜の引ける杯、椀を杯として一括し、灰釉陶器の器形を模倣したものと考えられる深い器形を持つものを椀として記述する。土師器は奈良時代からの名称を踏襲しつつも略記号を使用しないで呼称し、ロクロ土師器については、灰釉陶器等の影響が強いため、名称は陶磁器の名称を参考とする。

SE4050上層

土師器杯・台付杯・椀・台付椀・台付皿・高坏・甕・頬・竈、ロクロ土師器皿・小皿・台付小皿・台付皿・台付椀、黒色土器椀、灰釉陶器椀・皿・段皿・長頸瓶・短頸壺、縁釉陶器椀が整理箱で24箱ある。土

種別	形態	破片数		比率
土師器	供膳	3,965	58.93%	
	(ロクロ)	77	1.14%	
	貯藏	33	0.49%	
	煮沸	2,614	38.85%	
	その他	39	0.58%	
小計		6,728		95.26%
黒色土器		24		0.34%
須恵器	供膳	12		
	貯藏	90		
	その他	6		
	小計	108		1.53%
灰釉陶器	供膳	137		
	貯藏	44		
	その他	2		
	小計	183		2.59%
縁釉陶器	供膳	20		
	その他	0		
	小計	20		0.28%
製塩土器		0		0.00%
土姫		0		0.00%
総計		7,063		100%

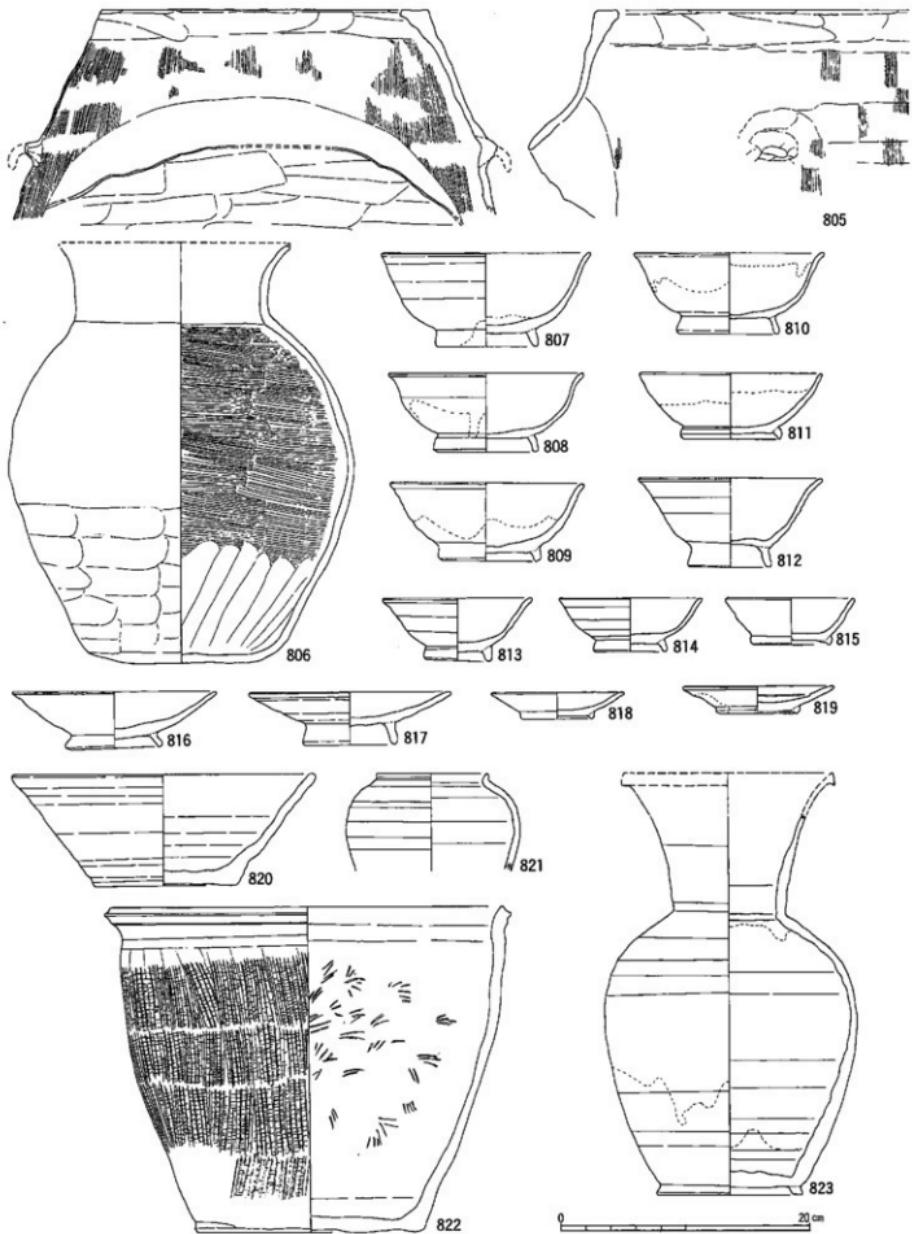
第21表 SK4050上層出土土器構成表



第48図 王宮第III期第1段階の土器 (SE4050上層①)

師器の供膳具の器種は少くなり、小皿、杯、台付椀、台付小皿で、ロクロ土師器も土師器に対応した器種となる。

- 土 師 器** 杯(768~722)の大きなものには、口径14cm、器高3.0~4.0cmのもの(769~770)と15cmのやや大きなもの(768)がある他、口径11cm、器高2~3cmの小型のもの(771・772)とがある。脚の付く台付杯(777・778)は、口径が15cm前後と大形のもので、浅い椀状の体部に約2cmの高い脚が付く。
- 碗(773~776)は、杯と比較して器高の深いもので、丸く椀状の体部で横ナデされ、口縁部がやや外反する。後述する台付椀の脚のない器形で、前代までの碗という器形とは異なり当概期から出現する。
- 台付椀(779・780)は、口縁部がヨコナデされ、深くて丸い体部外面下半部はナデと指押さえのe手法のままである。灰釉陶器碗の器形に類似するもので、器高が台付杯に比べて深い。
- 台付小皿 台付小皿(781~785)は、口径が10cm前後のものが多く、杯部はほぼ平らである。3cmほどの高い脚を持つもの(781~783)と2cmほどの低い脚のもの(784・785)がある。
- 台付鉢 台付鉢(800)は、口径30.4cm、器高10.9cmで外上方に延びる口縁部をもつ。粘土紐の接合痕が残り、体部の残りが悪いが、外面にはタテハケが施されても全面ではなくてごく一部にのみ施されたと考えられる。
- 壺(804)は、球形の体部に「く」字形に曲がる短い口縁部が付く壺Aの系譜を引くものである。体部外面下半はヘラケズリで、外面上半ナデ、内面上半、板状工具によるナデが施される。
- 壺Cの系譜を引くもの(801・803)は、口縁端部が折り曲げられて肥厚する。体部外面下半と内面にヘラケズリを行い、体部外面のタテハケは頸部に近い上半部を軽く整形するにとどめて体部中央から下は当初のナデとオサエの面を残すまである、また、粘土紐の接合痕も残っている。
- 壺(806)は、長く外反する口縁部に摩滅して残りが悪い端部がつまみ上げられる。平底気味の底部で当概期の壺としては類例があまりないもので形態的には壺に類似する。この他、瓶、竈もわずかであるが出土した。瓶(802)は、口径24cmほどで、底部のさんはなく、筒状である。体部外面の調整は壺に類似し、粘土紐接合痕が残り、タテハケは下半部ほど粗くなってしまばらとなる。把手も挿入式で小さなものである。瓶は他に2個体ほどある。竈(805)は、口径が46cmの大型のものである。
- ロクロ土師器 出土破片数は中層の5片と比較して77片と増加するが、全体の割合から言うと1%程度と少ない。底部外面に糸切り痕が残るものが大半である。
- 碗(786)は、口径14cm、器高3.6cmで、体部下半~底部外面をヘラケズリするもので他のロクロ土師器とは異なる。(787・788)は口径12~14cm、器高3.5~3.8cmで内湾しながら立ち上がる口縁部を持つ。
- 台付椀(797)は、口径11.4cm、器高4.9cmの小形のもので類例が少ない。
- 小 皿 小皿(789~791)は、口径10~12cm、器高2~2.5cmで、口縁部が横上方に延びる内面がやや深いもの(790・791)と、(789)は口縁部が横に延び、内面が浅くて底部が厚く、



第49図 斎宮第III期第1段階の土器 (SE4050上層②)

外見上は高台を意識した擬高台と呼ぶべきものもある。

台付皿 台付皿(792・793)は、口径が18cm前後、器高約6cmで、杯部は器高4cmほどとやや深く、高さ2cmほどの長い脚が付く。

台付小皿 台付小皿(794~796)は、口縁部が横に延びる内面の浅いものに脚が付くものである。口径は、11~12cmと小形のもの(794・795)である。口径10cm、器高3.3cmのもの(796)は、より新しい傾向のあるものでSE4050上層でも比較的新しい様相である。

黒色土器 梗(798)は、内面黒色化のA類で、中層のものと比較して体部は丸く器壁も厚く、口縁部内面の沈潜状に巡る凹線がなくなり、外反気味に丸く終わる。内面のヘラミガキは雜で、高台が外側に踏ん張る形状のものである。(799)は、黒色土器B類の梗の底部片である。高台は、つぶれた形状で低くて逆台形を呈する。

須恵器 鉢(820)は、口径22cm、器高9cmの浅い鉢で、糸切り痕の残る平らな底部に口縁部が外上方に直線的に延び端部が丸く収められる。鉢(822)は、口径31cm、器高26cmと口径に対して器高の深い鉢で、口縁部が外反し外傾する面を持つ。体部外面のタタキは底部に近いところまで及んでいない。

短頸壺(821)は、短く直立する口縁部を持つもので、口径8.8cmと小形である。

灰釉陶器 梗(807~815)は、口径により12cmと15cm前後の二者に分かれ、高台も短いものや高いものなど様々である。体部が丸く高台が比較的高い深梗タイプ(807)や外上方に直線的に延びる口縁部を持つ無釉の梗(812・813)などもある。

皿(816~819)は、口径16cm、器高4.5cm前後の深いもの(816・817)と、口径11cm、器高2cm前後の浅い小皿(818)や小形の段皿(819)がある。

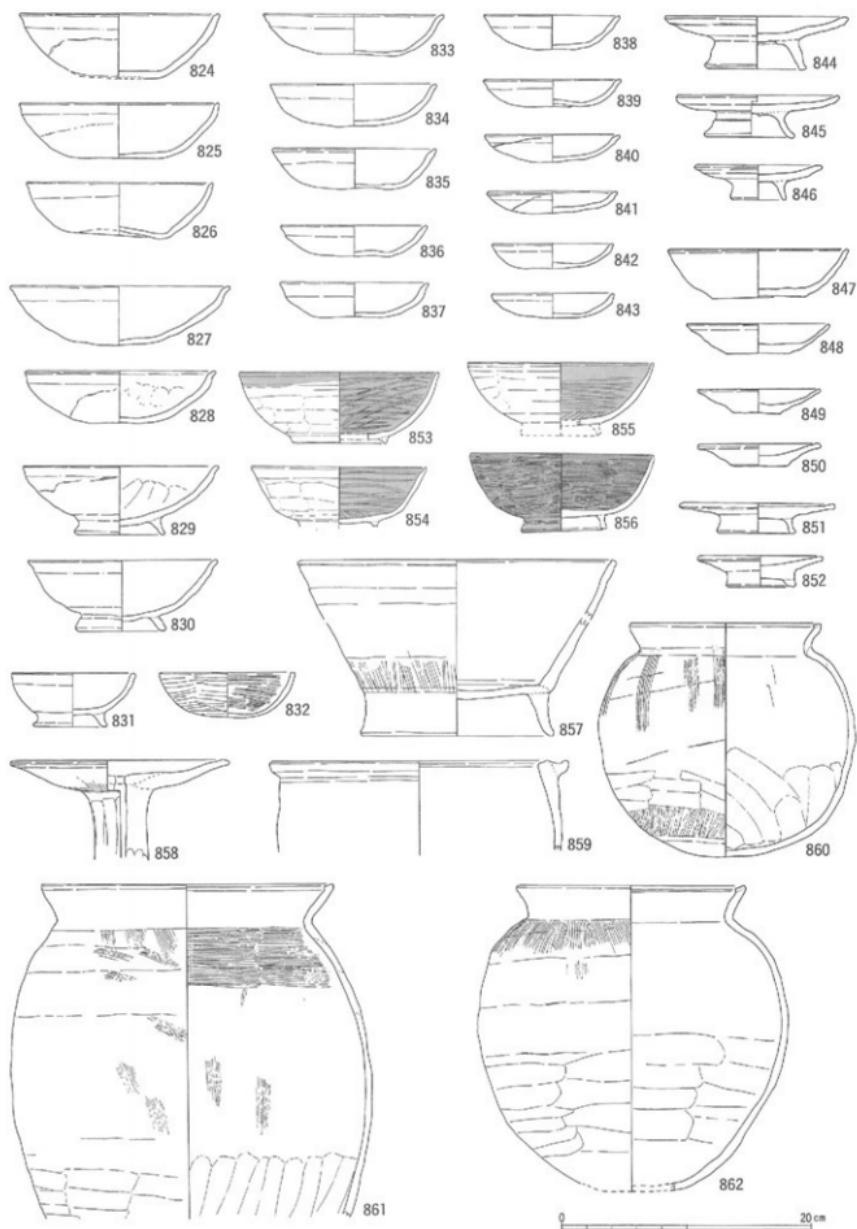
長頸瓶は、数点あるが大半は体部のみで口縁部が欠損するものが多い。(823)は、口縁部を欠損し、胴のあまり張らない卵形の体部に、薄い灰釉が口縁部内外面と胴部上半にかかる。

SE2000 第31~4次調査で検出した径4mの円形の素掘井戸で、深さは2mまで下げただけである。遺構検出面から深さ1.5mまでは土師器や灰釉陶器等の遺物が多く出土し、これより下は遺物が少なくなるものの、完形の土師器が多く出土している。検出面から1.5mまでが第2層に該当し、ここでは主に第2層出土遺物として調査時に取り上げたものを中心報告する。⁽²¹⁾

第2層出土遺物 土師器杯・台付杯・梗・台付梗・台付小皿・高杯・台付鉢・甕・甑・竈、ロクロ土師器皿・台付梗・小皿・台付皿・台付小皿、

種別	形態	破片数	比率
土 師 器	供 脳	4,868	64.07%
	(ロクロ)	181	2.38%
	貯 藏	83	1.09%
	煮 沸	2,466	32.46%
	その他	0	0.00%
小計		7,598	73.86%
黒色土器		68	0.66%
須 恵 器	供 脳	9	
	貯 藏	694	
	その他	0	
	小計	703	6.83%
灰釉陶器	供 脳	1,096	
	貯 藏	542	
	その他	0	
	小計	1,638	15.92%
緑釉陶器	供 脳	101	
	その他	0	
	小計	101	0.98%
製塙土器		75	0.73%
土 瓶		104	1.01%
總 計		10,287	100%

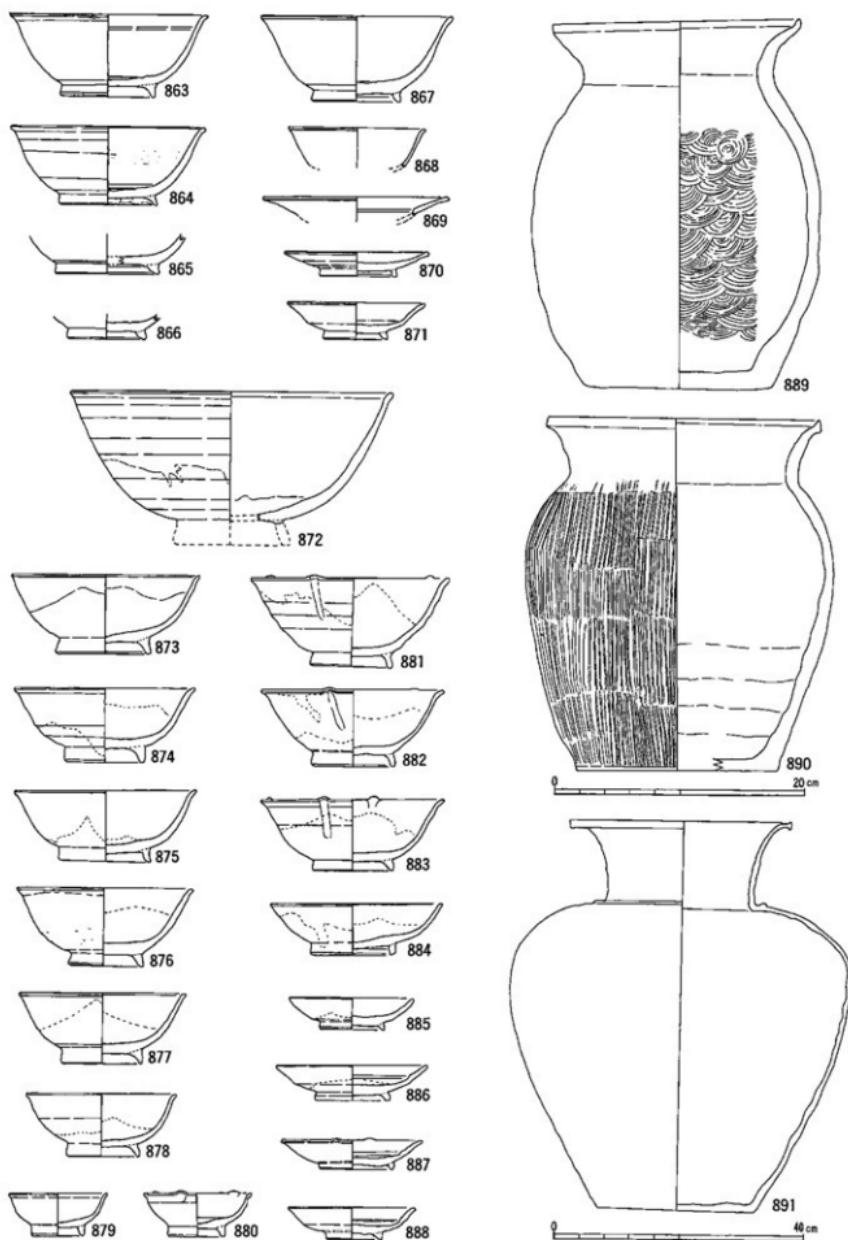
第22表 SE2000出土土器構成表



第50図 斎宮第III期第2段階の土器 (S E 2000①)

黒色土器A類椀・B類椀、綠釉陶器椀、灰釉陶器椀・皿・段皿・長頸瓶・広口瓶・瓶が整理箱で24箱ある。

- 土 器** 杯(833～843)は、底部の平底気味のものと丸底気味のものが見られ、これらがそれぞれ前代からの杯と椀の系譜を引くものとも考えられる。口径10.5～12.6cm、器高2.5～3.0cmの小形のもの(835～840)と口径12.8～14cm、器高3.0～3.5cmの中形のもの(833・834)が中心で、中形のものは13cm前後のものが多くSE4050と比較しても口径が小形化している。また、口径9.5cm、器高2cmのさらに小形のもの(741～743)があり、これらの一群は小皿と呼ぶべきものかもしれない。
- 椀 楓(824～828・832)は、口径10.5cm、器高2.8cmの底部が丸くて小型のものも(832)あるが、多くは口径15cm以上のもので、器高5～6cmのものが多い。(829・830)は、口径15cm前後の楓の形態と同じで脚が付く。(832)は、1個体だけ出土したもので類似するものはない。
- 台付椀 台付楓は、底部の丸い灰釉陶器の楓に類似するもので、口径10cmの小形のもの(831)がある。
- 台付小皿 台付小皿(844～846)は、杯部がほぼ平らもので、口縁端部がわずかにヨコナデされるもので、高い脚を持つ。(846)は口径が10cmの小形のもので皿と同様に新しいものほど小形化する傾向である。
- 台付鉢 台付鉢(857)は、口縁部が直線的に外方に延び、高い高台の付くもので底部外面から体部下半にかけてハケメが施され、特に底部外面のものは高台の接合をよくさせるためハケメを深く粗く施す。火を受けたためか器面の残りが非常に悪い。
- 高杯(858)は、口径19.6cmで、口縁部が外側に開き丸味のある浅い底部を持つ杯部に、脚部はヘラケズリによる面取りを行う。杯部底部中央には8mmほどの孔が貫通している。ヘラミガキは施されない。
- 甕(860～862)は、口縁部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚し、内傾する面を持つもので体部の丸いもの(860・862)と長いもの(861)があり、甕A・Cの系譜を引くものがこの時期までたどることが出来る。体部内外面下半はヘラケズリを行い、外面は頸部に近い胴部上半にタテハケが粗く施されのみで他はナデと指押さえのままで粘土紐接合の痕跡を残す。(859)は清郷型の鍋で口縁部と体部を接合させるための指押さえの痕跡が上面凹部に明瞭に残る。口縁部は2個体ほど確認できる。
- 口クロ土器 器(847～848)は、内湾しながら立ち上がる口縁部を持つもので、口径14cmのもの(847)と11.8cmの小形のもの(848)がある。
- 小 皿 小皿(849・850)は、口径9.5cm前後で口縁部が内湾しながら立ち上がる器壁の薄いものの(849)と外反しながら外側に延びる器壁の厚いもの(850)がある。台付小皿(851・852)も同様に薄手と厚手の形態のものがあるが薄手のものは図示していない。
- 黒色土器 SE2000から出土したものの内、実測可能な椀は約10点あり、このうち2点は斎宮跡でも出土例の少ない内外面黒色化のB類である。A類の椀のうち、第2層出土のもの(853～855)は、内面のヘラミガキが粗く、ミガキの幅も太くなつて、粗雑になる。これに対して下層のものは、端部内面に沈線が巡り、高台も断面三角形を呈する小さ



第51図 斎宮第III期第2段階の土器 (SE2000②)

なものでヘラミガキも比較的丁寧である。上方から出土したと思われるものの中には、口縁部内面に沈線の巡らなくなり、外側に延びる高い高台をもち、ヘラミガキが省略されていくものもある。

黒色土器B類の碗(856)は、口縁端部内面に沈線が巡り、口縁部外面と、高台内側の底部外面にも丁寧にヘラミガキを施す。搬入品と思われる。

縁釉陶器

碗(863～868)、段皿(869)、皿(870)、稜皿(871)がある。皿(870)が東濃産のものである他は、いずれも近江産のものと思われる。碗(863・864)は、高台内側の沈線がなくなり、底部内面の見込みの沈線も小さく退化している。近江産でも最終末のものと思われる。

灰釉陶器

碗(872～883)は灰釉がツケガケされるもので、口径14～15cmの中形のもの(873～876・881～883)が多く、他に口径8cmの小形のもの(879・880)や、口径26cmの大形のもの(872)がある。中形と小形のものには輪花が5カ所施されるものも認められる。

皿(884)は口径13.7cm、器高4.1cmと口径に比較して器高の深い皿である。小形の皿(885)は、底い高台を持ち、同じ形態で内面に段の付く段皿(886～888)もある。

広口瓶(891)は、口径36cm、器高62cmの大形の瓶である、口縁部が外反して外側に面を持つ。頸部と体部の境に凸帯が張り付けられる。薄い灰釉が口縁部内外面と胴部内外面にかかる。

このほか図示はしていないが口縁部の欠損した体部のみの長頸瓶が数点ある。いずれも底径12cmほどの中形のものである。

須恵器

甕(889・890)は、口径20cm、器高29cm程度で口縁部が外半し端部がつまみ上げられる。胴はあまり張らず底部は平らである。調整は、(890)は体部内面にナデ調整で仕上げられ、外面に縱方向の粗い平行タタキの痕跡が残る。(889)はタタキの後に体部外面ナデ調整で、内面には同心円のタタキの痕跡が残る。図示はしていないが口径54cm、器高70cm、体部内外面にタタキの痕跡の残る大形の甕もある。

(2) 斎宮第III期第2段階

この時期の資料は増加はしているが、これまでのSK1730・1074に代わる資料は抽出できなかった。灰釉陶器の百代寺窯期に相当する。土師器ではロクロ土師器が増加し、黒色土器は消滅していく。

SK1730

史跡西部の古道沿いで行った第32次調査で検出した1.7m×1.4m、深さ0.45mの梢円形の土坑で、土師器杯・小皿・台付小皿・

種別	形態	破片数		比率
土師器	供膳	1,236	70.07%	
	(ロクロ)	438	24.83%	
	貯蔵	2	0.11%	
	煮沸	88	4.99%	
	その他	0	0.00%	
小計		1,764		97.78%
黒色土器		0		0.00%
須恵器	供膳	1		
	貯蔵	7		
	その他	0		
	小計	8		0.44%
灰釉陶器	供膳	27		
	貯蔵	5		
	その他	0		
	小計	32		1.78%
縁釉陶器	供膳	0		
	その他	0		
	小計	0		0.00%
製塙土器		0		0.00%
土舞		0		0.00%
総計		1,804		100%

第23表 SK1730出土土器構成表

台付皿・高杯・甕、ロクロ製土師器椀・小皿・台付皿、黒色土器椀、灰釉陶器椀等が整理箱で7箱出土した。

土 師 器 口径12~14cmの杯(896~898)と口径8.4~10cmの小皿(905~910)があり、前段階より器高が減少していく。

椀 楓(892~895)は、口径14cm以上のもので器形も丸いものや口縁部が直線的に延びるものなど様々である。

台付皿 台付皿(903)は、口径15cm、丸くて浅い杯部に高い脚が付くもので口縁端部は上面に平らな面を持つ。

台付小皿 台付小皿(904)は口径10cmで、比較的長い脚を持つ。

器台 器台(911)は、上下の口径差の少ないもので、脚柱部はナデと指押さえで仕上げられた粗雑なもので、斎宮跡の中での類例は少ない。

甕 甕(912・913)は、口縁部が内側に肥厚するもので、体部外面のハケメは省略されるもので、体部は丸いものと考えられ、甕Cは消滅したものと思われる。

ロクロ土師器 楓(914~915)は、外上方に直線的に延びる口縁部を持ち、小さな底部が厚く突出し、

椀 口径により8cmの小形のもの(915)と14cmの大形品(914)に分かれる。

小 皿 小皿は、口径9.4cmで平らな底部に短い口縁部が付くもの(920・921)と口径10.2cm前後の底部が少し突出し内窵する短い口縁部を持つもの(918・919)がある。底部が高く突出する小皿は器壁の厚いもの(930~932)と薄いもの(928・929)があり、薄いものは作りが丁寧である。口径9~10cmほどである。

台付小皿 台付小皿(922~927)は、口径7.5~10.5cmで短い脚が付くもので、外見は突出する底部の小皿と同じ形である。器壁の薄いものと厚いものが小皿同様認められる。

台付皿 台付皿(901・902)は、丸い底部を持つもので、長い高台が付く。土師器の台付皿と同様の形態を示す。

黒色土器 黒色土器A類の楓(933)は、口径が10.3cmと小形のもので、内外面のヘラミガキの省略されるものである。

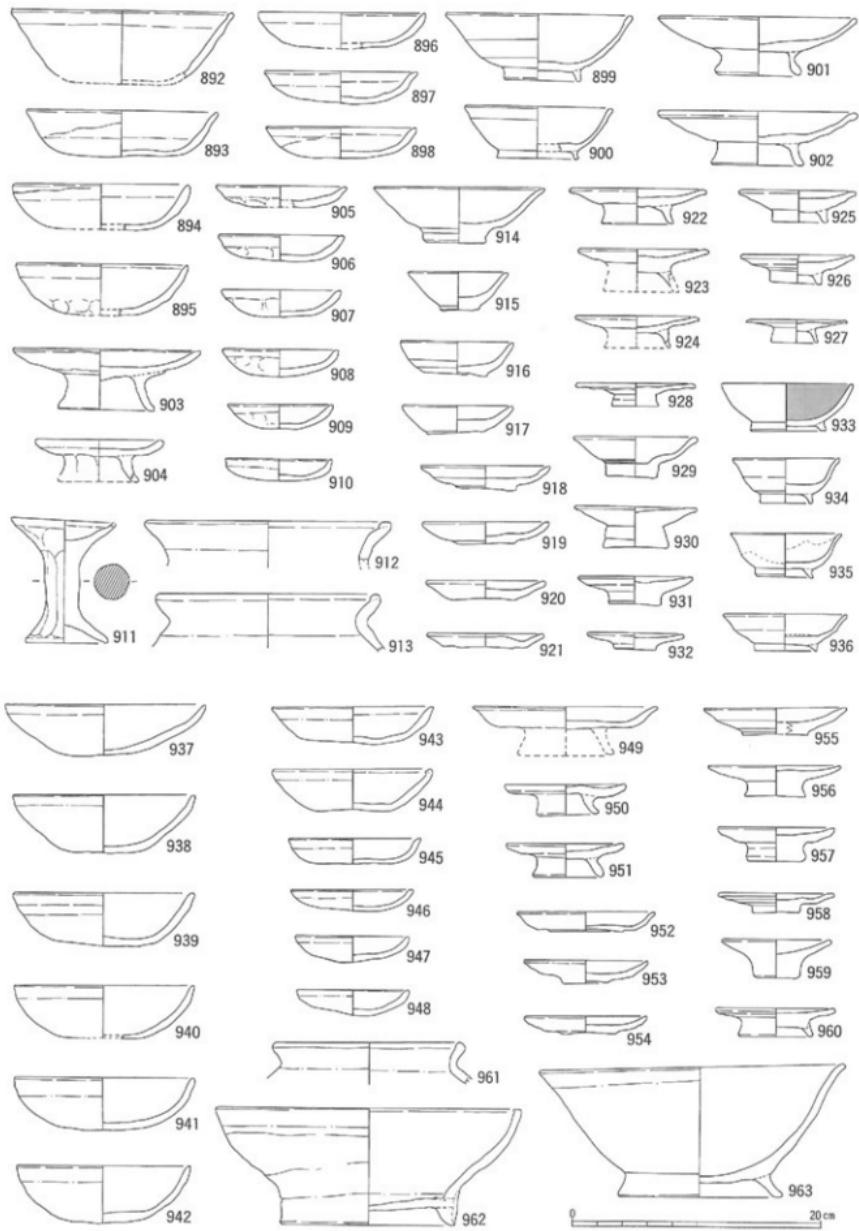
灰釉陶器 楓(934~936)は、口径が小さく、体部の丸い小楓(934・935)と後楓(936)がある。ツケガケで百大寺窯式に相当する。

SK1074 柳原区画で行われた第20次調査で検出した径1.6m×1.2m、深さ0.4mの楕円形の土坑で、土師器椀・小皿・台付小皿・台付皿、ロクロ土師器小皿、須恵器鉢、灰釉陶器椀・皿・瓶が整理箱で5箱出土した。

土 師 器 楓(937~944)には、口径14~16cm、器高

種 別	形 態	破片数	比 率
土 師 器	供 様	55	46.22%
	(ロクロ)	21	17.65%
	貯 藏	41	34.45%
	煮 沸	2	1.68%
須 恵 器	その他	0	0.00%
	小計	119	28.06%
黒 色 土 器		0	0.00%
	供 様	0	
	貯 藏	44	
	その他	0	
	小計	44	10.38%
灰 釉 陶 器	供 様	124	
	貯 藏	137	
	その他	0	
	小計	261	61.56%
緑 釉 陶 器	供 様	0	
	その他	0	
	小計	0	0.00%
襲 塩 土 器		0	0.00%
土 鍋		0	0.00%
總 計		424	100%

第24表 SK1074 出出土器構成表



第52図 斎宮第III期第2段階の土器 (SK1730 : 892~936, SK1074 : 937~963)

椀	4.0~4.5cmと深くて、底部の丸いもので、器壁は厚いもの(937~942)と、口径13cm、器高2.5cmとやや浅いもの(943・944)がある。
小皿	小皿(945~948)は、口縁部外面の端部のみが横ナデされるもので、底部の丸いものは、口径9~10cm前後(945~948)、13cm(945)のものがある。
台付皿	台付皿(949)は、口縁部が短く外反するもので、高台は剝離して形態は不明であるが、SK1730同様に長い脚が付くものと思われる。
台付小皿	台付小皿(950・951)は、平らな受部に1cmほどの長さ高台が付く。口径9.5cm、器高2.4cm程度のものである。台付鉢(963)は、口径23.9cm、器高10.6cmの大形の鉢で、口縁部が外上方に開いて端部が外反し、高台は外側に開く、灰釉陶器を模倣したものである。
鉢	鉢(962)は、平らな底部に内湾しながら立ち上がる体部で、口縁端部のみヨコナデされる。体部外面には粘土紐の接目のある粗雑な作りで、直立する高台を持つ。
甕	甕(961)は、口径14.6cmほどの小形のもので、口縁端部内面の肥厚は弱くなりほとんど認められなくなる。
ロクロ土師器	小皿(952~955)は、口径9.5~9.8cmほどの小形で器高1.3~1.6cmと低いものと、口径10.8cm、器高1.6cmとあまり変化はないが口縁部が内湾しながらわすかに立ち上がるものの(952)がある。また、小皿(955)は口径11cm、器高2.1cmとやや深い。
小皿	口縁部が平らで底部が厚く突出した小皿は、口径が9~10cmと小形のものが多い。器壁の厚手のもの(956・957・959)が多いが、(958)のように器壁の薄いものも見られる。
台付小皿	台付小皿(960)は、突出する底部を持つ小皿に、脚は剝離してはいるが、短い脚の付くものと思われる。
灰釉陶器ほか	灰釉陶器(964~969)は口縁部が外反し、ツケガケされるものである。口径14~15cm、器高6cm前後のもの(964~968)が多いが、口径11.9cm、器高4.0cmの小形のもの(969)には、口縁部に輪花が施される。
椀	鉢(972)は、口径27.1cm、器高12.7cmで、小さく高い高台に、内湾しながら立ち上がる口縁部を持つ。同規模の個体がもう1点あり、片口の鉢になる可能性が高いものである。
鉢	長頸瓶(974)は、口縁端部を欠くが口縁部が強くヨコナデされくぼむ。
広口瓶	広口瓶(975)は、外反しながら延びる口縁部で端部は外側に面を持つ。口縁部内外面と体部外面に灰釉がハケ塗りされる。肩部には縱方向のタタキの痕跡が残り、体部内面はロクロナデで、外面はロクロナデの後縱方向にナデ調製される。
須恵器鉢	須恵器鉢(973)は、口径25.8cm、器高13.4cmで平らな底部で、外上方に延びる体部に口縁部は外反し外面に面をもつものである。他に口径29.9cm、器高20.7cmの大形のものもある。
山茶碗	(970)は外反する口縁部を持ち、角張った高い高台を持つ。丁寧な作りのもので、灰釉陶器に近いものである。(971)は口径16.2cm、器高5.1cmで、灰釉陶器に比べて口径に対して器高の低いものである。

(3) 斎宮第III期第3段階

平安時代末期に位置付けられ、山茶椀の出現する時期である。資料が少なく、今後再検討する必要がある時期の資料である。

SD3052

SK1730の検出された第32次調査の西側で実施した第50次調査で検出した逆L字型に巡る溝である。幅1.4~2.4mで、西側に比べ東側が幅が広くて深さも東側では0.5mある。出土した遺物は、土師器杯・小皿・甕、ロクロ製土師器小皿、山茶椀等が整理箱で7箱ある。

土 師 器
杯

杯(976~981)は、口径13.8~14.5cmで強くヨコナデされた口縁部外面に面をもつもの(976~979)と、口径13cm前後の内弯しながら立ち上がる口縁をもつもの(980~981)がある。

小 皿

小皿(987~992)は、口径8.3~8.9cmと小形化し、器高も浅くて扁平化する。甕(993~994)は口径19cm強の口縁部の肥厚する甕である。摩滅していることから混入の可能性が高い。

ロクロ土師器 小皿(983~986)が4点ある。口径が小さく、山皿の形態に類似するものである。

山 茶 椥

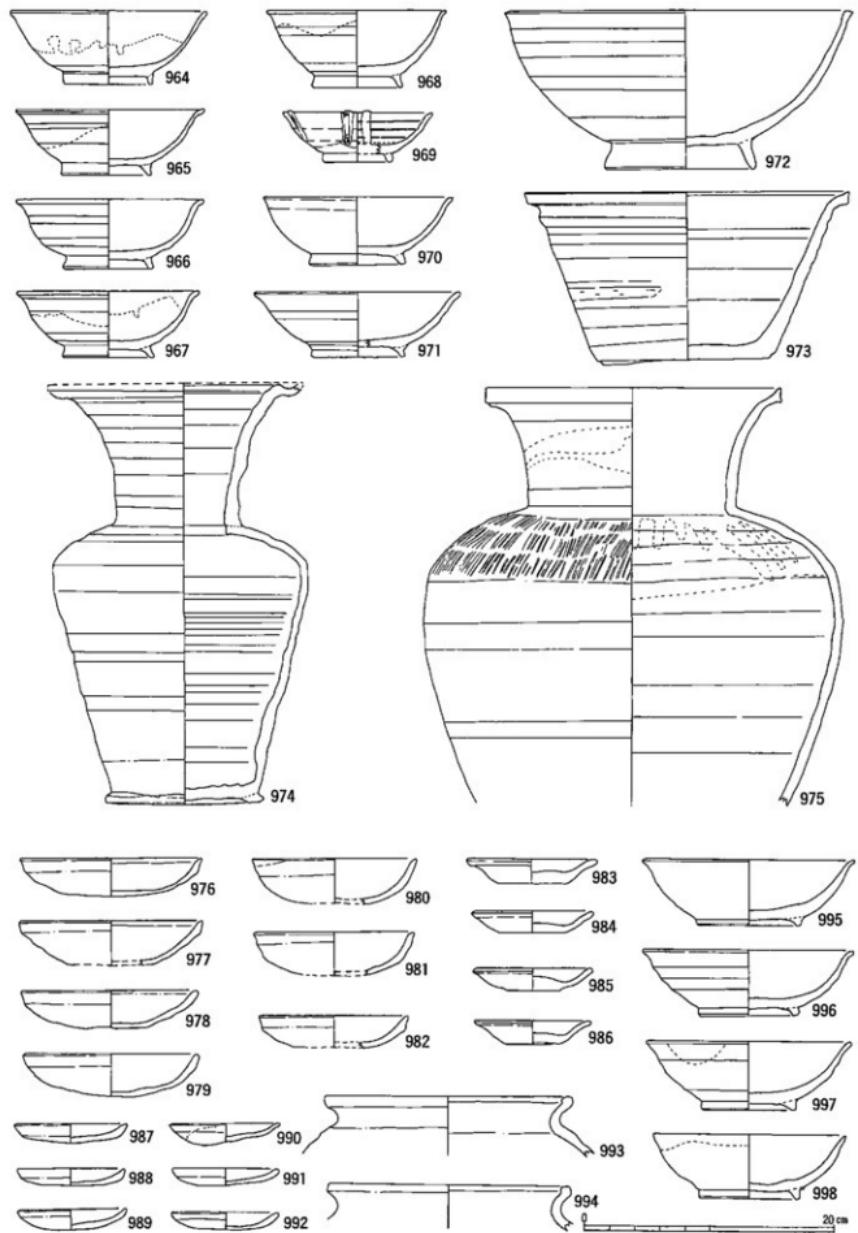
(995~998)は、口径16~17cm、器高6cm未満のもので、口縁部が緩く外反し、低い高台が張り付けられる。

註

- (1) 「斎宮跡の土師器」作製にあたっては、当時の三重県斎宮跡調査事務所の倉田直純を中心に山澤義貴、谷本銳次等が担当した。
三重県斎宮跡調査事務所年報1984『史跡 斎宮跡 発掘調査概報』三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所 1985.3
- (2) 高島忠平「平城宮東三坊大路東側溝出土の灰釉陶器」1971
植崎彰一・斎藤孝正「猿投窯編年の再検討について」『シンポジウム平安時代の土器・陶器』1977
斎藤孝正「猿投窯における灰釉陶器の展開」1978
植崎彰一「猿投窯編年について」1983
前川要「猿投窯における灰釉陶器生産最終の末期の諸様相」1984
斎藤孝正「古墳時代の猿投窯」1989
- (3) 藤澤良祐「瀬戸古窯址群I」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要I』1982
- (4) 『古代の土器 I 都城の土器集成』1992『古代の土器 II 都城の土器集成II』1993『古代の土器 III 都城の土器集成III』1994 古代の土器研究会編
- (5) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告X IV——平城宮第二次大極殿院の調査——』1993
- (6) 上村安生「各地の土師器生産と土師器焼成遺構 東海——三重県を中心として——」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編 新陽社 1997

種 別	形 態	破片数	比 率
土 師 器	供 繩	1,932	52.23%
	(ロクロ)	655	17.71%
	貯 藏	6	0.16%
	煮 沸	1,105	29.87%
	その他の	1	0.03%
小計		3,699	92.29%
黒色土器		1	0.02%
山 茶 椥		1	0.02%
須 恵 器	供 繩	46	
	貯 藏	102	
	その他の	0	
	小計	148	3.69%
灰 釉 陶 器	供 繩	140	
	貯 藏	17	
	その他の	0	
	小計	157	3.92%
綠 釉 陶 器	供 繩	0	
	貯 藏	0	
	その他の	0	
	小計	0	0.00%
製 塩 土 器		1	0.02%
土 鍋		1	0.02%
總 計		4,008	100%

第25表 SD3052出土土器構成表



第53図 斎宮第III期第2段階の土器 (SK1974 : 964~975) 第3段階の土器 (SD3052 : 976~998)

- (7) 編年作業は、1998年度に基準資料の抽出とその適合性について検討会を開催して行った。検討会は、山澤義貴（三重県埋蔵文化財センター次長）、谷本銳次（三重県教育委員会生涯学習課 文化財保護室長）の指導・助言のもとに、倉田直純・梶雄二（文化財保護室）、吉水康夫・田坂仁・山田猛・野原宏司・杉谷政樹・竹内英昭・伊藤裕偉・大川操（三重県埋蔵文化財センター）、藤原寛・駒田利治・新田洋・榎村寛之・上村安生・大川勝宏・角正芳裕（斎宮歴史博物館）、中野敦夫（明和町教育委員会）の諸氏で行った。
- (8) 西弘海「土器様式の成立とその背景」『小林行雄博士古希記念論文集・考古学論考』1974
- (9) 奈良国立文化財研究所 奈良国立文化財研究所学報第31冊『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』1978
- (10) 斎藤孝正「東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録』第3巻東日本編I 1995 雄山閣
- (11) SB1615は、調査区の北西隅で確認され、一部が調査区外へ広がっている。また、他の住居跡等との重複も考えられるが、出土遺物から判断する限り、重複も考慮にいれても大きな時期差はないものと考えられ、一括遺物と把握できる。
- 吉水康夫「第30次調査」『三重県斎宮跡調査事務所年報1980 史跡斎宮跡 発掘調査概報』1981 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所
- (12) 土器の法量は、土器類、須恵器とも第I段階の土器については次のとおりとする。
- | | |
|-----|----------------|
| 大形品 | 口径 19.0~17.0cm |
| 中形品 | 口径 14.0~18.0cm |
| 小形品 | 口径 9.0~12.0cm |
- (13) 鍋・甕の煮沸形態の土器は、北野遺跡等の土器師焼成坑で生産されており、その形態は古墳時代以降の形態を受継いでおり、都城型の煮沸形態とは異なる。器形分類にあたっては、平城宮の基準資料に準拠してその特徴的な形態で第26・27表及び第62・63図で区分した。
- (14) 須恵器杯G、同蓋には造構面直上出土のものがあり、出土状況から一括遺物として取扱うには、問題がないわけではないので参考資料として計測した。
- (15) SK1254、SK1256と重複関係にあるが、遺物の混入は少ないと判断できる。
- (16) 酒人内親王は、母が光仁天皇の皇后となつた井上内親王であり、井上内親王は元正天皇・聖武天皇在位の神亀4年(727)に群行、天平16年(744)に退下している。
- また、酒人内親王は桓武天皇の后となり、その子朝内親王は桓武朝の帝王として延暦4年(785)に群行している。
- (17) 1984編年では、第28次調査のSK1291を基準資料としていたが出土遺物が少ないとあり、本資料を採用した。
- (18) 21枚は腐食が進んでおり、19枚は直径が1.9cmと小振りで、うち4枚が「延喜通宝」と判読できた。
- (19) SX6666の資料は、焼き歪んでいるものが多く、同一個体で口径1cm、器高で0.6cmほど異なるいびつな形状を示すものがあり、遺物を新たに実測し直し、最大値と最小値の中間値をその個体の口径とした。
- (20) SK7030の杯碗は、SX6666同様にいびつなものが多く、掲載したものは新たに実測し直した。
- (21) SE2000の遺物は、これまで概報や講演会資料などで紹介されているが、層位を加味した検討はなされていなかった。検出時に撮影した資料と、完掘はしていないが下部で出土した遺物が同一資料として掲示されてきた。上部と下部では時期幅があるようと思われるが、上部の第2層出土に限定した資料を比較資料とした。そのため、これまで公表されてきた資料でも第2層出土ではないものは今回は省いている。

第五章 光仁・桓武朝の斎宮

—奈良時代後期の位置付けについて—

本章の課題は、奈良時代後期の斎宮における、方格地割造営の契機やその背景について文献面から分析を加えることである。とはいっても、文献上、方格地割、つまり斎宮における画期的な区画の造成が行われたことを明示する史料は全く存在しないので、断片的な史料をもとに類推を重ねていかなければならない。そこで、まず方格地割造営に至る8世紀前半の斎宮の状況について概説的見ることから始めたいと思う。

(なお、引用史料の中で特に出典を記さないものは『続日本紀』による)

1 奈良時代前期の斎宮の概観

大来皇女

一般に、斎王は天武天皇の皇女である大来皇女をもって制度的に確立したと認識されている。『日本書紀』天武紀をもとに考えると、天皇一代に一人であること、伊勢派遣前に泊瀬に止まり、後の野宮に対応する隔離生活を送っていること、崩御に伴い退下していることなど、たしかに大来が最古と考えられる斎王の特質は少なくない。しかし、それは必ずしも制度的完成を示すものではない。例えば7世紀後半の『日本書紀』の伊勢神宮関係記事には以下のような史料が見られる。

- 674年（天武天皇3年）10月 大来皇女、伊勢に向かう
- 675年（天武天皇4年）2月 十市皇女・阿閉皇女、伊勢神宮に参る
- 686年（朱鳥元年）4月 多紀皇女・山背姫王・石川夫人を神宮に遣わす
- 686年（朱鳥元年）11月 大来皇女、帰京する。

大来の伊勢滞在中に、十市・多紀などの皇女が伊勢神宮を訪れているのである。彼女らが斎王であるとは考えられないが、奈良時代以降、伊勢神宮への勅使は男性の皇族や貴族に限られており、斎王以外の天皇の娘が伊勢神宮を訪れる例は全く見られない。つまりこの時期に限られた現象と理解できる。こうした皇女たちを、今、便宜的に「皇女勅使」と名付けておこう。

皇女勅使

皇女勅使の事例は、8世紀になっても引き続き見ることができる。

8世紀初頭の斎宮関連記事のはほとんどは内親王の派遣記事であり、その頻度は他の時代には類例がない。☆は後世に斎王とされている者、△はされていない者である。

- 698（文武天皇2年） 當番皇女を伊勢斎宮に遣わす☆
- 701（大宝元年）2月 泉内親王を伊勢斎宮に遣わす☆
- 706（慶雲3年）閏正月 泉内親王、伊勢神宮に参る
- 706（慶雲3年）8月 田形内親王を伊勢神宮に遣わす☆
- 706（慶雲3年）12月 多紀内親王、伊勢神宮に参る△
- 717（靈龜3年） 久勢女王を伊勢神宮に遣わす☆
- 721（養老5年） 井上王を斎内親王とする☆
- 727（神亀4年）9月 井上内親王を遣わし伊勢神宮に侍らせる

一見して明白なように、大宝元年（701）に「斎宮司を寮に准じ、属官を長上に准」じて後も慶雲3年（706）までは、皇女勅使が見られたり、斎王が短期間で交替するなど、不安定な状態が続いている^①。△は皇女勅使の類例と考えられるほか、△も後世の編纂史料により斎王と認定されたにすぎず、その中に皇女勅使がいた可能性は少くない。ちなみに、斎宮頭自体も次に見るよう、短期間で3人が交替している。

- | | |
|-----------|-------------------|
| 702（大宝2年） | 當麻真人橘を斎宮頭とする |
| 703（大宝3年） | 引田朝臣広目を斎宮頭兼伊勢守とする |
| 705（慶雲2年） | 當麻真人橘を斎宮頭とする |
| 717（靈亀3年） | 猪名真人法麻呂を斎宮頭とする |

このように、斎王と皇女勅使が併存する体制は、8世紀初頭までは続いていた。7世紀後半から8世紀初頭にかけての天皇家と伊勢神宮との結びつきは、斎王制度だけではなく、臨時に伊勢を訪れる皇女勅使の補完によって維持されていたと思われる。大来皇女の段階に始まるとされる斎王「制度」は、機構的には未完成なままでしばらくは機能していた。かつて直木孝次郎氏が指摘されたように^②、持統朝には神宮に奉仕する皇女について記事は見られず、文武天皇2年（698）に麻統・服部氏の氏上・助の制定なども行われていることを考慮すれば^③、伊勢神宮の祭祀体制の整備の中で斎王制度の確立を文武朝に求めることも可能であろう。

さて、706年から717年の間には『続日本紀』には斎宮関係の資料は見られない。ところが『一代要記』には、元明朝（707～715）の斎王として、智努女王・円方女王の名が挙げられている。智努の出自はわからないが、養老7年（723）、神亀元年（724）に叙されているので、実在は間違いない^④。円方は長屋王の娘の円方女王と同一人物と考えられ、『万葉集』^⑤、長屋王家木簡^⑥にもその名が見られることから、こちらも実在は疑いない。つまりこの二人の女王についての後世の記録は、あながちに無視できないのである。しかし、『続日本紀』に記事が見られないこともやはり無視はできないだろう^⑦。とすれば、彼女らは、斎王としてではなく、皇女勅使として伊勢神宮に赴いたのであり、その記録が何らかの形で残っていたため、誤って斎王とされたという考え方もありたつではないだろうか。伊勢に滞在する斎王に比べ、一過性の皇女勅使の方が記録から漏れる可能性はより高いと考えられる。二人の女王は、記録された以降にも皇女勅使は続いている可能性を示唆しているのである。

このように考えると、皇女勅使体制が確実に見られなくなるのは、靈亀3年（717）年の久勢女王の斎王就任と、それには連続する、聖武天皇の娘である井上内親王の斎王就任以降となる。そして斎宮寮の機構が確立し、斎宮の経済的基盤も自立する^⑧、つまり、斎宮が文字通り独り立ちできるようになるのはこの時期のことである。その意味で井上の段階で官位相当と定員が定められたのは画期的なことといえる^⑨。

次に官司としての斎宮の整備過程を検証する。

- | | |
|-------------|--------------------|
| 701（大宝元年）6月 | 大宝律令施行 |
| 701（大宝元年）8月 | 斎宮司を寮に准じ、属官を長上に准す。 |
| 718（養老2年） | 斎宮寮公文にはじめて印を用いる |
| 727（神亀4年）8月 | 斎宮寮官人121人を補す |

	728（神亀5年）	斎宮寮の官人の定数と官位相当を決める
	730（天平2年）	斎宮の年料は以後官物を用いる
機構の確立 は井上の時期	斎宮司は大宝2年に寮に准ずるようになる。しかし、古川淳一氏がすでに指摘されているように ⁽¹⁰⁾ 、斎宮寮は斎王が帰京すると消滅する非常置の官司である。その点で、大来・當耆・泉・久勢の時の「斎宮司」 ⁽¹¹⁾ が一定の規模を保ちつづけていたとさえ断することはできない。むしろ井上就任時に121人とわざわざ明記した補任記事があることから、この時期に著しい拡大があったと見るべきだろう。その意味で注目できるのは、この補任が斎王の群行直前に行われたにもかかわらず、機構の確定と官位相当が翌年にまでずれ込んだ、つまり斎宮到着後になったことである。このすれば、121人の補任が、必ずしも準備周到に行われていなかったことを意味していよう ⁽¹²⁾ 。その意味で直木孝次郎氏が、『類聚三代格』所収神亀5年官符を「官制の拡充よりも職員の待遇を明確にすることに主張があった」とされるのは ⁽¹³⁾ 、傾聽に値するだろう ⁽¹⁴⁾ 。	

2 奈良時代前期の斎宮－発掘調査と関連して

しかしながら、本章の目的から見て注意すべきは、この時期の斎宮跡において、顕著な遺構の変化が見られないことである。

この点については、榎村「道と蔵」すでに指摘しているので、詳しくはくりかえさないが⁽¹⁵⁾、注意すべきは、史跡西部において、伊勢路と見られる、西北から東南に走る官道跡の南北に遺跡が広がることと、その官道を挟んで北に生活区、南に行政・儀礼区という雰囲気で遺構の性格が異なることである。この時期の内院が確定されていない現状では明確に断定はできないが、8世紀前半の、少なくとも12司の区画は、官道によって制限されて造営されていた可能性が高い。この時期の建物の方位が、官道のそれを意識している例が多いこともその傍証となる。この時代の斎宮は、既成地形に規制されて成立していると考えていいだろう。これらの事実は、8世紀前半の斎宮が、既成の統治システムに付属して展開する、いわば非常置の令外官的な性格が強かったことと符合している。それはこれまで見てきた8世紀前半の斎王制の性格ともよく対応するものである。

遺構からは 確認できない 井上段階の 整備	しかし問題は、その傾向が8世紀中盤、すなわち、久勢・井上段階になっても変わらなかっことである。少なくとも古里地区の調査結果から見る限り、720年代の斎宮の機構確立によって、この時期の斎宮の遺構の規模や企画性に顕著な変化が生じたとは考えにくい。しかし一方では、美濃産須恵器の出土傾向から上村安生氏が指摘されたように ⁽¹⁶⁾ 、斎宮経済が官物によって維持されるという体制の変化がこの時期に見られたことは間違いないようだ。これは何を意味しているのだろうか。
--------------------------------	---

ここで留意すべきは、前章で少し見たように、井上斎王の就任が、必ずしも周到な準備の上で成立したわけではなかったことである。井上の斎王の成立については、母が皇族ではない聖武の即位と関連づけて考えるべき政治的な背景がある⁽¹⁷⁾。また、その就任儀礼も、内安殿に井上本人を招いて任命儀式を行い、そのまま北池辺新宮に左右大臣の先導する行列とともにに入る⁽¹⁸⁾など、権威の誇示を意図した他に例を見ない独特のものである。このことは前述した、斎宮寮の急速な整備の問題とも不可分ではな

いと思われる。

つまりはこうした井上を巡る斎宮の改革は、すべて前例のない独自の措置と認識されていた可能性が否定できないのである。また、聖武の後の皇太子には安倍（孝謙）が挙げられる可能性もあり、その際に斎王制が続くかどうかという問題もあったと考えられる。つまり、斎王制度は井上段階で整備されたとはいものの、それが持続していくとは必ずしも考えられていなかった不安定な体制を採っていたという想定がなりたつのである。

3 斎宮諸制度の整備と奈良時代中期の斎宮

次に、井上内親王前後の斎宮、特に斎宮寮以外の組織について考えるにかかりとして『皇太神宮儀式帳』と『正倉院文書』の「正殿等飾金物注文」⁽¹⁹⁾を取り上げよう。

『儀式帳』では、斎王は伊勢神宮の三節祭において、玉串御門の内側で拝礼した後、大物忌を介して瑞垣御門の西頭に太玉串を立てることを主たる儀礼とする。天平宝字6年（762）頃の成立と見られる『金物注文』には、「美豆垣御門」「間垣御門」「玉櫛御門」「外御門」が見られており、『儀式帳』の内院形態がほぼ定まっていることがうかがえる。

とすれば、斎王の太玉串を立てる儀礼はこのころには成立しており、また、『金物注文』に「外御門」と記される玉垣御門と玉串御門の間の唯一の建物である斎王候殿もこのころにはあったと見るのが妥当であろう。このように考えると、『儀式帳』に見られる斎王の儀礼の大筋は、8世紀中期には大まかには定まっていたことになるだろう。

しかし、こうした儀礼が760年頃に成立したとは単純に言い切れない。田阪仁氏が論じられたように『続日本紀』天平勝宝5年2月甲午条の「斎宮大神司」の存在が否定されるとすると⁽²⁰⁾、孝謙朝の斎宮についての確定な同時代史料は見られないことになり⁽²¹⁾、少なくとも積極的な評価は難しくなる。また、淳仁朝の斎宮の動向を見ると、そうした儀礼整備が行なえるような状態ではないように思われるからである。

758（天平宝字2年）斎王の事を皇太子（淳仁天皇）即位に関連づけて告す

758（天平宝字2年）淳仁天皇即位

759（天平宝字3年）丈部大麻呂を斎宮頭とする

761（天平宝字5年）栗田朝臣足人を斎宮長官とする

761（天平宝字5年）斎内親王、伊勢に向かうので大祓

7C3（天平宝字7年）忌部宿祢あざ麻呂を斎宮頭とする

764（天平宝字8年）称徳天皇重祚

このように、淳仁朝の斎宮は、長官が短期間に三人も交替する。このうち丈部大麻呂が次に見られるのは、延暦2年2月23日に本位に復されるという記事であり、斎宮頭を罷免されていた可能性がある。栗田足人はこの記事以外に見られない。忌部宿祢あざ麻呂は神祇官畠を歩いてきた官人で、二度神宮奉幣使になり、伊勢神宮とも関係がある。また、神宮への天皇即位の報告記録はこの時が最初であり、直木氏はこの時に天皇と伊勢神宮の関係がさらに強化された可能性を指摘している⁽²²⁾。斎王の事を特

に告していることやあざ麻呂の人事も、こうした動きと関係したものと理解できるだろう。しかしその時の斎王はあざ麻呂着任の後わずか1年2ヶ月後に、恵美押勝の乱に伴う淳仁退位により帰京したと考えられるので、さほどの改革が行われたとは思にくい。とすれば、この頃に斎王の儀礼が定まったと見るよりも、それ以前にすでに成立していたと考える方が妥当であろう。

儀式を支える
女官体制の
骨子も八世紀
中葉には完成

斎王の儀礼から推測できる重要な問題として、斎王の動きが定まっていたのなら、その補佐をする内侍（命婦とも、筆頭女官）や女孺の役割もまた、奈良時代に確実にさかのぼるだろうことである。『皇太神宮儀式帳』によれば、神宮には「斎王候殿」とともに「女孺候殿」があり、斎王が太玉串を神宮の大宮司から受け取り、内玉垣南御門の西の頭に立てる時は、内侍が補佐することになっていた。神宮における平面プランが確定していたのなら、斎宮における女官体制も、奈良時代中期にはその骨子が固まっていたものと考えられる⁽²²⁾。現段階では、斎宮寮制の整備とほぼ同時期に女官の制度化も進んでいたものと見ておきたい。

4 称徳朝の斎宮と伊勢神宮

称徳朝の斎宮

淳仁朝以来不安定な状況を呈していた斎宮は、続く称徳朝になると、より一層その影が薄くなる。『斎宮記』や、それに先行する『二所太神宮例文』⁽²³⁾にもこの期間の斎王の存在を示す記述はなく、また『続日本紀』を見ても、斎宮不在を暗示する史料がある。それは、神護景雲元年（767）8月16日の、神護景雲改元につながる瑞雲記事である。この記事は、等由氣乃宮の上に瑞雲が現れ、神護景雲への改元の契機となつたというものだが、この宣命で最も注意すべきは、末尾に見られる贈位記事の中で「大神宮の祢宜大物忌内人に二級、御巫以下に一級、神郡二郡司に一級」の加階措置が行なわれているのに対し、斎宮寮と太神宮司に対して全く論及が行なわれていないことである。神宮で起こったのだから斎宮は関係ないのは当然のようだが、この時には諸国の祝部や六位以下や左右京男女の六十以上ほかに一級、孝子順孫ほかには二級の増位が、五位以上には「御手物」が与えられ、天下に田租の半免ほかの措置が採られるほどに手厚く配慮がなされていることを思えば、やはり不自然と思わざるを得ない。事実、斎宮の上空に別の瑞雲が現れてやはり改元を行ったとする天応元年（781）正月元日の詔では、斎宮官人に加えて太神宮司・祢宜・大物忌・内人・多気度会郡司に二級の増位が行なわれているのである。両者は極めて類似した、恐らく政治的に創出された瑞祥であろうから、その相違は、称徳朝と光仁朝の政治的背景の相違を示唆していると思われる。神護景雲元年には、斎宮寮と太神宮司は、除外されたのか、あるいははじめから無かったか、としか考えようがないのである。

斎宮と太神宮
司の不在

斎宮はともかく、太神宮司がないのは考えにくいくらいに思えるが、この時期には、神宮の禰宜以下に季禄を賜うという、より官的な掌握が行われてもいる⁽²⁴⁾。神宮を管轄する事務処理体制にも一時的に変化があった可能性はやはり否定できない。

その意味で興味深いのは、宣命の文言である。前者では、美雲は「三宝も諸天も天地の神たちも共に示現賜へる奇く貴き大瑞の雲」、つまり神仏の一体となった瑞祥と強調されている。称徳政権は、太神宮司や斎宮を介さず、伊勢神宮への仏教主導型の

直接支配体制を志向していたのではないかとも思える。一方後者では、「神宮は国家の鎮めにて、天よりこれに応ず。」と、神宮のみの瑞祥としているのである。称徳朝の仏教的色彩を払拭しようとした光仁朝の政策の変化と理解できよう。いわば天応改元は、神護景雲改元のスタンスを踏襲しつつも、前政権との相違を明確にするために行われたと考えられるのである。

このように当時の政治状況を理解すると、称徳朝の伊勢神宮は、仏教優位の支配下に置かれ、法体の女帝が三宝の加護により自ら祭る、という形を採ったために、斎宮も無意味化していたのではないかと考えられる。井上内親王段階で確立したと見えた斎王制度は、称徳朝には断絶していたのである。

官司名墨書 土器の問題

さて最後に、8世紀中葉以前の斎宮の不安定性の傍証として、墨書き土器の問題を取り上げたい。斎宮跡で確認されている官司名墨書き土器はほとんどが8世紀末期以降、つまり方格地割区画の形成以降のもので、史跡西方の奈良時代遺構からは全く確認されていない。奈良時代の墨書き土器は出土件数も少なく、また方格地割内の発掘調査は最も進んでいるので、単純には言い切れないが、奈良時代における官司の未整備傾向と無関係ではないだろう⁽²⁶⁾。

5 光仁朝の斎宮の史的意義

以上のような称徳朝の特殊な伊勢神宮支配の終焉と新しいスタートに光仁朝斎宮が位置づけられる。この時期において早くから注目されていたのは、光仁天皇の皇女酒人内親王の斎王就任と、宝亀2年(771)11月18日の「氣太王が斎宮造営のために伊勢国に派遣された」という記事である。この二つの史実と、方格地割の造成の関係を主軸に、この時期の斎宮を取り巻く諸条件を考えてみたい。

酒人内親王の卜定の背景を考える時、彼女が井上皇后を母にしていることの意義は大きい。井上は聖武天皇の娘であり、元斎王でもあった。孝謙・称徳期の伊勢神宮支配を揚棄するのにもっとも具体的な方法は、まさ聖武時代の体制の復元であろう。また、光仁即位が聖武の娘婿で、他戸親王の成長までの中継ぎとしての性格によるものであるとすれば⁽²⁷⁾、聖武の孫となる井上所生の皇女の重視は当然のことになる。このように、光仁朝の斎王制は、井上内親王の時代を意識して整備されたものと考えられる。実際、それまでの斎王制の経緯を振り返ってみれば、制度的にも血統的にも、理想的な時代として範となるの斎王は井上しかいない。大来も血統的には申し分ないが、制度としてはきわめて不備な時代である。

また、酒人と井上には他にも類似点がある。井上は元正朝に斎王となり、天皇が元正から聖武に代わっても斎王となりつづけた。一方酒人は、母の井上と弟の他戸が罪に落とされても斎王を退くことはなかった。井上の場合、聖武即位と密接に関連した選出であったと考えられるが、酒人の場合も同様の事情があったと考えられる。3年という周到な準備期間を置いて再興した斎宮にまず入るべき斎王は、聖武の孫で、聖武朝の斎内親王であった井上の血を引く酒人以外にはいなかったのである⁽²⁸⁾。

井上斎王 時代の再現 としての 酒人斎王

このように、酒人内親王は光仁の時代に斎王制度を再び聖武の時代の形に戻すべく選ばれた斎王だったが、その象徴とも言えるのが、先に触れた天応元年の「美雲」記

事である。この時期にはすでに酒人は帰京していたと考えられるが、斎宮・大神宮司・神宮が一体となった新しい神祇支配体制が順調に動いていることを強調しようという意思がうかがえる。「天応」の改元とともに、神護景雲の瑞雲を否定する意味でも、この美雲は必要だったのであろう。

鍛冶山西地区 第Ⅰ期の建物

以上のような背景をもとに考えれば、鍛冶山西区画第Ⅰ期の建物群、つまり最初期の方格地割の中心部について、何がしか理解できることがあるだろうか⁽²⁹⁾。

まず、その立地は8世紀前半の櫛田川沿いの台地西端から、より伊勢よりの台地東部に移っていることが注目される。台地西端部分は塚山、坂本古墳群など多くの古墳群が南北に連なる地域であり、現状で見る限り、斎宮関係の遺構も南北に分布しているように思われる。一方、東部では8世紀前半に遡る遺構は散発的には見られるものの、明確な官衙遺構や集落跡の遺構は確認されていない⁽³⁰⁾。つまりより在地の事情を考慮しない占地が可能だったと考えられる。その意味で、8世紀前半に比べ、企画性のある開発を想定していた推測できる。鍛冶山西地区の占地は、周囲に恒久的な官衙組織が入るべき地割を配することを前提にしている可能性がある。

次に、鍛冶山西区画の第Ⅰ期遺構の独自の特色として、東西に長い大型区画であること、そこには二重堀と倉と大型建物を伴うことがあげられる。一つの区画を複数の小区画に区切るという特性は、その区画内に複数の性格を持つブロックがあったことをうかがわせる。さらに内部区画外に大型建物SB7950が存在することは、外部区画にも重要な役割があったことを推察させる。また、総柱の倉という収納施設を伴うことは、この区画がある程度の自己完結性を持っていたことを示唆している。展示室では隣接する牛葉東区画の堀を持つブロックとの並存を想定し、この建物を女官の詰所、出居殿と推測したが、この区画が、牛葉東地区より古く、方格地割内で最初に成立した堀を持つ区画だとすれば、例えば生活用と儀式用の二つの正殿が置かれていた可能性もある。このように、第Ⅰ期の建物群は第Ⅱ期以降に比べても、独自の性格がうかがえる。

自己完結性 のある区画

しかし一方で、方格地割全体に共通する性格もすでに見られる。それは官道=伊勢路を分断する特異性である⁽³¹⁾。鍛冶山西区画の長方形プランが最初期のものであるとすれば、その形成時においてすでに伊勢路を分断していることになる。もしも鍛冶山西区画形成時に方格地割が同時に造成されていなかったとしても、斎宮方格地割の重要な特性である官道の付け替えは、鍛冶山西区画の形成時にすでに行われていたのである。

とはいって、二重堀を持つ鍛冶山西区画の長方形区画の設計思想は、後の時代のそれとは大きく異なっていた。そのプランは、特定の区画のみが突出するもので、むしろ多賀城の方格地割に見られるような⁽³²⁾、既設の中心区画の周辺に地割ができる形に近いのである。

内院区画の後 周辺区画が 造 成 ?

仮にこの区画が光仁朝の斎宮の内院だとすれば、先にふれた氣太王の造営から酒人内親王の群行までが3年という長期間にわたっていたことがやはり注意される。その造成過程については全く想像の域を出ないのだが、あるいは、井上内親王段階の斎宮

を意識した内院区画が先行して造られ、少し時期を遅らせてその周囲に、ある程度の企画性を持って斎宮寮の区画が造られた、と考えることもできる。

いずれにしても、鎌治山西区画第I期の時期の斎宮は、特に整備された内院区画があり、その周囲に付属する形で斎宮寮の区画がある程度整備された、というようなものではないかと思われる。とすれば、それは整然とした区画の完成というよりも、上内親王の段階で定められた、斎宮寮と主神司を含む13司という斎宮の規模に対応する区画を、初めて定めたという点で評価できると考えられる。

このように、文献による斎王制度の変遷史を踏まえて考えれば、鎌治山西区画の第I期の区画は、神亀5年(728)に定められた斎宮寮という組織が、安定した区画として現れたものであると理解することができる。それは、斎宮の制度化が軌道に乗ったのが、ようやく光仁朝になってからだったことを意味している。すなわち、8世紀前半の斎宮の不安定性と、斎王制の敵密な意味での制度化が、この時期まで下ることを意味しているのである。

6 桓武朝の斎宮の特質と平安時代への展開

酒人内親王の帰京の後、淨庭女王を経て、桓武天皇の即位により、彼と酒人内親王の娘である朝原内親王が斎王に就任した。三代つづく斎王の誕生である。そして、延暦4年(785)4月23日には「紀作良が造斎宮長官となった」という記事が見られる。

方格地割の第I期を酒人時代の斎宮と考え、そこには奈良時代的な性格が強く残されていると考えると、朝原内親王の時代の斎王制には微妙な変化は見られなかったか。

延暦4年(785)の造営は長岡京のそれと軌を一にしている。長岡京の造営は、大和から山城への遷都であり、それは貴族層の大和盆地からの分離につながった。そして平安遷都を経てその傾向はさらに明確になり、天皇や貴族層の都市住民化が進むことになると指摘されている⁽³³⁾。

このような時代に斎宮では、鎌治山西区画の長方形プランが、その南北区画と同一の東西130m、南北120mの規模に変更される。内院地区の大きさは周辺区画と変わらなくなり、あたかも区画の中に埋没するかのようになるのである。斎王はこの区画、方格地割の奥深くに暮らし、外部との隔離はさらに進んだものと考えられる。内院という言葉が、中院・外院に先行して『延喜斎宮式』に現れることも注意されるところである⁽³⁴⁾。それは京内から宮内、さらに内裏内へと行動範囲を収縮していく当時の天皇とも対応する変化だと考えられる⁽³⁵⁾。そしてこの区画は9世紀の斎宮の度会離宮への一時移転まで踏襲されており、さらに第119次調査では、鎌治山西区画において、逆L字形に並ぶ大型建物二棟が数次にわたってほぼ同じ位置で建て替えられていることが確認されている。内部構造にいたるまで踏襲された部分も見られるのである。この期間は、斎宮のプランが安定継承していく時期、逆の見方をすれば、斎宮の維持が、事務的に進められるようになる時期なのではないかと考えられる。桓武朝の区画の改変は、氣太王段階の方格地割の基礎プランを踏まえつつ、各区画の成立の経緯や、前後関係などを一旦白紙に戻し、全区画を極めて統一的なプランニングのもとに整形するというものだったのでないだろうか。

このような斎宮区画の「規範化」は、8世紀末以降に顕著になる、斎王の没個性化現象と不思議に軌を一にする。朝原内親王をもって斎王の「直系継承」は途絶え、それ以降、9世紀前半の斎王には、内親王が多いにもかかわらず、強い個性のうかがえる人物が極めて少なくなる。一時期度会郡に移っていたとはいえ、方格地割が安定して維持されていた9世紀前半には、斎王は天皇の娘から、という形で、いわば機械的に継承されていくのである。その意味で、斎王制度の制度としての最終的確立は、方格地割の確立と軌を一にしているとも考えられるのである。

7 まとめにかえて

以上のように、方格地割の造営に代表される8世紀後半の斎宮の変革は、斎宮寮の機構が8世紀前半に規定されていたにもかかわらず、その区画が約50年の懸隔を置いてようやく形成されたという事実を示していると考えられる。ゆえに方格地割が造成されても、斎宮寮の規模拡大など、制度面での大きな変化は見られなかつたのである。このことは斎宮という組織が、8世紀においては、例えば天皇の個性やその時点の政治的状況によって変動しうる、いまだ流動性を持ったものだったことをうかがわせる。その意味で、方格地割の形成、それも畿治山区画の突出性が失われた時点が、厳密な意味での斎宮の制度化の完成期と見ることができるのではないだろうか。

なお、8世紀末の官衙区画の性格変化は、斎宮に限られたものではない。例えば国府城にしても、近年では計画的なものは8世紀後半以降に造営されたという傾向が指摘されている⁽⁶⁾。その意味で、斎宮の区画造成もまた、律令国家の大きな方針転換の中に位置付けられるものだとも言えるのである。

注

- (1) さらには付加されるならば、斎王の代々に數えられている皇女や内親王のすべてが大来皇女と同じ資格で伊勢に赴いたという明確な証拠はない。この時期には、「斎王」という言葉すら確認されていないのである。西洋子「斎宮寮について—奈良時代を中心として—」（閑見先生還暦記念会編『日本古代史研究』1980 吉川弘文館）、樺村寛之「『斎王』という称号の成立について」（『ヒストリア』151号 1996）参照。
- (2) 直木孝次郎「奈良時代の伊勢神宮」（『日本古代の氏族と天皇』所収 1964 塗書房）
- (3) 『続日本紀』文武天皇二年九月朔条
- (4) 『続日本紀』養老七年正月十日条、神龜元年二月六日条
- (5) 『万葉集』卷二十 4477番「智努女王の卒りし後、円方女王の悲傷みて作れる歌一首」
- (6) 奈良國立文化財研究所編『平城京発掘調査出土木簡概報』21C「圓方若翁」「員方若翁」が、25に「員方王子」「圓方若翁」が、28に「圓方若翁」が見られる。なお、長屋王関係ではないが、『平城京発掘調査出土木簡概報』4に「円方女王」が、同研究所編『平城京木簡』4にも「円方女王」が各一例ある。なお、長屋王家木簡には「智努若翁」も見られる（『平城京発掘調査出土木簡概報』23・28）。寺崎保広氏は「智努女王について」（『日本歴史』第633号所収 2001 吉川弘文館）において、『続日本紀』に見られる智努と長屋王木簡の智努は別人で、後者は円方の姓だった可能性を指摘している。
- (7) 山中智恵子氏は『斎宮志』（1984 大和書房）で、和銅五年（712）の年記のある『万葉集』卷一、81番の長田王の歌の詞書に「長田王を伊勢の斎宮に遣し時」とあることから、斎王がいた可能性を指摘しているが、山中氏自身も指摘しているように、この斎宮は伊勢神宮を指している可能性もあり、傍証とするには躊躇される。
- (8) 早川庄八「斎宮寮の成立とその財政」（『名古屋大学文学部研究論集』116 史学39所収 1993）
- (9) いうまでもなくそれは直木前掲論文の指摘するように、聖武朝における伊勢神宮の国家神としての確立と密接に関係すると考えられる。
- (10) 古川淳一「斎宮寮に関する基礎的研究」（笠山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集』下巻所収 吉川弘文館 1993）

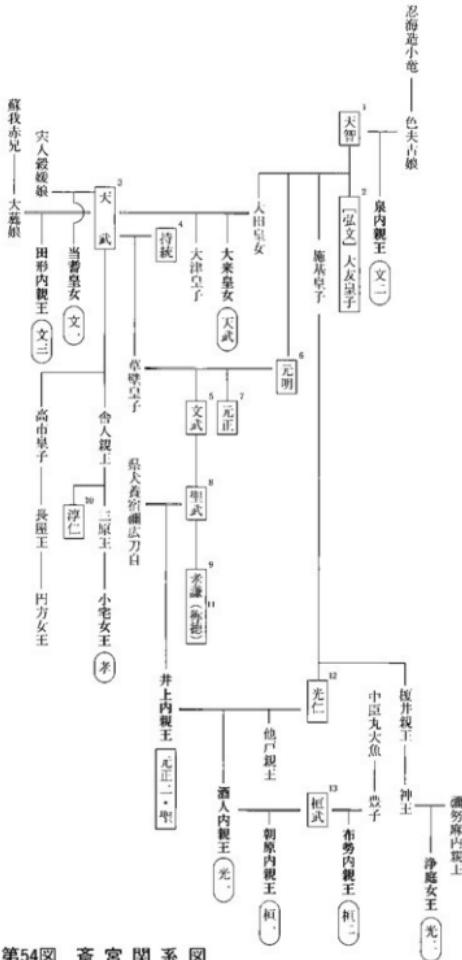
- (11) 早川前掲論文は、「斎宮官」であった可能性を指摘している。
- (12) 古川前掲論文は神龜四年を斎宮寮の規模拡大の年と見る、なお、私は、この121人という数について、井上内親王の家産機構の構成員、つまり内親王の宮の職員をそのまま官人とした可能性があると考えている。官位相当も職務もなく暫定的に捕任したとは考えにくいからである。
- (13) 直木孝次郎「斎宮寮成立の時期について」（井上薰教授退官記念会編『日本古代の国家と宗教下巻』所収 吉川弘文館 1980）
- (14) 神龜五年官符については、斎宮研究では直木孝次郎〔注(2)論文および『伊勢神宮』（三一書房 1960）〕・田中卓氏〔『神宮の創祀と発展』1959〕の論争にはじまり、熊田亮介「斎宮寮の成立をめぐって」（『東北大大学文化』41-1・2 所収 1977）や、直木注(13)論文による反論、前掲の西氏・古川氏の研究など、多くの業績がある。その詳述は今回のテーマとは外れるので、今回は、神龜五年段階で斎宮の官制が最終的に確立したともいいがたいことを指摘するに止めておきたい。
- (15) 櫻村「道と蔵 文獻より見た斎宮の構造についての観察二」（『斎宮歴史博物館研究紀要』6 所収 1997）
- (16) 上村安生「考古資料から見た『統日本紀』天平2年7月癸亥条について」（『斎宮歴史博物館研究紀要』9所収 2000）
- (17) 櫻村「斎王制と天皇制―特に血縁関係を中心に―」（『律令天皇制祭祀の研究』所収 1996 塙書房）
- (18) 『政事要略』所引『官曹事類』養老五年九月十一日条
- (19) この史料については福山敏男「神宮の建築とその歴史」（『神社建築の研究』所収 1984年 初出 1974）参照。
- (20) 田阪仁「斎宮大神司」をめぐる観察（『斎宮歴史博物館研究紀要』1所収 1992）
- (21) 『一代要記』は孝謙朝の斎王を小宅女王とする。山中智恵子『斎宮志』や角田文衛「恬子内親王」（『紫式部とその時代』角川書店 1996）は、『統日本紀』宝龜二年十月十五日に見られる、菅生王に斎されて内親王の属籍を削られた小室内親王と同一人物とするが、確証はない。関口裕子「日本古代における『姦』について」（『日本古代婚姻史の研究』所収 上巣書房 1993）は「（斎王の姦）はそう解する可能性があるという以上のものではない」とする。また、安田政彦「小室内親王について」（『統日本紀研究会編『統日本紀の時代』所収 1994）は全くの別人とする。
- (22) 直木前掲注(2)論文。
- (23) なお、田中卓氏は『神宮の式制と整備』第二章「斎宮官司制の発展」で、斎宮の大祓整備が神宮の遷宮の直前に行われる傾向を指摘している。非常に興味深い指摘である。遷宮儀式における斎王の儀礼は、神宮三節祭における斎王の儀礼とほぼ同じであり、あるいは斎王の儀礼自体が遷宮の開始される7世紀後半にさかのぼる可能性も認められるだろう。とすれば、内侍などの女官についても同様のことを考えられる。
- (24) ともに『群書類从』神祇部一所収
- (25) 『統日本紀』神護景雲二年四月辛丑条。なお、熊谷保孝「道鏡政権下の神祇」（『律令国家と神祇』所収 1982）参照。
- (26) なお、斎宮跡出土の奈良時代と推定される土器に記された官司名墨書きには、「菜」（49次）、「水司鶴三（範書き）」（82次）、酒（69次）があり、いずれも方格地割内の出土である。斎宮歴史博物館企画展示図録『眠りから覚めた文字たち』（斎宮歴史博物館 1997）参照
- (27) 早川庄八「律令国家・王朝国家における天皇」（『天皇と律令国家』第五章 講談社文庫 1998）
- (28) 櫻村前掲注(17)論文
- (29) いうまでもなく、以下の方格地割理解は多くの先行研究の成果の上に立っているが、ここでは一々を注せず、最も恩恵を受けたものを挙げるにとどめる。田阪仁・泉雄二「国史跡斎宮跡調査の最新成果から―史跡東部の区画遺構プランニングをめぐって―」（『古代文化』43-4 1991）、大川勝宏「光仁・桓武朝の斎宮」（『古代文化』49-11 1997）、田阪仁「宝龜二年の造斎宮使の意義について」（『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』8所収 1999）
- (30) 方格地割内では、第45、57、62、69、88次調査で奈良時代の掘立柱建物は確認されているが、明確な配置の規則性などは見られない。
- (31) 杉谷政衛「古代官道と斎宮跡」（『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』6所収 1997）
- (32) 櫻村「多賀城から照射した斎宮」（斎宮歴史博物館企画展図録『みちのくのみやび』1998）
- (33) 仁藤敦史「古代国家における都城と行幸―「動く王」から「動かない王」への変質―」（『古代王権と都城』所収 吉川弘文館 1998）
- (34) 「新任弁官抄」に「内院、中院、外院」とあることから、内院という用語は、外院あるいは中院との対話のように思われるが、「延喜斎宮式」には内院しか見られず、また内院は斎宮寮がまだ設置されていない野宮にもあったことが確認されているので、この理解が正しくないことがわかる。『斎宮式』段階では内院に対応するのはあくまで「諸司雜會」である。その意味で内院とは、あくまで官衙区画の中の「うち=斎王のプライベート区画」に属する部分という意味で使われ始めた言葉と見ることができ

るだろう。とすれば、この用語の成立は、斎王居住区画が宮内省区画の中に位置付けられた頃と見ることができる。なお、「延喜式」段階で、中・外院の区別が無かった可能性については、『日本史料延喜式上』のられるものである。渡辺寛「延喜式における仏事忌避条文の成立」（『史料』80号所収 皇學館大學史料編纂所 1985）、和田翠「神宮の忌詞」（『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』中所収 塗書房 1995）参照。

(36) 阿部義平「遺跡からみた国府一方形方格の古代地方都市は存在したかー」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第20集所収 国立歴史民俗博物館 1989）ほか

斎王関係系図（飛鳥・奈良時代）

斎王関係系図（飛鳥・奈良時代）



□は天皇（数字は天皇の即位順を示す）

斎王は、特に太明で表記し、○内の文字により対応する天皇を示している。
また、一人の天皇に複数の斎王がいる場合は、漢数字を加え就任順を示した。

元正天皇期の一人目の斎王久勢女王、聖武天皇期の二人目の斎王興子女、淳仁天皇期の斎王山於女王は、天皇との関係が不明なため系図に提出していない。

元明天皇期は、『一代要記』に田方・多紀内親王、智勞・円方女王が各一度参入したとみえるが、斎王設置の有無は不詳である。

第54図 斎宮関係系図

第六章 内院地区の遺構変遷

1はじめに

史跡斎宮跡の約30年の発掘調査の中で、これまで第三章などでみてきたとおり、内院推定地区、方格地割内の牛葉東区画及び鍛冶山西区画は広大な史跡の中でも最も解明が進められてきた地区であるとともに、奈良時代から長岡京の時代を経て平安時代へ移る古代国家の大きな転換期に、この内院地区もまた成立・変革期を迎えている。

また第五章でも述べられているように、この転換期にあたる光仁・桓武朝には中央国家の体制のみならず、斎王制度にとても大きな変化の時期であることが窺われる。

ここでは第三章をもとに、牛葉東区画・鍛冶山西区画の主要遺構の変遷を通して、斎宮の変革と内院地区的変遷について現時点での総括と展望としたい。なお、これにあたっては斎宮跡土器編年による時期区分をもとに両区画の遺構変遷を、方格地割内における内院地区第1～6期の画期を設定して記述する。

また、これらと比較するため、第1期以前の様相についても概述する。

2 内院地区第1期以前（～斎宮I-3期）の遺構

内院に先行する遺構

この段階では牛葉東・鍛冶山西区画周辺でも斎宮編年I-3期前後の遺構も散見されるものの、構造的な遺構はほとんど認められず、後代のような斎宮中枢部的な様相は窺われない。特に斎宮編年I-1期には成立していた可能性がある伊勢道と推定される幅約9mの古道がこの地域を北西から南東方向におよそE15°Sの方向に延びており、I-3期頃まではこの地域の土地利用に影響を与えていたものとみられる。ただしこの道路側溝の埋没は早く、斎宮I-2期には埋没している例が史跡内の発掘調査で確認されている。⁽¹⁾

この牛葉東・鍛冶山西区画ではその他に当該時期の遺構は明らかではないが、後代鍛冶山中区画とされる地区ではI-3期に比定される遺構が多数検出されており、特に倉庫と推定されるSB2780やSB2810などの大型の総柱建物や伊勢道に重複して掘削される大型の須恵器貯蔵具を多量に含むSK6210やSK6220などの廃棄土坑が中心になる点は、現段階では鍛冶山中区画の部分などで調査がさらに進展するのを待たねばならないものの、鍛冶山西区画が後に大型掘立柱塀に囲まれた方格地割の中枢区画に整備される基盤が想定され注目される。

3 内院地区第1期（斎宮I-4期）の構造

鍛冶山西区画

奈良時代のI-3期までの土坑等に重複して大規模な掘立柱塀による区画施設が成立する段階である。区画南辺については調査例が無く現段階では知り得ないが、北辺掘立柱塀は東西約120m(40間)のSA6760の東端から南へSA6770が延び、SA6760からさらに東へ(26間)分SA2800が続く構造となり、東西66間の規模を持つ。そのため方格地割を構成する鍛冶山西区画の区画東辺道路は少なくともこの段階では成立して

大規模な区画

内郭による 二重構造

いなかったと想定される。

また、鍛冶山西区画が他区画と大きく異なり掘立柱塀による内郭構造をもつ事が判明しているが、これは北辺のSA2705で東西20間となり、外郭北辺のSA6760（40間）のちょうど半分の長さになる。この両者の規格に強い関連性が窺われるものの、しかしながら両者の東西中心軸は一致しておらず、外郭掘立柱塀西辺との間隔は（8間）、東辺とは（12間）と内郭は西に寄った構造になる。

内郭内では、北西隅に総柱建物SB7375と、東西に並立する5間×2間のSB7385・8050があり、この2棟から11間分南にSB6840・6841・6842の3棟の側柱建物と推定される大型掘立柱建物が見つかっている。近鉄線以南の調査例は依然少ないが、内郭の中心的建物はこの間に想定するのが現状では妥当と考えられる。

大型建物と 井 戸

内郭の外側では区画内最大の6間×4間で南北両面庇のつくSB7950が東側に建つ。この周辺ではSA2705に北側柱筋をあわせてSB8090と、そこから北へ30間分間をあけてSB6740の2棟の倉庫と考えられる総柱建物が建つ。なお、内郭東辺SA8080との間隔はSB7950で2間、SB8050で1間分しかない。また、この部分では斎宮跡最大級の大型井戸S E 7920が設けられる。これは、井戸掘形の周囲に一辺約10mの方形の掘り込み地業を行なう、斎宮跡で他に類例の無い特殊な構造のものもある。また、この井戸から延びるように北進して東へ直角に曲がるSD6810は井戸に伴うものと考えるとこの段階まで遡る可能性もある。SE7950の上部構造は判明していない。

特異な建物

内郭西側ではSA1411とSA7150の間に納まるように、この時期からII-1期までの間にSB7155・7160の2棟の東西棟が建てられる。これらは周囲に雨落ち状に溝を付設する特異な形状のものである。

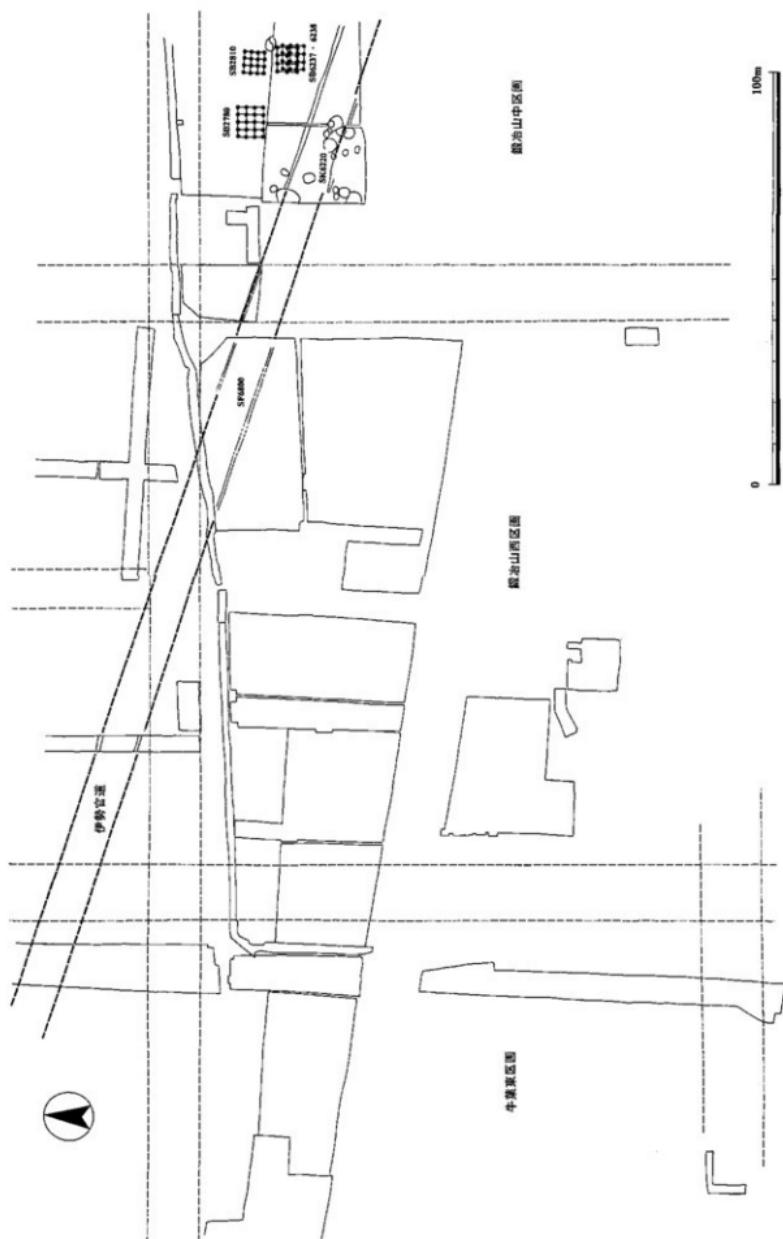
空白の区画 北 部

内郭北側では積極的にこの時期まで遡らせられる建物は認められない。鍛冶山中地区まで広がるSA2800の畠みの内部については未調査地が多いため解説は進んでいないが、7尺等間の南北棟SB2790が区画北西隅に建てられる。なお、区画東部の南北掘立柱塀SA6770は第119次調査ではわずかに検出されているが、第124次調査では連続を明らかにする事はできていない。

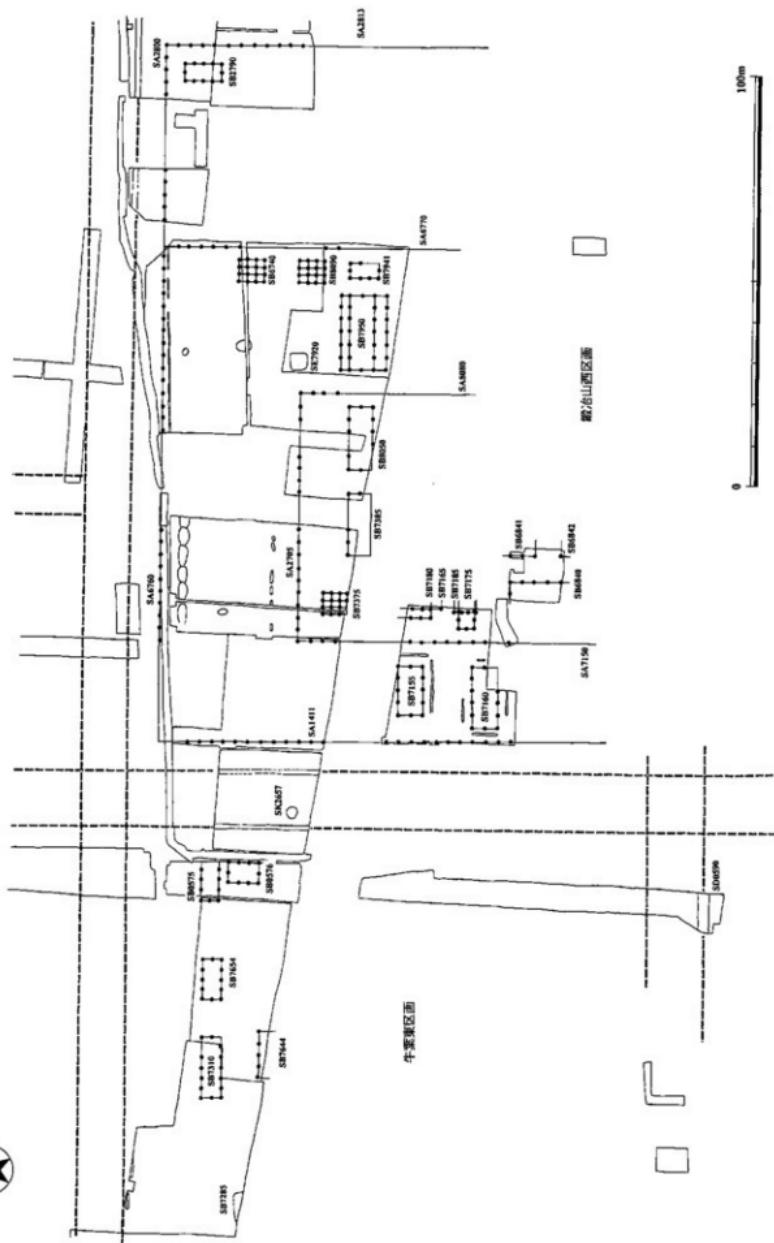
I - 4 期の 特 徴

このI-4期に成立すると考えられる鍛冶山西区画は内外郭の大規模な二重構造の他にも、他の時期と異なるいくつかの特徴を持っている。まず、この段階の掘立柱塀と、倉庫と推定される3間×3間の総柱建物SB6740・7375・8090とSB7950の附属的な位置関係のSB7941以外の主要な側柱建物は全て柱間寸法10尺（約3m）を基準としており、II-1期以降8尺（約2.4m）がおおむね基準となっていく事と異なる。この規格はこれまでの調査の中では、II-1期以降の牛葉東区画の掘立柱塀と、現在、方格地割南西隅と想定されている木葉山西区画の八脚門SB6850が付設する掘立柱塀以外では知られていない。にもかかわらず、これらの大型の建物は、いずれも建替えの痕跡が無く、区画内構造の継続性が窺われないという特徴がある。

出土遺物は他の時期に比較して極めて少ない。当該期については、後に斎宮の遺物の出土状況の特徴のひとつとなる、「土器溜まり」と言われる土師器類を中心とした大量廃棄土坑が、この段階では発見されていないためである。



第55図 内院地区第1期以前（斎宮I～3期）の造構



第56図 内院地区第1期（斎宮I-4期）の遺構

牛葉東区画

I-4期では、鍛治山西区画の整然とした様相に比べ、牛葉東区画の構造は、規格性に乏しいことが窺われる。この区画ではこの時期には区画を囲む掘立柱塀は無く、SK2657がこの時期のものとすると、あるいは鍛治山西区画との間にまだ区画間道路も成立していなかった可能性もあり得る。出土遺物では判定できない程度の時期差を持って併存しないかもしれないが、堅穴住居とみられるSB7285もみられる。この時期の牛葉東区画は、この区画のみでみると、他と比べて際立った優位性は窺われない。しかし、この時期になって掘立柱建物が出現する事、鍛治山西区画と比べて小規模で配置に綿密な計画までは認めがたいものの、SB7310・7654などは東西に並列しており、これらの配置がII-1期以降へ存続していないという鍛治山西区画との共通点を持っている。出土遺物もこの時期のものは多くない。

4 内院地区第2期（斎宮II-1期）の構造

鍛治山西区画

この段階でかなり大規模な変更を受ける。まず最大の変化は内郭掘立柱塀が消失し、外郭の掘立柱塀も全体に南へ約2.4m移動するとともに、鍛治山中区画まで延びていたSA2800も廃絶して北辺の掘立柱塀が40間の規模となる事で、鍛治山西区画の東辺区画道路も成立し、この部分が方格地割全体の構造に整合するようになる。

内郭の廃絶

内郭の廃絶に伴い区画内部の建物配置は大きく変わるが、区画施設では内郭掘立柱塀SA7150を東へ約4.6mずらした位置でSA7400が間仕切り的に設けられる。これは北辺のSA6780には接続せず、南端も近鉄線を越えずに途絶している事が判明している。このSA7400の付近では、前代のSB7155・7160が存続していると考えられる。

区画北部では、第1期では乏しかった棟方向が南北になる建物SB7382・8060が区画内ではほぼ対称的な位置に建てられる。この時期以降の建物は先述のとおり、主要なものでも柱間寸法8尺（約2.4m）を基本としている。

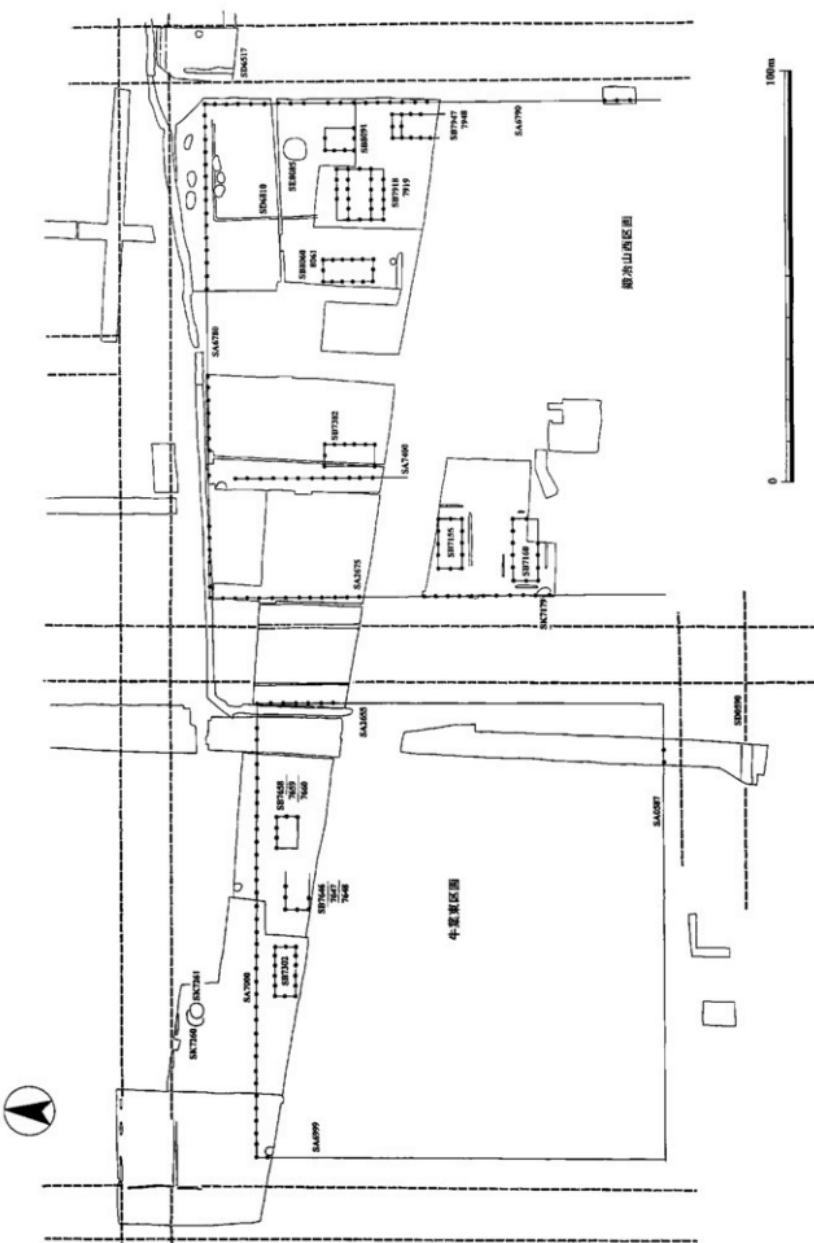
逆L字形の建物配置

区画東部では、前代の大型掘立柱建物SB7950は建て替えられる事なく、その跡地にSB7918→7919とSB7947→7948の組み合わせで逆「L」字形の配置を構成する。これらの変更に伴って前代のSE7920はやや構造を簡略化してSE8085に変更される。井戸の南側ではSB7933→7934→8091の順に3間×2間の南北棟が建て替えられる。

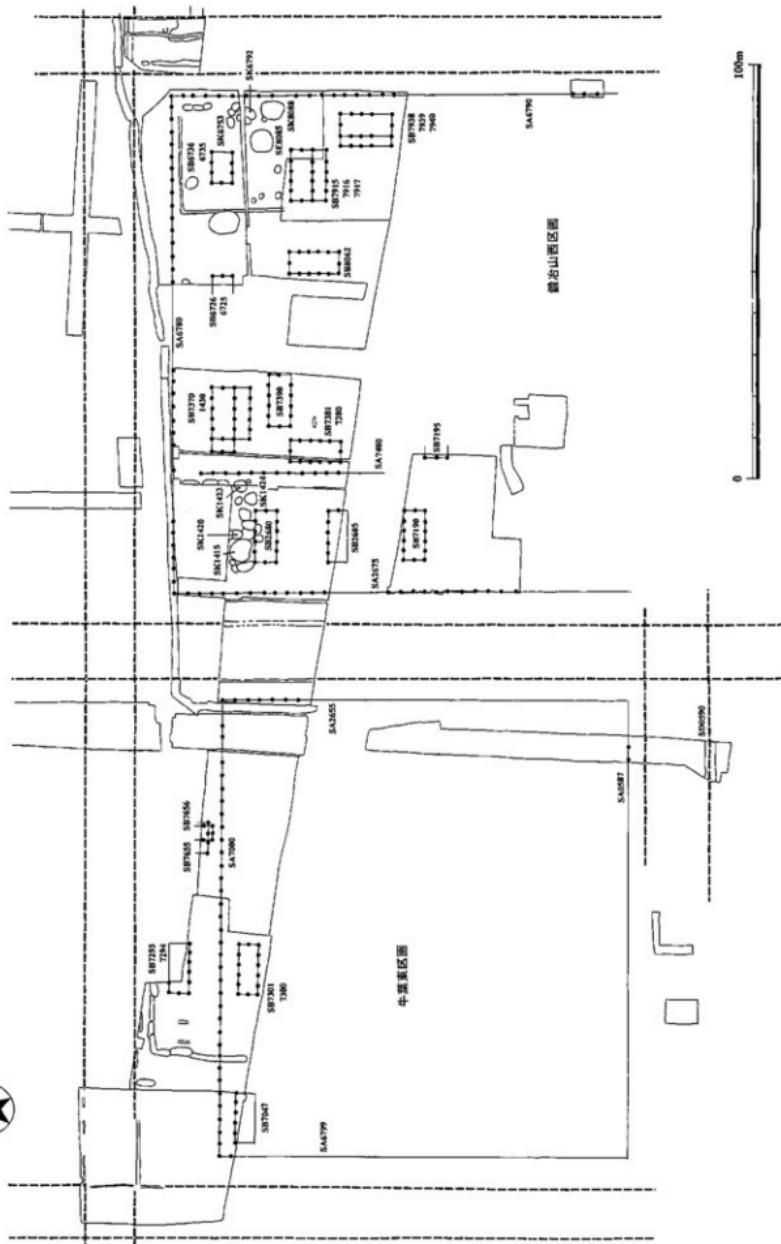
この段階では間違いなくあったとみられるSD6810は、この南北溝の溝心と区画東辺SA6790、SA7400とSA2675の間隔が約28mでほぼ等しく、対照的な配置となっていたと考えられるのに加え、SD6810の溝底の絶対高も勾配がみられず、排水よりも区画溝的性格を強く持っていると考えられる。

牛葉東区画 掘立柱塀

この段階になって区画全体を囲む大規模な掘立柱塀が出現し、鍛治山西区画と並びたつようになる。北辺のSA7000以外は極めて部分的な確認ではあるものの、南辺とみられるSA0587も見つかっており、東西約107m(36間)、南北で約95mの規模となる。ほぼ全容を調査したSA7000では、いずれの柱間も等間隔であり、明確な門の遺構は見つかっていない。掘立柱塀内部では、第3期にも建て替えられて、規則的な配置を構成するSB7302の他、ほとんど位置を変えることなく建て替えられるSB7658→7659→7660やSB7646→7647→7648といった東西棟方向の建物が建てられる。



第57図 内院地区第2期（斎宮II-1期）の造構



第58図 内院地区第3期（斎宮II-2期）の遺構

土器溜まり 塙の北側では、当該期の所謂「土器溜まり」遺構であるSK7260・7261が出現する。このように内院地区第2期には、掘立柱塙による二重構造の消失と牛葉東区画の整備にみられるように、鍛冶山西区画単独の求心性が弱くなる事が最大の変化であろう。また、この段階では内院地区第1期のように倉庫と推定されるような総柱建物も無くなるとともに、出土遺物のうえでも所謂「土器溜まり」と呼ばれる土師器杯・皿類を中心とした土器の大量投棄場が部分的に出現するといった構造的な変革を伴った代替が行なわれている事が明らかとなっている。

5 内院地区第3期（斎宮II-2期）の構造

第2期の踏襲 この段階は、鍛冶山西区画・牛葉東区画いずれも、その外側を囲む大型掘立柱塙が存続しており、基本的な構造は維持しつつ、内部の建物配置を少しづつ変更している段階と考えられる。

鍛冶山西区画 内院地区第2期に成立した区画内を区分するSA7400やSD6810は依然として機能していると考えられる。SA7400の西側の区画西部では、第2期のSB7155・7160の配置を部分的に踏襲しつつ、SB7155が規模を縮小して5間×2間のSB7190に建て替えられる。また、これと40尺(11.8m)ずつ等間隔をおいてSB2680・2685が建てられる。SB2680の北側には、若干時期差を置くものと考えられるが、大規模な土坑が連続して掘られ、その中には斎宮を代表する「土器溜まり」遺構も含まれることとなる。

SA7400とSD6810にはさまれる区画北部では、8尺間を基本とした東西棟がSB7370→1430の後、少し位置を南へずらして、SB7390へと3度建て替えられる。SB1430では南と西に庇が付くが、基本的には同規模程度のものである。この南側には第2期に統いてSB7381→7380とSB8062の8尺等間、5間×2間の南北棟のグループが継続している。これらの建て替えとSB7370等の建て替えは対応するものである可能性は考えられる。

区画北東部では3間×2間のSB6726とSB6736が桁行の柱筋を揃えて並び建つ。これらは各々SB6725と6735に建て替えられる。大型の井戸SE8085はこの段階では存続しており、この東側にやや小規模な廃棄土坑が設けられる。

SE8085の南に第2期に現れたL字形の建物配置は第3期にも引き続き見られる。南面庇をもつ東西棟SB7915→7916→7917と西面庇をもつ南北棟SB7938→7939→7940の配置が確認されている。

牛葉東区画 同様に大型掘立柱塙が存続すると見られる。ただし建物配置のうえでは、区画北辺東半の連続した建て替えはこの段階には継続していない。一方、第2期のSB7302はその後SB7301→7300に、SA7000を挟んで北に40尺のところに、同規模のSB7293→7294が、SB7300の西およそ80尺のところにSB7047が建てられる。

6 内院地区第4期（斎宮II-3～4期）の構造

第2～3期の構成を踏襲しながら、再構成がすすめられる段階と考えられる。

鍛冶山西区画 区画西部を画するSA7400の後にSA7170～7172が南へ延長して設けられるが、区画

新たな小区画 東部の対照的な位置に配置されていたSD6810は埋没している。と同時に区画北部に小土坑や溝を「コ」の字形に連続させて新たに小区画が設けられる。これらの土坑・溝は第124次調査区では部分的に幅3m前後で並列しており、本来は築地ないし土塁などの構造となっていた可能性がある。この小区画は内々で東西約49m、北辺SA6780との間隔は約35mである。この小区画内部には第3期まで東西棟を主体としてきたのに変わって5間×2間を規模の基準とする南北棟がSB7412→7411→7410とSB6722→6721→6720の東西の2つのグループに分かれて構成される。なお、現在未発掘ではあるが、この中間にもう1つのグループも想定し得る。

区画西部では、SB7191が前段階のSB7190を踏襲して同一規模で建て替えられるものの、その北側では東面庇をもつ南北棟SB2690やSB7405・2700に変更される。

区画東部では、北東隅で9間×2間の身舎に南面庇の特異な建物SB6745が建てられ、その南に南面庇付きのSB6730→6731→6732の3間×3間の建物がみられる。

先述の通りSA7170・7171・7172はSA7400を踏襲して設けられているが、南へ大きく延長されており、これまでに23間分まで確認されている。しかしこれによる区画内での機能上の変化については、区画南の調査例が少ない事もあって判断できないが、区画内の再構成が進められた事は明らかである。

土器溜まりの最盛期 区画の北東に加え北西でも大小様々な「土器溜まり」土坑がみられる。その中で最大級のSK2650もこの段階に属するものであり、祭祀などにより土師器類を大量廃棄するパターンのピークとなる。しかしながら、その中でも区画北部の「コ」字形区画内には基本的に土器溜まりは存在せず、その機能差が想定される。

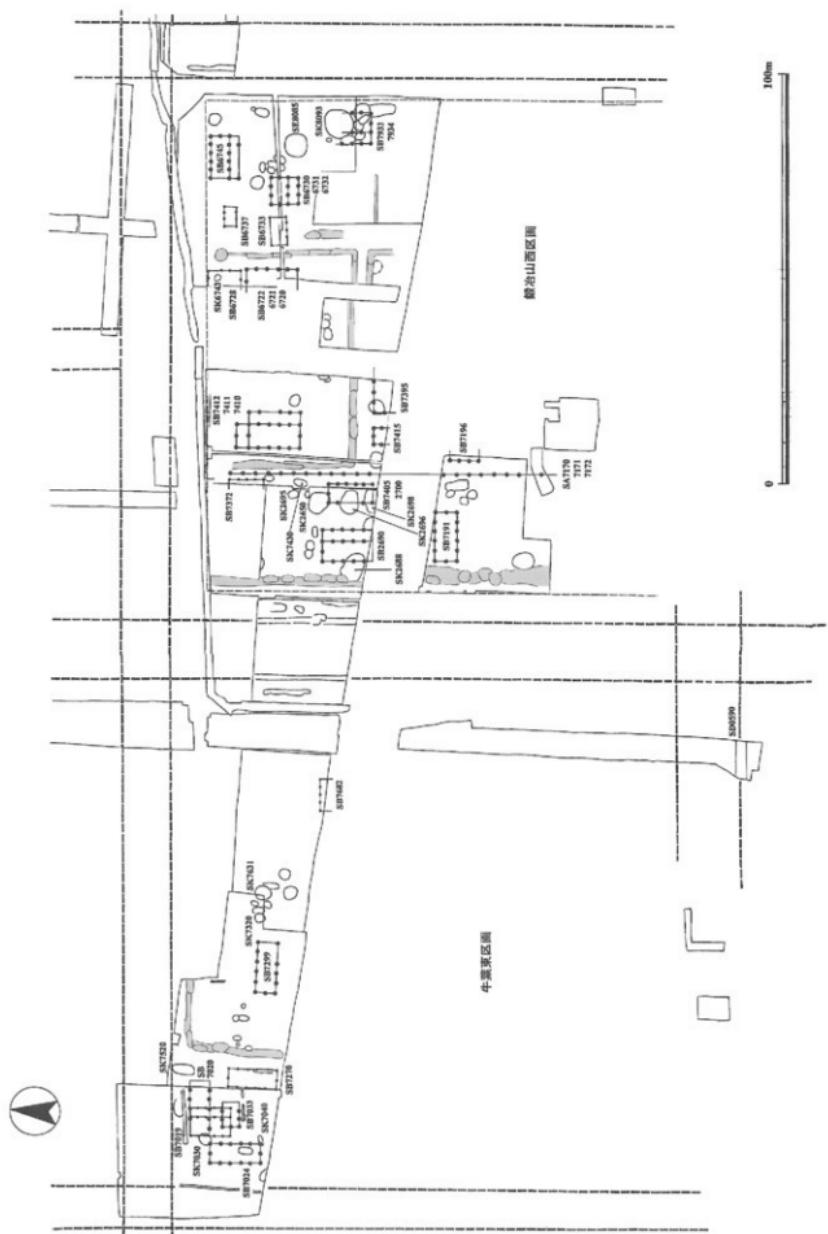
なお、鍛冶山西区画は第II-4期以降急速に衰退し、第98次調査区や第109次調査区にわずかに残る小規模などを除いて建物はほとんどみられなくなる。区画内を囲む大型掘立柱塀もこの段階の中で消失したと見られるとともに、「土器溜まり」遺構もこの段階を最後としており、特にII-4期には「コ」の字形区画を形成する土坑・溝群を当該期の土師器類が埋没させており、当区画の機能低下を示している。

牛葉東区画 鍛冶山西区画と同様にこの段階には大型掘立柱塀が消失しており、これに重複するようにSB7299やL字形配置となるSB7020・SB7024、SB7033などが建てられる。また、区画施設とみられるSD7273などの溝・土坑の連続によるL字形の区画も出現する。斎宮編年II-3期からII-4期の「土器溜まり」はあるが、鍛冶山西区画に比して小規模である。

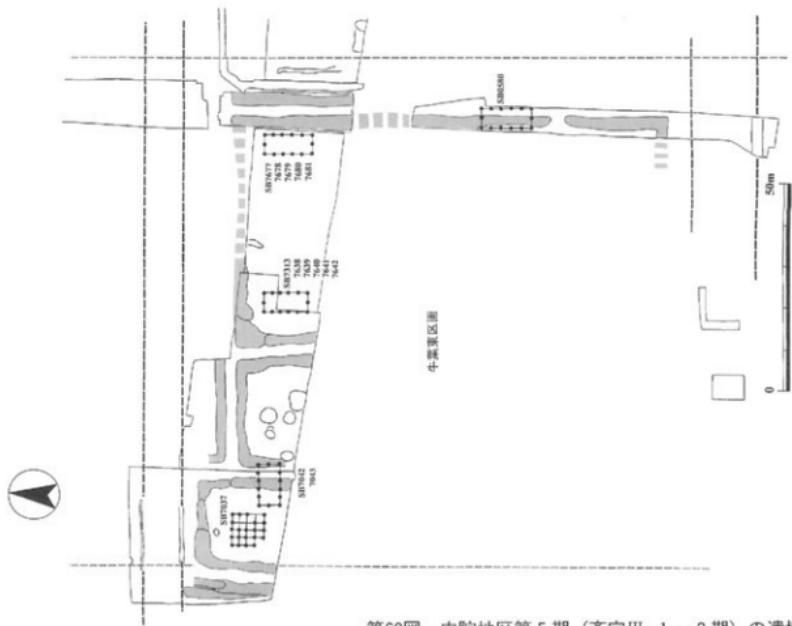
7 内院地区第5期（斎宮III-1～2期）の構造

鍛冶山西区画の廃絶 この段階以降、鍛冶山西区画では建物をはじめ、「内院」としての機能を有する遺構は皆無となる。以後、内院的な機能は牛葉東区画により担われていくと考えられる。

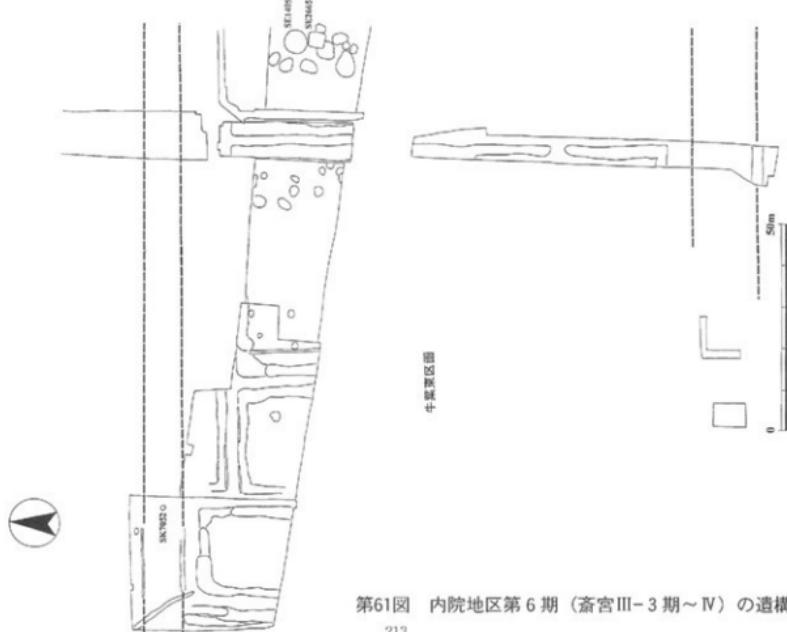
牛葉東区画の小区画 鍛冶山西区画の事実上の廃絶により、大規模な変革がおこる。外周の掘立柱塀は前段階の中で廃絶しているが、その後区画内を浅く2条が併行するのを基本とする溝で細分されるようになる。2条の溝の間は第4期の鍛冶山西区画と同様、土塁ないし築地などの施設があったものと見られる。今までのところ3つ以上の区画が想定され



第59図 内院地区第4期(斎宮II-3~4期)の遺構



第60図 内院地区第5期（斎宮III-1～2期）の遺構



第61図 内院地区第6期（斎宮III-3期～IV）の遺構

ており、区画の溝は斎宮編年III-2期にはすでに埋没が始まっている。昭和53年度に実施された、度会郡小俣町の離宮院跡の発掘調査の際にも同様の平安時代後期の土墨状遺構が報告がされており、これらは現在も地表面上に部分的に確認でき、同様の遺構になるものと考えられる。第10次調査区ではこれらの溝が一部切れている様子が窺われ、区画東からの入口となる可能性がある。

区画北西のSB7042・7043はこれらの区画施設に先行するものとみられるが、総柱建物のSB7037や集中的に同じ場所で建て替えられるSB7313・7638～7642やSB7677～7681のグループはこの小区画の中に整合するよう配されている。

この新たな構造は、前段階の鍛治山西区画でもみられていた構成が、その廃絶を受けて、牛葉東区画で再構成されたものとみることができる。

8 内院地区第6期（斎宮III-3期～IV期）の構造

平安時代末期

斎宮跡2000年編年以前には平安時代末期～鎌倉時代とされていた段階である。

今までのところ牛葉東区画においても建物跡は確認されていない。しかし、第10次調査区や第114次調査区では、第5期に成立する小区画を構成する溝に大量の土師器類が廃棄されており、人面墨書をはじめ、ひらかなどみられる墨書土器も含まれており、この近隣において女官の存在に想定される、斎宮として機能した遺構があるものと想定される。

内院地区的衰退

なお、鍛治山西区画と牛葉東区画の区画間道路部にはSK1405・2665が、区画北辺の道路にはSK7052が穿たれるなど、方格地割を構成していた道路の機能が失われていく様子が窺われるなど、内院地区として機能していた等地区周辺の衰退が明らかに認められる。以後近世の「蓮光寺」跡とみられる鍛治山西区画の遺構が現れるまで、両区画内での遺構及びまとまった遺物の存在は確認されていない。

9 各期における意義と課題

以上のように、内院地区と推定される鍛治山西区画と牛葉東区画の主要遺構の変遷を通して観察したが、これらの変遷の意義について整理しておきたい。

内院第1期
宝亀2年の造営

まず最初の大きな画期である内院地区第1期については、これまでの調査から史跡東部に想定される斎宮の中核機関の史跡東部への移動と意義づけられよう。第五章で述べられるように、これは光仁朝の斎宮造営、『続日本紀』にみる宝亀2年(771)11月18日条の「遣鍛治正従五位下氣太王造斎宮於伊勢國」の記事に対応し、宝亀5年に光仁朝の最初の斎王、酒人内親王の発遣のために周到に準備された斎宮の造営にあたるものとみることができる。⁽⁵⁾

この段階の区画構成は、①後世の方格地割の規模を越える大型の区画。②外郭と対応する内郭を持つ二重構造。③区画内の建物の大型規格と、特殊な井戸の存在。④倉庫と考えられる総柱建物を区画内に取り込んだ、後世にみられない、完結性を持った構成。といった特徴があげられる。また、この段階での方格地割の構成要素は鍛治山西区画と鍛治山中区画の区画間道路が成立していないのはもちろん、鍛治山西区画と

牛葉東区画の区画間道路についても、この段階から存在するかどうかは残念ながら現在のところ確実ではない。ここで、牛葉東区画の遺構が、鍛治山西区画内ほど明確な規格性をもたないこととあわせてみると、宝亀2年の斎宮造営の段階で、方格地割全体の構想があったのか、あるいは奈良時代までの斎宮の延長として当初造営されはじめたのかという課題が残される。これは、鍛治山中区画部分の遺構の状況の解明などを待って解決していきたい。

光仁朝の二期 第1期を光仁朝の斎宮とした場合、内郭と中央部分のSB7950・7385・8050などの計画的ながら、配列上逼迫した状況は酒人内親王とそれにかわる淨庭女王の2期に対応するような造営上の時期差も明確にしていく必要があろう。

内院地区第2期においては、先述の第1期の特徴はほとんど変容し、鍛治山西区画単独の突出した性格が、牛葉東区画と内院的性格を有するとみられる区画が並立する段階に入った時期と位置づけられる。これにあわせて鍛治山西区画は規模が縮小され、内部も内郭を有する明確な二重構造から、小区画に細分されたものに変わり、これにあわせて鍛治山西区画の東辺道路や牛葉東区画との区画間道路が明らかに成立していく事で、平安時代の斎宮を特徴づける方格地割の成立が明らかになる段階である。

桓武朝の斎宮 区画内部も、鍛治山西区画の外郭を南にずらして再度造営するなど、前段階のものを変更して再構成している事が窺われる。この段階として想定されるのが、『統日本紀』延暦4年(785)4月23日の桓武天皇の斎王、朝原内親王の群行に先立つ紀朝臣作良の造斎宮長官任命である。⁽⁷⁾ 桓武朝の長岡京の造営に前後する斎宮の新たな造営は、一辺約120m(400尺)の方形区画を集積して地割りを構成する、という新たな都城の造営計画と連動するものであり、多分に奈良時代の色彩を有していた光仁朝の斎宮をあえて包摵する形で斎宮を拡大造営する事が、王権の正当な継承を表象する意義を有するものと捉える事ができる。

内院地区第5期 次の大きな画期としては鍛治山西区画が廃絶する内院地区第5期があげられる。斎宮跡の土器編年でIII-1期にあたり、10世紀後半の頃と想定している。内院地区の大きな衰退期として捉えられるが、区画内の構造の変化をみると、この変化にも前段階からの基本的な連続性が窺うことができる。

両区画の機能 内院地区においては正殿に相当する施設が未調査であり、牛葉東区画については北辺部のみの調査ではありながら、鍛治山西区画と牛葉東区画のそれぞれの機能については、いくつかの検討材料がある。これを今後の展望のために整理すると、①内院地区第2～3期において、鍛治山西区画で認められる小区画が牛葉東区画では現在のところ確認されていないが、第5期にいたって牛葉東区画に成立する。②土師器の杯・皿類を中心とする「土器溜まり」遺構が第2～4期にいたるまで、鍛治山西区画で圧倒的に多く、規模も大きいが、これも第5期には牛葉東区画に移っていく。③出土遺物の中に斎宮に特徴的なひらがな墨書き土器があるが、第4期までは鍛治山西区画に集中するものが、第5期以降は牛葉東区画に限られる。④各区画内の建物配置で各期を越えて踏襲されるのは、鍛治山西区画の西部の東西棟の配置と、東部の逆L字配置の部分があり、後者に北接して大型の井戸が存続している。⑤未調査だが、牛葉東区画

の現在の竹神社内には池の痕跡（「みかわの池」？）の可能性のある落ち込みが残っている。⑥第5期以降だが、牛葉東区画ではサイコロとみられる土製品や調度品に使用されたとみられる金銅製金具が見つかっている。また、「て」の字口縁の京都系の土師器皿がまとまって出土する。

以上の項目から検討すると、第5期の画期では、特に①②に窺われるとおり、鍛治山西区画の機能の牛葉東区画への統合が推定されるのであり、また、⑤⑥からは牛葉東区画には平安時代後期以降、特に日常的な生活空間の様相が有り、鍛治山西区画は、ひらがな墨書き土器に女官等、斎王の生活に近い存在も想定されるものの、大型の井戸の存在や祭祀や饗應に使用されたとみられる大量の土器の投棄土坑が第3～4期に集中する点から儀式空間としての機能をもっていたともみることができる。

こうした機能の整理・統合として見たとき、第4期の鍛治山西区画の小区画の構成と第5期での牛葉東区画での再構成、離宮跡との共通性が理解でき、また本来両区画がそれぞれ付与されていた機能が解明されるのではないかろうか。現段階では、この指摘にとどめておきたい。

斎宮跡は宮殿遺跡であり、都城（的）遺跡であり、官衙遺跡である。部分的には生産遺構も見つかっている。とともに、櫛田川・轍川を望む台地上のはば同じ地域において700年近く存続しつづけた他に例をみない遺跡でもある。今回は、斎宮跡の発掘調査開始から30年という節目において、斎宮の奈良時代末期から平安時代の中権部「内院」地区の西暦2000年段階の調査成果と知見を集大成することで、斎宮跡を通して古代国家の展開と変容について検討する資料を提示した。鍛治山西・牛葉東の両区画についても近鉄山田線以南の解明という現代的条件による制約を突破していく必要がある。また、先行する奈良時代、後続する鎌倉時代の斎宮の姿もあわせて検討していく事で、それぞれの時期の斎宮の本質に迫っていく必要もある。その意味では、今回の報告書の上梓は、ひとつの区切りであるとともに、次のステップへの出発点でもある。

注

- (1) 例えば、第50次調査、第78次調査、第88次調査、第98次調査、第106～5次調査など。
- (2) 他には西加塵南区画の斎宮編年II-1期とみられているSB5800・5820が確認されているのみである。
- (3) 「6.第96～5次調査(6ADR-T)」『史跡斎宮跡平成4年度現状変更緊急発掘調査報告』明和町教育委員会 1995
- (4) 御村精司・榎本義謙『離宮跡発掘調査報告書』小俣町教育委員会 1980
- (5) 『統日本紀』宝亀二年十一月庚子条
- (6) 『統日本紀』宝亀五年九月己亥条
- (7) 『統日本紀』延喜四年四月丁亥条

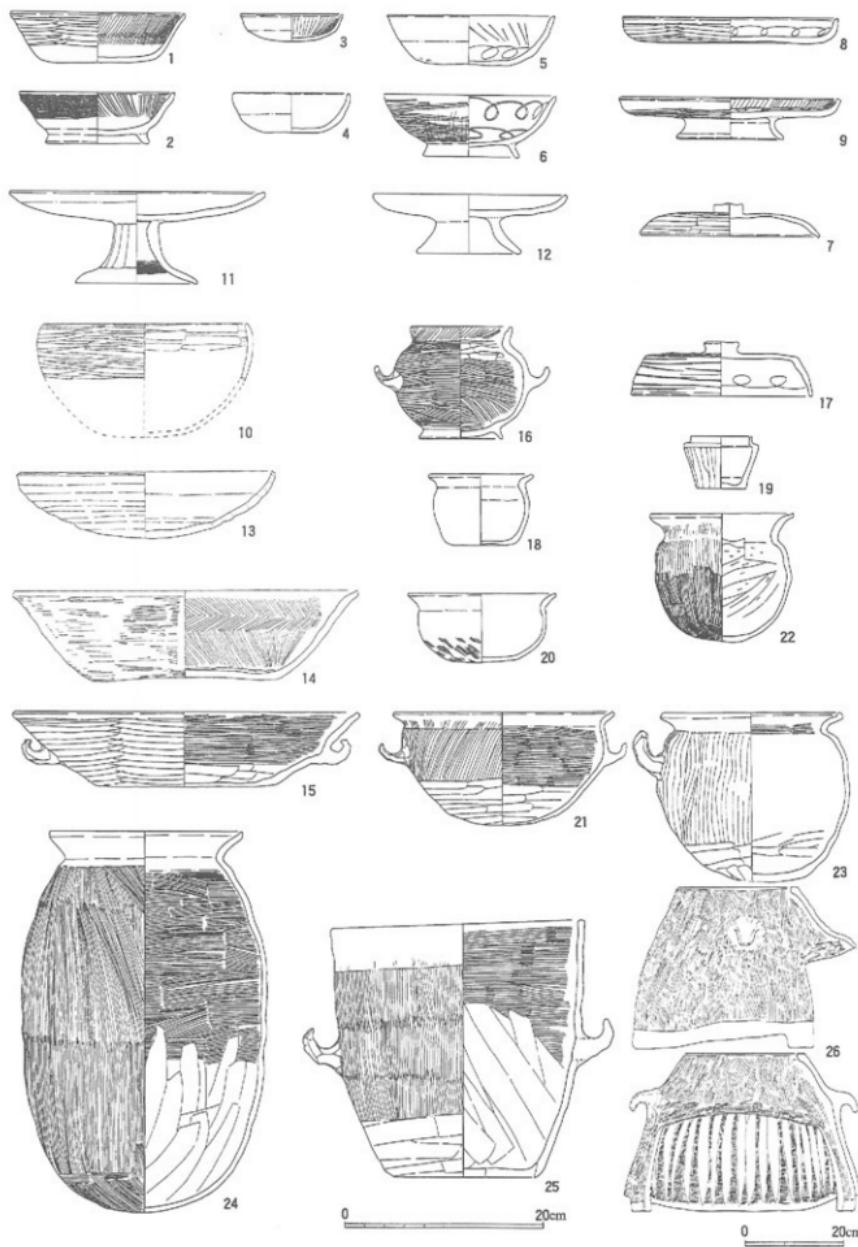
第26表 斎宮跡土師器構成表

器種名	番号	器種 説明
杯 A	1	広く平らな底部と斜め上に開く口縁部からなる。口縁部の形態は、口縁部が直線的あるいは外反するA形態と口縁部が丸みをもつて内湾するB形態に区分できる。
杯 B	2	杯Aに低短な高台がつく。
杯 C	3	小さな平底ないし九底と斜め上に開く口縁部からなる。口縁端部が内傾する。
杯 G	4	楕円形の杯で、底部は丸みをもち、口縁部は内湾して開き、端部は丸くおさめられる。粘土巻き上げ成形を行い、体部外面にその痕跡を残すことが多い。「粗製椀」「いなか風椀」ともよんできた器種である。胎土に砂粒を多く含む。
椀 A	5	丸底に近い小さな平底と内湾する弧をえがいて、斜め上に大きく開く口縁部からなる。
椀 B	6	椀Aに低短な高台がつく。
蓋	7	ボタン状のつまみをつけ、平坦な天井となだらかに彎曲する口縁部からなる。
皿 A	8	広く平らな底部と斜め上に開く短い口縁部がつく。口縁部には、杯同様A・Bの二形態がある。
皿 B	9	皿Aに低短な高台がつく。
鉢 A	10	丸底ないし尖底に近い丸底から外湾気味に開く口縁部が腹部近くで内傾するいわゆる鉢形である。
鉢	13	平底に近い底部と外傾する口縁部からなる。
高杯A	11	ラッパ状に開く脚部と、ヘラで多面体に面取りした脚部に大きく外方に開く浅い杯部を付す。脚部と杯部の接合方法には、杯部外面に直接粘土巻き上げないし輪積により脚部を作る方法(円錐手法)と、芯部の上に粘土紐を巻き上げて脚部を作る方法(芯棒接合法)がある。
高杯B	12	口縁部が内湾する杯部と面取りのない脚部からなる。
盤 A	14	低い底部と斜め上に大きく開く口縁部からなる。
盤 B	15	盤Aの口縁部に把手をつけた器種であり、低短い高台のつくものもある。
壺 A	16	高台を付した平底と肩の張ったイチジク形の胴部と直立する短い口縁部からなる。肩部に上方に強く折り曲げた三角形把手を付す。
壺 盖	17	ボタン状のつまみを付した平坦な天井部と内側に折れ込む端部からなる。
壺 B	18	平底に近い丸底と球形に近い胴部と外反する短い口縁部からなる広口の壺である。貯蔵器というより、人面を描き、祭祀に使用するための器である。
壺 E	19	蓋受けのような短く内側に屈曲する口縁部をもつ広口の壺である。
鍋 A	20	半球状に近い体部に外傾する口縁部のつくもの。
鍋 B	21	鍋Aの体部に片側もしくは両側に把手をつけたもの。
甕 A	22	半球に近い胴部と強く外反する口縁部からなる広口の甕。
甕 B	23	甕Aとはほぼ同じ形態で、相対する二方の肩に把手を付したもの。
甕 C	24	頸部でややすぼまる長手九底の器体に斜め上に開く口縁部をゆけたもので、いわゆる長向甕である。
瓶	25	底部のすぼまった円筒形の体部の両側に把手がつき、底部を大きくあけている。
甌	26	載頭放弾形の一侧面を大きく切り取り、その切開部の周辺に庇をつけるもの。

(註)

1 本表は、平城宮の土師器器種分類に準じており、『平城宮発掘調査報告書』に準拠している。

2 実測図は、斎宮出土土器による。縮尺は、1/5を原則とし、一部1/10としている。



第62図 斎宮跡土師器構成図

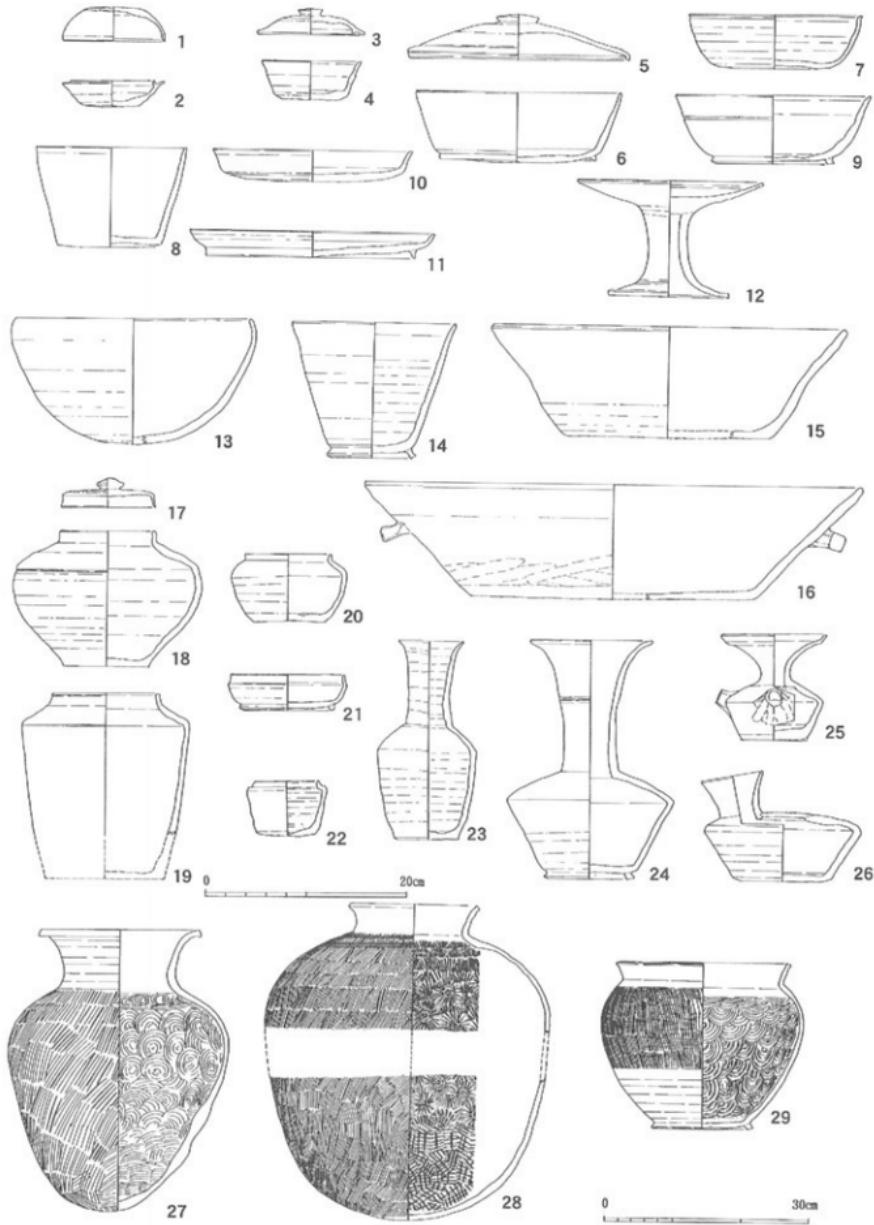
第27表 斎宮跡須恵器構成表

器種名	番号	器種説明
杯H蓋	1	杯Hとセットとなる蓋である。平坦な天井部は内窩して体部へ移行し、口縁部は垂直気味に垂下する。
杯 H	2	丸底の底部に内窩する体部が開き、口縁部には蓋受け部がつく。
杯A蓋	3	天井部が丸みをもち、頂部につまみをもつ。口縁端部には、杯との接点となるカエリをもつ。
杯 A	4	平坦な底部と斜め上に真直ぐのびる口縁部からなる。
杯B蓋	5	杯Bの蓋は、平らな頂部と屈曲する高縁部からなる形態と、頂部が丸く笠形を呈し、口縁部は屈曲せず、弯曲気味に端部にいたる形態のものがある。
杯 B	6	杯Aに高台をつけた形態をなす。
杯 E	7	平底と内窩する口縁部からなる銅杓形の形態である。
椀 A	8	杯Aをさらに深い形態にしたもので、杯Aに比べ口縁部の外傾度は低く、ほぼ真直ぐ立ち上がる。
椀 C	9	杯Aに高台をつけた形態をなす。
皿 A	10	扁平な底部に短い口縁部をそなえた形態で、他の皿類に比べ器高は、比較的高い。
皿 B	11	皿Aに高台をつけた形態で蓋と組み合う。
高杯	12	ラッパ状に聞く脚柱部と、外反する口縁部をもつ杯部からなる。
鉢 A	13	内窩して立つ口縁部と丸味を帯びた底部をもつ、いわゆる鉄鉢形をなす。
鉢 X	14	平底で、長い口縁部が、真直ぐ外方に聞くバケツ状の器。
盤 A	15	平底に強く外傾する長い口縁部を付した洗面器状の形態をなす。
盤 B	16	盤Aの体部外面に把手をつけた鉢である。
壺A蓋	17	平坦な天井部と直角に折れ曲がる口縁部からなる。頂部には、宝珠あるいは扁平ボタン状のつまみがつく。
壺 A	18	肩の張ったイチジク形の器體に直立する口縁部からなり高台を付す例もある。
壺 B	19	平底で斜め上に立ち上がる体部と、比較的平坦な肩と短い直立する口縁部からなる。肩と体部の境は、にぶい棱となり、底部に高台を付す例がある。
壺 C	20	直立する短い口縁部をもつ扁平な体部に高台をつけた形態をなし、高台を付すものもある。
壺 D	21	直立する短い口縁部をもつ扁平な体部に高台を付したものの。
壺 E	22	内窩気味に斜め上に聞く脚部と、狭い肩部に外傾する短い口縁部を付した広口の壺。高台を付すものもある。
壺 G	23	縱長の胴部に太くて長い口頭部をのせた形態である。
壺 K	24	細長い口頭部と肩が張り稜角をなす体部からなる長頸壺である。平底で高台を付すものと付さないものがある。
甕	25	球形の体部に大きく聞く口頭部が付き、体部上部に注口が付く。
平瓶	26	平底で扁平な体部の背面に広口の口頭部と把手を付す。
甕 A	27	卵形の体部に外反する口縁部をつけたもので、口縁部は肥厚し外傾する面をなす。
甕 B	28	卵形の体部に内窩気味の口縁部がつき、口縁端部は丸くおさまるもの、内傾するものがある。
甕 C	29	形の張った広口短頸の甕。肩部は器高をしのぐ例が多く、高台を付すものと付さないものがある。

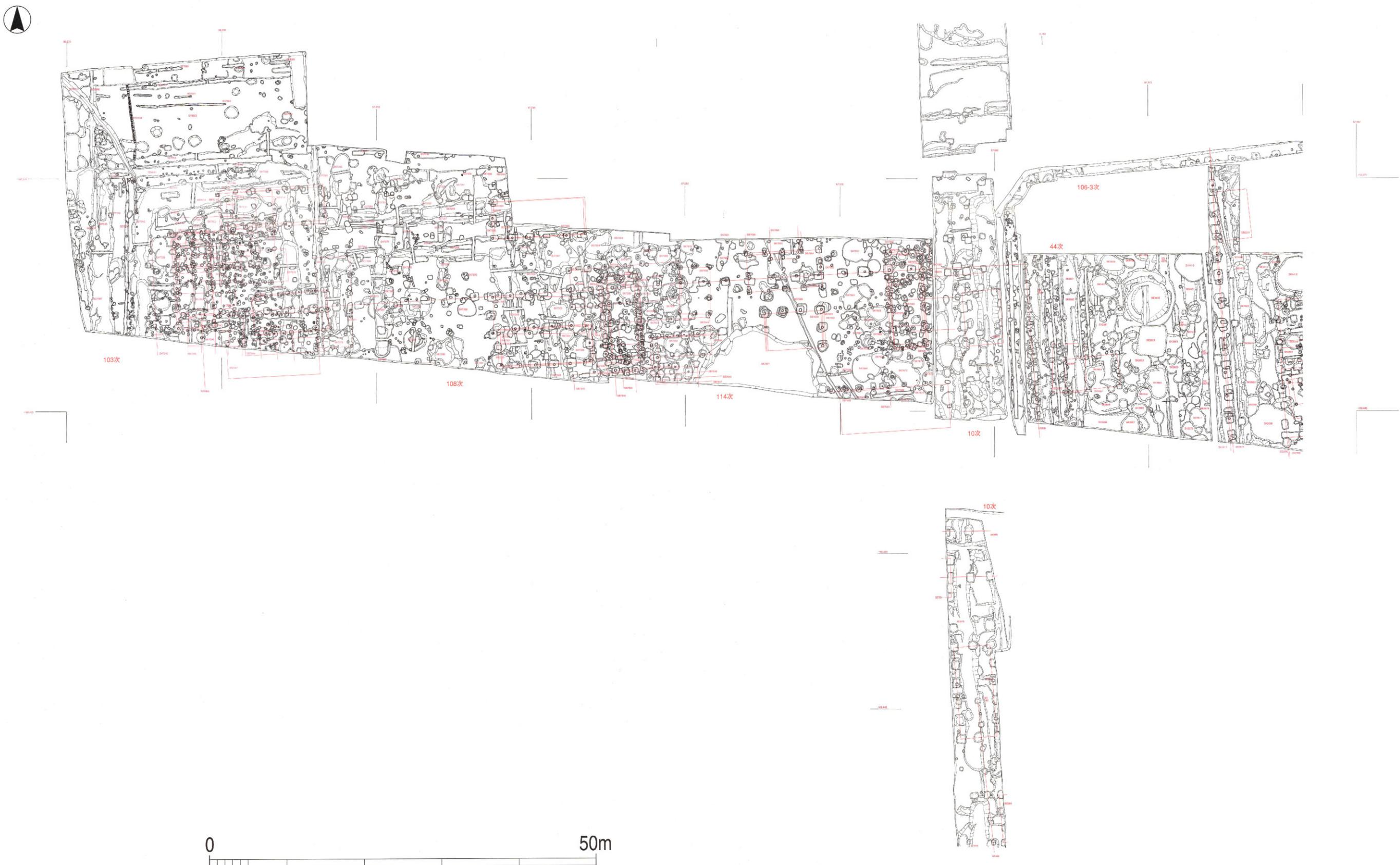
(註)

1 本表は、平城宮の須恵器器種分類に準じており、『平城宮発掘調査報告XⅠ』に準拠している。

2 実測図は、斎宮跡出土土器による。縮尺は、1/5を原則とし、一部縮尺を変更している。



第63図 斎宮跡須恵器構成図



付図1 午葉東区画遺構平面図 (1:250)



付図2 鍛冶山区画遺構平面図 (1:250)

斎宮跡発掘調査報告 I
内院地区の調査
本文編
平成13年3月31日

編集 斎宮歴史博物館
印刷 オリエンタル印刷株式会社
